秋田県文化財調査報告書第306集

潟　前　遺　跡（第２次）

――県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――

2000・3

秋田県教育委員会

潟前遺跡（第２次）

——県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書——

2000・3

秋田県教育委員会

序

秋田県内には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財が豊富に残されています。これら先人の貴重な文化遺産を保護すると共に、後世に伝えていくことは私達に課せられた重大な責務であります。同時に、地域社会を豊かにし、快適な生活を送るための開発も県民の切実な願いであります。当教育委員会は、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和を図るべく鋭意努力してまいりました。

このたび、県営田沢湖オートキャンプ場整備事業が計画され、事業地内に潟前遺跡のあることが判明しました。関係機関と協議して、遺跡保護のため事業計画の変更を行っていただきましたが、それでもなお遺跡の一部に影響があり、その部分については発掘調査を実施して記録保存することに致しました。

発掘調査は、平成8年度、10年度を当教育委員会が、平成9年度を田沢湖町教育委員会が担当しました。3年間の調査の結果、旧石器時代と縄文時代の複合遺跡であることがわかりました。平成10年度の調査では、縄文時代前期から中期前葉および後期前葉の集落跡を検出し、特に縄文時代後期には、大きな集落が営まれていたことがわかりました。

本報告書は、平成10年度の調査記録をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護に活用され、郷土の歴史や文化財を研究する資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施並びに本書の刊行に際し御協力を賜りました田沢湖町、田沢湖町教育委員会、東日本旅客鉄道株式会社、秋田県商工労働部観光課をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　清

例　　言

1．本報告書は、県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本報告書は、1998年(平成10年度)に調査された田沢湖町に所在する潟前遺跡の調査結果を収めたものである。
3．調査の内容については、すでにその一部が報告会資料・年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
4．本報告書の草稿執筆は、第4章第1節、第2節を松本昌樹と伊藤攻が、第1章から第3章、第4章第3節1、2および第6章を松本昌樹が、第4章第3節3、4を伊藤攻が行った。 加筆は、松本昌樹が行った。
5．アスファルトの成分分析および第5章の執筆は、北海道大学教授 小笠原正明氏にお願いした。
6．編集は松本昌樹が行った。
7．本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『田沢湖』と秋田県商工労働部提供の500分の1の地形図である。
8．本報告書の作成にあたり、南茅部町教育委員会文化財調査室室長 阿部千春、同学芸員 福田裕二の両氏にご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＩ‥‥竪穴住居跡	ＳＮ‥‥焼土遺構	ＳＫ‥‥土坑
ＳＫＦ‥フラスコ状・袋状土坑	ＳＫＰ‥柱穴様ピット	ＳＱ‥‥配石・集石遺構
ＳＲ‥‥土器埋設遺構	ＳＵ‥‥粘土貯蔵遺構	ＳＸ‥‥性格不明遺構

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡にともなう柱穴、 ＲＰは土器、 Ｓは礫を示している。
2．遺跡基本層位と遺構土層図中の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。
3．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、また土器、石器を問わず、すべて通し番号を付してあり、その番号は図版中の遺物番号と対応している。
4．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
5．挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。これ以外のスクリーントーンは各図中に凡例を示した。

焼土	炭化物の散布	すり範囲
みがき範囲	たたき部位	くぼみ部位

目　　次

序
例言・凡例
目次
第1章　はじめに …… 1
　第1節　発掘調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査要項 …… 2
第2章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第1節　遺跡の立地 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 4
第3章　発掘調査の概要 …… 7
　第1節　遺跡の概観 …… 7
　第2節　調査の方法 …… 8
　第3節　調査の経過 …… 8
第4章　調査の記録 …… 11
　第1節　縄文時代前期・中期の遺構と遺構内出土遺物 …… 11
　　1　竪穴住居跡 …… 11
　　2　土坑 …… 24
　　3　土器埋設遺構 …… 26
　　4　粘土貯蔵遺構 …… 26
　第2節　縄文時代後期の遺構と遺構内出土遺物 …… 27
　　1　竪穴住居跡 …… 27
　　2　焼土遺構 …… 45
　　3　土坑 …… 46
　　4　フラスコ状・袋状土坑 …… 72
　　5　土器埋設遺構 …… 72
　　6　配石・集石遺構 …… 74
　　7　性格不明遺構 …… 81
　第3節　遺構外出土遺物 …… 82
　　1　土器 …… 82
　　2　土製品 …… 86
　　3　石器 …… 87
　　4　石製品 …… 91
第5章　自然科学的分析 …… 105
第6章　まとめ …… 111
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図 …… 3
第 2 図　地形区分図 …… 4
第 3 図　周辺遺跡位置図 …… 6
第 4 図　調査区の基本層位 …… 7
第 5 図　遺構配置図 …… 9•10
第 6 図　ＳＩ39•42•64竪穴住居跡とその出土遺物 …… 13
第 7 図　ＳＩ64•76•80竪穴住居跡とその出土遺物 …… 14
第 8 図　ＳＩ80•94•97•99竪穴住居跡とその出土遺物 …… 15
第 9 図　ＳＩ97竪穴住居跡とその出土遺物 …… 16
第10図　ＳＩ102•136•137竪穴住居跡 …… 18
第11図　ＳＩ102•136•148•158竪穴住居跡とその出土遺物 …… 19
第12図　ＳＩ259竪穴住居跡 …… 21
第13図　ＳＩ308•309•310竪穴住居跡とその出土遺物 …… 22
第14図　ＳＩ340竪穴住居跡 …… 23
第15図　ＳＫ66•164•168•178•179•311•320土坑とその出土遺物 …… 25
第16図　ＳＲ243•318•331 土器埋設遺構、ＳＵ103 粘土貯蔵遺構とその出土遺物 …… 27
第17図　ＳＩ30竪穴住居跡 …… 29
第18図　ＳＩ30•45竪穴住居跡とその出土遺物 …… 30
第19図　ＳＩ46•47•51竪穴住居跡とその出土遺物 …… 31
第20図　ＳＩ53•55•61竪穴住居跡とその出土遺物 …… 33
第21図　ＳＩ77•113竪穴住居跡とその出土遺物 …… 34
第22図　ＳＩ122竪穴住居跡とその出土遺物 …… 35
第23図　ＳＩ140•143•157竪穴住居跡 …… 37
第24図　ＳＩ202竪穴住居跡とその出土遺物 …… 39
第25図　ＳＩ242•260•268竪穴住居跡とその出土遺物 …… 40
第26図　ＳＩ261•321竪穴住居跡 …… 41
第27図　ＳＩ324•334竪穴住居跡 …… 43
第28図　ＳＩ337•339竪穴住居跡 …… 44
第29図　ＳＮ101•104•126•152•153•342•343•344 焼土遺構、ＳＫ10•16 土坑とその出土遺物 …… 47
第30図　ＳＫ24•27•28•29•34•82土坑とその出土遺物 …… 49
第31図　ＳＫ35•36•44•49•52•62•79土坑とその出土遺物 …… 51
第32図　ＳＫ81•108•114•115•116•128•129•144•159土坑とその出土遺物 …… 53
第33図　ＳＫ170•175•176•177•191•196•197•205•224•225•227•229•245•250土坑とその出土遺物 …… 55
第34図　ＳＫ250•251•252•254•256土坑とその出土遺物 …… 57
第35図　ＳＫ257•258•269•270•336土坑とその出土遺物 …… 59
第36図　ＳＫ272•273•274•275土坑とその出土遺物 …… 61

第37図　ＳＫ275土坑出土遺物 …… 62
第38図　ＳＫ276・278・279・280・282・283・284・285・286・287・288・290・291・292・294・295・341土坑 …… 65
第39図　ＳＫ282・283・284・285・286・287・288・292・294・296・297・300・303・304・305・306・313・315
土坑とその出土遺物 …… 67
第40図　ＳＫ296・304・305・325・326・327・330・332・333・335・338土坑とその出土遺物 …… 69
第41図　ＳＫＦ54・165・30フラスコ状土坑・袋状とその出土遺物 …… 71
第42図　ＳＲ193・194・262・281土器埋設遺構とその出土遺物 …… 73
第43図　ＳＱ01・07・08・09・15・17配石遺構とその出土遺物 …… 75
第44図　ＳＱ13・18・23・56・68・69・70・75・26・32・64配石遺構、ＳＸ323性格不明遺構 …… 78
第45図　ＳＱ172・173配石遺構とその出土遺物 …… 79
第46図　ＳＱ172・173配石遺構出土遺物 …… 80
第47図　遺構外出土土器(1) …… 92
第48図　遺構外出土土器(2) …… 93
第49図　遺構外出土土器(3) …… 94
第50図　遺構外出土土器(4) …… 95
第51図　遺構外出土土器(5) …… 96
第52図　遺構外出土土器(6) …… 97
第53図　遺構外出土土器(7) …… 98
第54図　遺構外出土土器(8) …… 99
第55図　遺構外出土土器(9)・土製品 …… 100
第56図　遺構外出土石器(1) …… 101
第57図　遺構外出土石器(2) …… 102
第58図　遺構外出土石器(3) …… 103
第59図　遺構外出土石器(4)・石製品 …… 104
第60図　アスファルト試料分析のフローチャート …… 105
第61図　遺跡出土アスファルトのオイル分の高速液体クロマトグラフィーによる分析結果 …… 107
第62図　秋田県潟前遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分の
フラクションＰのＦ1マススペクトル …… 107
第63図　アスファルトの交易に関する北東北の主な河川および遺跡名 …… 108
第64図　秋田県伊勢堂岱遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分の
フラクションＰのＦ1マススペクトル　他 …… 108
第65図　住居跡模式図 …… 112

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧 …… 5
第2表　遺跡出土アスファルトの元素分析 …… 106
第3表　遺跡出土アスファルトのＲ値と駒形産の試料のＲ値からの相対偏差 …… 109

図　版　目　次

図版 1　1．遺跡遠景
　　2．調査区東部全景
図版 2　1．北部作業風景
　　2．中央部作業風景
図版 3　1．ＳＩ 42　(東→)
　　2．ＳＩ 64　炉(北東→)
　　3．ＳＩ 76　(南東→)
　　4．ＳＩ 80　(南西→)
　　5．ＳＩ 99･94　土層断面(南→)
　　6．ＳＩ 97　(南→)
　　7．ＳＩ102･339　(西→)
　　8．ＳＩ136･137･340　(南東→)
図版 4　1．ＳＩ148･158　(南東→)
　　2．ＳＩ308･309･310　(南→)
　　3．ＳＲ243　(南東→)
　　4．ＳＵ103　(南→)
　　5．ＳＩ 30　(西→)
　　6．ＳＩ 30　柱穴列(真上→)
　　7．ＳＩ 45　炉(南→)
　　8．ＳＩ 46　炉Ａ(北西→)
図版 5　1．ＳＩ 53　炉(東→)
　　2．ＳＩ 55　炉(北東→)
　　3．ＳＩ 77　炉(西→)
　　4．ＳＩ113　炉(南→)
　　5．ＳＩ122　炉(南西→)
　　6．ＳＩ143　(南→)
　　7．ＳＩ157･340　(西→)
　　8．ＳＩ202　(西→)
図版 6　1．ＳＩ242　炉(南→)
　　2．ＳＩ260　炉(北西→)
　　3．ＳＩ268　炉(南西→)
　　4．ＳＩ261　(北西→)
　　5．ＳＩ321　(南東→)
　　6．ＳＫ 10　(西→)
　　7．ＳＫ 36　(南→)
　　8．ＳＫ 49　(南→)
図版 7　1．ＳＫ159　(東→)
　　2．ＳＫ275　(南西→)
　　3．ＳＫ291　(西→)
　　4．ＳＫ333　(南東→)
　　5．ＳＫＦ307　(南→)
　　6．ＳＲ193･194　(南西→)
　　7．ＳＲ262　(西→)
　　8．ＳＲ281　(北西→)
図版 8　1．ＳＱ 01　(南西→)
　　2．ＳＱ 09　(南→)
　　3．ＳＱ 13　(南西→)
　　4．ＳＱ 18　(南→)
　　5．ＳＱ 23　(南→)
　　6．ＳＱ 70　(南西→)
　　7．ＳＱ172　(西→)
　　8．ＳＸ323　(南→)
図版 9　遺構内出土土器
図版 10　遺構内出土土器・アスファルト
図版 11　遺構内出土土器、遺構外出土土器
図版 12　遺構外出土土器・土製品

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経過

田沢湖畔北東部の東日本旅客鉄道株式会社所有地内に、田沢湖町、東日本旅客鉄道株式会社、秋田県の三者連携によるハーブ園、ホテル、オートキャンプ場を中核とした滞在型リゾート地の建設が計画された。その基本計画は、平成７年度に諸調査･基本設計･実施設計を行い、平成８・９年度に建設工事を実施し、平成９年７月開業の予定であった。

平成７年10月、田沢湖町民より田沢湖町教育委員会に東日本旅客鉄道株式会社所有地内東端部分から土器が出土しているとの指摘があった。同年11月田沢湖町教育委員会は、東日本旅客鉄道株式会社に対し、社用地内に遺物包含地があるので調査が必要との連絡を入れた。同年12月22日、秋田県教育庁文化課が１回目の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、町民から指摘された部分では遺構・遺物を確認することはできなかったが、オートキャンプ場建設予定地付近で縄文時代前期・後期の土器や土坑・焼土遺構を確認した。平成８年１月19日、秋田県教育庁文化課が２回目の埋蔵文化財分布調査を実施し、遺構・遺物出土地点は周知の遺跡であること、すなわち潟前遺跡であることを確認した。ホテルとオートキャンプ場の共同進入路付近1,500㎡は工事によって消滅するので、そこは記録保存調査を行い、その他の部分については工事施工の際に立会調査を行う方針を決定し、当初計画に沿ったオートキャンプ場を建設することとした。

しかしその後、平成８年５月21日から31日にかけて、秋田県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を実施した結果、遺跡はオートキャンプ場建設予定地を中心に約12,000㎡の広がりをもち、縄文時代前期中頃および縄文時代後期前半の大規模な複合遺跡であることが判明した。特に、オートキャンプ場建設予定地の台地部分では縄文時代後期の配石遺構も検出した。複合遺跡のため通常の調査と比較して作業量が増えるため、平成８年度の記録保存調査は1,000㎡が限度として、平成８年度はホテルとオートキャンプ場の共同進入路湖畔側を発掘調査し、共同進入路山側および台地部分については平成９年度に調査することとした。遺跡の保全に配慮し、当初は平成９年７月に「ハーブガーデン・ハートハーブ」、「長期滞在型宿泊施設・ファミリーオ」、オートキャンプ場が同時開業の予定であったが、オートキャンプ場の開業計画については見直しが行われた。

平成８年９月9日から11月15日にかけて、秋田県埋蔵文化財センターが共同進入路の湖畔側部分(1,030㎡)の発掘調査を行った(第１次発掘調査)。

その後、平成９年６月2日から８月6日にかけて、田沢湖町教育委員会がオートキャンプ場建設予定地の台地部分の表土除去を行い、配石遺構の構成や広がりを確認した。この結果を受けてオートキャンプ場の設計変更が行われ、台地部分のテントサイト建設はとりやめ、盛土して保存活用する方針が決定された。それでもなお遺跡範囲内にあたる道路・駐車場用地・水路部分(2,800㎡)については発掘調査が必要であり、平成10年５月12日から10月9日にかけて秋田県教育委員会が発掘調査を行った(第２次発掘調査)。なお、当初の事業名は「県営オートキャンプ場建設事業」であったが、平成10年度からは「県営田沢湖オートキャンプ場整備事業」と変更になっている。

第2節　調査要項

遺　跡　名	潟前遺跡
遺跡所在地	秋田県仙北郡田沢湖町田沢字潟前69外
調査期間	平成10年5月12日～10月9日
調査面積	2,800㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	松本昌樹（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
	伊藤　攻（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
	泉田　剛（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）（平成10年8月退職）
	田口康平（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）（平成11年3月退職）
	安原　誠（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）（現　岩手県宮古市教育委員会社会教育課文化係文化財調査員）
	黒澤幸子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
総務担当者	菅原　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）（現　秋田県教育庁福利課主事）
	佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県商工労働部
	東日本旅客鉄道株式会社
	田沢湖町教育委員会

参考文献

1.　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成9年)

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

田沢湖町は県東部のほぼ中央に位置する。町の大部分は、奥羽山脈の西側斜面と出羽山地の東側斜面にあたり、雄物川の支流玉川の上流域の大半を占める。また、南西部は横手盆地の最北部にあたる。

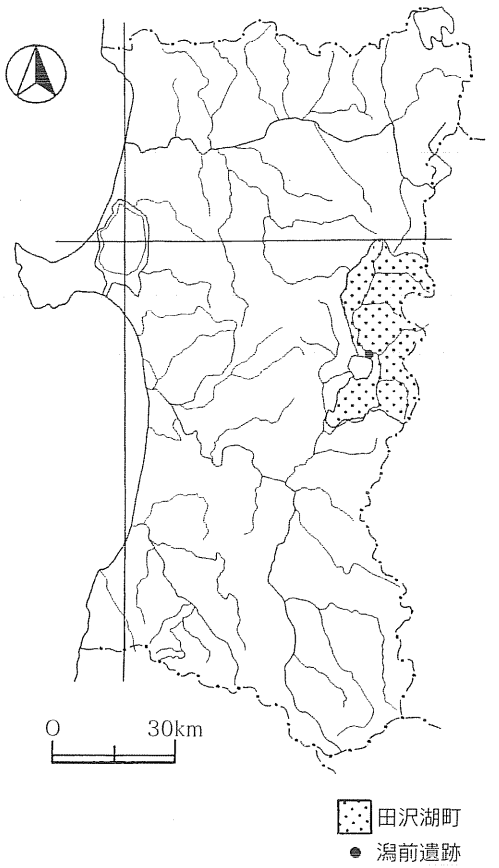
潟前遺跡はＪＲ田沢湖駅の北西約5.7km、田沢湖の北東湖岸(北緯39°44′29″、東経140°41′18″)に位置する。そこは、田沢湖の外輪山のひとつである笹森山より湖岸に伸びる標高254～264mの舌状台地先端部にあたる。(第１図)

遺跡周辺の地形は、山地・台地・低地の３つに分けられる。玉川河谷低地を境に西側は出羽山系で、非火山性山地の楢森山地や田沢湖の周囲を取り巻く田沢湖山地がある。東側には火山性山地の荷葉岳火山地があり、その周囲や南側に非火山性山地のソッケ森山地、八ッ木山地、大影山・小影山山地が連なり奥羽山脈の一部を構成している。玉川河谷低地と東側の山地に挟まれた地域は生保内台地と呼ばれる。遺跡周辺の地形を大局的に見れば、玉川の流路を境に東には奥羽山脈、西には出羽山地がそれぞれ南北に連なっているといえる。なお、本遺跡は出羽山系の田沢湖山地内に位置する。(第２図)

田沢湖山地は、院内岳(751.1m)を主峰とする田沢湖周囲の外輪山であり、北東部を除き、急斜面を伴う標高500m以上の山陵が田沢湖を断続的にとりまいている。これらは田沢湖の火山活動によって形成された溶岩円頂丘であると考えられ、起伏量は院内岳付近で最も大きく400～420mであるが、他はおおむね200～300mである。しかし、田沢湖北東部には笹森山(401.3m)を最高とし、起伏量が40～140mの緩斜面からなる丘陵性の山地が分布しており、潟前遺跡もこの地域に入る。

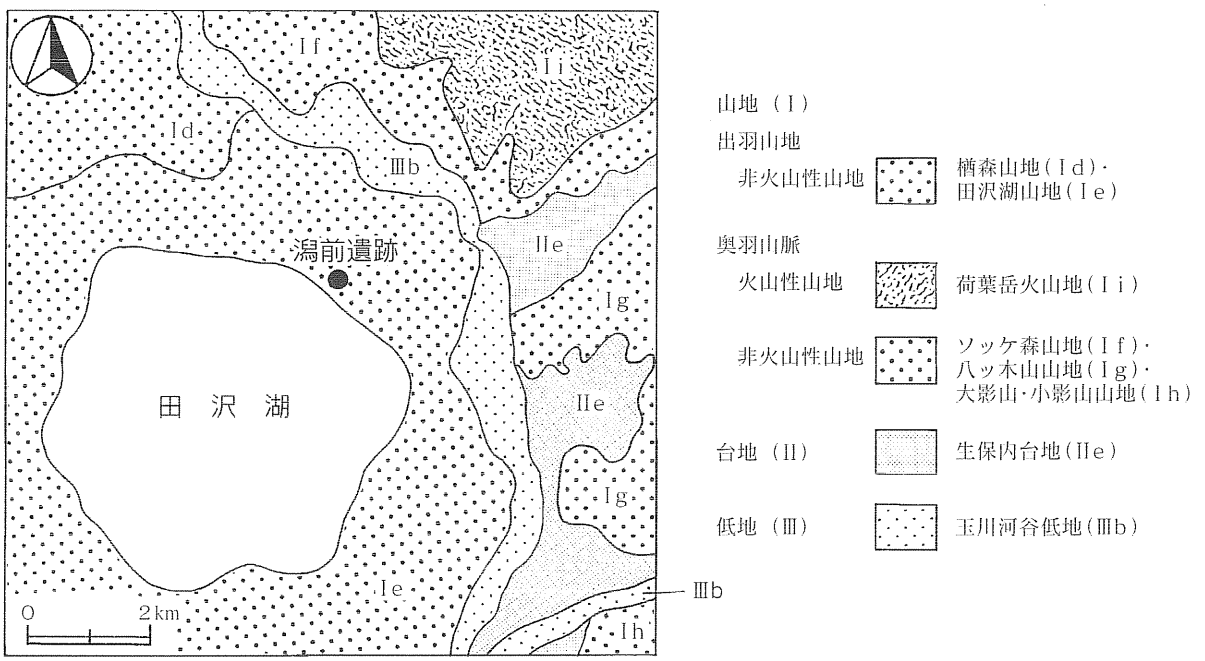
湖周辺の表層地質は、湖岸西から北西にかけては火山性岩石および深成岩から構成され断層群が発達し、田沢湖北岸には固結堆積物である松葉層、田沢湖北東部には宮田層、田沢湖から南東部地域には田沢層が広く分布し、緩やかな地形をなしている。潟前遺跡付近は田沢層(含輝石石英安山岩質火山礫凝灰岩)や宮田層(石英安山岩質異質火山礫凝灰岩・凝灰岩)から構成されている。

田沢湖は湖面標高249m、水深423.4mで、日本の湖沼中最深である。その湖岸線の形は、直径約6kmの円形または直線で囲まれた多角形と見ることができる。



第１図　遺跡位置図

自然状態としては閉塞湖であるが、発電の利便等のため 1940(昭和 15)年玉川の強酸水が注入され、かつて十数種棲息していた魚は姿を消した。しかし、風光明媚な田沢湖を中心とする地域は田沢湖抱返り県立自然公園に指定され、秋田県有数の観光地となっている。



第２図　地形区分図

第２節　歴史的環境

図幅内では、秋田県遺跡地図で 27 カ所の遺跡が確認されているが、それらは田沢湖畔の潟地区や玉川の河岸段丘面に偏在する。(第１表、第３図)

旧石器時代の遺跡は、大曲仙北郡内では協和町米ヶ森遺跡や南外村小出Ⅰ・Ⅳ遺跡で発掘調査が行われているが、玉川水系においては、平成８年度潟前遺跡(50-24)の調査が唯一のものである。

縄文時代の遺跡は 19 カ所確認されており、 その時期は縄文時代前期から晩期にわたっている。前期の遺跡には潟前遺跡(50-24)、中期の遺跡には蟹沢口遺跡(50-13)、中期から晩期にかけての複合遺跡には上屋敷Ⅱ遺跡(50-23)、潟尻遺跡(56-33)がある。なお、潟前遺跡(50-24)は、旧石器時代、縄文時代前期、中期、後期の複合遺跡であるが、主体は縄文時代後期である。晩期の遺跡には、大山遺跡(50-18)、沼田遺跡(50-21)、春山遺跡(50-25)、田子の木遺跡(50-26)、武蔵野遺跡(50-36)がある。このうち田子の木遺跡では、武藤鉄城氏によって「田子の木式土器」の名称を与えられた土器が出土している(註1)が、内容には不明な点が多い。また、武蔵野遺跡(50-36)は昭和 41・42 年に田沢湖町と県教育委員会により発掘調査され、縄文時代晩期の大洞ＢＣ式土器や土偶が出土している。なお、縄文時代の遺跡としている中には、時期を特定できていない遺跡も９ヵ所ある。

弥生・古墳時代の遺跡は確認されていない。古代に位置づけられるものは中山遺跡(50-12)と武蔵野遺跡(50-36)の２遺跡である。武蔵野遺跡では、竪穴住居跡が 26 軒検出されたというが、実際調査が行われたのは竪穴住居跡２軒、製鉄用の竈１基である。中世城館は８遺跡知られているが、空堀、

郭、帯郭のみであり具体的な史実で裏付けられる城館はない。

図幅外であるが、田沢湖町内の神代地区に所在する黒倉遺跡は、昭和初年から深沢多市、田口耕之助氏らによる調査が行われている。また昭和10年には、武藤鉄城氏が黒倉堤付近の道路工事中に土器や石器が多量に出土したことを教えられ、現地に赴いて遺跡であることを確認し調査を行っている。その後、黒倉Ｂ遺跡の本格的な調査が、昭和59年(1次調査)・昭和60年(2次調査)にかけて実施された。1次調査区域では、縄文時代前期から後期初頭の土器が出土したが、主体は中期初頭の大木式土器である。2次調査区域では縄文時代前期末葉から晩期の土器が出土したが、主体は中期全般にわたる大木式土器である。2年間にわたる調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡7軒、石組炉6基、土坑5基、焼土遺構3基、土器埋設遺構2基、配石遺構4基、捨て場1ヵ所が検出された。

註

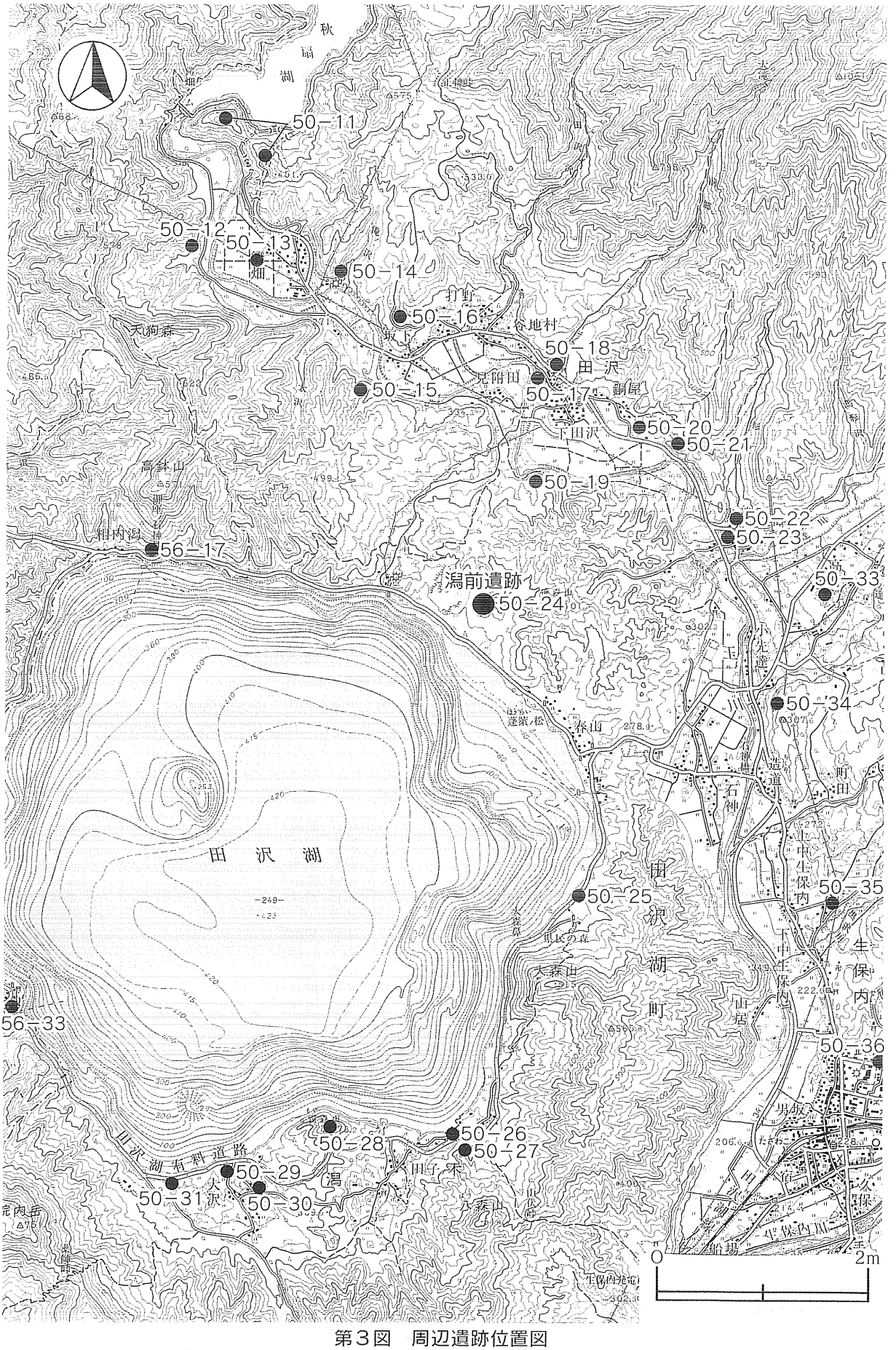
1. 武藤鉄城 「田沢湖畔の石器」富木友治編 『田沢湖』 瑞木の会　1959(昭和34年)

参考文献

1. 秋田県 『土地分類基本調査　田沢湖』5万分の1　国土調査　1991(平成3年)
2. 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図』(県南版)　1987(昭和62年)
3. 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ－小出Ⅰ・小出Ⅱ・小出Ⅲ・小出Ⅳ－』 秋田県文化財調査報告書第261集　1991(平成3年)
4. 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56年)
5. 田沢湖町教育委員会 『黒倉Ｂ遺跡』　第1次発掘調査報告　1985(昭和60年)
6. 田沢湖町教育委員会 『黒倉Ｂ遺跡』　第2次発掘調査報告　1986(昭和61年)
7. 深澤多市・田口耕之助 「秋田県生保内村の竪穴」『東北文化』1巻2号　1928(昭和3年)
8. 田沢湖町教育委員会 『武蔵野竪穴住居址群』第一次調査報告　1967(昭和42年)
9. 秋田県教育委員会・田沢湖町教育委員会 『武蔵野竪穴住居址群』第二次調査報告　1968(昭和43年)
10. 秋田県教育委員会 『潟前遺跡(第1次)－県営オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』 秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成9年)

番　号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	文　献
50－11	高堂屋・台城	田沢湖町田沢字蟹沢口	中世(館跡)	2・4
50－12	中山	田沢湖町田沢字猫乳	縄文・古代	2
50－13	蟹沢口	田沢湖町田沢字蟹沢口	縄文(中期)	2
50－14	天館	田沢湖町田沢字大蟹沢	中世(館跡)	2・4
50－15	見付田館	田沢湖町田沢字耳除	中世(館跡)	2・4
50－16	中ノ沢	田沢湖町田沢字中ノ沢	縄文	2
50－17	高屋館	田沢湖町田沢字高屋	中世(館跡)	2・4
50－18	大山	田沢湖町田沢字大山	縄文(晩期)	2
50－19	羽根坂館	田沢湖町田沢字羽根坂	中世(館跡)	2・4
50－20	古館	田沢湖町田沢字沼田	中世(館跡)	2・4
50－21	沼田	田沢湖町田沢字沼田	縄文(晩期)	2
50－22	上屋敷Ⅰ	田沢湖町田沢字先達	縄文	2
50－23	上屋敷Ⅱ	田沢湖町田沢字先達	縄文(中期～晩期)	2
50－24	潟前	田沢湖町田沢字潟前	旧石器・縄文(前期～後期)	2・10
50－25	春山	田沢湖町春山字春山	縄文(晩期)	2
50－26	田子の木	田沢湖町潟字蛭児堂	縄文(晩期)	2
50－27	田子の木館	田沢湖町潟字頭無	中世(城館)	2・4
50－28	靄森館	田沢湖町潟字中山	中世(城館)	2・4
50－29	一の渡し	田沢湖町潟字一の渡・蛭児堂	縄文	2
50－30	ヨテコ沢	田沢湖町潟字ヨテコ沢	縄文	2
50－31	荒沢	田沢湖町潟字荒沢	縄文	2
50－33	下高野	田沢湖町生保内字下高野	縄文	2
50－34	小先達	田沢湖町生保内字小先達	縄文	2
50－35	黒沢野	田沢湖町生保内字黒沢野	縄文	2
50－36	武蔵野	田沢湖町生保内字武蔵野	縄文(晩期)・古代	2・7・8・9
56－17	御座石	西木村上桧木内字相内潟	縄文	2
56－33	潟尻	西木村西明寺字潟尻	縄文(中期・晩期)	2

第１表　周辺遺跡一覧


秋
扇
湖
50－11
50－12
50－13
50－14
50－15
50－16
50－17
50－18
50－19
50－20
50－21
50－22
50－23
50－24
50－25
50－26
50－27
50－28
50－29
50－30
50－31
50－33
50－34
50－35
50－36
56－17
56－33
打野
谷地村
田沢
銅屋
下田沢
高森山
相内潟
潟前遺跡
田沢湖
田沢湖町
大森山
八森山
田子木
大沢
生保内
生保内駅
0
2m

第３図　周辺遺跡位置図

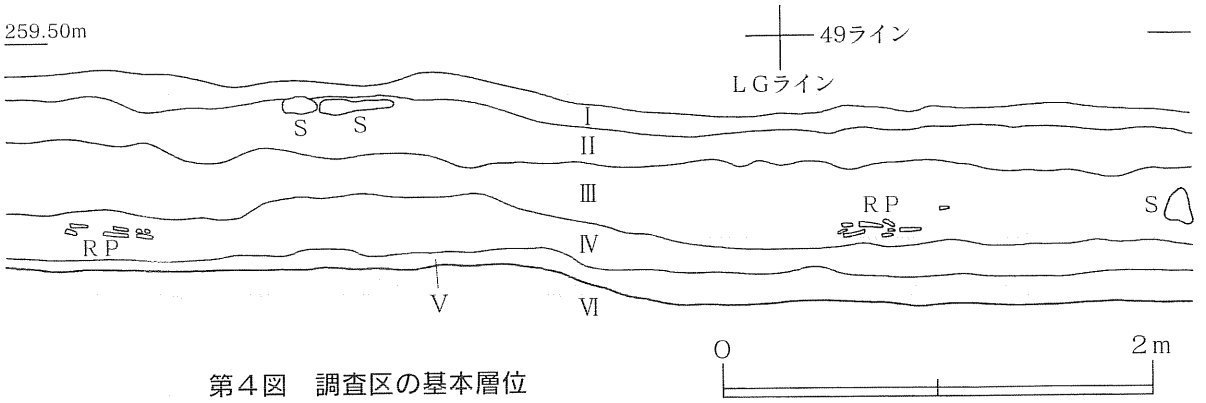
第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

潟前遺跡は、田沢湖の北東湖岸に位置し、田沢湖の外輪山である笹森山から湖岸に向かい南西方向に伸びる舌状台地先端部、標高 254～264m に位置する。高緯度で標高が高いため、亜寒帯性気候区分域に入り、植林された杉林や広葉樹の二次林に囲まれている。樹木の間から田沢湖を間近に見下ろすことができる。調査対象範囲周辺も杉林であったが、現在は伐採されている。遺跡のほぼ中央を町道が南北に通っている。この町道は、湖岸の春山地区と外輪山北麓側の田沢地区を結ぶ道路で、通称田沢道と呼ばれる。湖岸には、湖を周回するかたちで県道田沢湖西木線が走っている。遺跡南端部から湖岸までの距離は約 60m、湖面との比高は 5m である。遺跡の平均斜度は 8％であるが、北東側は 12％とやや急な斜面となっている。（第５図、図版１）

平成８年度の範囲確認調査の結果から、遺跡の推定面積は約 12,000㎡であるが、同年度にホテルの進入路部分 1,030㎡は発掘調査が終了し、すでに道路になっている。調査範囲 2,800㎡も大部分が、平成９年度の田沢湖町の調査によって表土が取り除かれていた。また、町道部分は以前から削平され、砂利敷きされていた。町道西側の平坦面約 5,000㎡は遺跡の中心部と考えられ、この部分は保存されることになり、現在は盛り土されている。

調査区の基本層位は、調査区境界に沿って設定したトレンチから、以下のように観察できた。（第４図）



第４図　調査区の基本層位

第Ⅰ層　黒色土(10ＹＲ2／1)：しまりの弱いシルト質土である。草木の影響を強く受けていて腐植含有量の多い黒ボク土壌である。層厚は、10～20cm である。

第Ⅱ層　黒褐色土(10ＹＲ2／3)：しまりの弱いシルト質土である。腐植含有量の多い黒ボク土壌である。少量ではあるが、縄文時代後期の遺物を含む。ところによって指頭大から拳大の礫が混入する。層厚は、0～25cm である。調査区西部では欠落する部分がある。

第Ⅲ層　暗褐色土(10ＹＲ3／3)：しまりのやや弱いシルト質土である。腐植含有量のやや少ない黒ボク土壌である。縄文時代後期の遺物を含む層である。ところによって指頭大の礫がわずかに混入する。層厚は、5～40cm である。

第Ⅳ層　暗褐色土(10ＹＲ3／4)：しまりのやや弱いシルト質土である。縄文時代前期中葉から中期前葉の遺物包含層である。ところによって指頭大の礫が極わずか混入する。層厚は、0～30cmである。調査区西部ではほとんどの部分で欠落する。

第Ⅴ層　にぶい黄褐色土(10ＹＲ4／3)：しまりのやや強いシルト質の地山漸移層である。層厚は、0～15cmである。部分的な堆積であり、主に調査区東部で認められる。

第Ⅵ層　明黄褐色土(10ＹＲ6／8)：しまりの強い粘土質の地山である。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を用いた。調査区内に任意の点を１ヵ所を選定し、この基準杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、網掛けすることにより4×4mのグリッドを設定した。また、南北線には２桁の算用数字、東西線にはアルファベット２文字の線名を付し、各グリッドは南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド杭を利用して行い、縮尺は原則として20分の１とした。

第３節　調査の経過

5月12日　作業員説明会を行った。資材の整理、環境整備をした。

5月13日　表土除去を開始した。前年調査の行われた区域の配石遺構から実測を開始した。

6月19日　ＳＸ30性格不明遺構は、地床炉を中心にして、周囲に柱穴が巡る竪穴住居跡であることがわかり、ＳＩ30竪穴住居跡と名称を変更した。

6月29日　調査区南端の仮設水路があふれたため、応急措置をしたあと原因者側に連絡した。

7月　2日　縄文時代後期の遺構は調査区全体に広がり、その密度も高く、予定通りの調査日数では終えられないことが明らかになった。

7月　8日　所長に調査期間の延長を依頼した。

7月16日　調査期間の延長の内諾を得、10年度の発掘・整理予算を見直し、補正予算を作成した。

7月31日　飛び地になっている調査区に遺構はなく、調査を終えた。

8月　4日　皇太子殿下御来跡の栄を賜り、県教育庁冨樫泰時参事がご説明した。

8月24日　ＳＲ193・194土器埋設遺構を検出した。

9月　1日　ＳＱ06配石遺構は、ＳＩ202竪穴住居跡の壁であることがわかった。

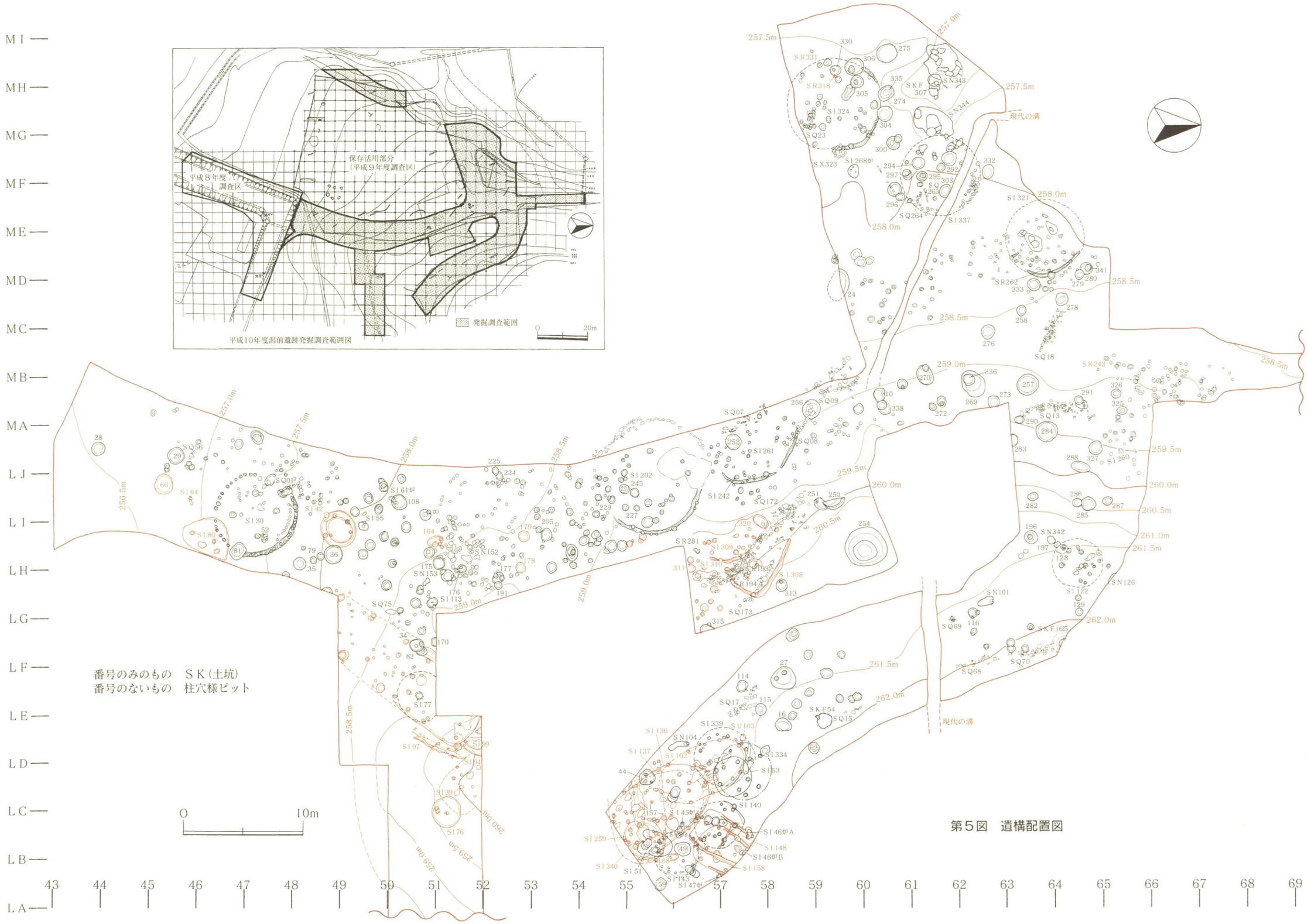
9月　8日　ＳＮ136・137焼土遺構は、大型住居跡の地床炉であることがわかった。

9月24日　調査区南部の調査を終了し、原因者側に明け渡しをした。

10月　1日　ＳＲ262土器埋設遺構は、壁溝のあるＳＩ324竪穴住居跡の壁近くの床に埋設されたアスファルト貯蔵土器であることを確認した。

10月　7日　終了写真撮影を行った。

10月　8日　遺物・器材を埋蔵文化財センターに搬送するとともに電線・電話取り外し・リース機材の返却を行い、調査を終了した。


保存活用部分
（平成９年度調査区）
平成８年度
調査区
発掘調査範囲
0
20m
平成10年度潟前遺跡発掘調査範囲図
現代の溝
番号のみのもの　ＳＫ（土坑）
番号のないもの　柱穴様ピット
0
10m
MI
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LJ
LI
LH
LG
LF
LE
LD
LC
LB
LA
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69

第５図　遺構配置図

第４章　調査の記録

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡42軒、土坑91基、フラスコ状・袋状土坑３基、配石・集石遺構18基、焼土遺構８基、土器埋設遺構７基、その他の遺構２基、柱穴様ピット490基であり、すべて縄文時代の遺構である。このうち縄文時代前期・中期の遺構と判断した遺構は、竪穴住居跡18基、土坑７基、土器埋設遺構３基、その他の遺構１基であり、それ以外の遺構はすべて縄文時代後期前葉のものと判断した。なお、炉だけあるいは柱穴だけの検出であっても、竪穴住居に伴うと思われるものは竪穴住居跡として扱った。また、柱穴様ピットは、建物跡に伴うと判断できなかったものについては記述を省略した。

縄文時代前期・中期の遺構は調査区の南東側を中心に広がるが、その広がりは調査区全体の４分の１にすぎない。逆に、縄文時代後期の遺構は調査区全体に広がり、その密度も高い。遺物は、第Ⅱ～Ⅲ層および同面を構築面とする遺構覆土中から縄文時代後期の土器・土製品・石器・石製品が、第Ⅳ～Ⅴ層および同面を構築面とする遺構覆土中から縄文時代前期・中期の土器・石器が出土した。しかし、上位の遺構の構築時や近代の道路造成・植林などによって撹乱されていて、縄文時代前期から後期までの遺物が混在していることが多く、層位的に時間差をとらえることができなかった。さらに、調査区南東側は、斜面であるうえ、縄文時代前期・後期ともに遺構の密度が高く、遺構の新旧や遺物の前後関係を把握することができなかった。

第１節　縄文時代前期・中期の遺構と遺構内出土遺物

１　竪穴住居跡

ＳＩ39竪穴住居跡（第６図）

ＬＣ51、ＬＤ51グリッドに位置する。トレンチ内の地山上で地床炉を検出して確認した。ＳＩ76竪穴住居跡と重複するが、本住居跡が新しい。未調査区域との境界に設定した断面には、本住居跡と重複している竪穴住居跡の壁を検出したが、本住居跡が古い。平面形は楕円形と推定した。覆土は３層に分けられた。第６～８層がそれである。自然堆積と思われる。壁は、断面からしか検出できなかったが、外傾しながら立ち上がる。その高さは0.35mを測る。床面は、やや凸凹はあるがほぼ平坦である。地床炉が３ヵ所で検出された。柱穴は、床面に５ヵ所検出したが、主柱穴は特定できなかった。遺物は、床面近くから縄文土器片（1～3）が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代中期初頭と思われる。

ＳＩ42竪穴住居跡（第６図、図版３）

ＬＨ48・49、ＬＩ48・49グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸3.0m、短軸2.8mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは0.35mである。覆土は、５層に分けられた。自然堆積と思われる。壁は、外傾しながら立ち上がり、最も高いところで0.15mを測る。床面は、ほぼ平坦である。外側に幅0.2m～0.5mのテラス状の一段高い面をもつ。床面中央に薄い円形の炭痕を検出した。床面とテラス状の面から７基の柱穴を検出した。遺物は、覆土中から

縄文土器片(4～6)や石錘２点(7・8)、石鏃１点(9)、石匙１点(10)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代前期中葉と思われる。

ＳＩ64 竪穴住居跡(第６・７図、図版３・９)

ＬＩ45 グリッドに位置する。焼土とその中で横倒しになった土器を検出して炉と判断した。ＳＩ80 竪穴住居跡と重複していると思われるが、新旧関係は不明である。壁も床も検出することができなかった。炉の内部から縄文土器(13)が出土した。口縁部を南西に向けて横倒しになり、上部は失われていた。また、胴部から底部にかけては、二次焼成を受け赤変していた。焼土は土器の東側に広がっていた。構築時期は、出土土器から縄文時代中期初頭と思われる。この土器は、横倒しに埋設された可能性がある。また、住居でなく炉としてだけ使用した可能性もある。

ＳＩ76 竪穴住居跡(第７図、図版３・９)

ＬＢ51、ＬＣ51 グリッドに位置する。地山上で褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ39 竪穴住居跡と重複する。本住居跡が古い。平面形は直径 2.45m の円形であり、底面直径 2.24m、確認面からの深さは 0.26m を測る。覆土は３層に分けられた。すべて地山に近い覆土で、自然堆積と思われる。壁は、外傾気味に立ち上がる。床面は平坦である。床面ほぼ中央に薄い炭層を確認して、炉と推定した。柱穴は、床面の南側に２基検出した。遺物は、底面近くの覆土中より縄文土器(11・12)、石匙２点(14・15)が出土した。柱穴が重複することから１回の改築があった可能性がある。構築時期は、出土した土器から縄文時代前期中葉と思われる。

ＳＩ80 竪穴住居跡(第７・８図、図版３)

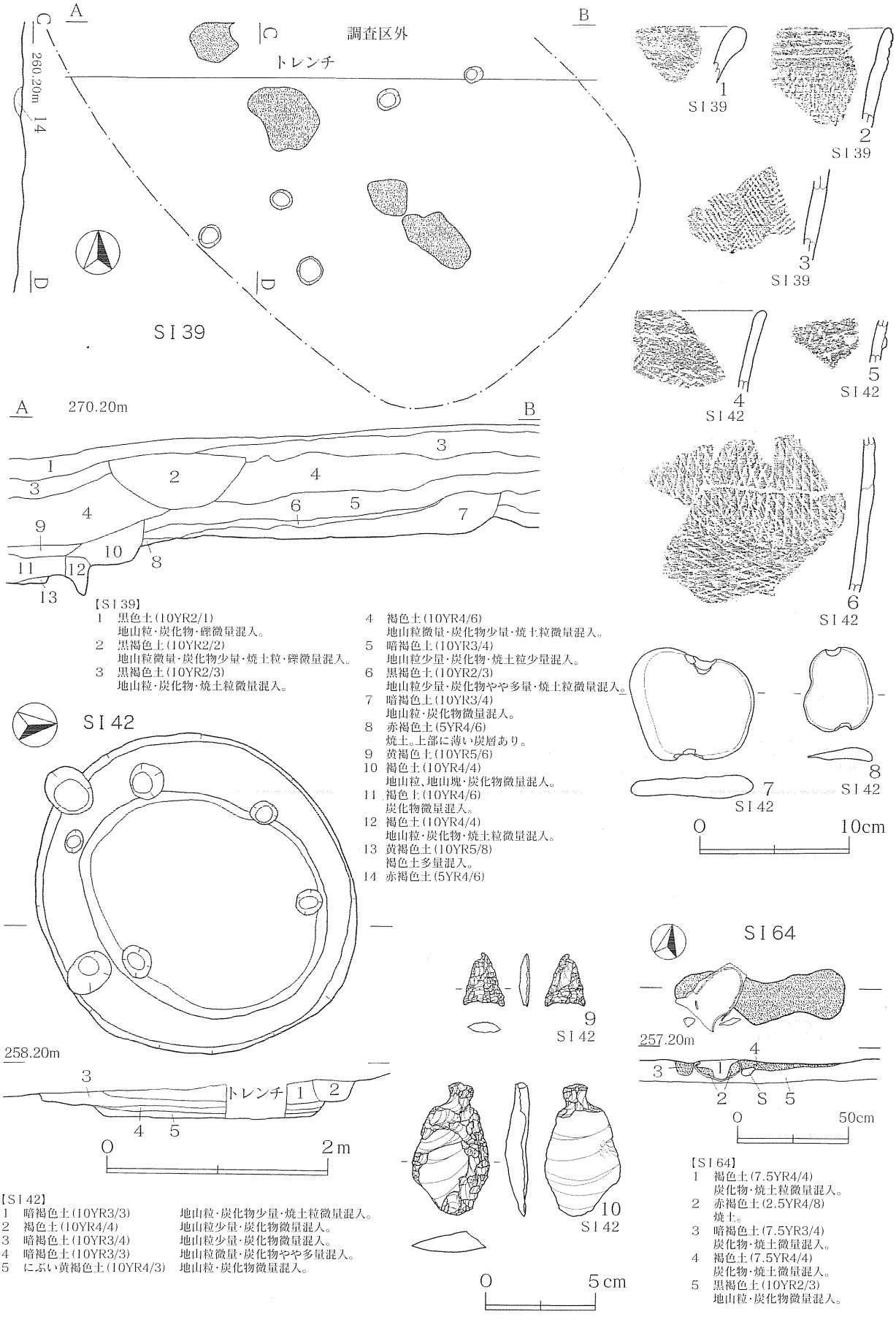
ＬＨ45・46 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ30 竪穴住居跡と重複するが、本住居跡が古い。平面形は、直径 4.5m の円形と推定され、確認面からの深さは 0.21m を測る。東側は調査区外に広がるが、およそ半分は調査したものと思われる。覆土は３層に分けられた。そのうち２層は柱穴の覆土である。壁は、少し開きながら立ち上がると思われる。床面は、平坦である。中央付近に焼土の堆積を検出し、炉と判断した。床面に４基の柱穴を確認した。主柱穴はＰ１・４と思われる。Ｐ２では、底面近くに炭層を検出した。遺物は、覆土中より縄文土器片(16～24)、石匙１点(28)、石錘３点(25～27)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代前期中葉と思われる。

ＳＩ94 竪穴住居跡(第８図、図版３)

ＬＤ51 グリッドに位置する。調査区外との境界にあたる断面と黄褐色土の落ち込みで確認した。ＳＩ97・99 竪穴住居跡と重複する。本住居跡が最も古い。覆土は１層(第９層)で、ほぼ地山と同じである。 遺物は、覆土中より縄文土器片数点が出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代前期中葉と思われる。

ＳＩ97 竪穴住居跡(第８・９図、図版３・９)

ＬＥ49・50、ＬＦ49・50、ＬＧ49・50、ＬＤ51 グリッドに位置する。Ⅳ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ94・99 竪穴住居跡と重複する。本住居跡が最も新しい。南側で調査区外に伸び、平面形は、推定長軸 17m、短軸 4.8m の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは 0.40m を測る。遺構内の覆土は２層に分けられた。壁は、少し開き気味に立ち上がる。傾斜地に床面を作ったため、北側では地山を削り南側では地山を盛って平坦にし、床にしている。北側の壁に沿って薄い炭層が広がるほか、地床炉が２ヵ所で検出された。床面で 50 基ほどの柱穴を検出しているが、主柱

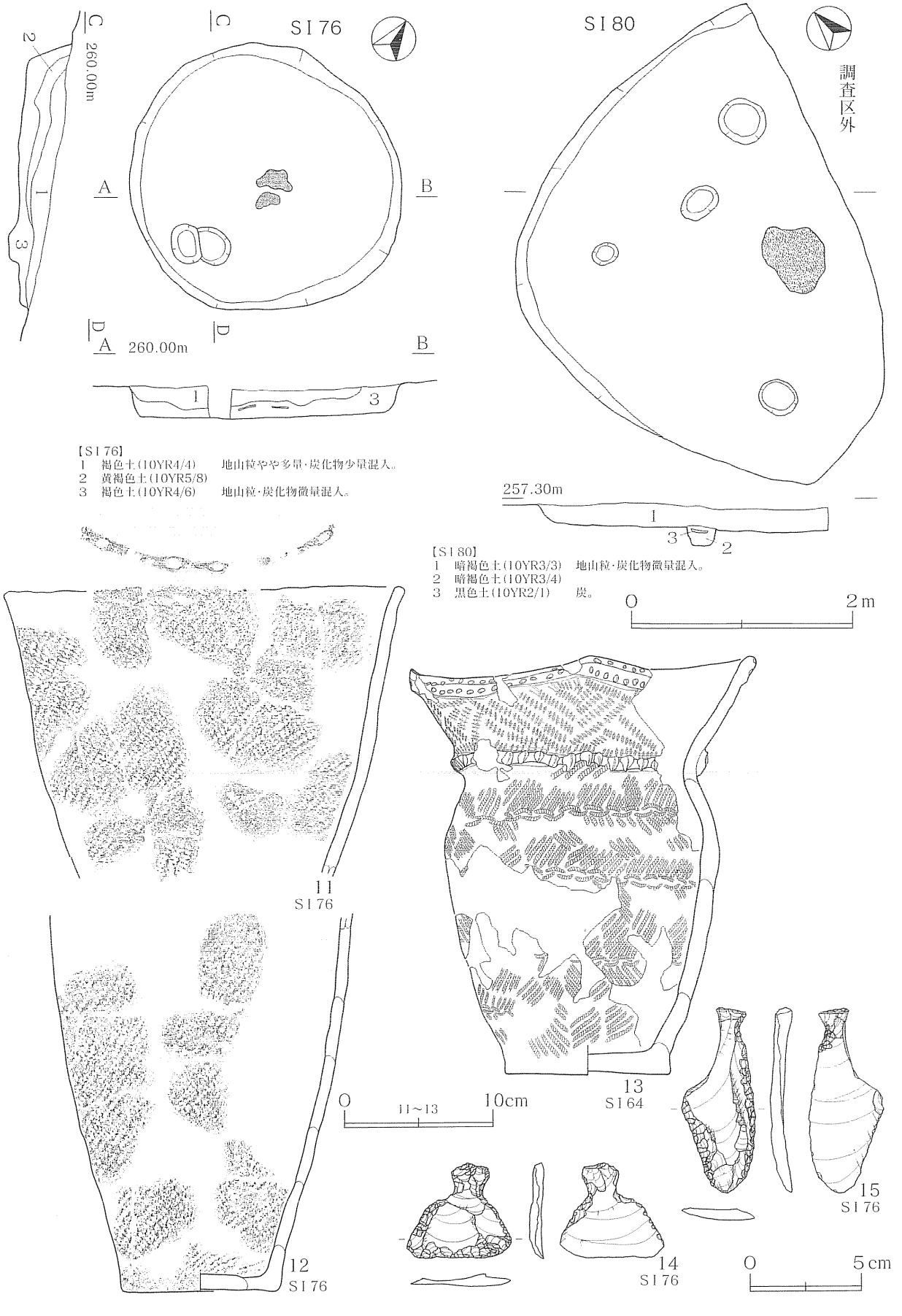


【SI 39】
1　黒色土(10YR2/1)
　地山粒・炭化物・礫微量混入。
2　黒褐色土(10YR2/2)
　地山粒微量・炭化物少量・焼土粒・礫微量混入。
3　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。
4　褐色土(10YR4/6)
　地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。
5　暗褐色土(10YR3/4)
　地山粒少量・炭化物・焼土粒少量混入。
6　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒少量・炭化物やや多量・焼土粒微量混入。
7　暗褐色土(10YR3/4)
　地山粒・炭化物微量混入。
8　赤褐色土(5YR4/6)
　焼土。上部に薄い炭層あり。
9　黄褐色土(10YR5/6)
10　褐色土(10YR4/4)
　地山粒、地山塊・炭化物微量混入。
11　褐色土(10YR4/6)
　炭化物微量混入。
12　褐色土(10YR4/4)
　地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。
13　黄褐色土(10YR5/8)
　褐色土多量混入。
14　赤褐色土(5YR4/6)

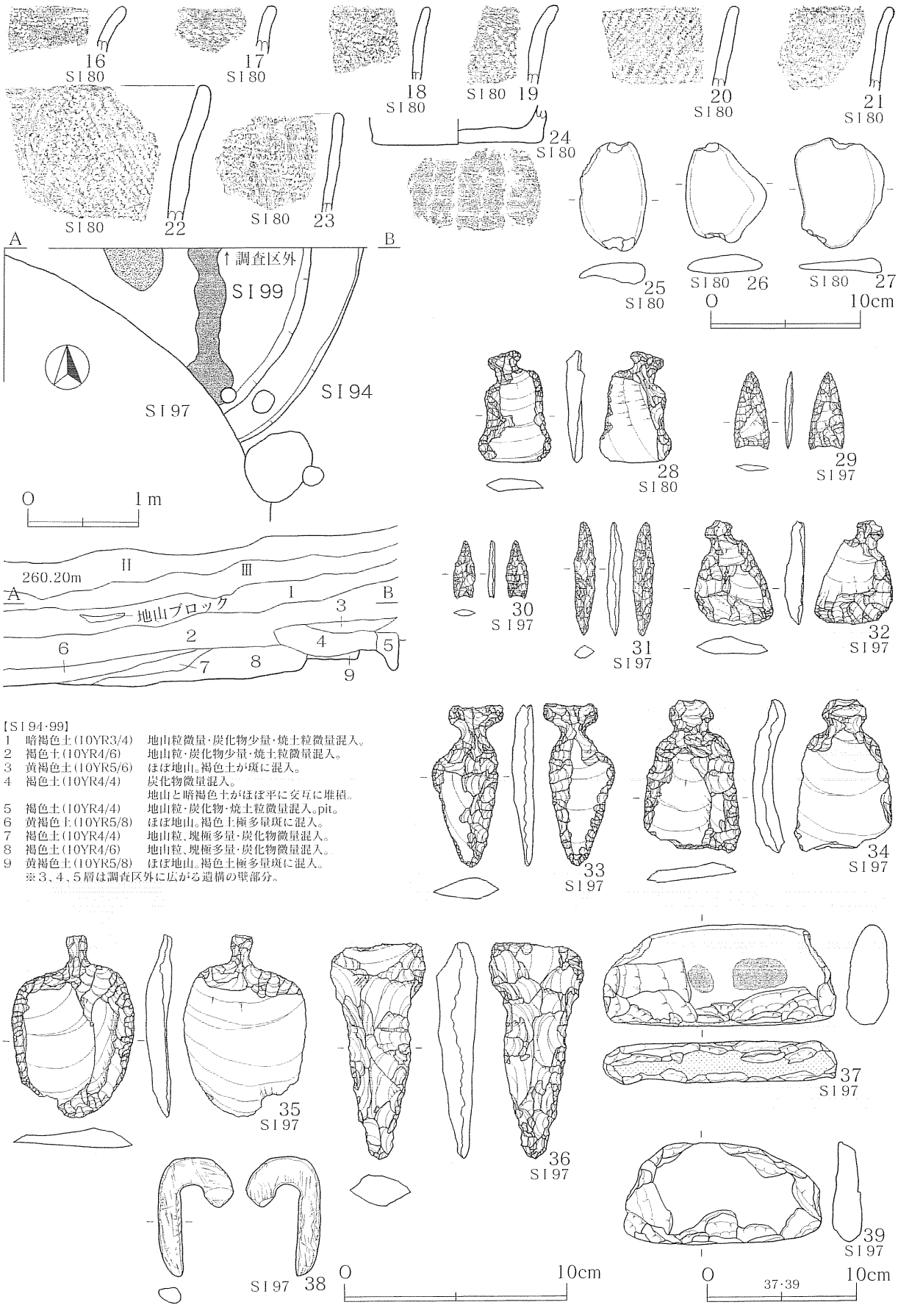
【SI 42】
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物少量・焼土粒微量混入。
2　褐色土(10YR4/4)　地山粒少量・炭化物微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒少量・炭化物微量混入。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒微量・炭化物やや多量混入。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒・炭化物微量混入。

【SI 64】
1　褐色土(7.5YR4/4)
　炭化物・焼土粒微量混入。
2　赤褐色土(2.5YR4/8)
　焼土。
3　暗褐色土(7.5YR3/4)
　炭化物・焼土微量混入。
4　褐色土(7.5YR4/4)
　炭化物・焼土微量混入。
5　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒・炭化物微量混入。

第６図　ＳＩ39･42･64 竪穴住居跡とその出土遺物



第７図　ＳＩ64･76･80　竪穴住居跡とその出土遺物

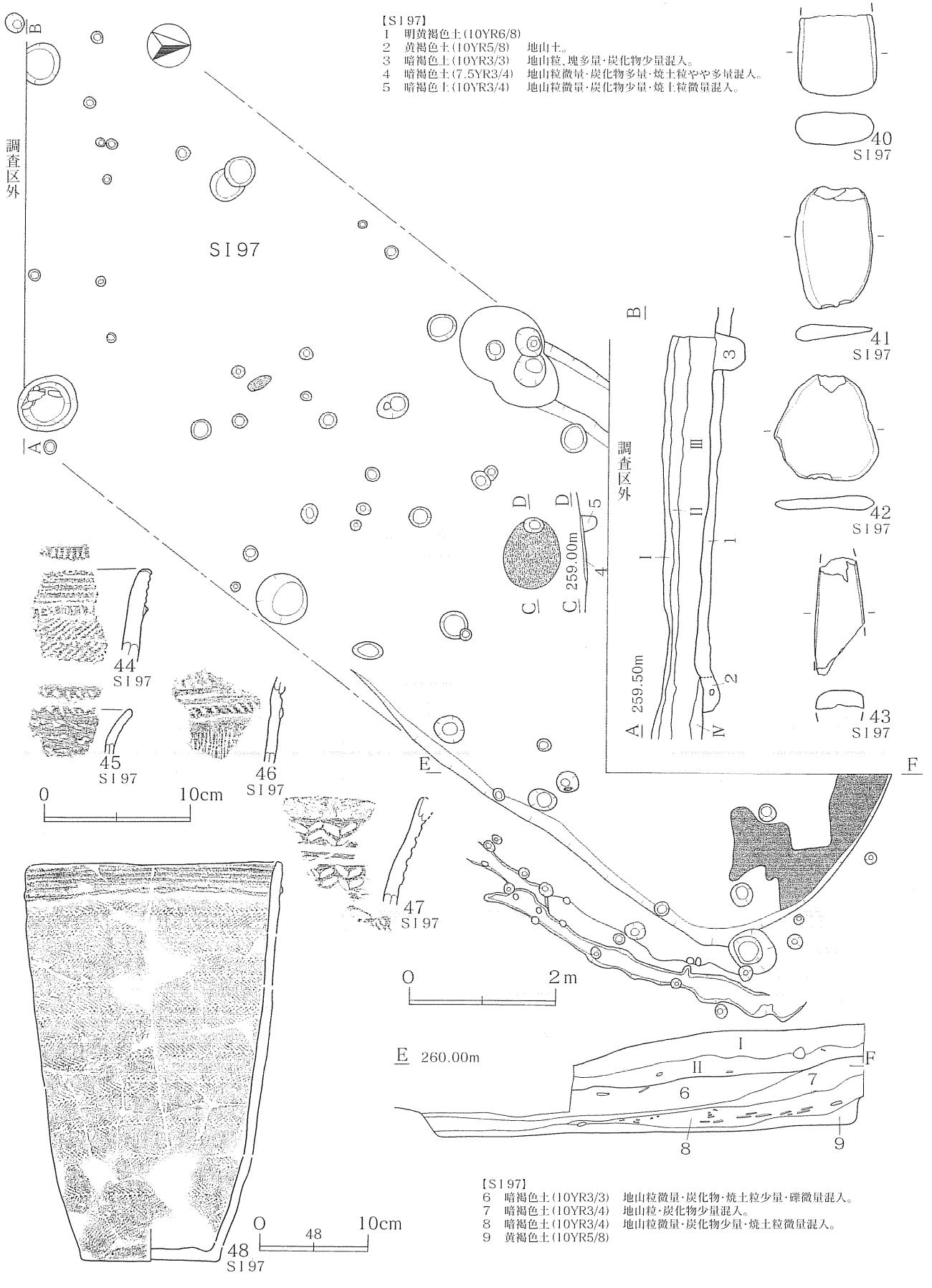


【SI94·99】

1	暗褐色土(10YR3/4)	地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。
2	褐色土(10YR4/6)	地山粒・炭化物少量・焼土粒微量混入。
3	黄褐色土(10YR5/6)	ほぼ地山。褐色土が斑に混入。
4	褐色土(10YR4/4)	炭化物微量混入。 地山と暗褐色土がほぼ平に交互に堆積。
5	褐色土(10YR4/4)	地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。pit。
6	黄褐色土(10YR5/8)	ほぼ地山。褐色土極多量斑に混入。
7	褐色土(10YR4/4)	地山粒、塊極多量・炭化物微量混入。
8	褐色土(10YR4/6)	地山粒、塊極多量・炭化物微量混入。
9	黄褐色土(10YR5/8)	ほぼ地山。褐色土極多量斑に混入。

※3、4、5層は調査区外に広がる遺構の壁部分。

第８図　SI80·94·97·99 竪穴住居跡とその出土遺物



第９図　ＳＩ97 竪穴住居跡とその出土遺物

穴は壁面に沿って並ぶ柱穴であると思われる。南東側で壁面の外側に沿って0.4mほどの幅で連続する小さな溝と穴が検出された。壁の構造材の痕と思われる。遺物は、覆土中より縄文土器(44～48)、石匙4点(32～35)、削器1点(36)、石錘2点(41・42)、石鏃3点(29～31)、玦状耳飾り1点(38)、磨製石斧(40・43)、半円状扁平打製石器2点(37・39)が出土した。一部柱穴に重複があることから、1回の改築の可能性が考えられる。構築時期は、出土した土器より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

ＳＩ99竪穴住居跡(第8図、図版3)

ＬＤ51グリッドに位置する。調査区外との境界にあたる断面で掘り込みを確認するとともに褐色土の落ち込みとして検出した。ＳＩ94・97竪穴住居跡と重複する。ＳＩ94竪穴住居跡より新しく、ＳＩ97竪穴住居跡より古い。規模は、ＳＩ97竪穴住居跡に切られていて不明である。覆土は、3層(第6～8層)に分けられた。地山の混入割合が高い。壁は、外傾気味に立ち上がると思われる。床面は、平坦であると思われる。床面が赤変した部分を検出し地床炉と判断した。東側に薄い炭層が帯状に伸びている。遺物は、覆土中から縄文土器片5点が出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認状況と出土した土器から縄文時代前期中葉と思われる。

ＳＩ102竪穴住居跡(第10・11図、図版3)

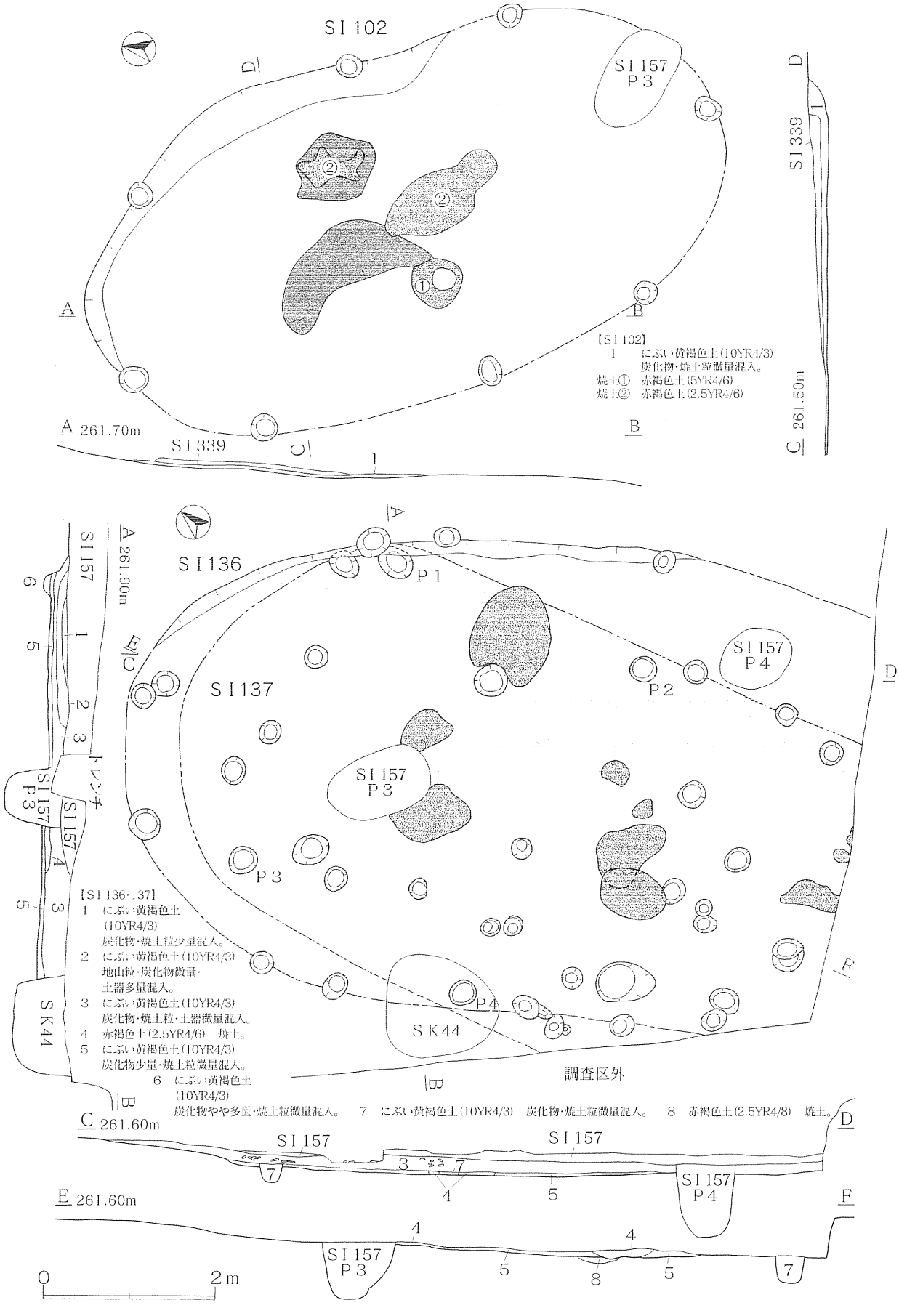
ＬＣ56、ＬＤ56グリッドに位置する。Ⅳ層中で、にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ53・334・339竪穴住居跡と重複するが、いずれの遺構より古い。ＳＩ136・137竪穴住居跡とも重複するが、その新旧は不明である。平面形は、長軸約7.7m、短軸約4.1mの楕円形と推定される。覆土は、2層に分けられた。1層はＳＩ339竪穴住居跡の覆土である。自然堆積と思われる。壁は、外傾気味に立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。地山が赤変し固結した部分を3ヵ所検出した。いずれも地床炉である。地床炉の北西側に薄い炭層が帯状に伸びている。壁に沿って8基の柱穴を検出した。遺物は、床面付近から縄文土器片(50)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代前期後葉と思われる。

ＳＩ136竪穴住居跡(第10・11図、図版3・9)

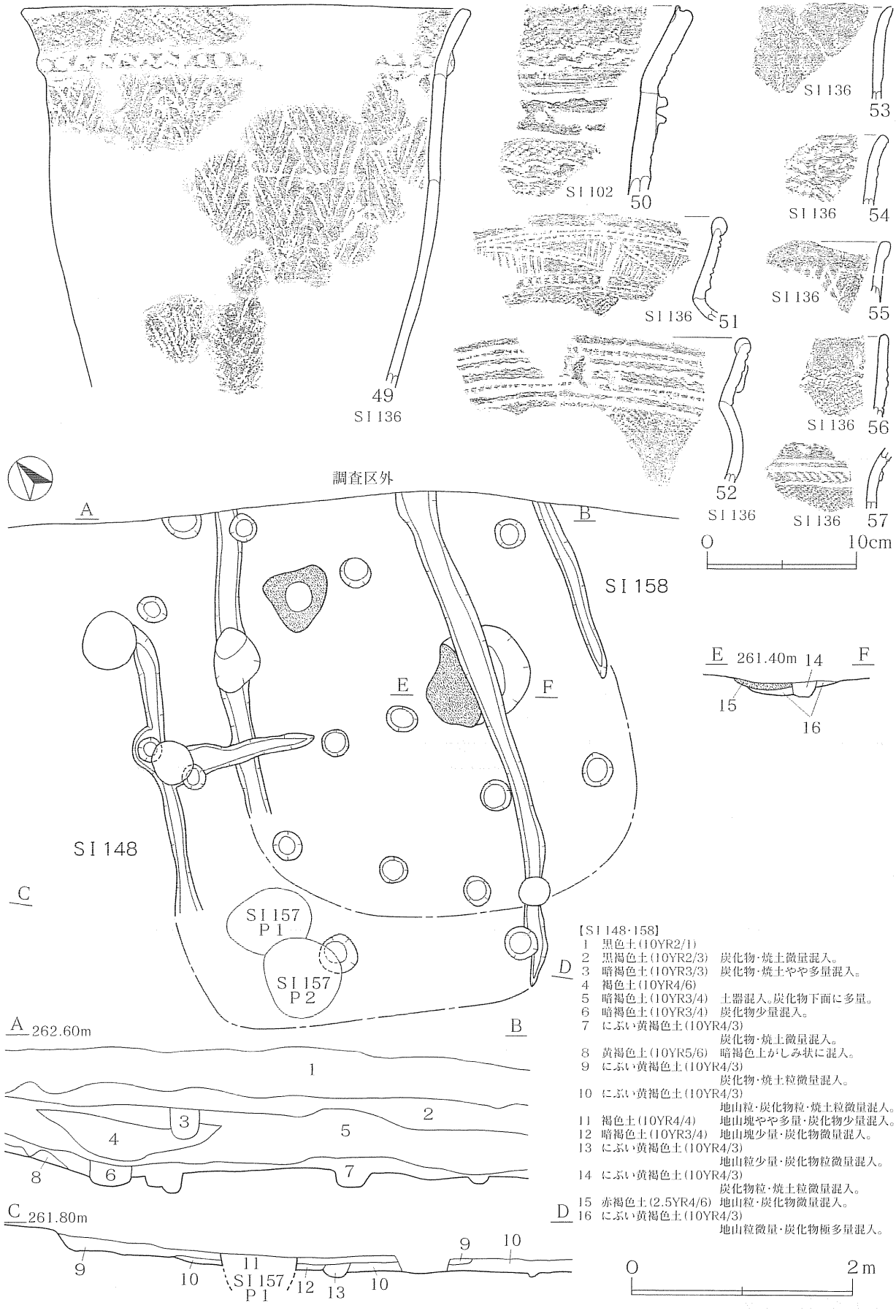
ＬＢ54・55・56、ＬＣ54・55・56グリッドに位置する。Ⅳ層中で焼土遺構として検出し、北東側で壁の立ち上がりを確認後、竪穴住居跡とした。ＳＫ44土坑、ＳＩ102・137・157・259・340竪穴住居跡と重複する。ＳＫ44土坑、ＳＩ157竪穴住居跡より古く、ＳＩ137・259・340竪穴住居跡より新しい。ＳＩ102竪穴住居跡との関係は不明である。平面形は、長軸10m以上、短軸約5.5mの楕円形と推定される。確認面からの深さは、0.20mである。覆土は、3層に分けられた。自然堆積と思われる。壁は、北東側のみ検出できた。床面は、ほぼ平坦である。炉を3ヵ所検出した。いずれも地床炉である。40基あまりの柱穴を検出したが、本住居跡に伴うか、ＳＩ137竪穴住居跡に伴うかは不明である。覆土の中に集中して土器が出土したところがあり、その出土量はコンテナ5箱を越えた。本遺構の廃棄に伴って捨てられたものと考えられる。ＳＩ137竪穴住居跡を少しずらした位置に改築したものが本住居跡であるが、柱穴が2基ずつ並ぶところがあり、さらにもう1回の改築が考えられる。構築時期は、出土した土器(49、51～57)より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

ＳＩ137竪穴住居跡(第10図、図版3)

ＬＢ54・55・56、ＬＣ54・55・56グリッドに位置する。ＳＩ136竪穴住居跡の地床炉の断面作成時、その下に別の焼土遺構を検出した。すなわち焼土遺構として確認した。ＳＫ44土坑、ＳＩ102・136・157・259・340竪穴住居跡と重複する。ＳＫ44土坑、ＳＩ136・157竪穴住居跡より古く、ＳＩ259・



第10図　ＳＩ 102・136・137 竪穴住居跡



【SI 148・158】
1　黒色土(10YR2/1)
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭化物・焼土微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物・焼土やや多量混入。
4　褐色土(10YR4/6)
5　暗褐色土(10YR3/4)　土器混入。炭化物下面に多量。
6　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物少量混入。
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物・焼土微量混入。
8　黄褐色土(10YR5/6)　暗褐色土がしみ状に混入。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物・焼土粒微量混入。
10　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒・炭化物粒・焼土粒微量混入。
11　褐色土(10YR4/4)　地山塊やや多量・炭化物少量混入。
12　暗褐色土(10YR3/4)　地山塊少量・炭化物微量混入。
13　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒少量・炭化物粒微量混入。
14　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物粒・焼土粒微量混入。
15　赤褐色土(2.5YR4/6)　地山粒・炭化物微量混入。
16　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒微量・炭化物極多量混入。

第11図　SI 102・136・148・158 竪穴住居跡とその出土遺物

340 竪穴住居跡より新しい。ＳＩ102 竪穴住居跡との関係は不明である。平面形は、長軸 10m 以上、短軸約 5m の楕円形と推定される。覆土は、1 層である。自然堆積と思われるが、一部はしまりが強く、ＳＩ136 竪穴住居跡の床面を構成していたと考えられる。床面は、ほぼ平坦である。褐色土の赤変を 7 ヵ所で確認したが、3 ヵ所に大別することができた。すなわち 3 基以上の地床炉が連なっていたと考えられる。40 基あまりの柱穴を検出したが、本住居跡に伴うか、ＳＩ136 竪穴住居跡に伴うかは不明である。主柱穴と考えられるのは、Ｐ1～4 である。本住居跡の遺物として確認できたものはない。柱穴や焼土が並列するところがあることから 1 回の改築が考えられる。構築時期は、確認状況より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

ＳＩ148 竪穴住居跡（第 11 図、図版 4）

ＬＡ56・57、ＬＢ56・57 グリッドに位置する。Ⅳ層中で、焼土と壁溝を検出し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ140・143・157・158 竪穴住居跡と重複する。ＳＩ140・143・157 竪穴住居跡より古く、ＳＩ158 竪穴住居跡より新しい。北東側で調査区外に伸びるため全容は不明であるが、平面形は、長軸 5m 以上、短軸約 3m の隅丸長方形で、深さ 0.15m と推定される。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。壁は、断面でしか確認できなかったが、やや外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。炉は、地床炉であるが、上面の柱穴に中央部を壊されている。柱穴は、同一面から 16 基を検出したが、本住居跡に伴うかＳＩ158 竪穴住居跡に伴うかは判別できなかった。壁溝は、長辺にあたる大部分から検出されたが、全体に巡っていたかどうかは不明である。本住居跡のものと確認できた遺物はない。ＳＩ158 竪穴住居跡を改築したものが本住居跡であることから、構築時期は縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

ＳＩ158 竪穴住居跡（第 11 図、図版 4）

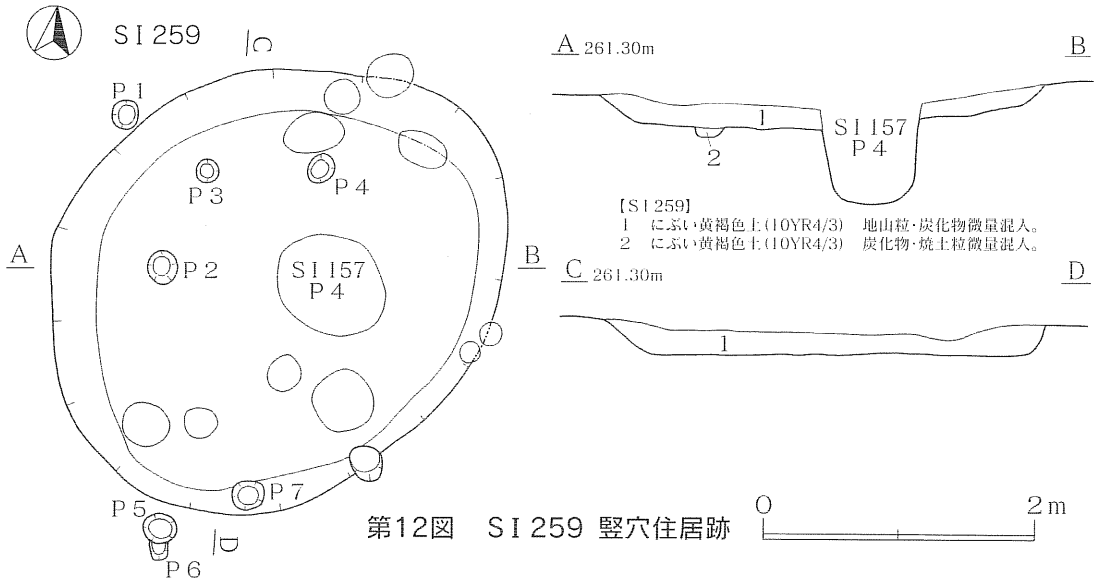
ＬＡ56・57、ＬＢ56・57 グリッドに位置する。Ⅳ層中で、焼土と壁溝を検出し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ140・143・148・157 竪穴住居跡と重複する。これらすべての住居跡より古い。規模の全容は不明であるが、長軸 4m 以上、短軸約 3m の隅丸長方形と推定される。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。壁は、断面でしか確認できなかったが、極めて緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦であると思われる。炉は、浅い掘り込みのある地床炉である。ＳＩ148 竪穴住居跡の壁溝に中央部を壊されている。柱穴は、同一面から 16 基を検出したが、本住居跡に伴うものかＳＩ148 竪穴住居跡に伴うものかは判別できなかった。壁溝は、長辺にあたる部分から検出したが、全体に巡っていたかどうかは不明である。本住居跡のものと確認できた遺物はない。本住居跡を改築したものが、ＳＩ148 竪穴住居跡である。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

ＳＩ259 竪穴住居跡（第 12 図）

ＬＢ55 グリッドに位置する。Ⅳ層中で褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ136・137・143・157・340 竪穴住居跡と重複する。これらすべての住居跡より古い。平面形は、長軸 3.7m、短軸 3.0m の円に近い楕円形である。確認面からの深さは、0.18m を測る。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。壁は、緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。炉は、確認できなかったが、ＳＩ157 竪穴住居跡の柱穴（Ｐ4）の壁面に薄い炭の層を確認し、炉の痕跡と判断した。柱穴は、同一面から 8 基検出した。主柱穴はＰ2・4 と思われる。本住居跡のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の層位より縄文時代前期と思われる。

ＳＩ308 竪穴住居跡（第 13 図、図版 4）

ＬＧ57・58、ＬＨ57・58 グリッドに位置する。地山上で平坦な面と焼土、壁溝を検出し、竪穴住



第12図　ＳＩ259 竪穴住居跡

居跡と判断した。ＳＩ309・310竪穴住居跡、ＳＱ172・173配石遺構、ＳＲ193・194土器埋設遺構と重複する。ＳＩ310竪穴住居跡より新しく、その他の遺構より古い。全容は不明であり、壁は北側の一部に痕跡を見るだけである。床面は平坦であるが、北西側半分は緩やかな斜面になっている。本来はⅣ層かⅤ層に床面があったと思われる。中央部に焼土の堆積があり、炉と判断した。柱穴を、同一面で９基検出したが、平坦な部分では１基のみで、すべてが本住居跡に伴うかどうかは不明である。北側と東側にかけて溝が検出された。遺物は、溝から縄文土器片15点、削器１点(60)、石箆１点(61)、石錘１点(59)が出土した。出土土器片は、縄文時代前期のものと後期のもの(58)が混じっていたが、磨滅が著しい。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期から中期前葉と思われる。

ＳＩ309竪穴住居跡(第13図、図版４)

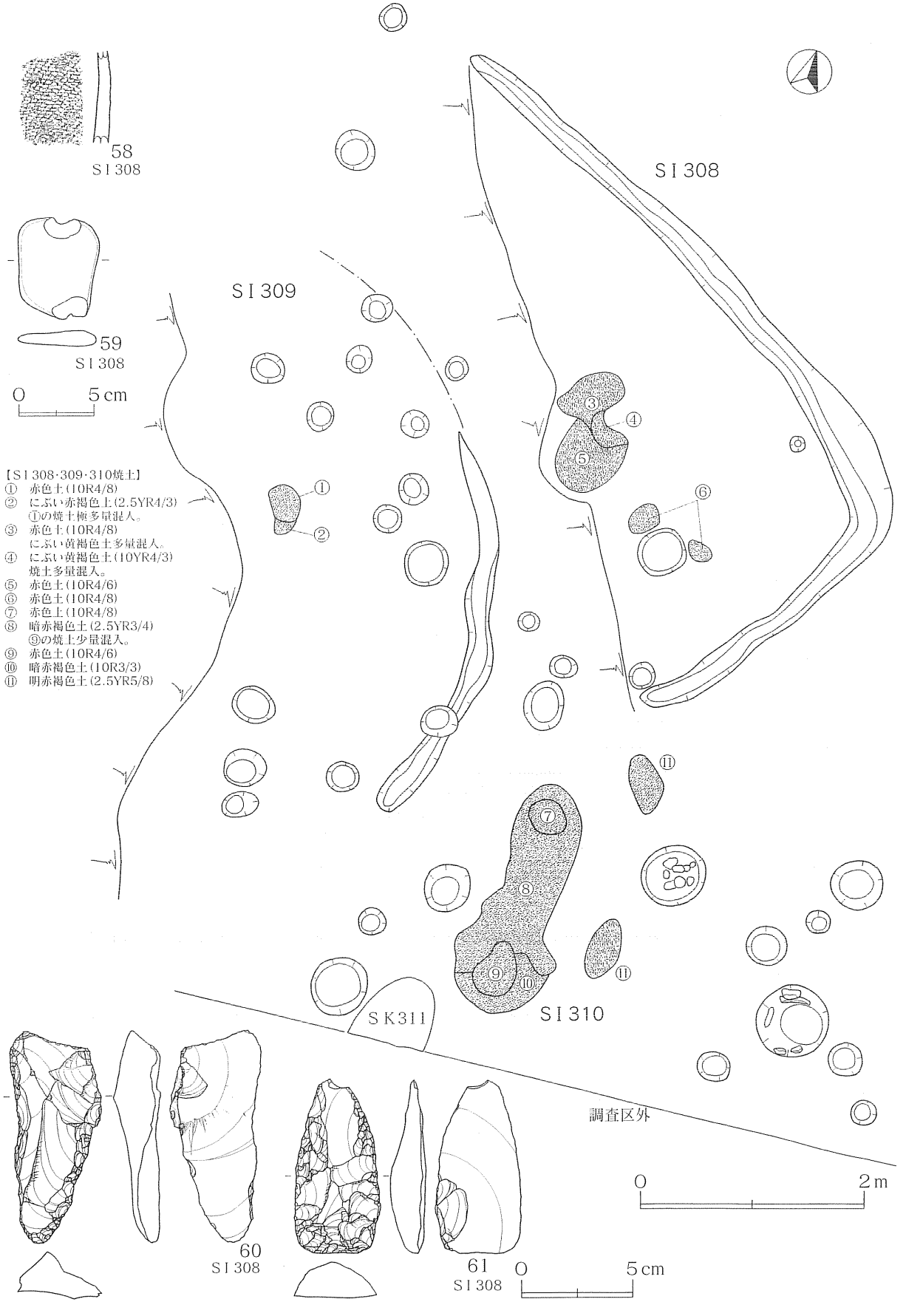
ＬＨ56・57グリッドに位置する。地山上の平坦面で焼土と壁溝を検出して確認した。ＳＩ308・310竪穴住居跡、ＳＱ172・173配石遺構、ＳＲ193・194土器埋設遺構と重複する。ＳＩ308・310竪穴住居跡より新しく、その他の遺構より古い。床面は平坦であるが、西側は緩やかに傾斜している。床面の中央と思われるところに焼土の堆積があり、炉と判断した。平坦面で13基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。溝は東側で検出したが、他は道路によって滅失したと思われる。縄文土器片９点が出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期から中期前葉と思われるが、住居形態から後期の可能性もある。

ＳＩ310竪穴住居跡(第13図、図版４)

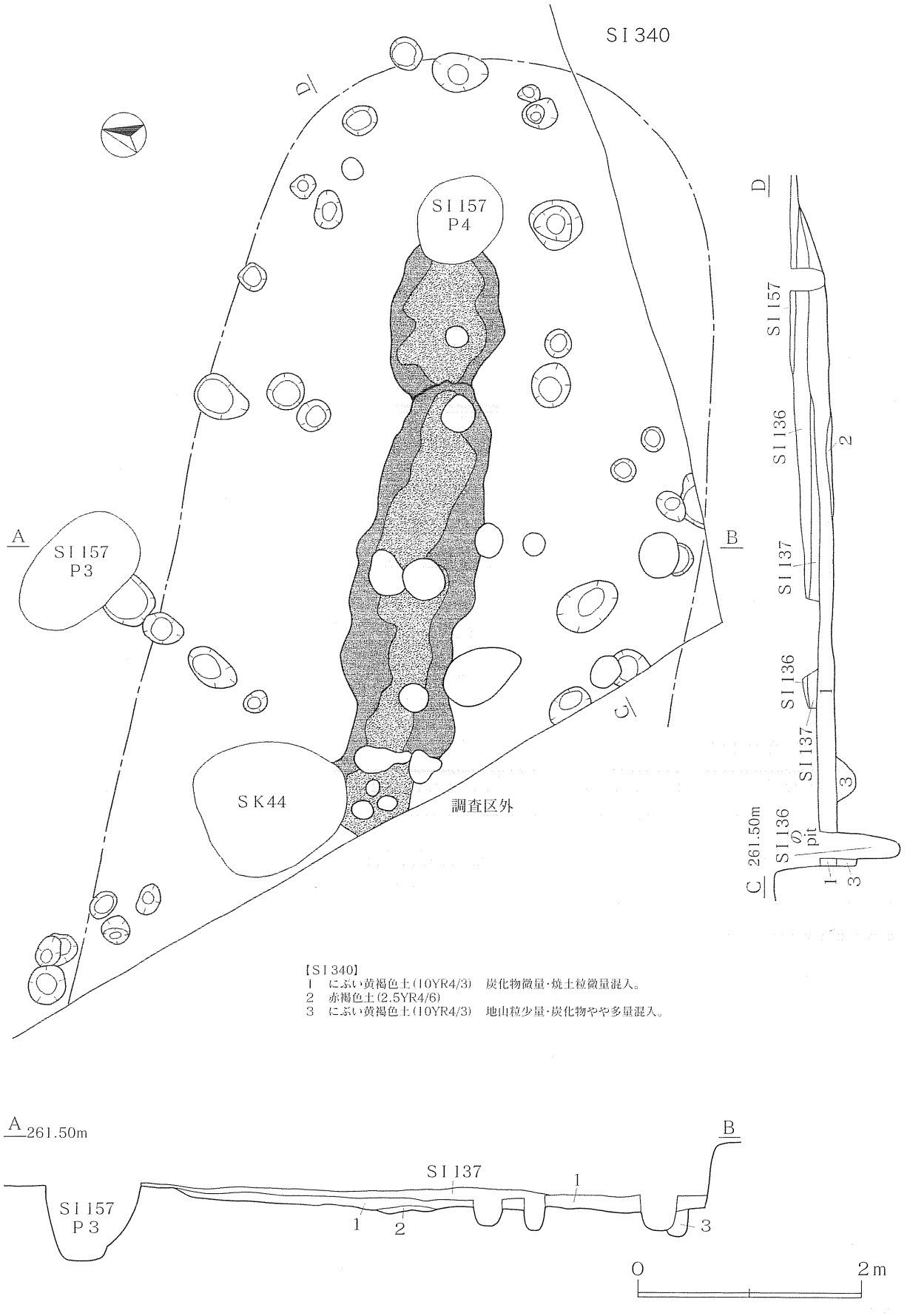
ＬＧ56、ＬＨ56グリッドに位置する。地山上で焼土の広がりと、平坦な面を検出して確認した。ＳＩ308・309竪穴住居跡、ＳＱ172・173配石遺構、ＳＲ193・194土器埋設遺構と重複する。本住居跡が最も古い。規模等の全容は不明であるが、床面は平坦である。地床炉と考えられる焼土は、南北に厚い部分がある。平坦面で11基の柱穴を検出したが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。本住居跡のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期から中期前葉と思われる。

ＳＩ340竪穴住居跡(第14図、図版３)

ＬＢ54・55、ＬＣ54・55グリッドに位置する。Ⅳ層中で、焼土とそれを楕円状に囲む柱穴を検出



第13図　SI 308・309・310 竪穴住居跡とその出土遺物



【SI 340】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物微量・焼土粒微量混入。
2　赤褐色土(2.5YR4/6)
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山粒少量・炭化物やや多量混入。

第14図　SI 340 竪穴住居跡

し、竪穴住居跡と判断した。ＳＫ44 土坑、ＳＩ136・137・157・259 竪穴住居跡と重複する。ＳＫ44 土坑、ＳＩ136・137・157 竪穴住居跡より古く、ＳＩ259 竪穴住居跡より新しい。平面形は、長軸 9.0m 以上、短軸 4.5m の楕円形と思われる。床面は、南西側がやや低いが、ほぼ平坦である。床面に焼土の堆積と炭の広がりを検出し、地床炉と判断した。床面に 30 基の柱穴を検出したが、すべてが本住居跡に伴うかどうか不明であり、主柱穴も不明である。壁際の柱穴が二重ないし三重になることから、1 回ないし 2 回の改築が考えられる。出土遺物で、本住居跡に伴うと確認できたものはない。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

2　土坑

ＳＫ66 土坑（第 15 図）

ＬＩ45 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.72m×短軸 1.43m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.09m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層である。底面は、ほぼ平坦である。底面中央付近に人頭大の扁平な礫があった。遺物は、覆土中より縄文土器片 6 点のほか、石皿 1 点(62)、石匙 3 点(63～65)、削器 1 点(66)が出土した。土器片は、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と出土遺物より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

ＳＫ164 土坑（第 15 図）

ＬＨ50・51 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。3 基の柱穴と重複している。いずれの柱穴よりも古い。平面形は、長軸 1.28m×短軸 0.8m の楕円形で、確認面からの深さは 0.12m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は、3 層に分けられた。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片 8 点と石錘 1 点(67)が出土した。土器片は、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

ＳＫ168 土坑（第 15 図）

ＬＢ55・56 グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複している。本土坑が古い。平面形は、長軸 0.82m×短軸 0.52m の楕円形で、確認面からの深さは 0.23m を測る。壁は、わずかに外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

ＳＫ178 土坑（第 15 図）

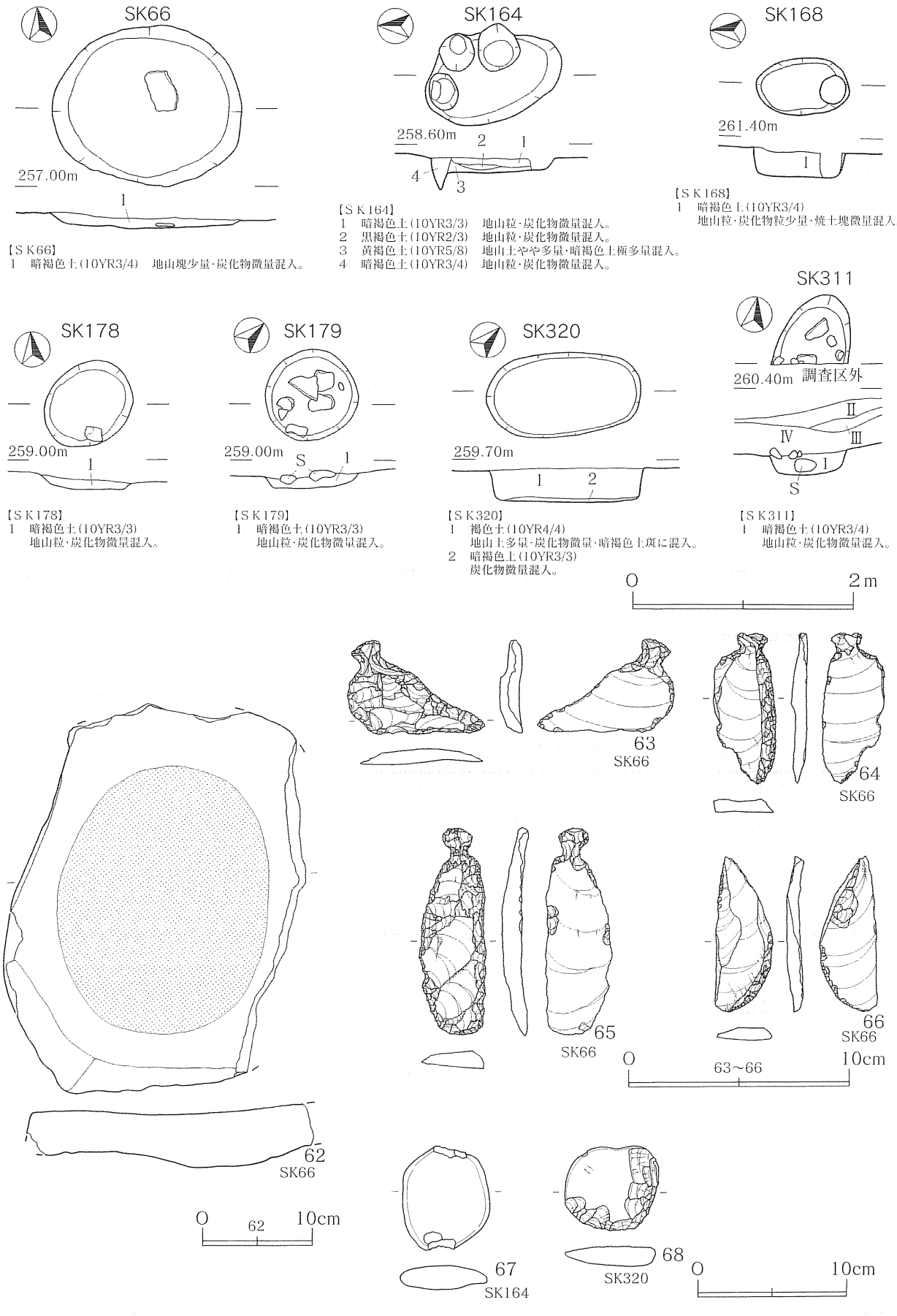
ＬＧ52、ＬＨ52 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.86m×短軸 0.71m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層である。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

ＳＫ179 土坑（第 15 図）

ＬＨ52 グリッドに位置する。Ⅳ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.83m の円形で、確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、ピンポン玉大から人頭大の礫を数個含む。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

ＳＫ311 土坑（第 15 図）

ＬＨ56 グリッドに位置する。調査区外との境界の断面に掘り込みを検出して確認した。全容は不



【ＳＫ66】
1　暗褐色土(10YR3/4)　地山塊少量・炭化物微量混入。

【ＳＫ164】
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
2　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭化物微量混入。
3　黄褐色土(10YR5/8)　地山土やや多量・暗褐色土極多量混入。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭化物微量混入。

【ＳＫ168】
1　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒・炭化物粒少量・焼土塊微量混入。

【ＳＫ178】
1　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒・炭化物微量混入。

【ＳＫ179】
1　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒・炭化物微量混入。

【ＳＫ320】
1　褐色土(10YR4/4)
地山土多量・炭化物微量・暗褐色土斑に混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
炭化物微量混入。

【ＳＫ311】
1　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒・炭化物微量混入。

第15図　ＳＫ66･164･168･178･179･311･320 土坑とその出土遺物

明であるが、調査した半分の形状から平面形は楕円形と思われる。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、ピンポン玉大から人頭大の礫を含む。底面は、中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。形態から土壙墓と考えられる。

ＳＫ320 土坑(第 15 図)

ＬＩ57・ＬＨ57 グリッドに位置する。地山上で褐色土に暗褐色土が斑に混じる円形の広がりとして確認した。平面形は、長軸 1.9m×短軸 0.75m の楕円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、わずかに外傾しながら立ち上がる。覆土は２層に分けられたが、暗褐色土が斑に混入することから、人為堆積と思われる。底面はほぼ平坦である。覆土中から縄文土器片６点、削器１点(68)が出土した。土器片は、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と出土遺物より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。覆土と形態から土壙墓と考えられる。

３　土器埋設遺構

ＳＲ243 土器埋設遺構(第 16 図、図版４・９)

ＭＢ64 グリッドに位置する。道路により上部は削平されていたが、地山上で正立する土器を検出し確認した。掘り方規模は、開口部径 53cm、底面径 24cm、確認面からの深さ 32cm を測る。土器(72)は、底径 11cm、高さ 14cm の上部を欠損する深鉢形土器である。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。覆土は、土器内と掘り方の２層に分けられた。土器の外側ににぶい黄褐色土を詰めて埋設していた。時期は、縄文時代中期前葉と思われる。

ＳＲ318 土器埋設遺構(第 16 図、図版９)

ＭＨ59 グリッドに位置する。上部は削平されていたが、地山上で正立する土器を検出し確認した。掘り方規模は、ほぼ土器と同じで、開口部径 27cm、底面径 22cm、深さ 9cm を測る。土器(70)は、現存部分が底面径 19cm、高さ 6cm で、上方の大部分は失われている。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。覆土は、土器内と掘り方の２層に分けられた。時期は、縄文時代前期中葉から後葉と思われる。

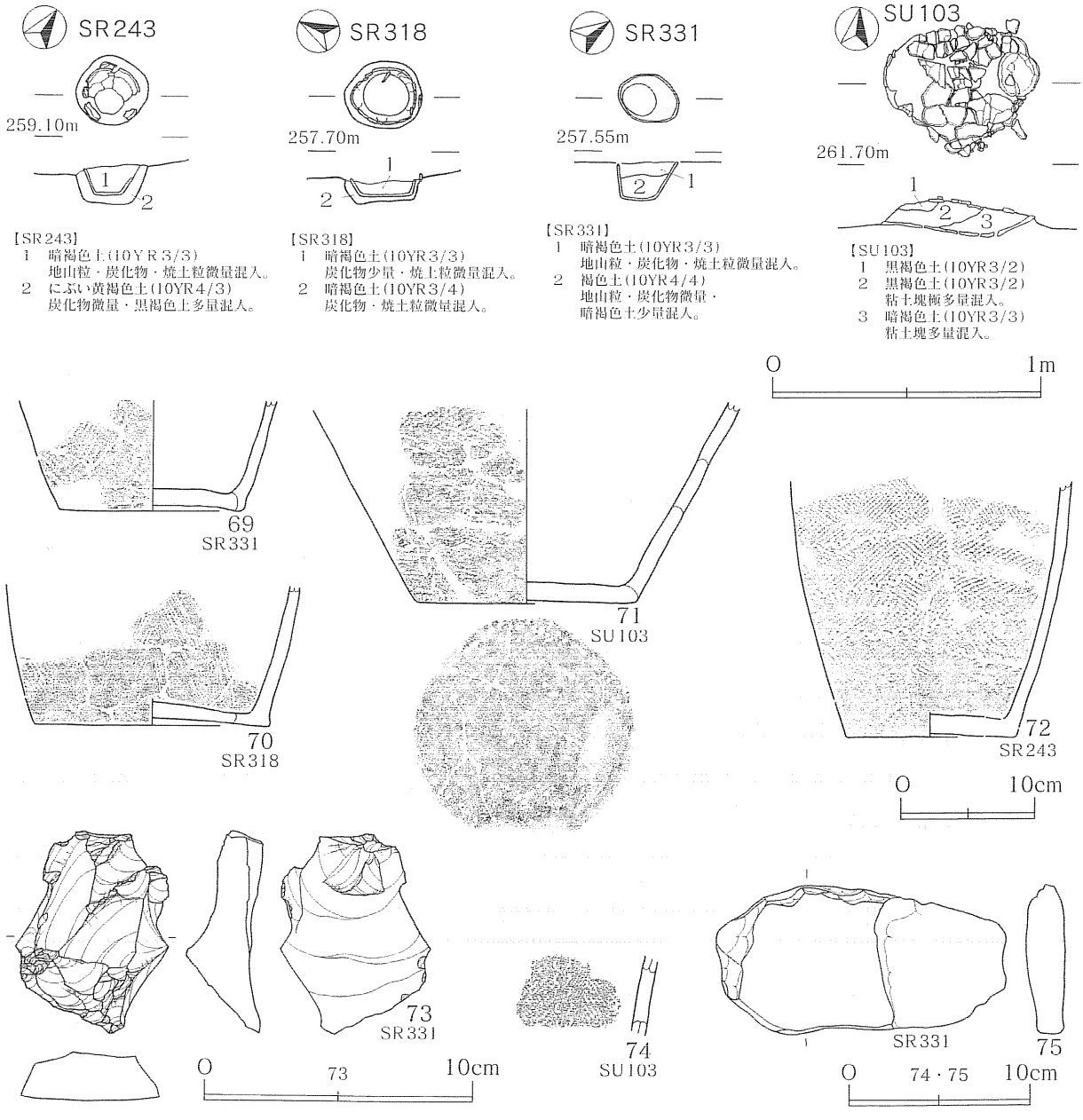
ＳＲ331 土器埋設遺構(第 16 図、図版９)

ＭＨ58 グリッドに位置する。地山上で正立する土器を検出し確認した。掘り方規模は、ほぼ土器と同じで、開口部径 20cm、底面径 12cm、深さ 14cm を測る。土器(69)は、現存部分が底面径 12cm、高さ 14cm で、上半部は失われている。埋設土器以外の遺物は、削器１点(73)、半円状扁平打製石器１点(75)が出土した。覆土は、土器内が２層に分けられた。時期は、縄文時代前期と思われる。

４　粘土貯蔵遺構

ＳＵ103 粘土貯蔵遺構(第 16 図、図版４・９)

ＬＤ57 グリッドに位置する。地山上に土器がまとまって出土し、確認した。ＳＩ339 竪穴住居跡と重複する。ＳＩ339 竪穴住居跡より古い。土器および内部の褐灰色粘土が、長径 55cm、短径 49cm の楕円状に広がる。その厚さは、最も厚いところで 13cm を測る。掘り込みはないが、土器に挟まれた粘土と覆土は３層に分けられた。土器に詰め込まれていた粘土と、粘土が流出し黒色土、暗褐色土の滲入した部分である。粘土は大部分酸化しているが、本来は青灰色であったと思われる。遺物は、本体土器(71)と流れ込んだと思われる土器(74)が出土した。 取り上げた土器片は 60 点に及んだが、流失・磨滅が激しく復原できたのは底部のみである。時期は、出土土器より、縄文時代前期中葉から後葉と思われる。本遺構は、粘土を貯蔵した土器が横倒しになった跡と思われる。



第16図　SR243・318・331土器埋設遺構、SU103粘土貯蔵遺構とその出土遺物

第2節　縄文時代後期の遺構と遺構内出土遺物

1　竪穴住居跡

ＳＩ30竪穴住居跡(第17・18図、図版4)

ＬＨ46・47・48、ＬＩ46・47・48グリッドに位置する。焼土と柱穴の検出によって確認した。ＳＫＰ63柱穴様ピットと重複している。本住居跡が古い。一部道路によって削られた部分があるが、平面形は直径6.2mの円形である。壁面に沿って円形に柱穴が並んでいる。覆土は、1層と考えられる。壁は、柱をほぼ等間隔に並べ、その柱の間を地山土で埋めた構造であったと思われる。床面は、焼土

上面で平坦だったと考えられるが、はっきりとしたところは検出できなかった。竪穴住居跡中央部北西よりに地床炉がある。主柱穴は４本である。本住居跡のものと確認できた遺物は、柱穴から出土した土器片４点(76～79)、石錘１点(80)である。出入り口と思われる柱穴の覆土から２回の改築が考えられるが、北側で柱穴列が二重になることから少なくとも１回の改築があったと思われる。構築時期は、床面が基本土層Ⅲ層中に作られたと考えられることと出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。なお、76 は前期の土器が流れ込んだものと考えられる。

ＳＩ45 竪穴住居跡(第 18 図、図版４・9)

ＬＢ56 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で３基の炉埋設土器を検出し、竪穴住居跡と判断した。３基の埋設土器は、検出順に炉Ａ・炉Ｂ・炉Ｃとした(81～85)。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい調査できなかったが、炉と周辺の焼土部分については 10 層に分けられた。炉Ａ(81)は直径約 17㎝の深鉢形土器であり、底部を欠き、垂直に埋設されており、その高さは確認できた部分だけで 14㎝を測る。炉Ｂ(82)は、直径約 28㎝の深鉢形土器で、炉Ａと同様底部を欠いて埋設され、その高さは 22㎝を測る。炉Ｃ(83)は、高さ 42㎝の深鉢形土器を縦に半截した後、横位に設置していたが、磨滅が著しく一部しか復原できなかった。炉の新旧関係は、焼土の堆積状況から、それぞれわずかであるが時期差があり、炉Ｃ→炉Ｂ→炉Ａの順に古いと考えられる。他に、炉Ｂの内部から２点(84・85)の土器が出土した。構築時期は、炉埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ46 竪穴住居跡(第 19 図、図版４)

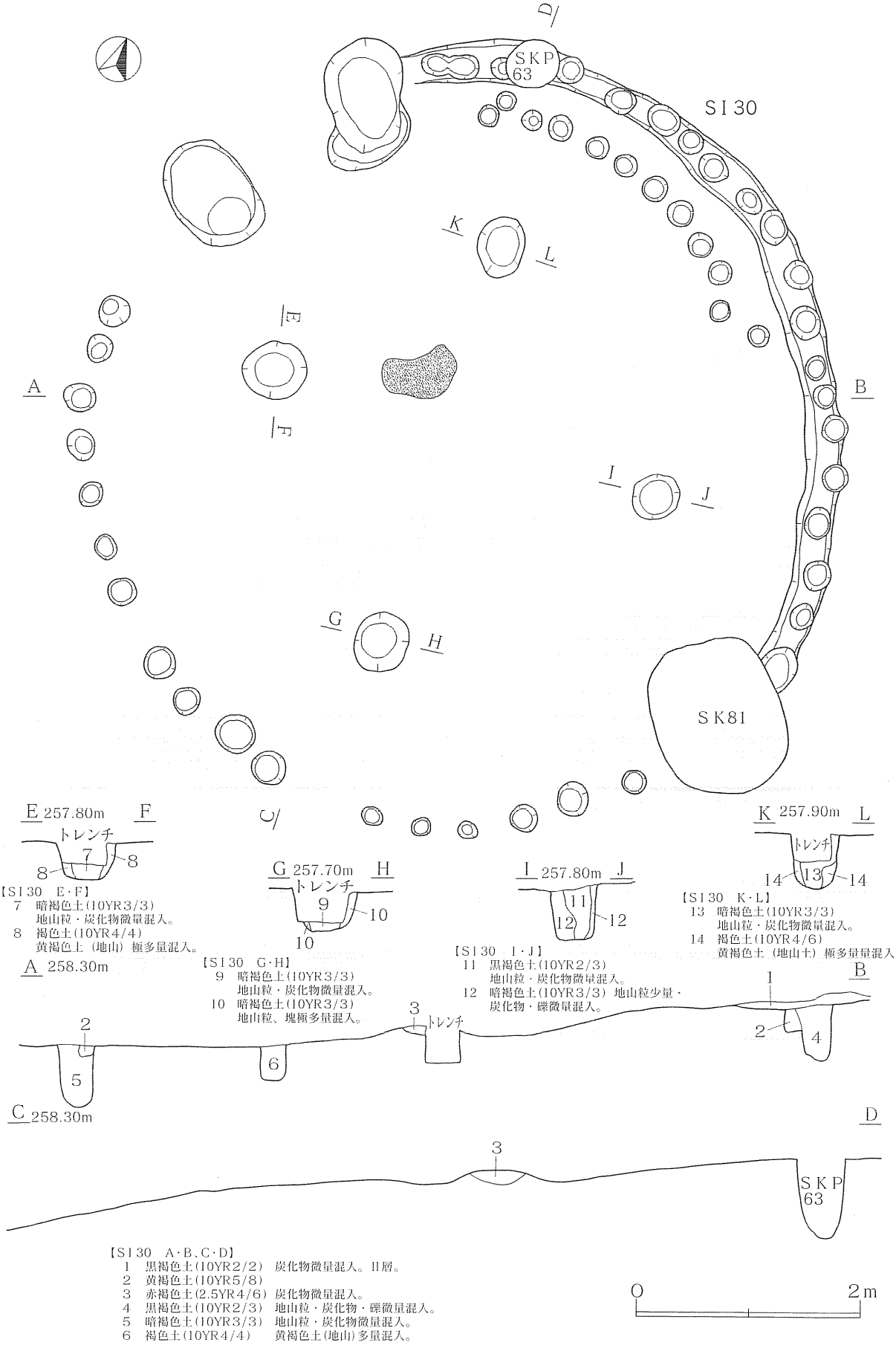
ＬＢ57 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で２基の炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい、床面の一部を確認しただけである。その床面には地山に由来する褐色土と焼土、炭化物が混入していた。貼り床と考えられるが、確認できた面積は北側の炉(Ａ)の周辺部約１㎡である。炉Ａは、埋設土器(86)を伴う。直径約 29㎝の深鉢形土器の底部を欠き、倒立に置いたものである。この埋設土器の南側に炉Ｂがあり、南北約 0.4m、東西約 0.8m の焼土範囲をもつ。これには浅い掘り込みがあり、焼土が堆積していた。焼けた土器片が出土したことから、ここにも土器を埋設していた可能性がある。炉Ａの覆土は４層、炉Ｂの覆土は２層に分けられた。なお、掲載していないが、埋設土器以外に、炉の内部と周辺から土器片 42 点が出土している。２基の炉の新旧関係は不明である。構築時期は、炉埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ47 竪穴住居跡(第 19 図、図版９)

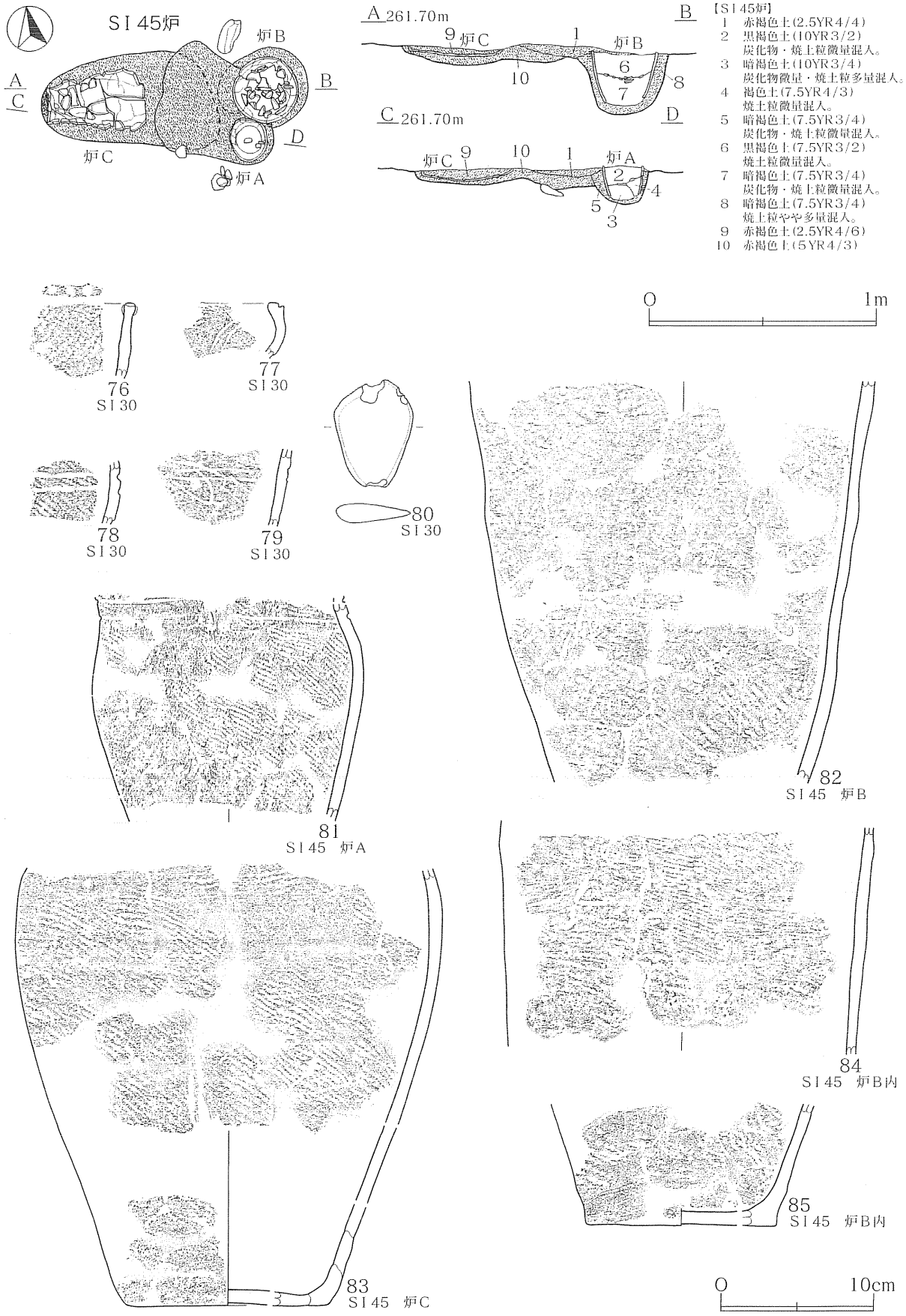
ＬＡ56 グリッドに位置する。調査区の境界沿いにトレンチを入れた際、Ⅲ層上面で土器埋設炉を確認し、竪穴住居跡と判断した。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい調査できなかった。Ⅲ層上面から掘り込みがあったと思われるが、壁の立ち上がりも検出できなかった。埋設土器にともなう掘り込みは２層で、その覆土に土器片が刺さった状態で弧を描くような形で出土したことから、これに埋設土器が設置されていたものと判断した。その土器片に接して東側には焼土の広がりも確認できた。本住居跡のものと確認できた遺物は、炉埋設土器(87)とその周辺から出土した土器(88・89)だけである。88、89 は断面図作成の際に炉の掘り込み内とその直下から出土した縄文時代前期末葉の土器である。構築時期は、炉埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ51 竪穴住居跡(第 19 図、図版 10)

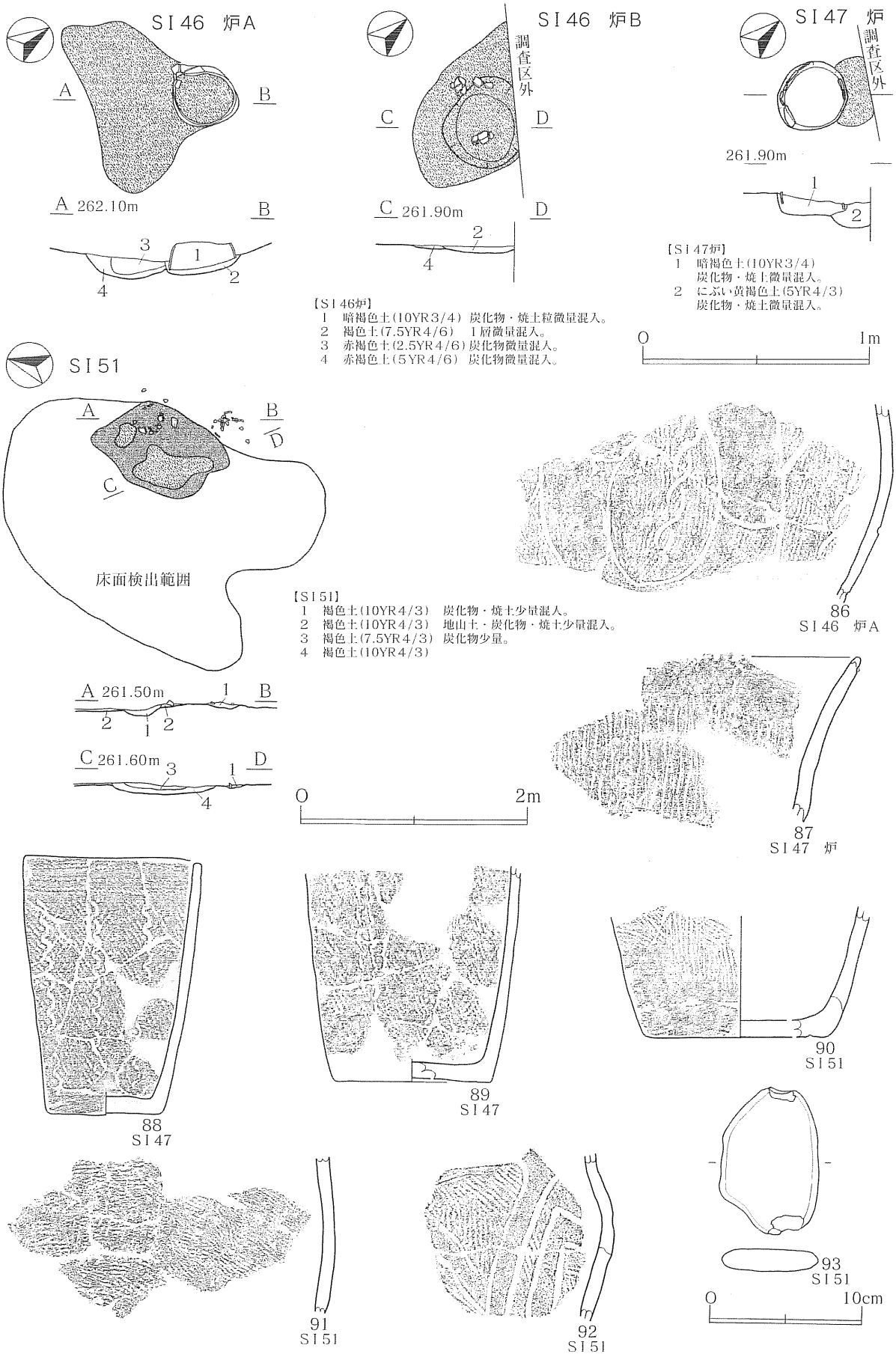
ＬＢ55 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、固く締まる焼土と地山土が混じる暗褐色土の広がりを



第17図　ＳＩ30 竪穴住居跡



第18図　SI 30・45 竪穴住居跡とその出土遺物



第19図　SI46・47・51 竪穴住居跡とその出土遺物

検出し、竪穴住居跡と判断した。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい調査できなかった。暗褐色土に地山土を貼ったと思われる床面は、しまりが弱く、確認できた面積は約4㎡である。炉を１基確認した。土器の胴部破片が覆土に刺さった形で出土したことから、土器埋設炉の可能性がある。本住居跡に伴う遺物は、炉内の土器(91)とその周辺の土器(90・92)、および石錘１点(93)である。構築時期は、確認面の層位と出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ53 竪穴住居跡(第20図、図版5)

ＬＣ56・57、ＬＤ56・57グリッドに位置する。Ⅲ層上面で炉埋設土器を検出し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ102・334・339竪穴住居跡と重複するが、いずれの住居跡よりも新しい。平面形は、直径3.5mほどの円形と推定される。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまったが、炉は埋設土器の覆土と掘り方の２層に分けられた。掘り方は、土器より一回り大きめである。土器は上部を欠いているが、直径21㎝、深さ10㎝の深鉢形土器が正立する形に据えられていた。その周囲には、狭い範囲ではあるが、焼土の堆積が認められた。炉を囲むように５基の柱穴を検出した。４基はいずれも直径25㎝ほどの円形で30～40㎝の深さがあるが、北端の１基は地山までの深さが浅いためか、柱穴の深さは15㎝と浅くなっている。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(94)のほかは23点の土器片のみである。構築時期は、炉埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ55 竪穴住居跡(第20図、図版5・10)

ＬＩ49グリッドに位置する。Ⅲ層中で炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ61竪穴住居跡と重複すると思われるが、詳細は不明である。炉は、土器埋設炉である。同じ場所に２回作られているが、古いほうの炉は廃棄にともなって小石混じりの灰で中を埋めている。床面に柱穴を検出しているが本住居跡に伴うかどうかは不明である。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(95、96)だけである。炉が２回作られていることから、１回の改築が考えられる。構築時期は、炉埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ61 竪穴住居跡(第20図)

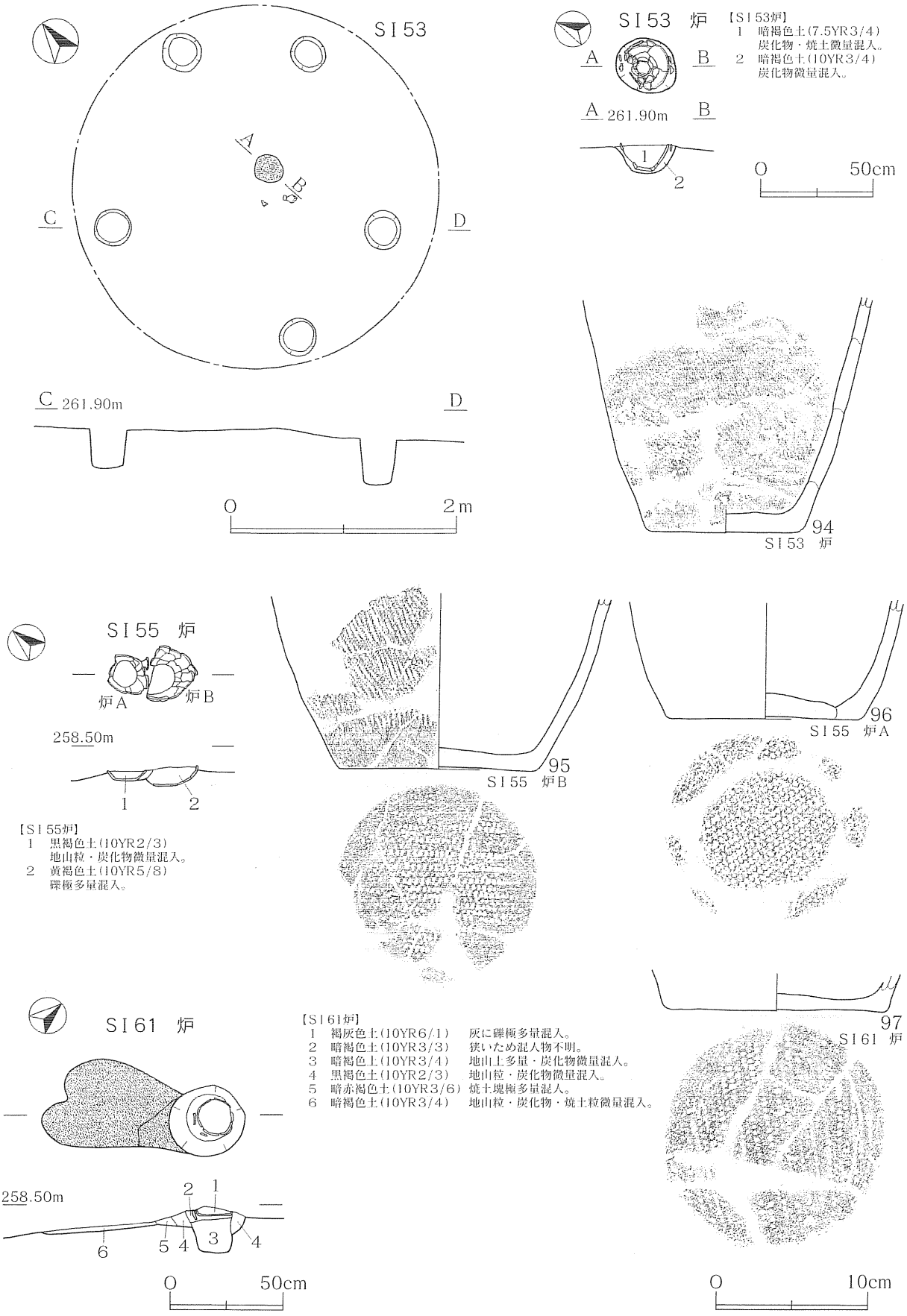
ＬＩ50グリッドに位置する。Ⅲ層中で炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ55竪穴住居跡と重複すると思われるが詳細は不明である。床面は、平坦であると思われる。炉は、土器埋設炉である。柱穴状の掘り込みに地山土を埋め土器を設置している。床面に柱穴を検出したが本住居跡に伴うかどうかは不明である。本住居跡に伴う遺物は炉埋設土器(97)のみである。構築時期は、縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ77 竪穴住居跡(第21図、図版5)

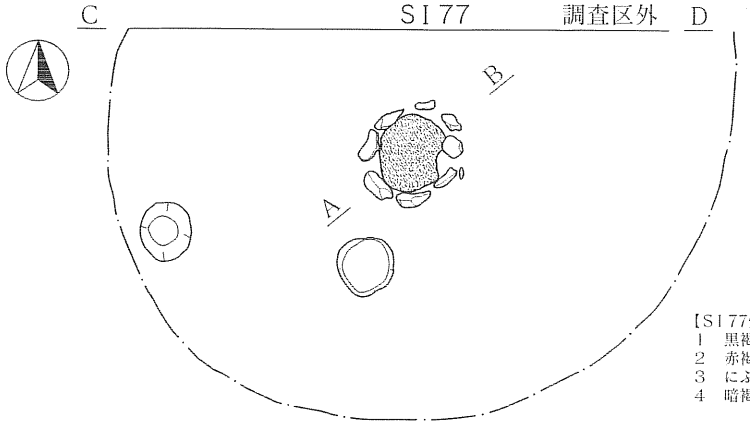
ＬＤ・ＬＥ50グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ97竪穴住居跡と重複するが、本住居跡が新しい。平面形は、直径約4mの円形と推定される。覆土は、２層に分けられた。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ほぼ平坦であり、ＳＩ97竪穴住居跡の覆土の上に作られている。炉は、人頭大の礫を８個円形に並べた石囲炉で、焼土が堆積し、礫の内面は焼けていた。柱穴は、２基検出した。遺物は、覆土中から縄文時代前期末葉(102～104・106)と中期初頭(98)、後期前葉(99・105・109・110・112・113)の土器片、および石錘２点(114・115)、削器１点(111)が出土した。構築時期は、検出面の層位と出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。

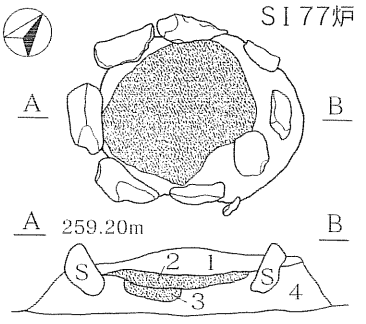
ＳＩ113 竪穴住居跡(第21図、図版5)

ＬＧ50・51グリッドと調査区外との境に位置する。Ⅲ層中で石囲炉を検出し、竪穴住居跡と判断

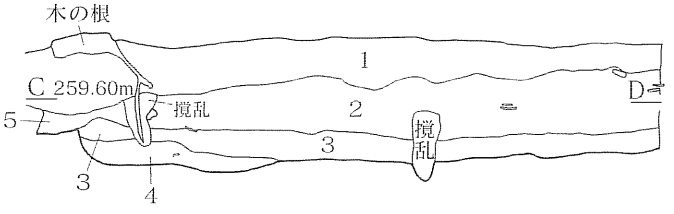


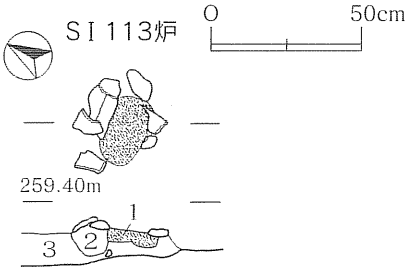
第20図　SI53・55・61 竪穴住居跡とその出土遺物





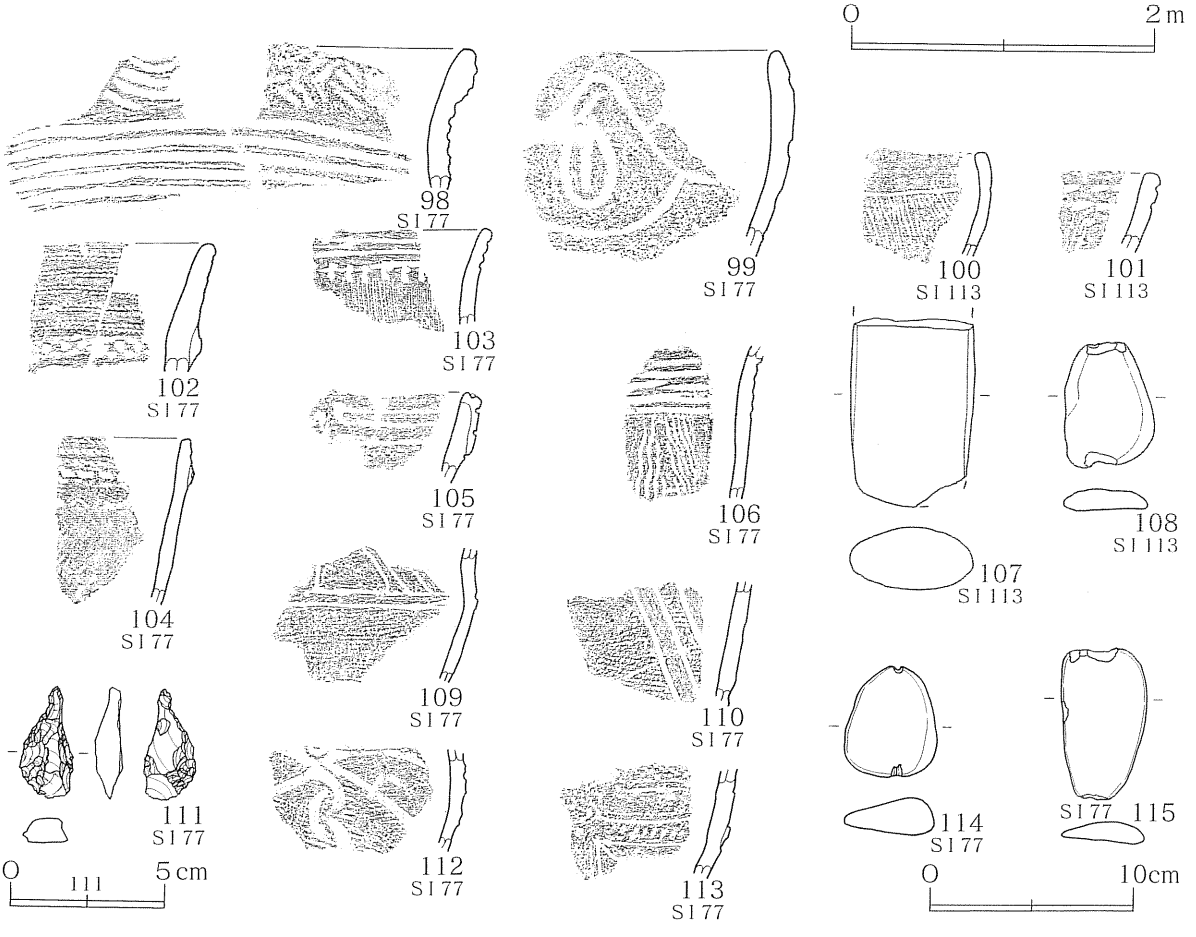
【SI77炉】
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭化物・焼土微量混入。
2　赤褐色土(2.5YR4/6)　焼土。
3　にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)　焼土。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭化物微量混入。



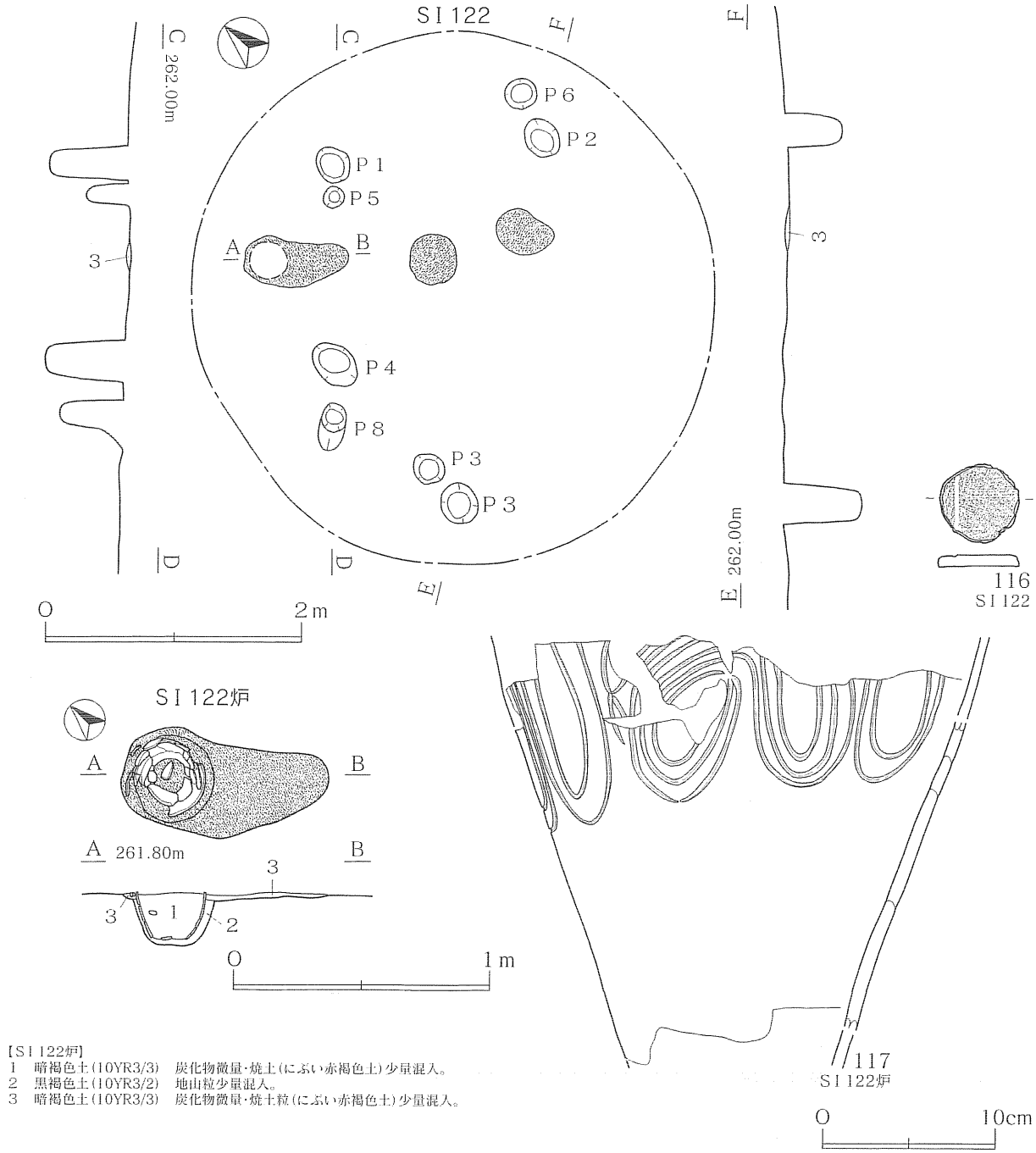


【SI77】
1　黒色土(10YR2/1)　地山粒・炭化物・礫微量混入。
2　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒・炭化物・礫微量混入。
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭化物微量混入。
4　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭化物微量混入。
5　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭化物・礫微量混入。

【SI113炉】
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒微量・炭化物・焼土粒少量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/4)　褐色土極多量・炭化物微量混入。



第21図　SI77・113 竪穴住居跡とその出土遺物



【SI 122炉】
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物微量・焼土(にぶい赤褐色土)少量混入。
2　黒褐色土(10YR3/2)　地山粒少量混入。
3　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物微量・焼土粒(にぶい赤褐色土)少量混入。

第22図　ＳＩ122 竪穴住居跡とその出土遺物

した。炉は、礫を不整円形状に配置し、その中には焼土が堆積していた。周囲に数基の柱穴があったが、本住居跡のものかどうかは不明である。遺物は、炉の中から縄文時代中期初頭(101)と後期前葉(100)の土器片、石錘１点(108)、石斧１点(107)が出土した。構築時期は、検出面の層位と出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ122 竪穴住居跡(第 22 図、図版 5)

ＬＧ63・64、ＬＨ63・64 グリッドに位置する。Ⅲ層中で、炉埋設土器を確認し、竪穴住居跡と判断した。平面形は、直径約 4m の円形と推定される。壁面と覆土は、平成９年度の調査の際に除去さ

れ不明である。床面は、ほぼ平坦である。焼土の広がりを３ヵ所検出した。うち１ヵ所は、埋設土器を伴う。柱穴は、８基検出した。P1～4 はやや深く、その他は比較的浅い。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(117)と円盤状土製品１点(116)のみである。焼土が３ヵ所にあることと柱穴が２基ずつ並ぶ配置から、１回ないし２回の改築が考えられる。構築時期は、出土した埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ140 竪穴住居跡(第 23 図)

ＬＢ56・57、ＬＣ56・57 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、焼土とそれを取り囲む柱穴 10 基あまりを確認し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ148・157・158 竪穴住居跡と重複するが、そのいずれの遺構よりも新しい。平面形は、直径約 3.9m の円形と推定した。覆土は１層である。壁は、北西側の 2m ほどしか確認できなかったが、高さ 0.1m で、やや外傾しながら立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。床面に赤変箇所が１ヵ所あり、地床炉と判断された。同一面から、13 基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。壁に沿う柱穴が並列していることから、１回の改築が考えられる。本住居跡のものと確認できた遺物はない。構築時期は、検出面の層位から縄文時代後期と思われる。

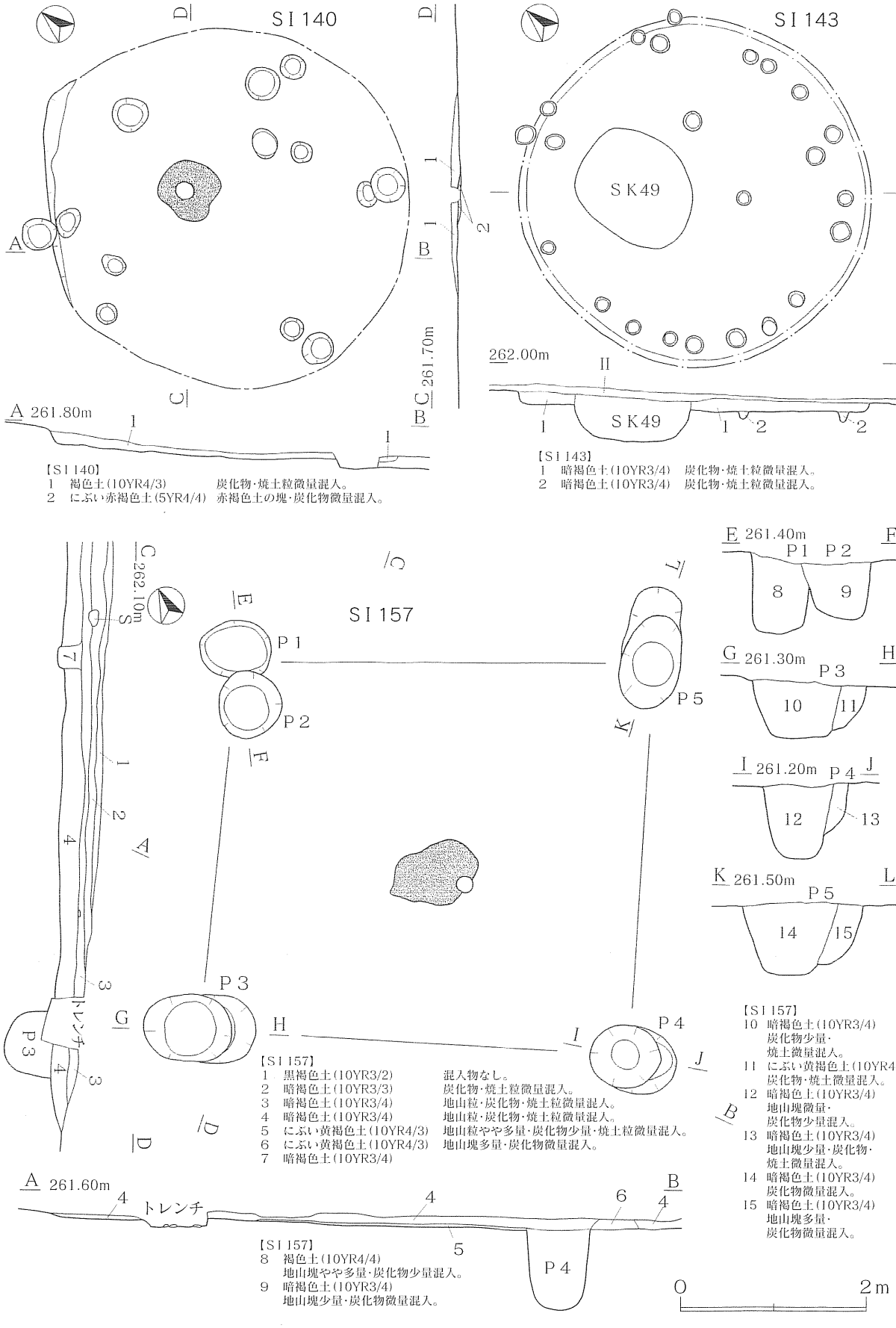
ＳＩ143 竪穴住居跡(第 23 図、図版 5)

ＬＡ55・56、ＬＢ55・56 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、柱穴 20 基あまりが円形に並ぶことを確認し、竪穴住居跡と判断した。ＳＩ148・157・158 竪穴住居跡、ＳＫ49 土坑と重複するが、ＳＫ49 土坑より古く、他の遺構よりも新しい。平面形は直径約 3.90m の円形と推定され、確認できた深さは 0.15m である。覆土は２層である。うち１層は柱穴の覆土である。壁は、断面でしか確認できなかったが、やや外傾しながら立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。炉は、本住居跡を壊して構築されたＳＫ49 土坑の覆土に多量の焼土粒が含まれていたことから、同遺構に壊されたものと思われる。柱穴は同一面から 23 基を検出したが、すべて直径 0.15m、深さ 0.25m ほどであり、主柱穴は不明である。北西側に一部柱穴の並びが途切れる部分があり、出入り口と考えられる。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、確認面の層位と柱穴の覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

ＳＩ157 竪穴住居跡(第 23 図、図版 5)

ＬＡ56、ＬＢ55・56、ＬＣ55・56 グリッドに位置する。柱穴はⅢ層下面で、暗褐色土の落ち込みとして確認し、焼土は同じく黄褐色土の赤変として確認した。当初それぞれ別遺構と判断したが、確認面が同じことと、焼土を囲んで柱穴が正方形状に配置されていることから、柱穴の半截終了後竪穴住居跡とした。ＳＩ143・148・158 竪穴住居跡と重複する。ＳＩ143 竪穴住居跡より古く、ＳＩ148・158 竪穴住居跡よりも新しい。柱穴の規模は直径 0.6m～1m、深さは 0.60～0.88m で、類似した形状となっている。覆土は 15 層に分けられたが、第７層は別の遺構の覆土で、第８～15 層は柱穴の覆土である。人為堆積と思われる。床面は、西側がやや下がるが、ほぼ平坦である。黄褐色土の赤変箇所が１ヵ所あり、地床炉と判断した。４ヵ所に柱穴を確認したが、それぞれ重複していた。掘り込みが確認できないことと柱穴の規模から、掘立柱建物跡の可能性もある。本住居跡に伴う遺物は、柱穴から出土した縄文土器片４点であるが、磨滅が著しいため掲載しなかった。４ヵ所の柱穴すべてがそれぞれ２基の柱穴の重複となっていることから、１回の改築が考えられる。柱穴の芯芯間距離は構築当初が 4.05m～4.75m、建て替え後が 3.55m～4.65m と推定される。構築時期は、確認面の層位と柱穴の覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

ＳＩ202 竪穴住居跡(第 24 図、図版 5・10)



第23図　SI 140・143・157 竪穴住居跡

ＭＡ55、ＬＪ54・55・56、ＬＩ54・55・56、ＬＨ54・55・56 グリッドに位置する。壁溝を検出して確認した。ＳＫ227・245 土坑と重複する。本住居跡は、ＳＫ227 土坑より新しくＳＫ245 土坑より古い。全体の４分の１ほどは調査区外であることと大部分が道路で削られていたため詳細は不明であるが、平面形は、直径9.2m の円形と思われる。覆土は、約10㎝の厚さで残っているだけであった。床面は、平坦であるが西に向かって低くなる。柱穴は、床面より 27 基検出した。主柱穴はＰ5・9・11・14・16・17・22と思われ、Ｐ13・15・19 は別の遺構に伴う柱穴と思われる。壁溝は東側に検出され、西に伸びるにしたがって消滅していく。その溝の延長線上に、平均して人頭大の礫が弧状に配列されている。この配石は調査区外にあるが、壁を構成するものと思われる。その性格上、溝の内側にあるとは考えにくく外側にあったと思われる。遺物は、覆土から縄文土器(118・119・121・122)、掻器１点(120)、石錘２点(123・124)が出土した。Ｐ16 に重複があるほかは、改築の痕跡はない。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ242 竪穴住居跡(第 25 図、図版６・10)

ＬＩ57、ＬＪ57 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で炉埋設土器を検出して確認した。ＳＩ261 竪穴住居跡、ＳＱ07 配石遺構と重複する。ＳＩ261 竪穴住居跡より新しく、ＳＱ07 配石遺構より古い。道路によってほとんどが削られていて全容は不明であるが、床面は平坦であると思われる。炉には埋設土器が伴い、その北側と東側に焼土が広がっている。北側に広がる焼土の端には、薄い炭の堆積が見られた。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(125)だけである。構築時期は、埋設土器から縄文時代後期と思われる。

ＳＩ260 竪穴住居跡(第 25 図、図版６)

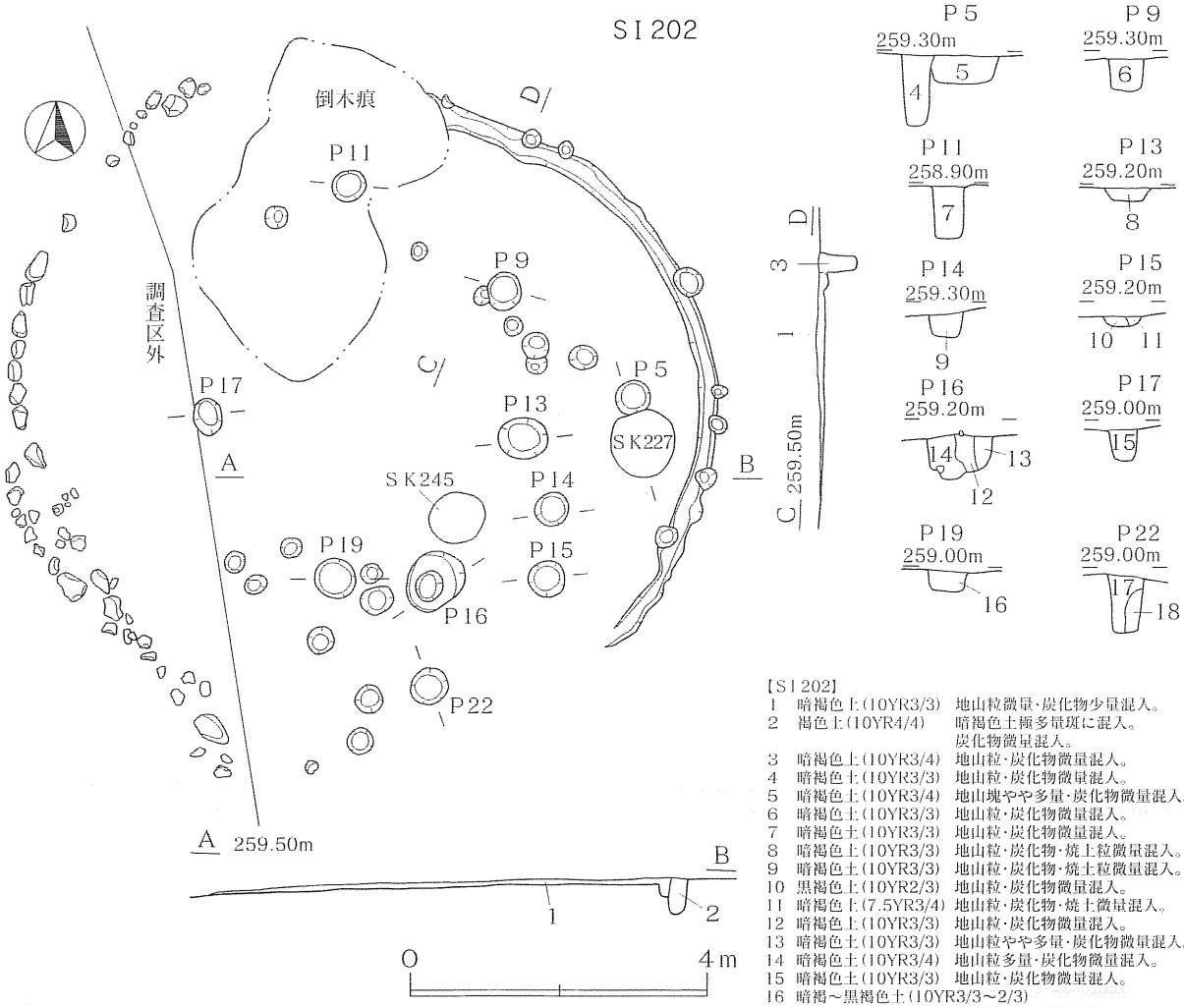
ＬＪ65 グリッドに位置する。Ⅲ層中で土器埋設炉を確認し、竪穴住居跡と判断した。斜面にあり、また杉根による撹乱のため床面、壁面ともに検出できなかった。炉の覆土は２層に分けられた。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(127)とその内部に詰められた土器片(126・128)だけである。炉埋設土器は、崩壊が著しく復原できなかった。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ261 竪穴住居跡(第 26 図、図版６)

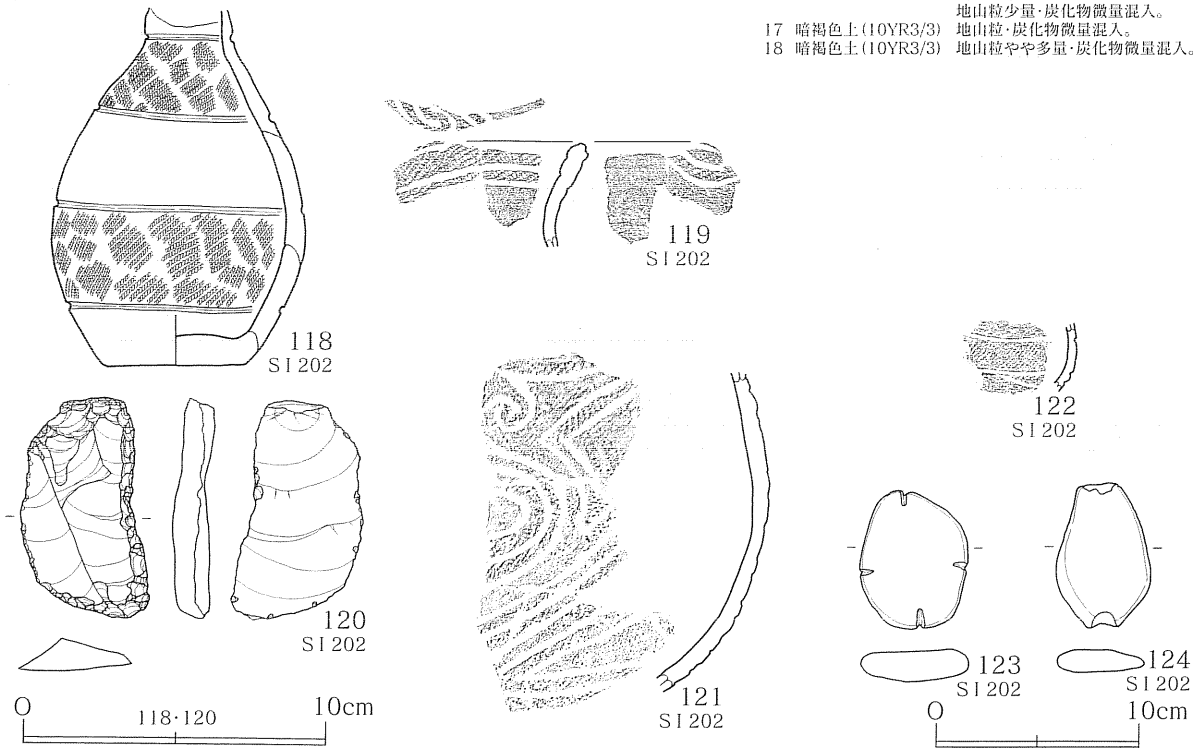
ＬＩ57、ＬＪ57・58 グリッドに位置する。Ⅲ層中で壁溝を検出して確認した。ＳＩ242 竪穴住居跡、ＳＫ252 土坑と重複し、本住居跡が最も古い。Ⅲ層上において平坦な床を作ったものと思われるが、地山が傾斜していて検出できなかった。壁溝の内側に 33 基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。東側に約 4.5m、北東側に約 3.5m の弧状の溝がある。溝が検出された場所は斜面の高い部分で、低い部分では、確認できなかった。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、検出面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＩ268 竪穴住居跡(第 25 図、図版６・10)

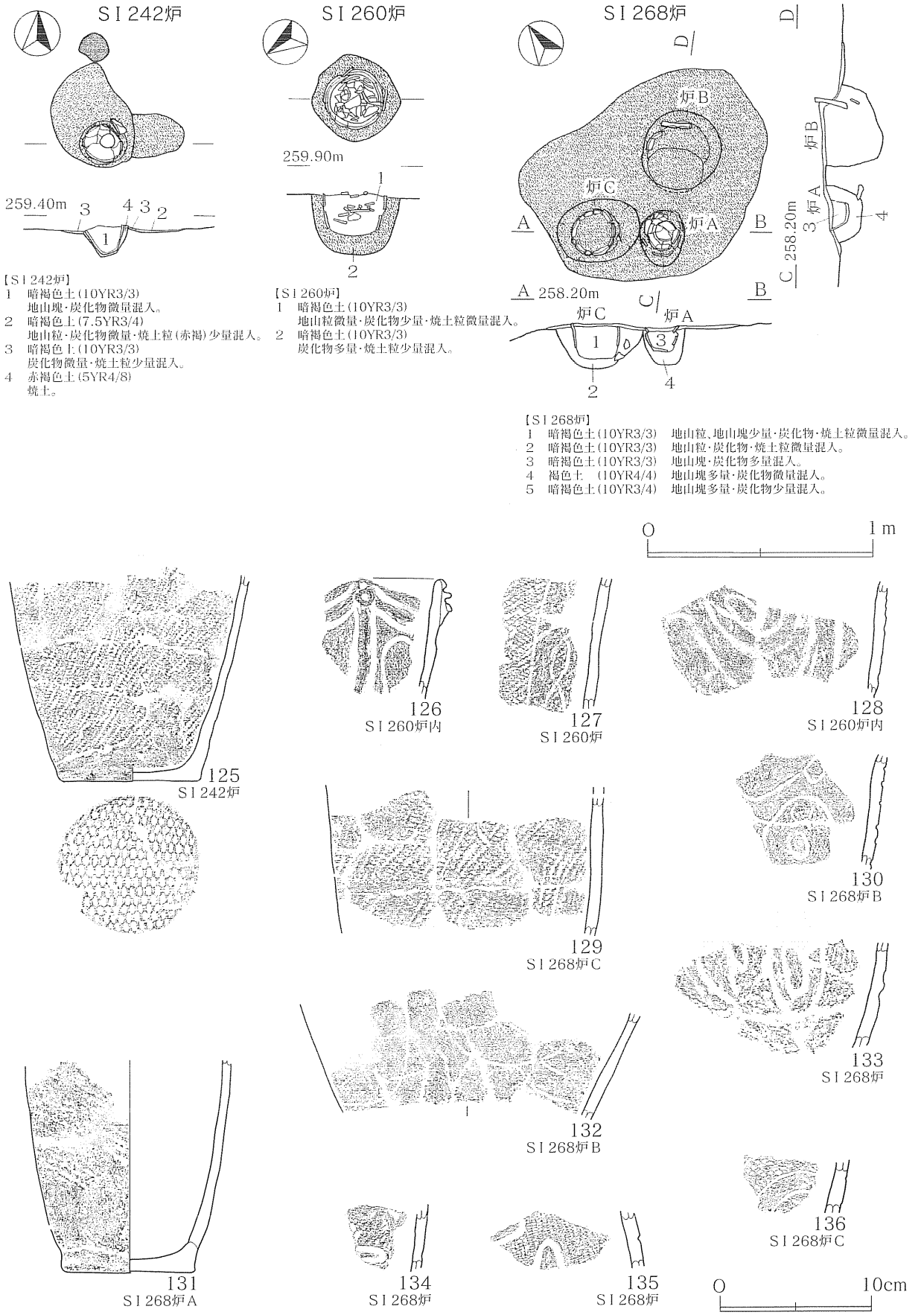
ＭＦ59 グリッドに位置する。Ⅲ層中で土器埋設炉を検出して確認した。ＳＩ324 竪穴住居跡、ＳＸ323 性格不明遺構と重複すると思われるが、新旧関係についても不明である。炉は、検出順に炉Ａ、炉Ｂ、炉Ｃとした。炉Ａ、炉Ｃは、土器埋設炉である。いずれも上部を欠いているが、炉Ａ(131)は口径 15㎝の深鉢形土器を、炉Ｃ(129)は口縁部・底部を欠いた口径 21㎝の深鉢形土器を埋設していた。炉Ｂは、炉Ａに伴う火床面と思われたが、直径約 35㎝、深さ約 25㎝の円形の掘り込みがあり、中から 16 点の土器片(復原が 132)と扁平な礫が突き刺さった状態で出土した。廃棄の際埋設した土



【SI 202】
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒微量・炭化物少量混入。
2　褐色土(10YR4/4)　暗褐色土極多量斑に混入。炭化物微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒・炭化物微量混入。
4　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山塊やや多量・炭化物微量混入。
6　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
7　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
8　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。
9　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。
10　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭化物微量混入。
11　暗褐色土(7.5YR3/4)　地山粒・炭化物・焼土微量混入。
12　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
13　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒やや多量・炭化物微量混入。
14　暗褐色土(10YR3/4)　地山粒多量・炭化物微量混入。
15　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
16　暗褐～黒褐色土(10YR3/3～2/3)　地山粒少量・炭化物微量混入。
17　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
18　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒やや多量・炭化物微量混入。



第24図　SI 202 竪穴住居跡とその出土遺物

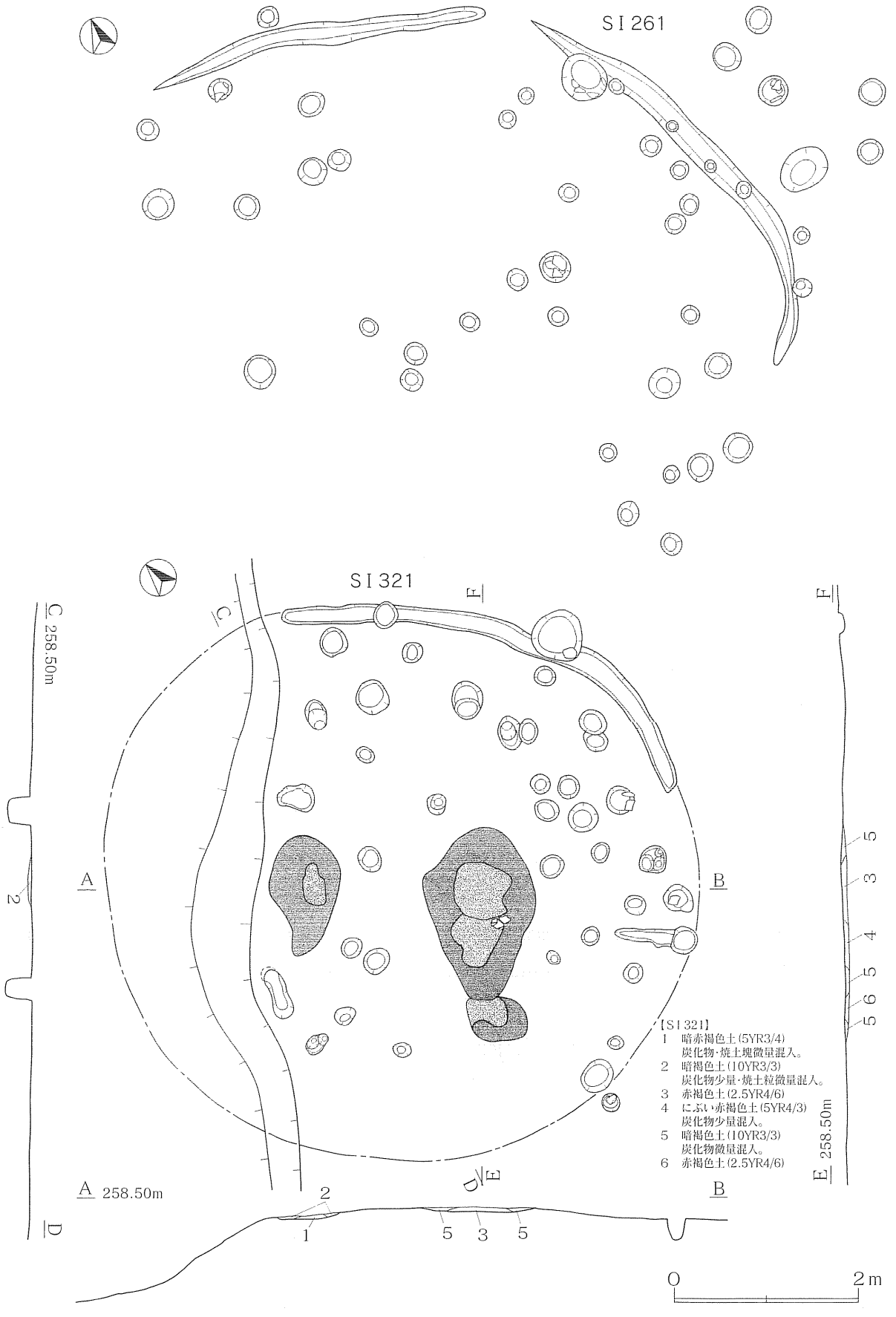


【SI 242炉】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山塊・炭化物微量混入。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)
　地山粒・炭化物微量・焼土粒(赤褐)少量混入。
3　暗褐色土(10YR3/3)
　炭化物微量・焼土粒少量混入。
4　赤褐色土(5YR4/8)
　焼土。

【SI 260炉】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
　炭化物多量・焼土粒少量混入。

【SI 268炉】
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒、地山塊少量・炭化物・焼土粒微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/3)　地山塊・炭化物多量混入。
4　褐色土　(10YR4/4)　地山塊多量・炭化物微量混入。
5　暗褐色土(10YR3/4)　地山塊多量・炭化物少量混入。

第25図　SI 242・260・268 竪穴住居跡とその出土遺物



第26図　ＳＩ261・321 竪穴住居跡

器を抜き取って、礫を立てた可能性もある。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(129・131)とその周辺から出土した土器片(130・132～136)である。3基の炉に明瞭な切り合い関係は認められなかったが、炉Ａの焼土が全体を覆っていることから、炉Ａが最も新しいと思われる。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ321 竪穴住居跡(第26図、図版6)

ＭＤ63・64、ＭＥ63・64グリッドに位置する。Ⅲ層中で焼土の広がりと弧状の溝跡を検出して確認した。北西側は沢状の地形であり崩落しているが、平面形は直径約6mの円形と推定される。床面は、平坦と思われる。焼土の広がりを3ヵ所で確認し、いずれも地床炉と判断した。40ヵ所近い柱穴を検出したが、すべてが本住居跡のものであるかどうかは不明である。東側に壁溝の一部が残っていた。柱穴は、床面から36基検出したが、主柱穴は不明である。炉の焼土の堆積状態から、1回ないし2回の改築が考えられる。本住居跡に伴う遺物は、アスファルトの詰まった土器(ＳＲ262)だけである。深鉢形土器を埋設し、内部にアスファルトを貯蔵していたものと思われる。構築時期は、アスファルト貯蔵土器(280)から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＩ324 竪穴住居跡(第27図)

ＭＦ58・59、ＭＧ58・59・60、ＭＨ58・59・60グリッドに位置する。Ⅲ層上面で壁溝と焼土を検出し竪穴住居跡と判断した。ＳＩ268竪穴住居跡、ＳＸ323性格不明遺構と重複する。ＳＸ323性格不明遺構より古いが、ＳＩ268竪穴住居跡との新旧関係は不明である。平面形は、直径約7.5mの円形と推定される。床面は、凹凸はあるがほぼ平坦である。床面に焼土の堆積を検出し、炉と判断した。本住居跡に伴う遺物はない。柱穴は床面に33基検出したが、主柱穴は不明である。東側と北側に壁溝の一部が弧状に残っていた。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

ＳＩ334 竪穴住居跡(第27図)

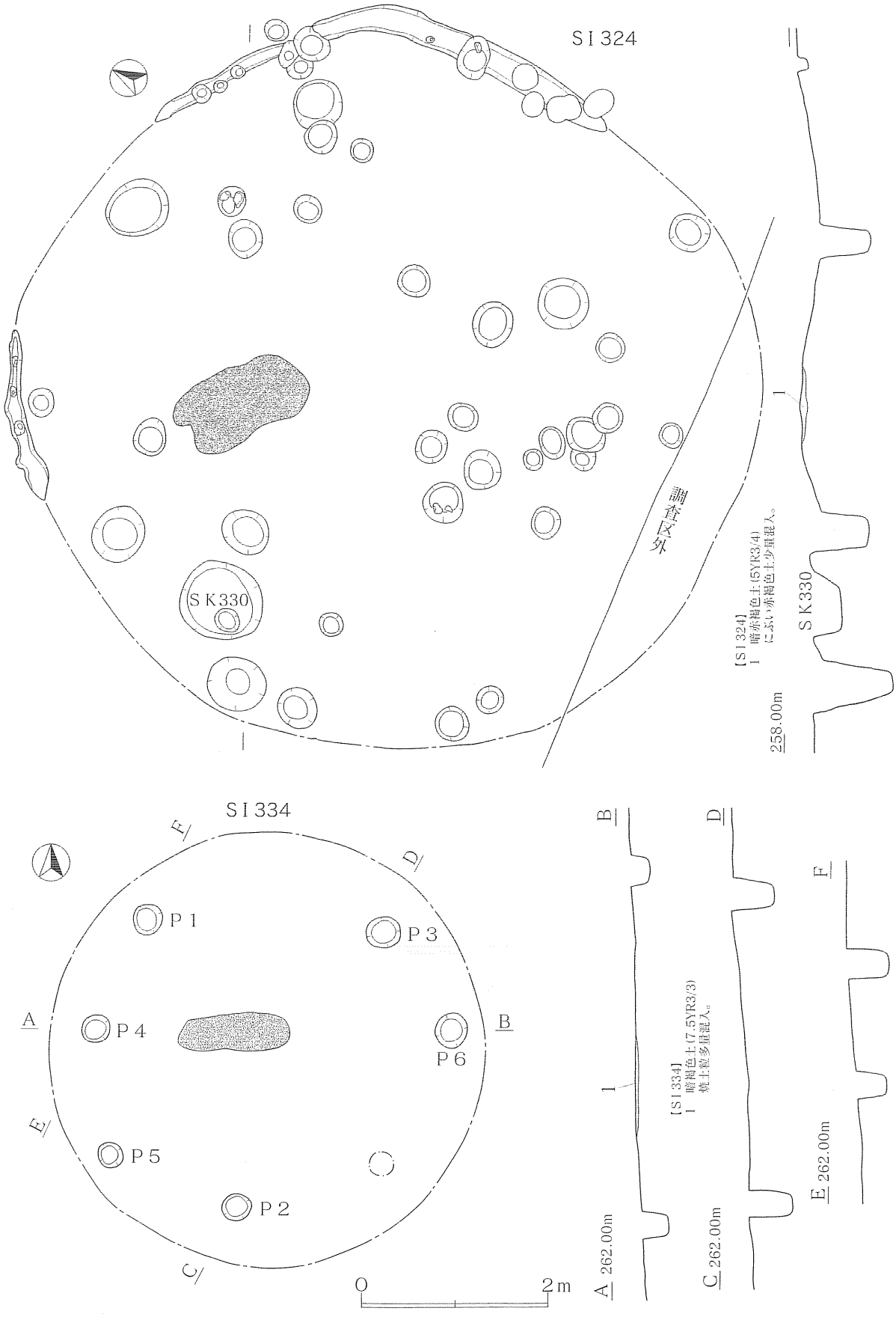
ＬＣ57・ＬＤ57グリッドに位置する。Ⅲ層中で、焼土とそれを囲む柱穴を検出し竪穴住居跡と判断した。ＳＩ53・102・339竪穴住居跡と重複する。ＳＩ53竪穴住居跡より古く、ＳＩ102・339竪穴住居跡より新しい。平面形は、直径約4mの円形と思われる。床面は、西側がやや低いが、ほぼ平坦である。焼土の堆積を確認し、地床炉と判断した。6基の柱穴を検出したが、トレンチ掘りの際に1基の柱穴を壊しているので、本来は7基あったものと思われる。主柱穴はＰ1～3と思われる。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、検出状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＩ337 竪穴住居跡(第28図)

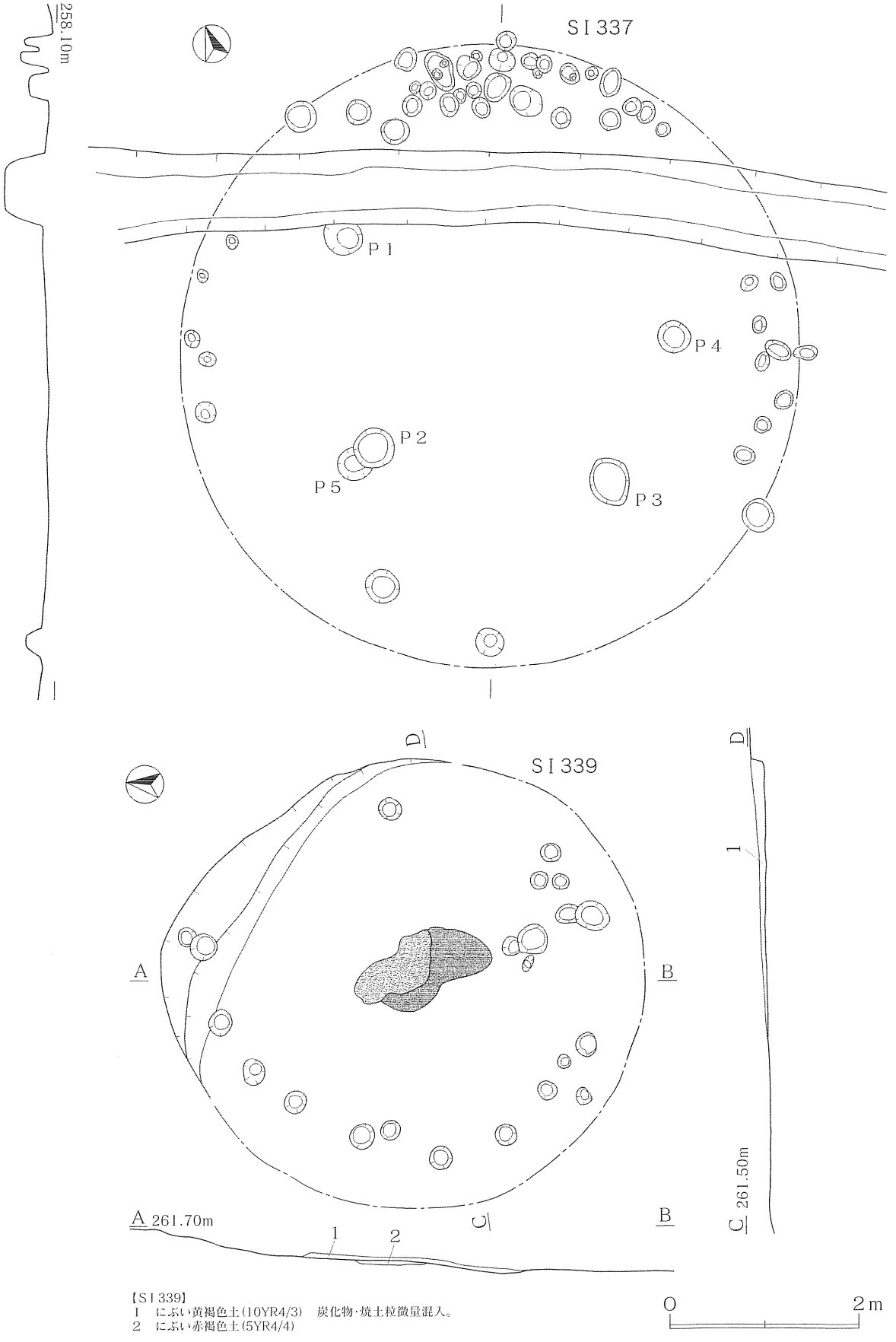
ＭＥ60・61・62、ＭＦ60・61・62グリッドに位置する。Ⅲ層中で、弧状に並ぶ柱穴群を検出し竪穴住居跡と判断した。平面形は、直径約6mの円形と思われる。床面は、北西側がやや低いが、ほぼ平坦である。床面に50基あまりの柱穴を検出したが、主柱穴はＰ1～4と思われる。本住居跡に伴う遺物はない。弧状に並ぶ柱穴が二重、三重になること、Ｐ4とＰ5が重複することから、1回ないし2回の改築が考えられる。構築時期は、確認面の層位と柱穴の覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＩ339 竪穴住居跡(第28図、図版3)

ＬＣ56・57、ＬＤ57グリッドに位置する。Ⅲ層中で、焼土とそれを囲む柱穴を検出し竪穴住居跡と判断した。ＳＩ53・102・334竪穴住居跡と重複する。ＳＩ53・334竪穴住居跡より古く、ＳＩ102竪穴住居跡より新しい。平面形は、直径約4.5mの円形と思われる。壁は、北東側一部だけの検出である



第27図　ＳＩ324･334 竪穴住居跡



【SI 339】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物・焼土粒微量混入。
2　にぶい赤褐色土(5YR4/4)

第28図　SI 337・339 竪穴住居跡

が、ごく緩やかに立ち上がる。床面は、西側に向かってやや低くなるが、ほぼ平坦である。床面に焼土の堆積と炭の広がりを検出し、地床炉と判断した。床面と壁部分に22基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、検出状況と柱穴の覆土から、縄文時代後期と思われる。

2　焼土遺構

ＳＮ101 焼土遺構(第29図)

ＬＧ62グリッドに位置する。平面形は長軸(北西－南東)1.38m×短軸(北東－南西)0.56mの楕円形を呈する。柱穴と重複するが、本遺構が新しい。本遺構の底面には、豆粒大の礫が敷かれたように堆積していた。 掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ104 焼土遺構(第29図)

ＬＤ55・56グリッドに位置する。平面形は長軸(北－南)1.35m×短軸(東－西)0.30mの不整楕円形を呈する。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ126 焼土遺構(第29図)

ＬＧ65グリッドに位置する。調査区外にかかっているため北東側は確認できなかったが、平面形は、円形または楕円形と考えられる。確認できた部分は、長軸(北西－南東)0.90m×短軸(北東－南西)0.18mである。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ152 焼土遺構(第29図)

ＬＨ51グリッドに位置する。平面形が長軸0.3～0.9m×短軸0.2～0.4mの不整円形または楕円形の集合体状を呈する。いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ153 焼土遺構(第29図)

ＬＧ50グリッドに位置する。平面形は長軸(北西－南東)0.72m×短軸(北東－南西)0.22mの不整楕円形を呈する。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ342 焼土遺構(第29図)

ＬＨ63・64グリッドに位置する。長軸(北東－南西)0.57m×短軸(北西－南東)0.35mの不整楕円形と、直径0.70mの不整円形の2ヵ所の焼土が並ぶ。いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ343 焼土遺構(第29図)

ＭＧ61・ＭＨ61グリッドに位置する。2カ所の焼土を一括し本遺構とした。ＳＫＦ307袋状土坑と重複する。本遺構が新しい。1カ所は、炭化物の広がりを含めた全体の平面形が長軸(北東－南西)4.09m×短軸(北西－南東)2.65mの不整楕円形を呈する。その中に長軸約0.7m ×短軸約0.35mの焼土が9ヵ所確認できた。北側と東側は、トレンチに切られている。もう1カ所は、その南東側で長軸0.85m×短軸0.52mの焼土とそれに接する炭化物の広がりが確認できた。いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

ＳＮ344 焼土遺構(第29図)

ＭＦ61・ＭＧ61グリッドに位置する。3カ所の焼土を一括し本遺構とした。1カ所は、炭化物の分布範囲を含め、平面形が長軸(北－南)3.63m×短軸(東－西)2.38mの不整楕円形を呈する。その中に長軸1.80m×短軸1.01mと長軸0.73m×短軸0.49mと長軸0.43m×短軸0.34mの楕円形の焼土が確認できた。1カ所は、その北東側で長軸(北西－南東)1.64m×短軸(北東－南西)0.64mの瓢箪形に広がる。1カ所は、南東側で長軸(北西－南東)0.79m×短軸0.54m(北東－南西)の不整楕円形に広がる。

いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

３　土坑

ＳＫ10 土坑(第 29 図、図版 6)

ＭＡ60 グリッドに位置し、当初配石遺構として確認した。ＳＫＰ266 柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 1.20m×短軸 0.75m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.45m を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がり、途中で一段平坦面をつくったあと、再びやや外傾しながら立ち上がる。覆土は４層で、人為堆積と思われる。１層と２層は同じ性格のものである。４層は礫を据えた層である。１層の上に大きく平べったい礫が蓋のように据えられ、その両側にも礫が据えられている。底面は、中央部が低くわずかに鍋底状である。遺物は、覆土中から縄文土器片(137)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から土壙墓と思われる。

ＳＫ16 土坑(第 29 図)

ＬＤ58 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.40m×短軸 1.12m の不整楕円形で、確認面からの深さは 0.22m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は２層で、自然堆積と思われる。底面は、中央が凹む。遺物は、覆土中から縄文土器片(138、139)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ24 土坑(第 30 図)

ＭＣ59、ＭＤ59 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みと、礫の表出によって確認した。半分は調査区外である。平面形は、長軸約 2.65m×短軸約 1.65m の楕円形と推定され、確認面からの深さは 0.37m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、直径 5㎝～25㎝ の礫が多数散在する。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ27 土坑(第 30 図、図版 10)

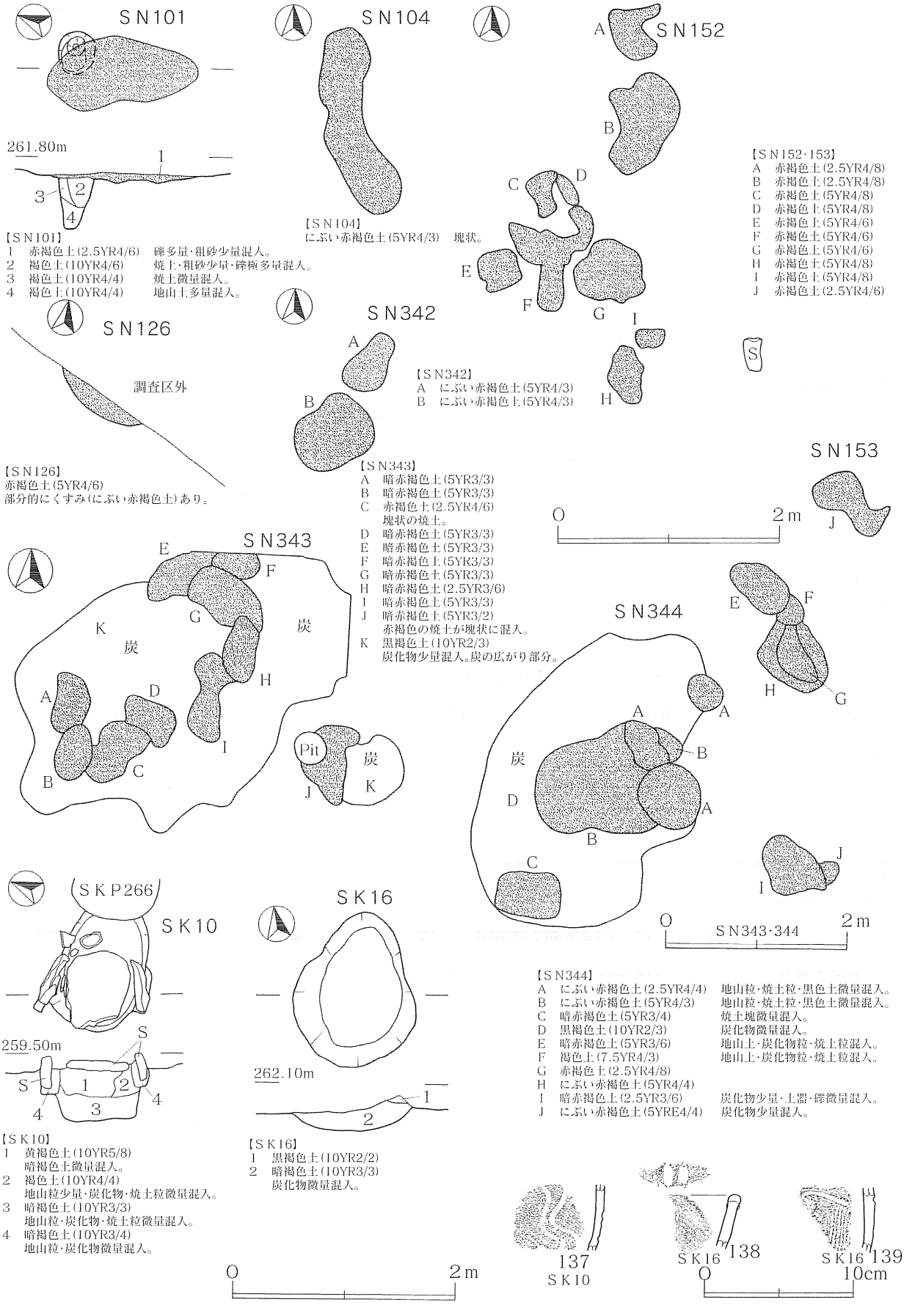
ＬＥ58、ＬＦ58 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。２基の柱穴を壊して構築されている。平面形は、長軸 2.01m×短軸 1.92m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.43m を測る。壁は、外傾しながら緩やかに立ち上がる。覆土は３層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、３層上面から縄文土器(150)、掻器１点(140)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ28 土坑(第 30 図)

ＬＪ43・44 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直軸 1.08m×短軸 1.06m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.38m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦であるが中央部が少し凹む。遺物は、覆土中から縄文土器片(141・142)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ29 土坑(第 30 図)

ＬＪ45 グリッドに位置している。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.35m の円形で、確認面からの深さは 0.20m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は４層で、自然堆積と思われる。底面は、やや中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片



第29図　ＳＮ101・104・126・152・153・342・343・344焼土遺構、ＳＫ10・16土坑とその出土遺物

４点が出土したが、磨滅が著しく、１点(143)のみ掲載した。これは、Ⅳ層に存在していた縄文時代前期後葉の土器片が入り込んだものと考えられる。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ34 土坑(第 30 図)

ＬＦ50 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で地山混入土が円形に存在することから確認した。ＳＫ82 土坑、柱穴２基と重複するが、いずれの遺構より新しい。平面形は、長軸 1.17m×短軸 1.04m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.40m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は４層で、人為堆積と思われる。北側にある柱穴も本土坑掘削時に埋められたものと考えられる。底面は、ほぼ平坦であるが中央部に浅い柱穴の痕跡がある。遺物は、覆土中から縄文土器片(144～147)、石皿１点(148)が出土した。縄文時代中期前葉(144～146)と後期前葉(147)の土器片が混じって出土している。構築時期は、確認状況と出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態と覆土の状況から、陥し穴か貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ35 土坑(第 31 図)

ＬＨ48 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 57㎝×短軸 54㎝ の円形を呈し、確認面からの深さは 0.39m を測る。断面形はＵ字形を呈する。覆土は、１層である。一気に埋め戻されたと考えられる。底面は、わずかに中央部が低く鍋底状を呈する。遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片(152・157)、削器１点(151)、半円状扁平打製石器１点(156)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。覆土の状況から土坑と判断したが、柱穴の可能性も否定できない。

ＳＫ36 土坑(第 31 図、図版 6)

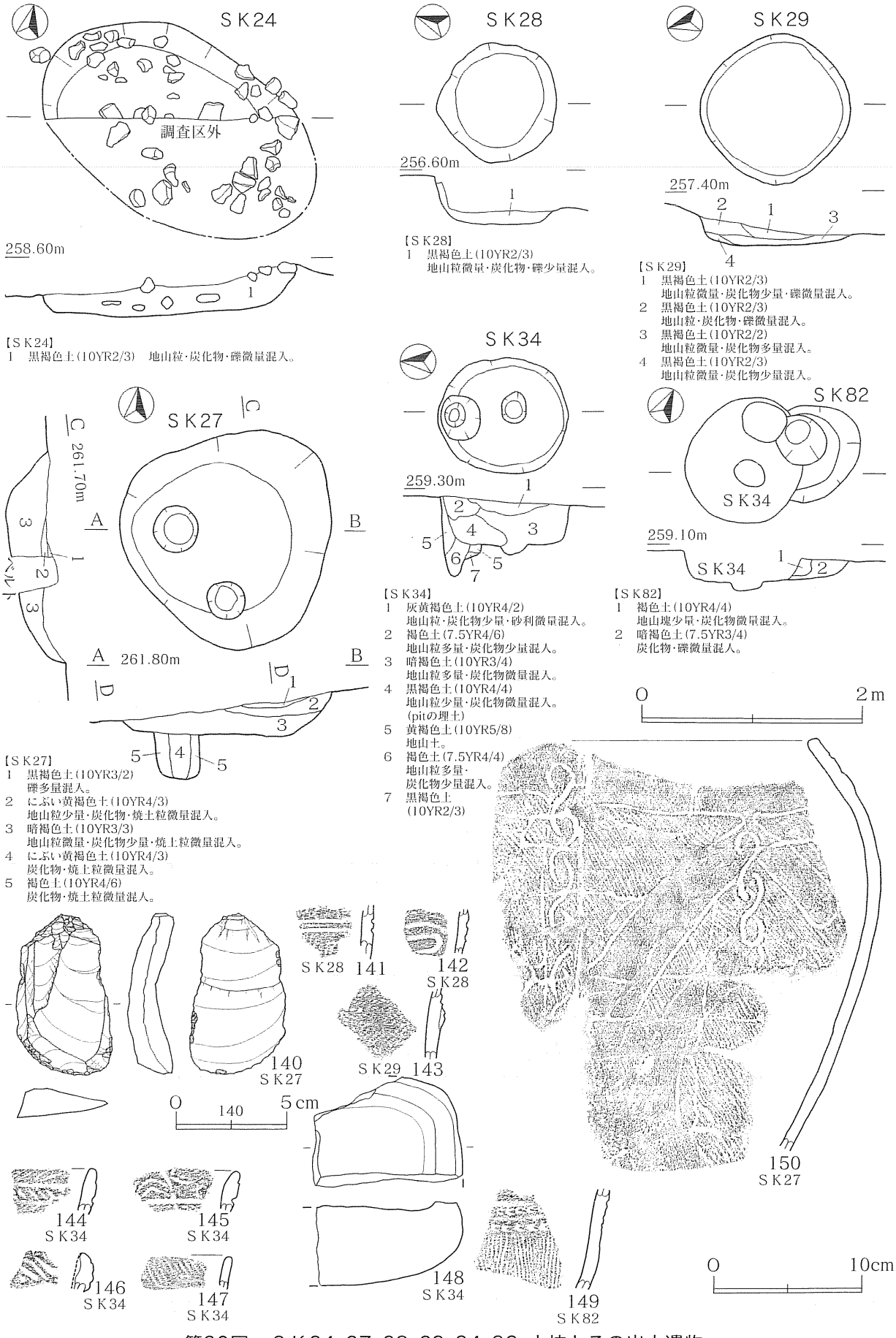
ＬＨ48・49 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みと基本土層ベルトで確認した。平面形は、長軸 1.52m×短軸 1.48m の円形で、確認面からの深さは 0.54m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、１層で、一気に埋められている。底面は、ほぼ平坦である。底面北半分には、壁に沿って人頭大前後の礫が並ぶ。遺物は、覆土中から縄文土器片(153～155・158～160・164)、石錘１点(167)、半円状扁平打製石器１点(161)が出土している。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、土壙墓と考えられる。

ＳＫ44 土坑(第 31 図、図版 10)

ＬＣ55 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ136・137・340 竪穴住居跡と重複するが、いずれの遺構よりも新しい。それらに伴う４基の柱穴を壊して構築されている。平面形は、長軸 1.36m×短軸 1.23m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.66m を測る。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、他はやや外傾しながら立ち上がる。覆土は、３層に分けられた。１層は３層の上に自然堆積したもの、２層は杉の根による撹乱、３層は人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、３層上部から縄文土器２点(162、163)、器台の脚部と思われるもの１点(166)が出土している。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。形態と出土遺物から、土壙墓と考えられる。

ＳＫ49 土坑(第 31 図、図版 6)

ＬＢ56 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ45・143・157・158 竪穴住居跡と重複しているが、いずれの遺構よりも新しい。平面形は、長軸 1.36m×短軸 1.15m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.32m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は、１層である。人為的に埋められていて、炭化物・焼土ともにかなりの量が含まれている。この炭化物・焼土はＳＩ143 竪穴



【ＳＫ24】
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒・炭化物・礫微量混入。

【ＳＫ28】
1　黒褐色土(10YR2/3)
地山粒微量・炭化物・礫少量混入。

【ＳＫ29】
1　黒褐色土(10YR2/3)
地山粒微量・炭化物少量・礫微量混入。
2　黒褐色土(10YR2/3)
地山粒・炭化物・礫微量混入。
3　黒褐色土(10YR2/2)
地山粒微量・炭化物多量混入。
4　黒褐色土(10YR2/3)
地山粒微量・炭化物少量混入。

【ＳＫ27】
1　黒褐色土(10YR3/2)
礫多量混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒少量・炭化物・焼土粒微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物・焼土粒微量混入。
5　褐色土(10YR4/6)
炭化物・焼土粒微量混入。

【ＳＫ34】
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
地山粒・炭化物少量・砂利微量混入。
2　褐色土(7.5YR4/6)
地山粒多量・炭化物少量混入。
3　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒多量・炭化物微量混入。
4　黒褐色土(10YR4/4)
地山粒少量・炭化物微量混入。
(pitの埋土)
5　黄褐色土(10YR5/8)
地山土。
6　褐色土(7.5YR4/4)
地山粒多量・
炭化物少量混入。
7　黒褐色土
(10YR2/3)

【ＳＫ82】
1　褐色土(10YR4/4)
地山塊少量・炭化物微量混入。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)
炭化物・礫微量混入。

第30図　ＳＫ24・27・28・29・34・82 土坑とその出土遺物

住居跡の炉を破壊したときに出たものと考えられる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況や覆土から縄文時代後期と思われる。形態から、土壙墓か貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ52 土坑(第 31 図)

ＬＨ47 グリッドに位置する。礫のまとまりによって確認した。ＳＩ30 竪穴住居跡と重複するが、本土坑が新しい。明瞭な掘り込みは、確認できなかったが、平面形は円形で、断面形は「Ｕ」字形と思われる。覆土は１層で、人為堆積と思われる。底面は、平坦だったと思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ62 土坑(第 31 図)

ＬＤ58・59 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.95m ×短軸 0.80m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.22m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、中華鍋底状を呈する。遺物は覆土中から土器片が４点出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ79 土坑(第 31 図)

ＬＨ48 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.60m の円形で、確認面からの深さは 0.40m を測る。断面形は「Ｕ」字形を呈する。覆土は１層で、一気に埋められたと考えられる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(165)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。覆土から土坑と判断したが、柱穴の可能性も否定できない。

ＳＫ81 土坑(第 32 図)

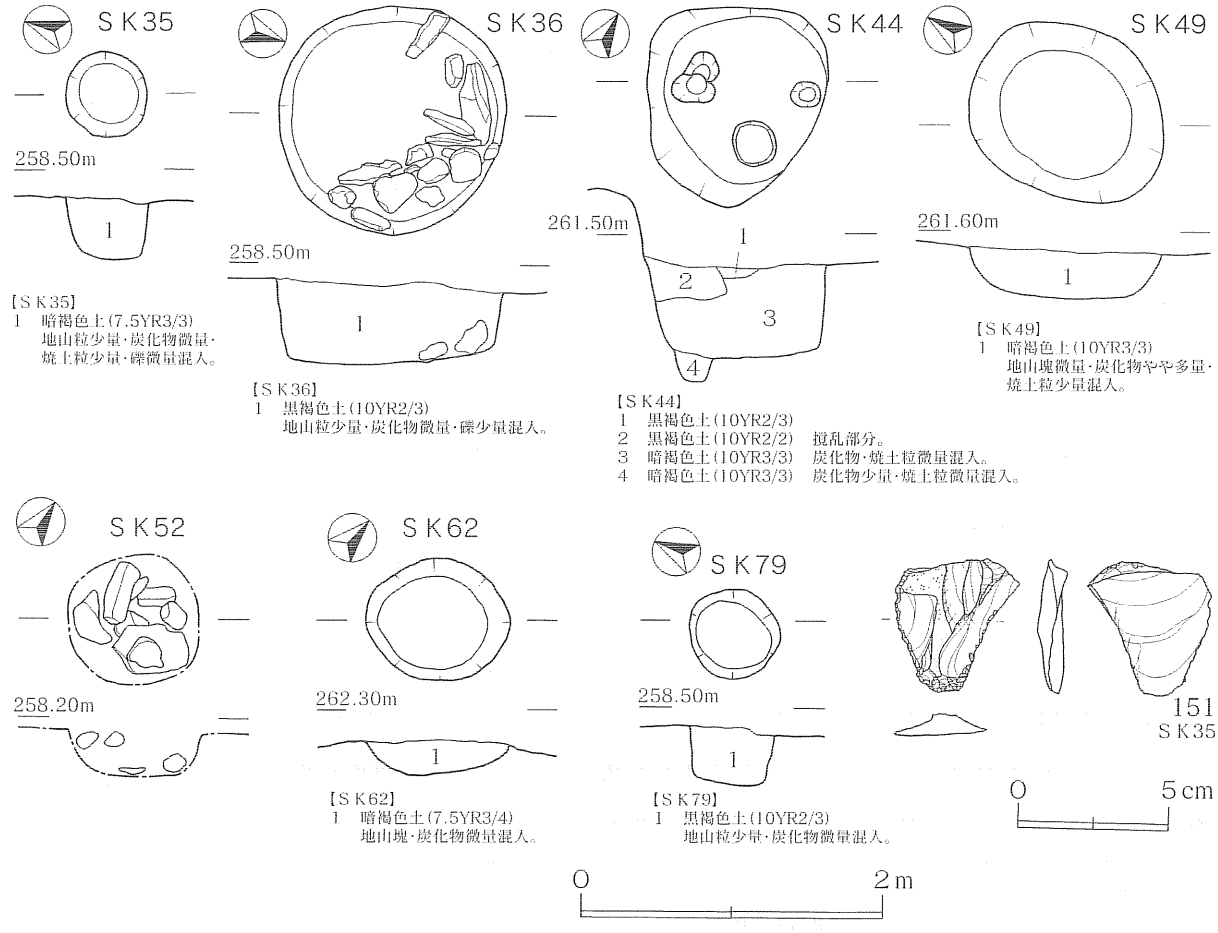
ＬＨ46、ＬＨ47 グリッドに位置する。ＳＩ30 竪穴住居跡の壁面を調査中、壁面で掘り込みを確認した。ＳＩ30 竪穴住居跡と重複する。本土坑が新しい。平面形は、長軸 1.42m ×短軸 1.08m の楕円形を呈し、確認面からの深さ 0.62m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、一気に埋められている。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中より縄文土器片(168・169・173・174)、両側縁に敲きによる加工痕のある石器１点(171)、磨製石斧１点(172)、石匙１点(182)、石鏃１点(183)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

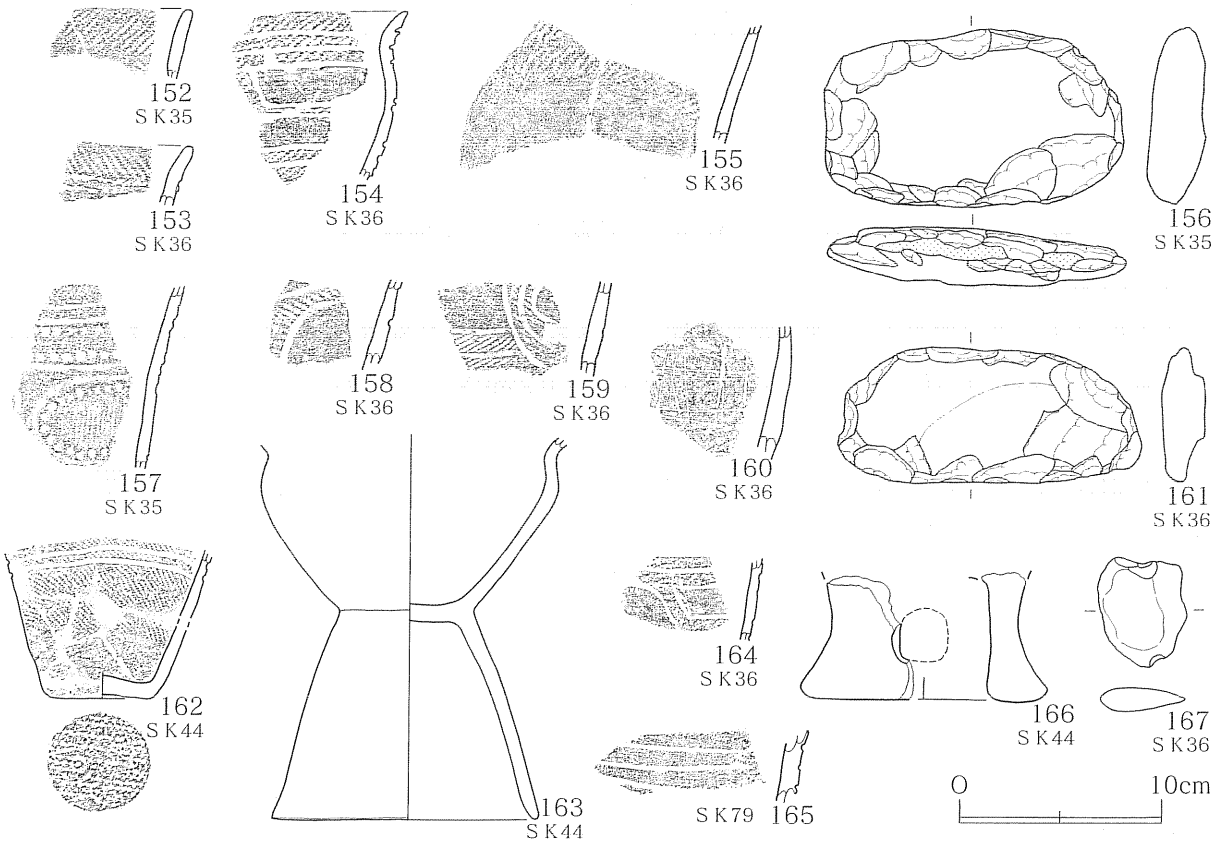
ＳＫ82 土坑(第 30 図)

ＬＦ50 グリッドに位置する。ＳＫ34 土坑を調査中に東側の壁面に掘り込みを確認した。ＳＫ34 土坑および柱穴と重複する。柱穴より新しく、ＳＫ34 土坑より古い。ＳＫ34 土坑に南西側を切られていて、全容は不明であるが、平面形は、直径 0.88m の円形と思われる。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。確認面からの深さは 0.19m を測る。覆土は２層に分けられ、人為堆積と思われる。底面は、平坦である。遺物は、覆土中から縄文時代前期の土器片(149)と後期の土器片７点が出土した。構築時期は、出土した土器片と確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ108 土坑(第 32 図)

ＬＩ50 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.20m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.27m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層である。粒子が水平に堆積していることから自然堆積と思われる。底面は、平坦である。遺物は、覆土中より縄文土器片(170)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。





第31図　ＳＫ35･36･44･49･52･62･79 土坑とその出土遺物

ＳＫ114 土坑(第 32 図)

ＬＥ57 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.92m の円形である。確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層で、人為堆積と思われる。中央部に 45㎝×40㎝×10㎝ の扁平な礫を中心に礫が数個並べられていた。底面は、平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

ＳＫ115 土坑(第 32 図)

ＬＥ57 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.88m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から凹石 1 点(180)が出土した。構築時期は、覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ116 土坑(第 32 図)

ＬＧ62 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。2 基の柱穴と重複している。いずれの柱穴よりも新しい。平面形は、直径 0.76m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.53m を測る。断面形は、ビーカー形を呈する。覆土は、5 層に分けられた。第 5 層は人為堆積、それより上位は自然堆積と思われる。第 5 層から、野球ボール大からラグビーボール大の礫が 7 個出土した。底面は、平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(175)、磨製石斧 1 点(181)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ128 土坑(第 32 図)

ＬＨ64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ197 土坑および柱穴と重複しているが、いずれの遺構よりも古い。平面形は、直径 0.80m の不整円形で、確認面からの深さは 0.54m を測る。断面形は、ビーカー状を呈するが、一部オーバーハングするところがあり、袋状に近い。覆土は 1 層で、土とともに拳大から人頭大の礫が埋められたものと思われる。底面は、ほぼ平坦であるが、中央部がやや凹む。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。形態から、貯蔵穴または土壙墓と考えられる。

ＳＫ129 土坑(第 32 図)

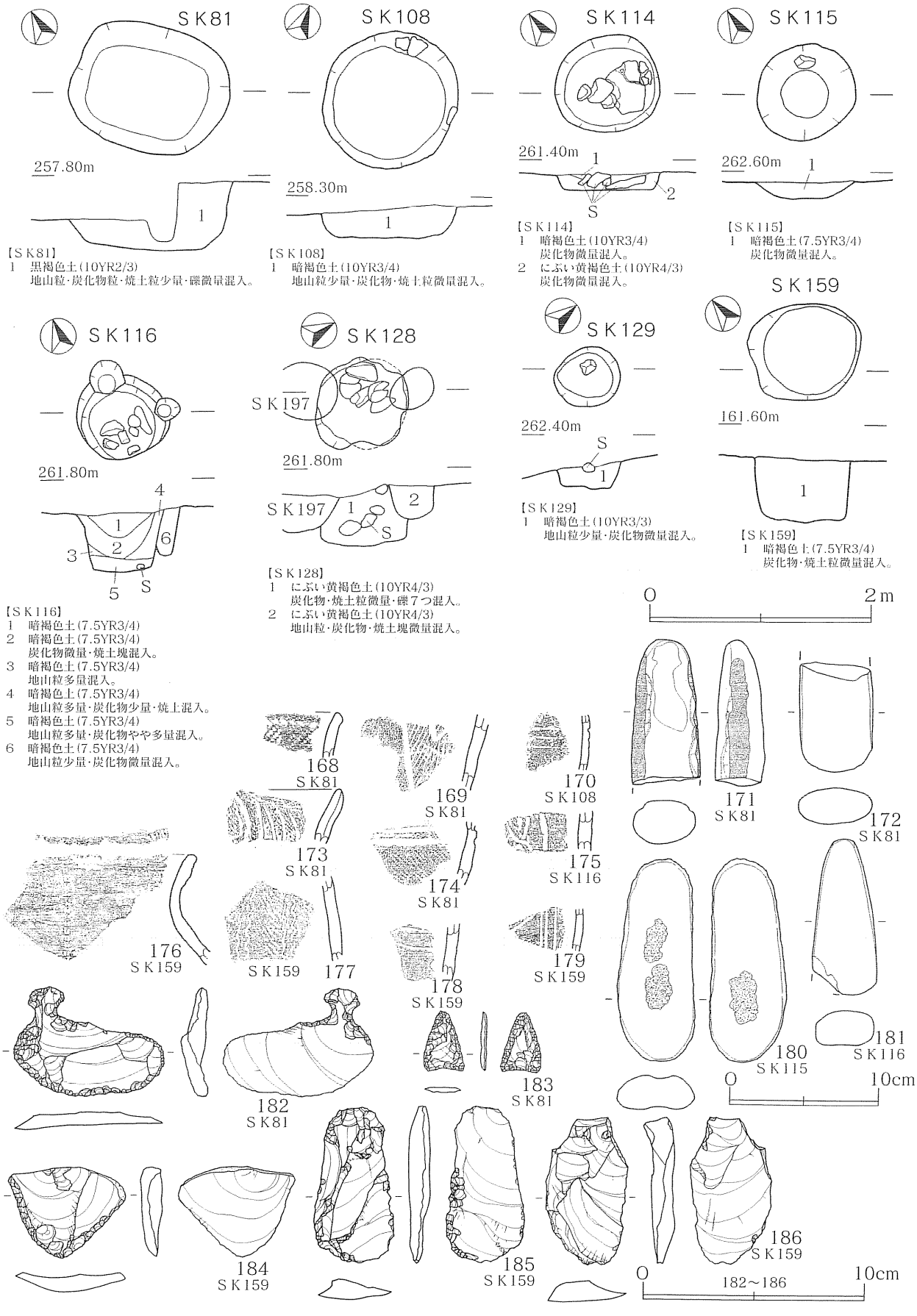
ＬＧ64 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.60m ×短軸 0.53m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.25m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、上位で掌大の礫 1 個が出土した。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ159 土坑(第 32 図、図版 7)

ＬＡ55 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.98m ×短軸 0.90m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.56m を測る。断面形は、ビーカー形を呈する。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。底面は、堅くしまり、ほぼ平坦である。遺物は、縄文時代中期前葉(177)と後期(176・178・179)の土器片、石箆 1 点(185)、削器 2 点(184・186)が出土した。構築時期は、確認面と出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、貯蔵穴または土壙墓と考えられる。

ＳＫ170 土坑(第 33 図)

ＬＦ50 グリッドに位置する。調査区外との境界の断面に掘り込みを確認した。半分は調査区外で



【SK81】
1　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒・炭化物粒・焼土粒少量・礫微量混入。

【SK108】
1　暗褐色土(10YR3/4)
　地山粒少量・炭化物・焼土粒微量混入。

【SK114】
1　暗褐色土(10YR3/4)
　炭化物微量混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　炭化物微量混入。

【SK115】
1　暗褐色土(7.5YR3/4)
　炭化物微量混入。

【SK116】
1　暗褐色土(7.5YR3/4)
2　暗褐色土(7.5YR3/4)
　炭化物微量・焼土塊混入。
3　暗褐色土(7.5YR3/4)
　地山粒多量混入。
4　暗褐色土(7.5YR3/4)
　地山粒多量・炭化物少量・焼土混入。
5　暗褐色土(7.5YR3/4)
　地山粒多量・炭化物やや多量混入。
6　暗褐色土(7.5YR3/4)
　地山粒少量・炭化物微量混入。

【SK128】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　炭化物・焼土粒微量・礫７つ混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　地山粒・炭化物・焼土塊微量混入。

【SK129】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒少量・炭化物微量混入。

【SK159】
1　暗褐色土(7.5YR3/4)
　炭化物・焼土粒微量混入。

第32図　ＳＫ81･108･114･115･116･128･129･159 土坑とその出土遺物

あるが、平面形は直径0.73mの円形と考えられる。確認面からの深さは0.53mを測る。断面形は「U」字形を呈する。覆土は、2層に分けられた。粒子がほぼ平坦に堆積していることから、自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ175土坑(第33図)

ＬＨ50・51グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径0.96mの円形を呈し、確認面からの深さは0.18mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、やや中央部が凹むが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ176土坑(第33図)

ＬＧ51、ＬＨ51グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複する。本土坑が古い。平面形は、直径0.68mの円形で、確認面からの深さは0.18mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。第2・3層は、柱穴の覆土である。底面は、平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ177土坑(第33図)

ＬＧ52グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴2基およびＳＫ191土坑と重複するが、いずれの遺構よりも古い。平面形は、直軸0.99mの楕円形で、確認面からの深さは0.20mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1層(第3層)で、自然堆積と思われる。なお、第1・2層はＳＫ191土坑の覆土である。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ191土坑(第33図)

ＬＧ52グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ177土坑と重複する。本土坑が新しい。平面形は、直径0.61mの円形で、確認面からの深さは0.38mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は2層で、自然堆積と思われる。ＳＫ177土坑より地山粒子の割合が高い。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ196土坑(第33図)

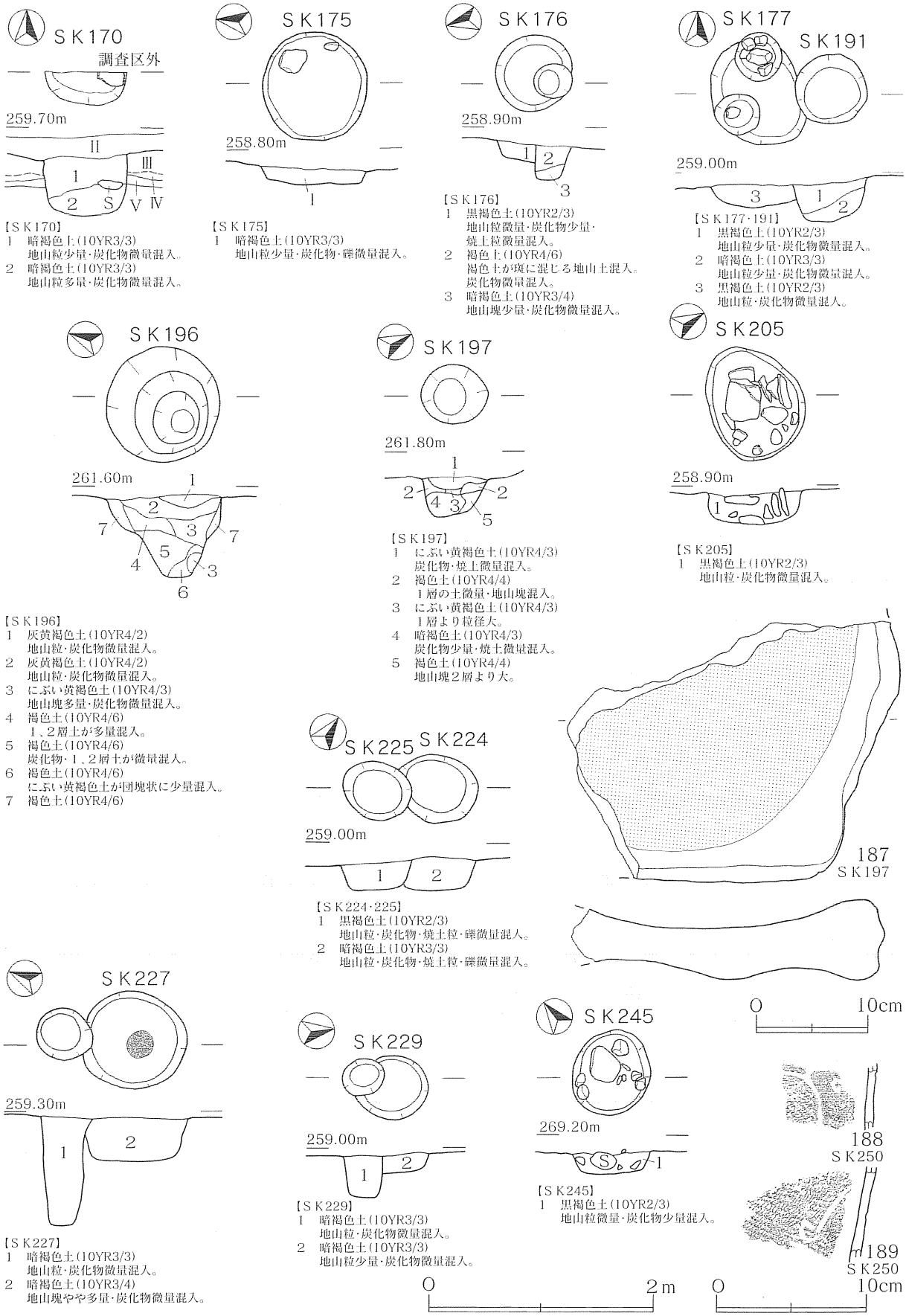
ＬＨ63グリッドに位置する。Ⅲ層下面で灰黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径1.00mの円形で、確認面からの深さは0.73mを測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は7層で、自然堆積と思われる。底面は狭く、中央が凹む。遺物は、2層覆土中から縄文土器片が2点出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ197土坑(第33図)

ＬＨ63・64グリッドに位置する。Ⅲ層下面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径0.60mの円形で、確認面からの深さは0.35mを測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は5層で、自然堆積と思われる。底面は南西側が低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片30点、石皿破片1点(187)が出土した。土器片は、いずれも磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ205土坑(第33図)

ＬＨ53グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、黒褐色土の落ち込みと表出する礫で確認した。平面



【ＳＫ170】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒少量・炭化物微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒多量・炭化物微量混入。

【ＳＫ175】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒少量・炭化物・礫微量混入。

【ＳＫ176】
1　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒微量・炭化物少量・
　焼土粒微量混入。
2　褐色土(10YR4/6)
　褐色土が斑に混じる地山土混入。
　炭化物微量混入。
3　暗褐色土(10YR3/4)
　地山塊少量・炭化物微量混入。

【ＳＫ177・191】
1　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒少量・炭化物微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒少量・炭化物微量混入。
3　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒・炭化物微量混入。

【ＳＫ196】
1　灰黄褐色土(10YR4/2)
　地山粒・炭化物微量混入。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)
　地山粒・炭化物微量混入。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　地山塊多量・炭化物微量混入。
4　褐色土(10YR4/6)
　１、２層土が多量混入。
5　褐色土(10YR4/6)
　炭化物・１、２層土が微量混入。
6　褐色土(10YR4/6)
　にぶい黄褐色土が団塊状に少量混入。
7　褐色土(10YR4/6)

【ＳＫ197】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　炭化物・焼土微量混入。
2　褐色土(10YR4/4)
　１層の土微量・地山塊混入。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　１層より粒径大。
4　暗褐色土(10YR4/3)
　炭化物少量・焼土微量混入。
5　褐色土(10YR4/4)
　地山塊２層より大。

【ＳＫ205】
1　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒・炭化物微量混入。

【ＳＫ224・225】
1　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒・炭化物・焼土粒・礫微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒・炭化物・焼土粒・礫微量混入。

【ＳＫ227】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒・炭化物微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/4)
　地山塊やや多量・炭化物微量混入。

【ＳＫ229】
1　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒・炭化物微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
　地山粒少量・炭化物微量混入。

【ＳＫ245】
1　黒褐色土(10YR2/3)
　地山粒微量・炭化物少量混入。

第33図　ＳＫ170・175・176・177・191・196・197・205・224・225・227・229・245・250
土坑とその出土遺物

形は、長軸 1.03m×短軸 0.84m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は１層である。礫は意図的に埋められたと思われる。底面は中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ224 土坑（第 33 図）

ＬＩ52、ＬＪ52 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ225 土坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 0.72m×短軸 0.61m の楕円形で、確認面からの深さは 0.15m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は平坦である。覆土中より縄文土器片が９点出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ225 土坑（第 33 図）

ＬＪ52 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ224 土坑と重複するが、 本土坑が新しい。平面形は、直径 0.55m の円形で、確認面からの深さは 0.24m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、平坦である。覆土中から縄文土器片数点が出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と出土遺物から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ227 土坑（第 33 図）

ＬＨ55、ＬＩ55 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、直径 0.87m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.39m を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、一気に埋められたと思われる。底面は、平坦である。中央付近に炭の薄い堆積が見られ、火を使用した痕と考えられる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ229 土坑（第 33 図）

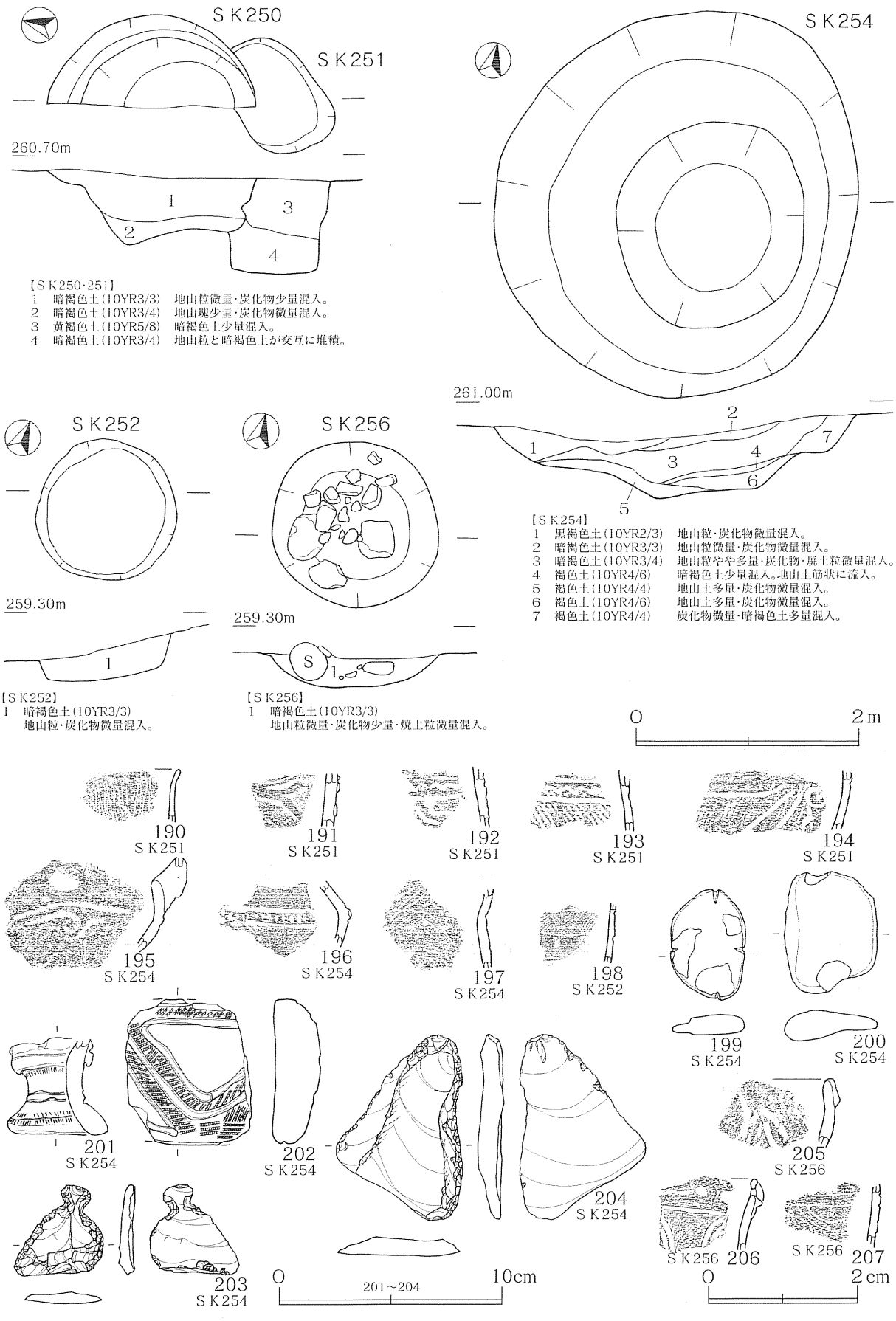
ＬＩ54 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複している。本土坑が古い。平面形は、直径 0.58m の円形で、確認面からの深さは 0.17m を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ245 土坑（第 33 図）

ＬＩ55 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、黒褐色土の落ち込みと表出する礫で確認した。ＳＩ202 竪穴住居跡と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、長軸 0.76m×短軸 0.69m の楕円形で、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、大小の礫を含む。人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ250 土坑（第 33・34 図）

ＬＩ59 グリッドに位置する。道路の法面で掘り込みを確認した。ＳＫ251 土坑と重複するが、本土坑が新しい。道路に削られ半分ほどしか調査できなかったが、平面形は、直径 1.54m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.66m を測る。壁は南東側がやや外傾し、北東側が大きく外傾するが、開口部



第34図　ＳＫ250・251・252・254・256 土坑とその出土遺物

近くではさらに傾きが大きくなり緩やかに立ち上がる。覆土は、２層に分けられた。第２層は人為堆積、第１層は自然堆積と思われる。底面はほぼ平坦であるが、北側は低い。遺物は、覆土中から縄文土器片(188・189)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ251 土坑(第 34 図)

ＬＩ58・59 グリッドに位置する。道路の法面に掘り込みを確認した。ＳＫ250 土坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 1.15m×短軸 0.76m の楕円形で、確認面からの深さは 0.83m を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、２層(第３・４層)に分けられた。第３層はほとんど地山である。第４層は地山と暗褐色土が交互に堆積している。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(190～194)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ252 土坑(第 34 図)

ＬＪ57 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＩ261 土坑と重複する。本土坑が新しい。平面形は、ほぼ直径 1.3m の円形である。確認面からの深さは 0.43m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(198)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ254 土坑(第 34 図)

ＬＨ59・60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 3.2m の円形で、確認面からの深さは 0.53m を測る。壁は、途中で段差を持ち、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は７層に分けられた。自然流入である。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(195～197・201)、腕輪形土製品１点(202)、石匙１点(203)、掻器１点(204)、石錘２点(199・200)が出土した。201 は、異形土器の台部と思われる。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ256 土坑(第 34 図)

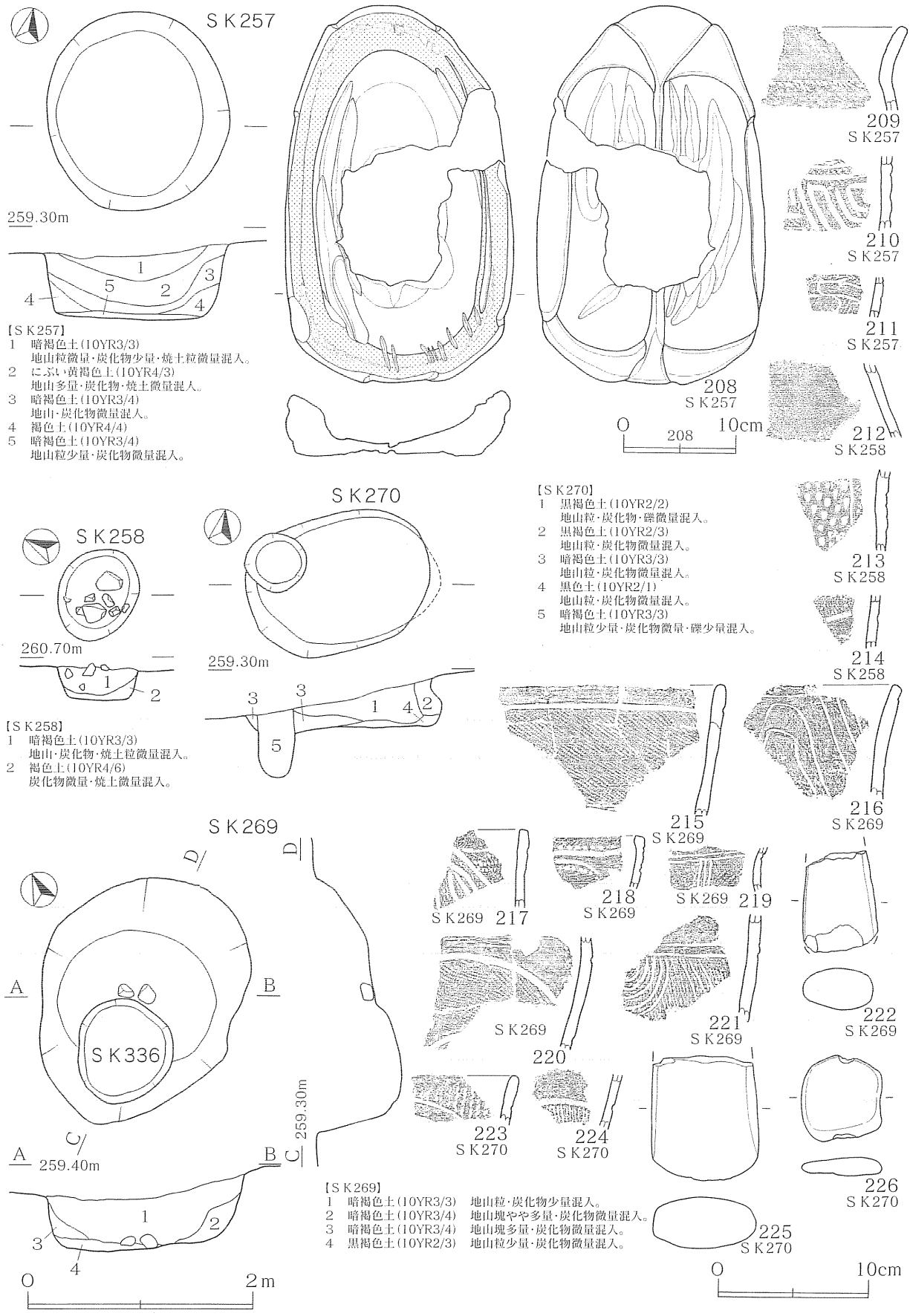
ＭＡ58・59 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＱ08 配石遺構と重複する。本土坑が古い。平面形は、ほぼ直径 1.48m の円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、拳大から人頭大の礫が混在する。意図的に埋められたものと思われる。遺物は、覆土中から縄文土器片(205～207)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われ、形態から土壙墓の可能性も考えられる。

ＳＫ257 土坑(第 35 図)

ＭＡ63、ＭＢ63 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、ほぼ直径 1.63m の円形で、確認面からの深さは 0.63m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は５層で、自然堆積と思われる。底面は、地山の礫が出ているがほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(209～211)、石皿１点(208)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、袋状土坑だった可能性も考えられる。

ＳＫ258 土坑(第 35 図)

ＭＣ63 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.85m×短軸 0.69m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は２層で、拳大から人頭大の角礫が、底部から開口部まで雑然と混入している。第２層



第35図　ＳＫ257・258・269・270・336 土坑とその出土遺物

は地山土の堆積、第１層は人為的に埋められたものと思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(212～214)が出土した。212 は、台付鉢の台部と思われる。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ269 土坑(第 35 図)

ＭＡ62、ＭＢ62 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ336 土坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 2.3m×短軸 1.9m の不整楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.45m を測る。これは開口部の崩落によるもので、本来は円形と思われる。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は４層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(215～221)、磨製石斧１点(222)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、袋状土坑だった可能性も考えられる。

ＳＫ270 土坑(第 35 図)

ＭＡ61、ＭＢ61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 1.65m×短軸 1.23m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.41m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がるが、東側の一部はオーバーハングする。覆土は４層で、自然堆積と思われる。底面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(223・224)、磨製石斧１点(225)、石錘１点(226)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ272 土坑(第 36 図)

ＭＡ61 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 0.85m×短軸 0.65m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.25m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

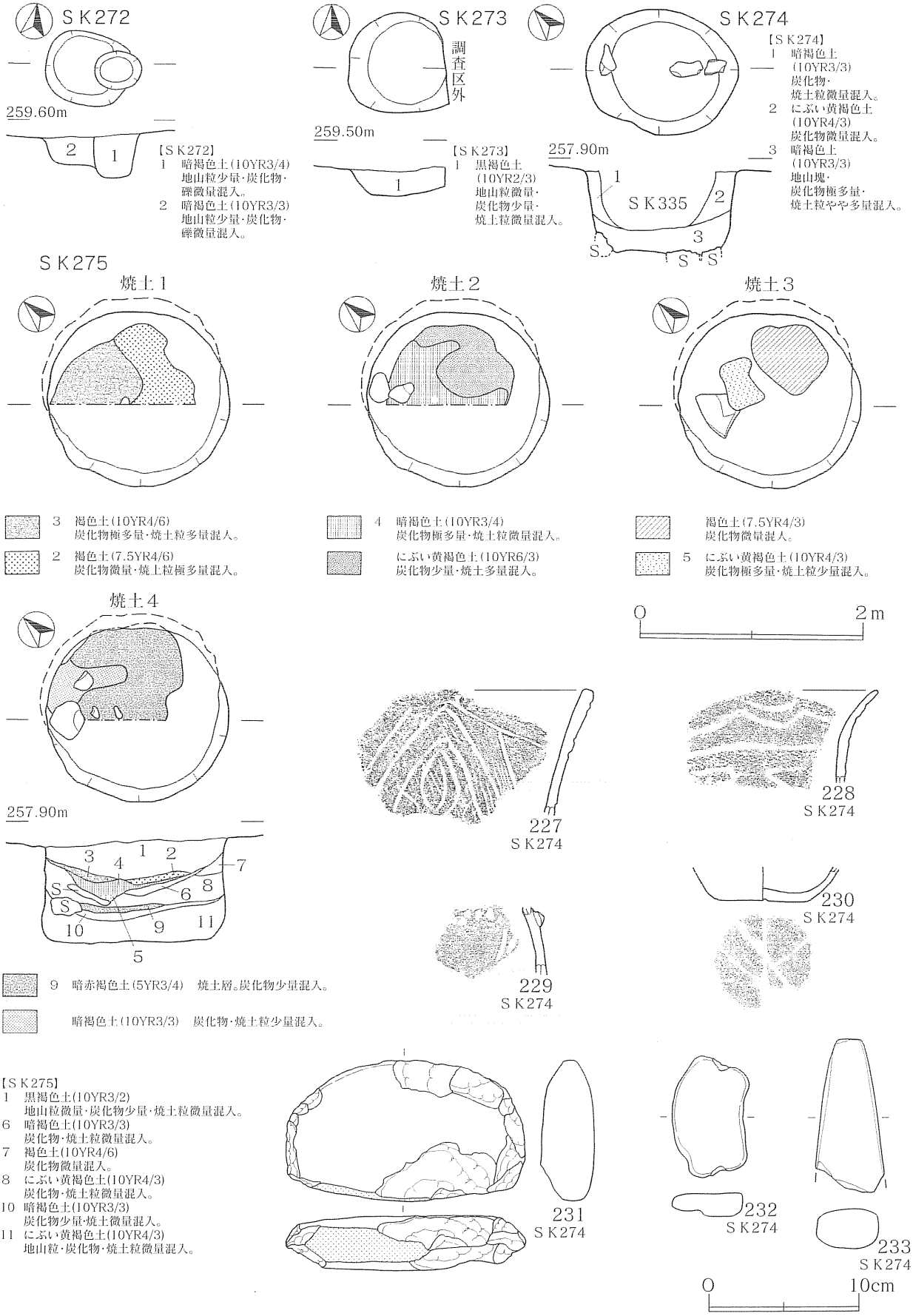
ＳＫ273 土坑(第 36 図)

ＭＡ62 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。東側一部は、調査区外であるが、平面形は、ほぼ直径 0.87m の円形と思われる。確認面からの深さは 0.22m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、凹凸があるが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

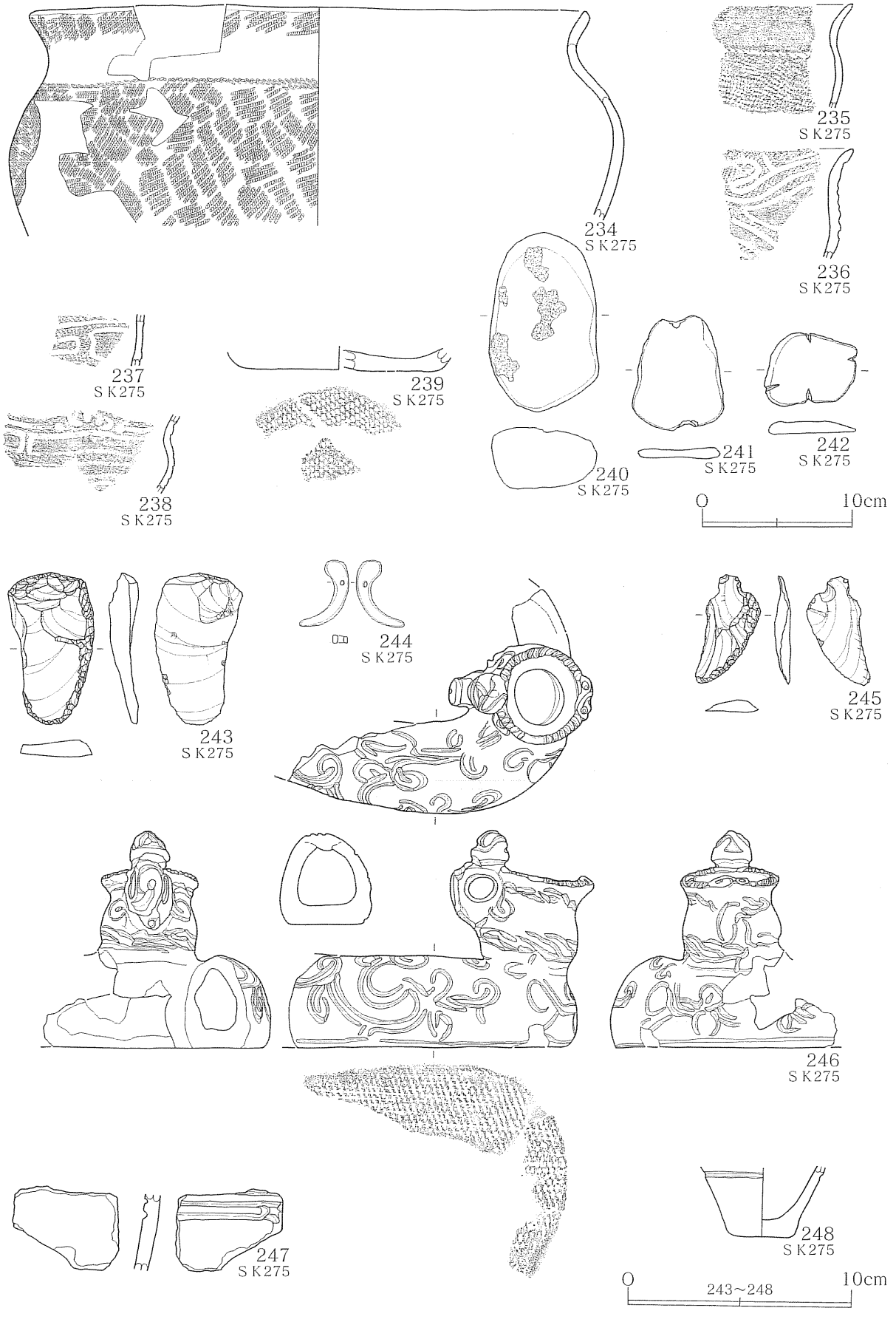
ＳＫ274 土坑(第 36 図)

ＭＧ60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で円形の礫のまとまりとその周囲の暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ335 土坑と重複しているが、本土坑の中央部を壊してＳＫ335 土坑が構築されている。平面形は、長軸 1.36m×短軸 1.12m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.70m を測る。断面形は、「Ｕ」字形を呈する。覆土は３層で、炭化物・焼土粒・地山塊が多量に入っている。人為堆積と思われる。第３層には、多量の炭の堆積があり、繰り返し火をたいた痕と判断した。底面は、地山礫層のため凹凸はあるが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土第３層から縄文土器片(227～230)、石錘１点(232)、磨製石斧１点(233)、半円状扁平打製石器１点(231)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ275 土坑(第 36・37 図、図版 7・10)



第36図　ＳＫ272・273・274・275 土坑とその出土遺物



第37図　ＳＫ275 土坑出土遺物

ＭＨ60 グリッドに位置する。Ⅱ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.62m の円形で、確認面からの深さは 0.91m を測る。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がるが、北側約半分は底面から３分の１の高さからオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、９層に分けられた。第１層は自然堆積、他は人為堆積と考えられる。壁面に多量の炭化物の付着が見られることと、土坑内で、４面の焼土の広がりが確認できたことから、内部で少なくとも４度にわたり火が焚かれたと考えられる。火を焚いた時期は、第 11 層の堆積後と第８層の堆積後の２時期に大別され、第８層の堆積後は３度の使用が認められる。人頭大の礫も数個入っていたが、火を受けて赤変したものが多かった。遺物は、覆土中から縄文土器片(234～239・246～248)、凹石１点(240)、石錘２点(241・242)、削器１点(243)、石匙１点(245)、垂飾品１点(244)が出土している。246 は、丁寧に研磨された環状注口土器である。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。遺跡の北西端の沢沿いにあることや内部で繰り返し火を焚いていることから、特別な用途があったと思われる。

ＳＫ276 土坑(第 38 図)

ＭＢ62、ＭＣ62 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.06m の円形で、確認面からの深さは 0.44m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は２層に分けられた。第１層は自然堆積、第２層は人為堆積と思われる。底部に人頭大の角礫が１個入っていた。底面は、中央部がやや凹むが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ278 土坑(第 38 図)

ＭＣ64 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.05m×短軸 0.92m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.32m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、上位で人頭大の礫が２個出土した。人為堆積と思われる。底面は、中央部がやや凹む。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

ＳＫ279 土坑(第 38 図)

ＭＤ64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ280 土坑と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、直径 0.72m の円形で、確認面からの深さは 0.09m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

ＳＫ280 土坑(第 38 図)

ＭＤ64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ279・341 土坑と重複するが、ＳＫ279 土坑より古く、ＳＫ341 土坑より新しい。平面形は、直径 0.92m の円形で、確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片が 32 点出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ282 土坑(第 38・39 図)

ＬＩ63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、

長軸 0.87m×短軸 0.63m の楕円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(249)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ283 土坑(第 38・39 図)

ＬＪ63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。調査区境界に位置しているため南側半分は未調査であるが、平面形は直径 1.03m の円形と思われる。確認面からの深さは 0.56m を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がると思われるが、北側の壁は底部付近は内傾しながら、開口部付近はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は４層に分けられた。最下層(第４層)は人為堆積、それ以外は自然堆積と思われる。底面は平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(250)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ284 土坑(第 38・39 図)

ＬＪ63・64、ＭＡ63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.65m の円形で、確認面からの深さは 0.40m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、炭化物・焼土粒が多量に混入していた。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(251)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ285 土坑(第 38・39 図、図版 10)

ＬＩ64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ286 土坑と重複している。本土坑が新しい。平面形は、直径 1.08m の円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器１点(260)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ286 土坑(第 38・39 図)

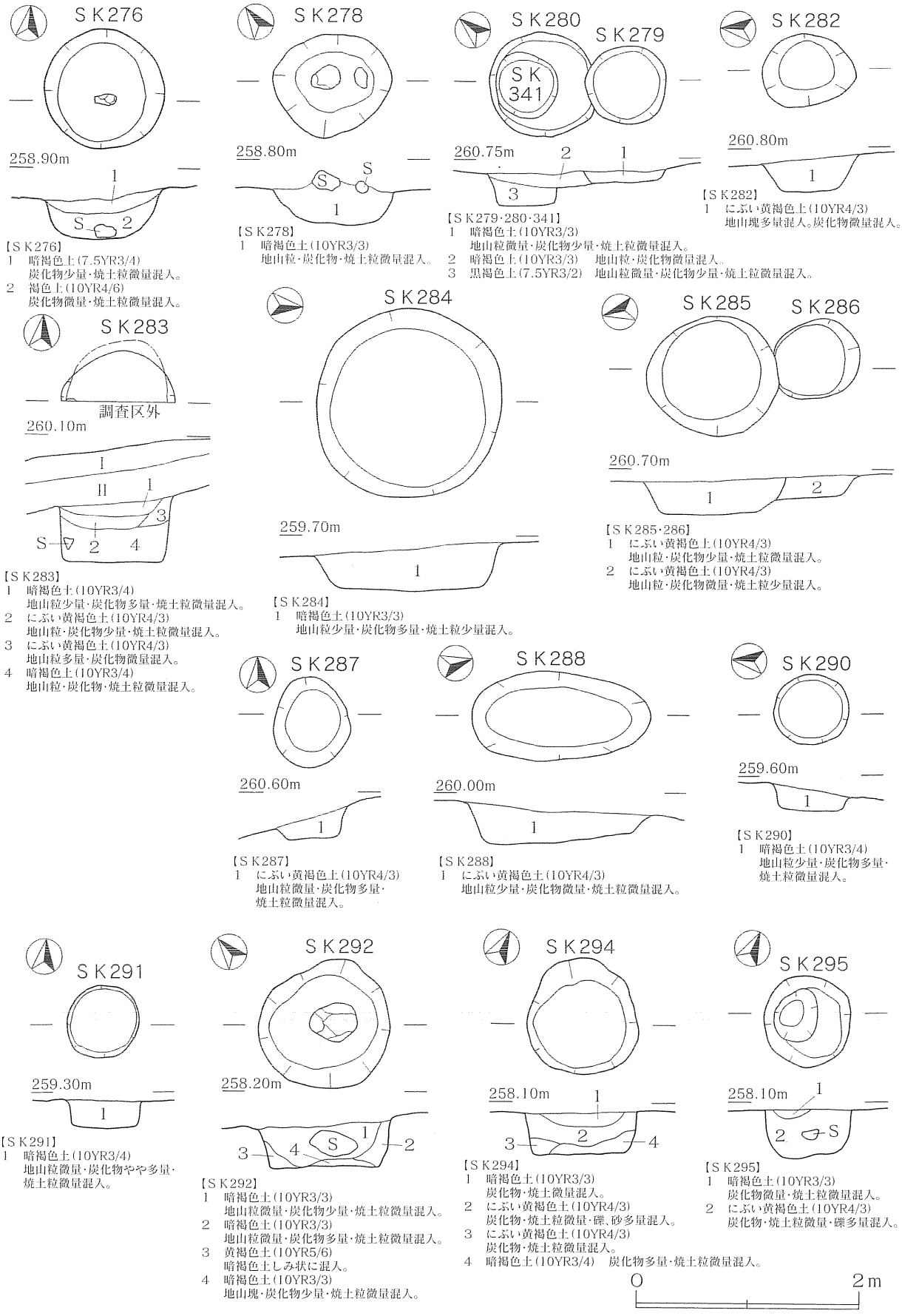
ＬＩ64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ285 土坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、直径 0.70m の円形で、確認面からの深さは 0.17m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(252)、石棒１点(256)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ287 土坑(第 38・39 図)

ＬＩ64・65 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.82m×短軸 0.63m の楕円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、斜面のせいか西側がやや下がるが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(253・254)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ288 土坑(第 38・39 図)

ＬＪ64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.60m×短軸 0.80m の楕円形で、確認面からの深さは 0.37m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、人為堆積と思われる。底面は、南側が低く、北側が高くなっているが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(255)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄



【SK276】
1　暗褐色土(7.5YR3/4)
炭化物少量・焼土粒微量混入。
2　褐色土(10YR4/6)
炭化物微量・焼土粒微量混入。

【SK278】
1　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。

【SK279・280・341】
1　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒・炭化物微量混入。
3　黒褐色土(7.5YR3/2)　地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。

【SK282】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山塊多量混入。炭化物微量混入。

【SK283】
1　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒少量・炭化物多量・焼土粒微量混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒・炭化物少量・焼土粒微量混入。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒多量・炭化物微量混入。
4　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒・炭化物・焼土粒微量混入。

【SK284】
1　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒少量・炭化物多量・焼土粒少量混入。

【SK285・286】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒・炭化物少量・焼土粒微量混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒・炭化物微量・焼土粒少量混入。

【SK287】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒微量・炭化物多量・
焼土粒微量混入。

【SK288】
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山粒少量・炭化物微量・焼土粒微量混入。

【SK290】
1　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒少量・炭化物多量・
焼土粒微量混入。

【SK291】
1　暗褐色土(10YR3/4)
地山粒微量・炭化物やや多量・
焼土粒微量混入。

【SK292】
1　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒微量・炭化物少量・焼土粒微量混入。
2　暗褐色土(10YR3/3)
地山粒微量・炭化物多量・焼土粒微量混入。
3　黄褐色土(10YR5/6)
暗褐色土しみ状に混入。
4　暗褐色土(10YR3/3)
地山塊・炭化物少量・焼土粒微量混入。

【SK294】
1　暗褐色土(10YR3/3)
炭化物・焼土微量混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物・焼土粒微量・礫、砂多量混入。
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物・焼土粒微量混入。
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物多量・焼土粒微量混入。

【SK295】
1　暗褐色土(10YR3/3)
炭化物微量・焼土粒微量混入。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
炭化物・焼土粒微量・礫多量混入。

第38図　SK276・278・279・280・282・283・284・285・286・287・288・290・291・292・294・295・341 土坑

文時代後期前葉と思われる。形態から、土壙墓と考えられる。

ＳＫ290 土坑(第 38 図)

ＭＡ63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.64m の円形で、確認面からの深さは 0.23m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ291 土坑(第 38 図、図版 7)

ＭＡ64 グリッドに位置する。Ⅲ層中上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.64m の円形である。確認面からの深さは 0.23m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ292 土坑(第 38・39 図)

ＭＦ61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.16m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.40m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 4 層に分けられた。第 1 層は人為堆積、他は自然堆積と思われる。中央部に直径約 40㎝ の礫が入っていた。炭化物の混入量が多い。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(257)が出土した。構築時期は、出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ294 土坑(第 38・39 図)

ＭＦ61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.99m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.38m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 4 層に分けられた。炭化物・礫・砂が大量に混入している。第 1 層は自然堆積、他は人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(258・259)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ295 土坑(第 38 図)

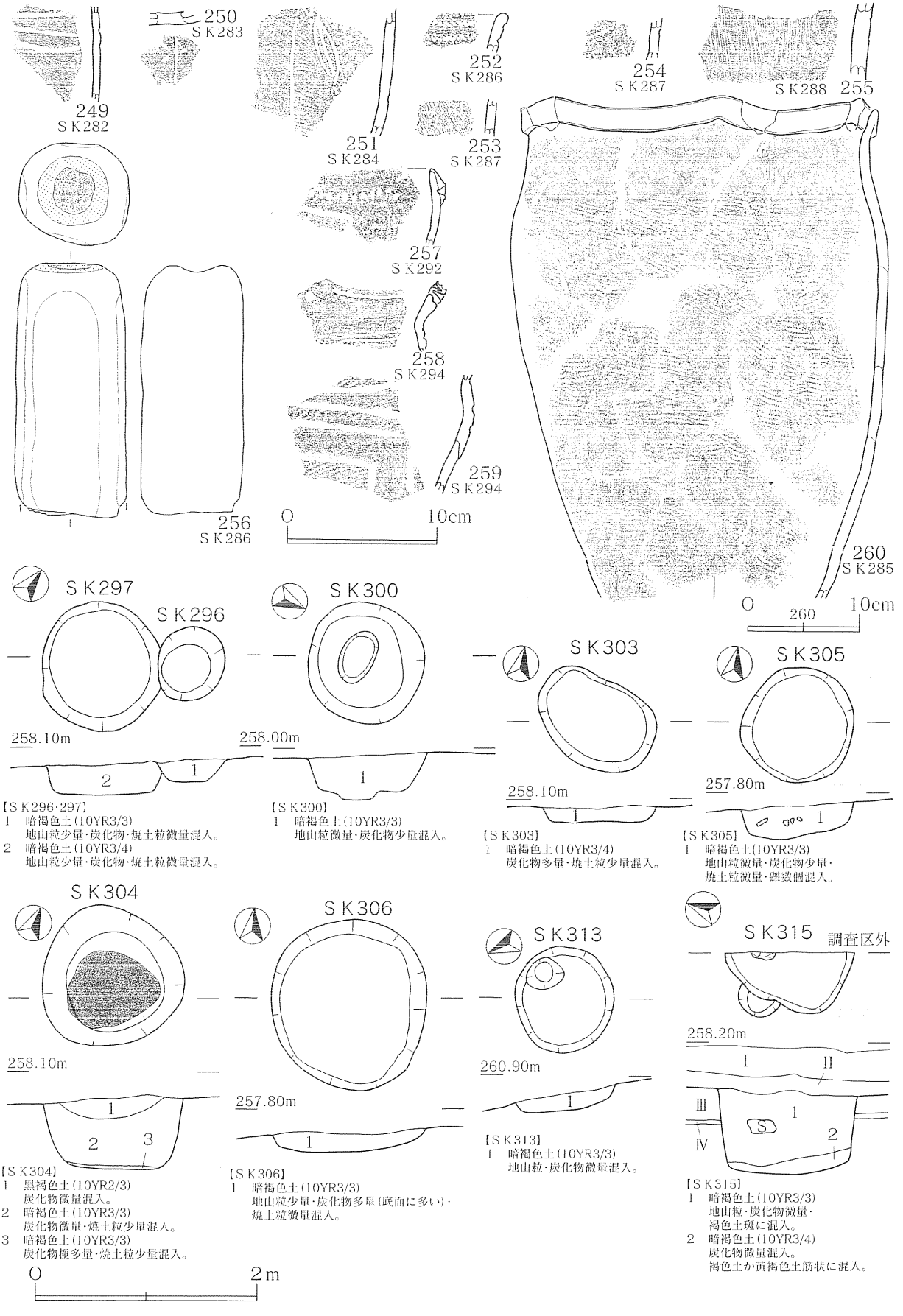
ＭＦ61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.76m の円形で、確認面からの深さは 0.43㎝ を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、2 層に分けられた。礫が大量に混入していることから人為堆積と思われる。底面は、東側はほぼ平坦であるが、西側は凹んでいる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。覆土の状況から土坑と判断したが、柱穴の可能性もある。

ＳＫ296 土坑(第 39・40 図)

ＭＥ60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ297 土坑と重複する。本土坑が新しい。平面形は、直径 0.66m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.20m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土から縄文土器片 3 点、石箆の未製品 1 点(261)が出土した。土器片は、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と出土遺物から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ297 土坑(第 39 図)

ＭＥ60、ＭＦ60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ296 土坑



第39図　S K282・283・284・285・286・287・288・292・294・296・297・300・303・304・305・306・313・315 土坑とその出土遺物

と重複する。本土坑が古い。平面形は、直径 1.16m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ300 土坑(第 39 図)

ＭＦ60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.09m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.38m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、人為堆積と思われる。底面は、中央部に長径 0.48m、短径 0.32m、深さ 0.06m の楕円形の落ち込みがある。それ以外は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ303 土坑(第 39 図)

ＭＥ61 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.11m ×短軸 0.80m の不整楕円形で、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、炭化物・焼土粒が多量に混入していた。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ304 土坑(第 39 図、図版 10)

ＭＧ60 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.28m の円形で、確認面からの深さは 0.64m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は３層に分けられた。第１層は自然堆積、第２・３層は人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。底面付近に炭化物の広がりがあり、その炭化物のまとまり具合から、内部で火を焚いた痕と考えられる。遺物は、第２層下面から縄文土器(262・269)が出土した。262 は異形土器で、土器底面内側の中央部に突起が付き、それに外側から穿孔している。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ305 土坑(第 39 図)

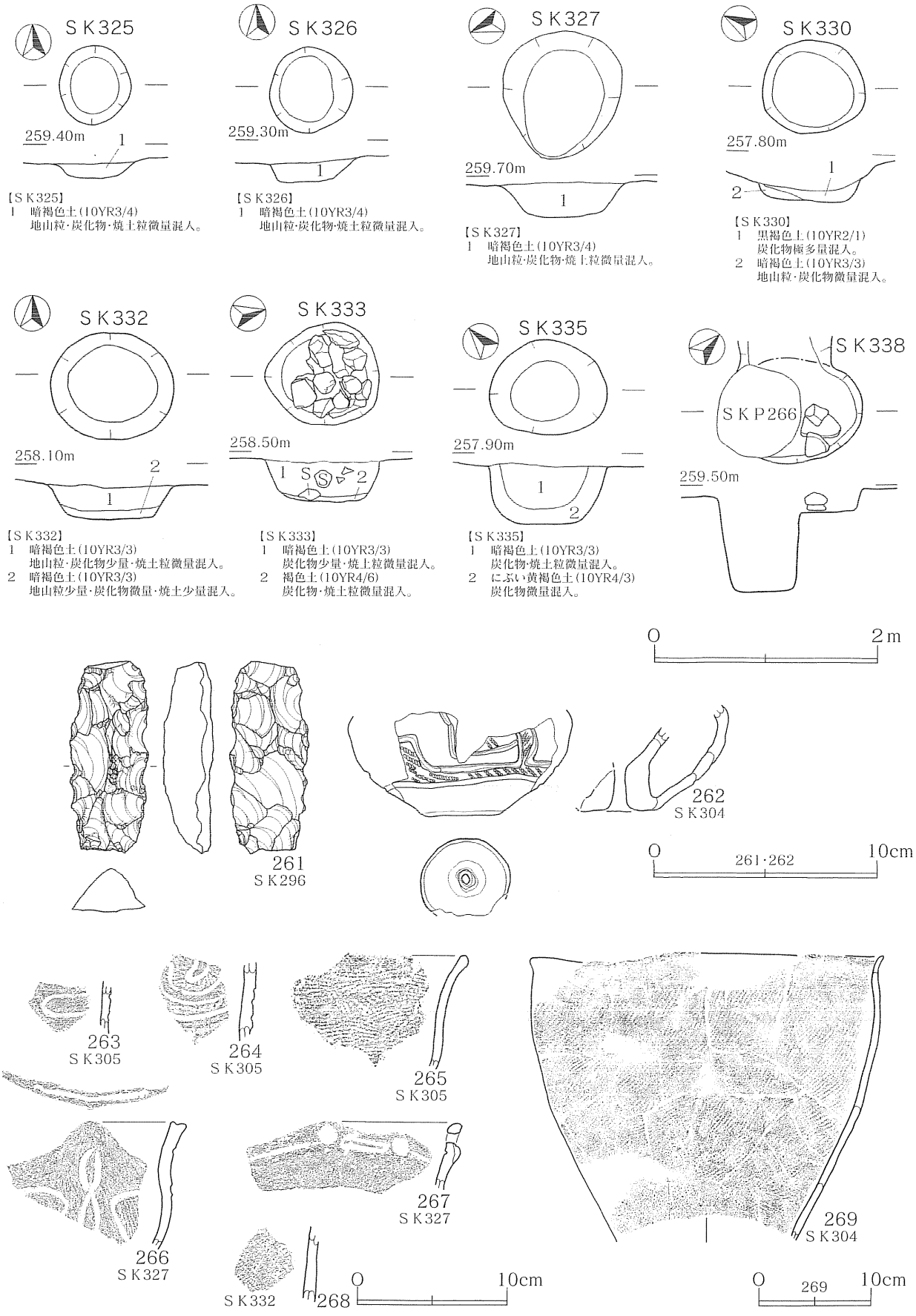
ＭＨ59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.01m の円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、拳大の礫が 10 個ほど混入していた。人為堆積と思われる。底面は西側がやや下がるが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(263～265)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＫ306 土坑(第 39 図)

ＭＨ59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、直径 1.53m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.18m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層で、底面付近に炭化物が多量に混入していた。人為堆積と思われる。底面は、中央がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ313 土坑(第 39 図)

ＬＧ58 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、直径 0.88m の円形で、確認面からの深さは 0.16m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は１層である。底面は中央部がやや凹むが、ほぼ平坦である。本土坑のもの



第40図　ＳＫ296･304･305･325･326･327･330･332･333･335･338 土坑とその出土遺物

と確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ315 土坑(第 39 図)

ＬＦ56 グリッドに位置する。調査区外と境界の断面で掘り込みを検出して確認した。柱穴と重複する。本土坑が新しい。半分は調査区外であるが、平面形は、直径 1.10m の円形またはそれに近い楕円形と思われ、確認面からの深さは 0.75m を測る。断面形は、「Ｕ」字形を呈する。覆土は 2 層に分けられた。第 1 層は人為堆積、第 2 層は自然堆積と思われる。底面は、中央部がやや凹むが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ325 土坑(第 40 図)

ＭＡ65 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.68m の円形で、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は、やや大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ326 土坑(第 40 図)

ＭＡ65 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.75m の円形で、確認面からの深さは 0.17m を測る。壁は、やや大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ327 土坑(第 40 図)

ＬＪ64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.14m ×短軸 1.05m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がるが、北西側だけはほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(266・267)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から土壙墓と考えられる。

ＳＫ330 土坑(第 40 図)

ＭＨ59 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.90m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.10m を測る。覆土は 2 層に分けられた。第 1 層は人為堆積、第 2 層は自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ332 土坑(第 40 図)

ＭＦ62 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.10m ×短軸 0.95m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(268)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ333 土坑(第 40 図、図版 7)

ＭＣ63、ＭＤ63 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.02m ×短軸 0.92m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.36m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層に分けられた。拳大から人頭大の角礫が底部から開口部付近まで多数入っ

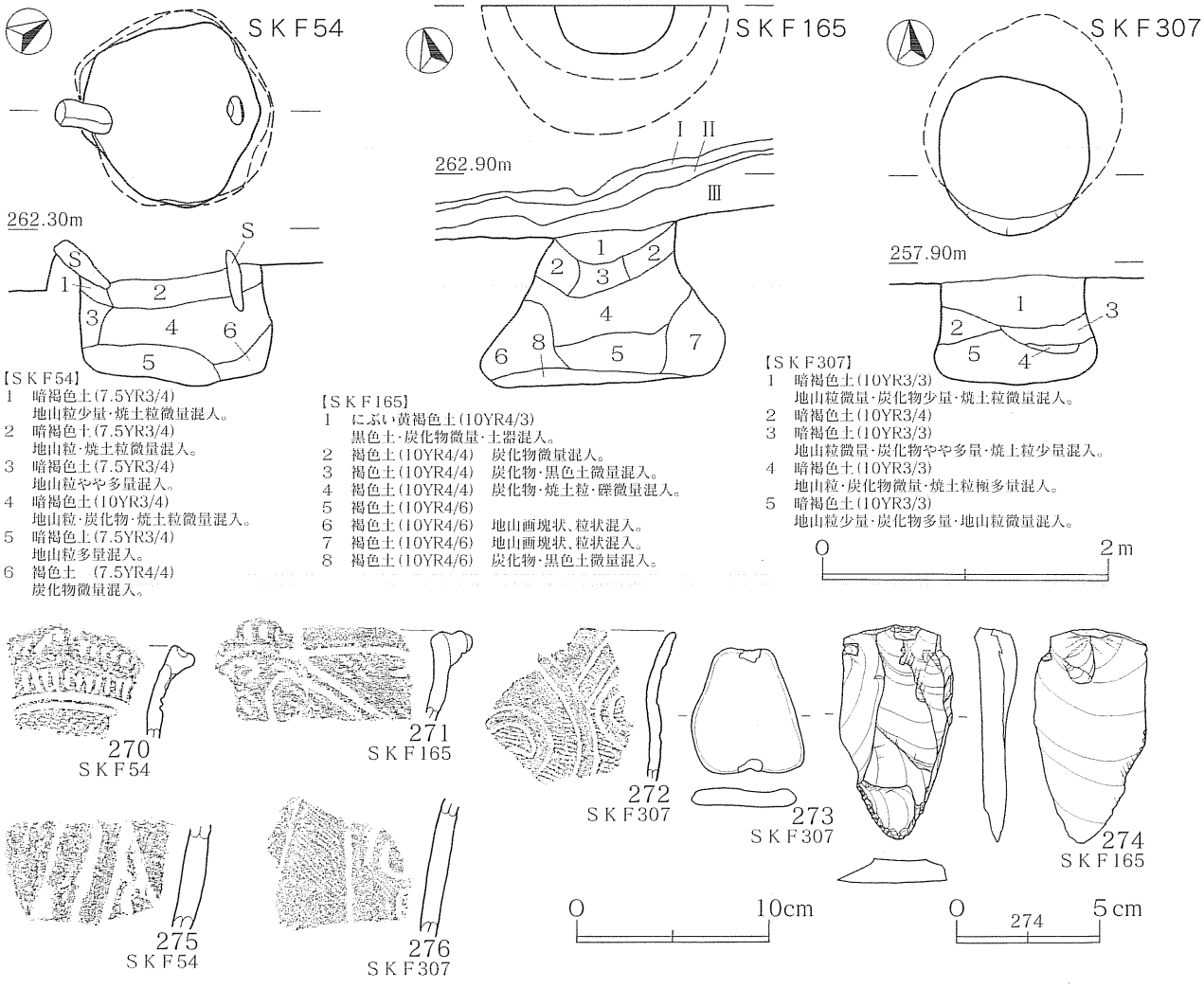
ており、人為的に埋められたと思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ335 土坑（第 40 図）

ＭＧ60、ＭＨ60 グリッドに位置する。ＳＫ274 土坑の精査中、断面で確認した。ＳＫ274 土坑を壊してその中央部に構築されている。平面形は、長軸 1.05m×短軸 0.85m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.53m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は２層に分けられた。第１・２層ともに、炭と親指爪大の円礫が混入していて意図的に埋められたと思われる。底面は、ほぼ平坦であるが、しまりが弱い。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。覆土のしまりが弱いことから土坑と判断したが、柱穴の可能性も否定できない。

ＳＫ336 土坑（第 35 図）

ＭＡ62、ＭＢ62 グリッドに位置する。ＳＫ269 土坑の半截中に、底面近くでその落ち込みを確認した。ＳＫ269 土坑と重複する。確認状況からは、本土坑が古いと言えるが、その新旧は不明である。平面形は、直径 0.88m の円形で、確認できた深さは 0.25m である。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は、ＳＫ269 土坑の第１層とほぼ同じであった。底面は、北東側がやや高いがほぼ平坦である。本土坑のもの



第41図　ＳＫＦ54・165・307 フラスコ状・袋状土坑とその出土遺物

と確認できた遺物はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＫ338 土坑(第 40 図)

ＭＡ60 グリッドに位置する。北西側は、昨年(1997 年)の調査で埋設土器を掘り上げたところで、凹んでいた。ＳＫＰ226 柱穴様ピットを完掘中、壁に掘り込みと礫を検出して確認した。ＳＫＰ226 柱穴様ピットと重複する。本土坑が古い。平面形は、推定長軸 1.2m×短軸 0.93m の楕円形で、確認面からの深さは 0.20m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。底面は、平坦である。本土坑のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認状況と覆土から縄文時代後期と思われる。形態から土壙墓と思われる。

ＳＫ341 土坑(第 38 図)

ＭＤ64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ280 土坑と重複する。本土坑が古く、ＳＫ280 土坑に上部を壊されている。現状で確認できた平面形は、直径 0.56m の円形で、確認面からの深さは 0.28m である。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。本土坑のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

4　フラスコ状・袋状土坑

ＳＫＦ54 袋状土坑(第 41 図)

ＬＤ59、ＬＥ59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で礫の刺さった暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、開口部が直径 1.50m の円形で、底面は長軸 1.65m×短軸 1.40m の円に近い楕円形である。確認面からの深さは 0.80m を測る。断面形は、袋状である。覆土は 6 層で、人為堆積と思われる。北東側と南西側にそれぞれ人頭大を超える礫が立てられている。遺物は、第 2・4 層中から縄文土器片(270・275)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から土壙墓と考えられる。

ＳＫＦ165 フラスコ状土坑(第 41 図)

ＬＦ64 グリッドに位置する。Ⅳ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。調査区境界に位置するため南側半分の調査であるが、平面形は、開口部直径 0.83m、底面直径 1.70m の円形と推測される。確認面からの深さは 1.06m を測る。断面形は、フラスコ状を呈する。覆土は 8 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、第 1 層から縄文土器片(271)、削器 1 点(274)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

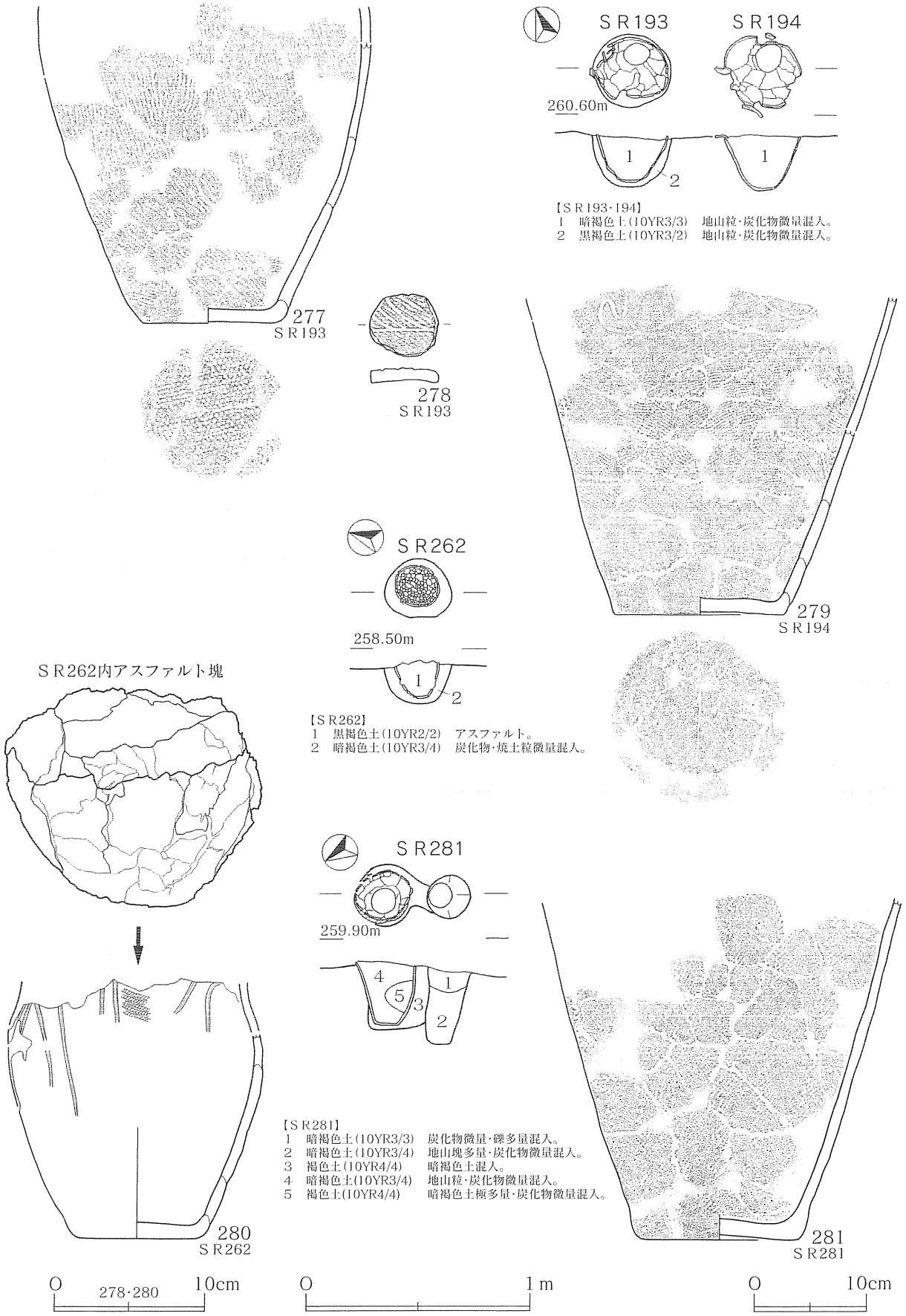
ＳＫＦ307 袋状土坑(第 41 図、図版 7)

ＭＨ61 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の円形プランとして確認した。開口部は直径 1.12m のほぼ円形で、底面は長径 1.44m×短径 1.28m の楕円形である。確認面からの深さは 0.76m を測る。断面形は、袋状である。覆土は 5 層に分けられた。第 4・5 層は人為堆積、それ以外は自然堆積と思われる。底面は、中央がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(272・276)、石錘 1 点(273)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

5　土器埋設遺構

ＳＲ193 土器埋設遺構(第 42 図、図版 7・10)

ＬＧ57、ＬＨ57 グリッドに位置する。ＳＱ172 配石遺構の精査中に検出した。ＳＱ172 配石遺構と重複する。新旧関係は不明であるが、同配石遺構を構成する礫群の間に埋設されていることから、互いの存在を知ることのできるほど近いときに成立したか、同時であると思われる。また、確認状況と



第42図　ＳＲ193・194・262・281 土器埋設遺構とその出土遺物

土層からＳＲ194土器埋設遺構とは同時に存在したと思われる。掘り方規模は、開口部径33cm、底面径15cm、深さ23cmで、埋設土器(277)は、底径11cm、口径29cm、高さ20cmの口縁部を欠く深鉢形土器であった。埋設土器以外の遺物は、土器の内部から出土した円盤状土製品１点(278)である。覆土は、土器内と掘り方で２層に分けられた。時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＲ194土器埋設遺構(第42図、図版７・10)

ＬＧ57グリッドに位置する。ＳＱ172配石遺構の精査中に検出した。ＳＱ172配石遺構と重複する。新旧関係は不明であるが、同配石遺構を構成する礫群の間に埋設されていることから、互いの存在を知ることのできるほど近いときに成立したか、同時であると思われる。また、確認状況と土層からＳＲ193土器埋設遺構とは同時に存在したと思われる。掘り方は検出できなかったが、ほとんど土器と同じ大きさと思われる。土器(279)は、底径12cm、口径33cm、高さ24cmの口縁部を欠く深鉢形土器である。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。覆土は、土器内の１層のみである。時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＲ262アスファルト入り土器埋設遺構(第42図、図版７・10)

ＭＤ63グリッドに位置する。遺構検出作業中、Ⅲ層で埋設土器とその内部にあるアスファルトを検出して確認した。ＳＩ321竪穴住居跡の床面を掘り込んで埋設されていたことから、ＳＩ321竪穴住居跡と同時か、本遺構が新しい。掘り方規模は、開口部径28cm、底面径16cm、深さ18cmを測る。覆土は、土器内アスファルトと掘り方の２層に分けられた。土器(280)は、現存部分で、底径9cm、開口部径16cm、高さ18cmの上部を欠失する深鉢形土器である。正位埋設で、内部にはアスファルトが詰められていたが、油分が揮発し、ブロック状に固結していた。総重量は、3,580gで、アスファルトだけの重量は、2,490gであった。その他の遺物は出土しなかった。時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＲ281土器埋設遺構(第42図、図版７・11)

ＬＨ56グリッドに位置する。道路のため上部は削平されていたが、地山上で正立する土器を検出して確認した。掘り方規模は、開口部径28cm、底面径13cm、深さ31cmである。5cmほど離れた南側に同時に存在したと思われる柱穴(開口部径20cm、底面径11cm、深さ33cm)がある。土器は、底径12cm、高さ27cmの上部を欠損する深鉢形土器である(281)。覆土は、土器と掘り方で３層、柱穴を２層に分層した。土器には地山塊と小さな礫が詰められていた。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。時期は、出土した土器から縄文時代後期と思われる。

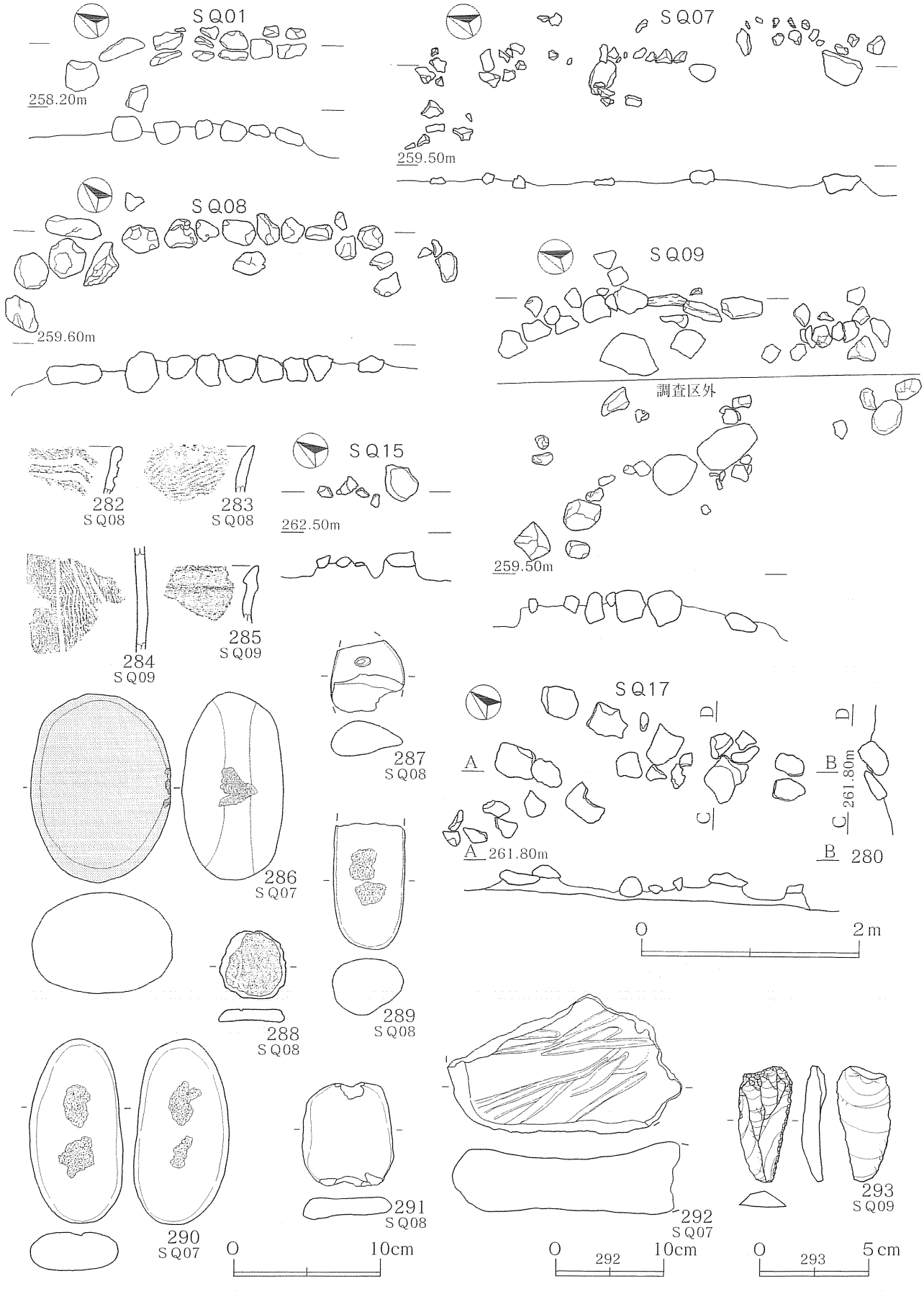
6　配石・集石遺構

ＳＱ01配石遺構(第43図、図版８)

ＬＩ47・48グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。ＳＩ30竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。長軸2.2m×短軸0.7mで南南東－北北西の直線状を呈する。人頭大ほどの礫を２列ないし３列に並べている。礫のレベルは、南南東側がやや低くなっているが、ほぼ同一である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。本配石は、ＳＩ30竪穴住居跡の付属施設の可能性もある。

ＳＱ07配石遺構(第43図)

ＬＪ57、ＭＡ57グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。ＳＩ242・261竪穴住居跡の覆土上にある。ＳＩ242竪穴住居跡は



第43図　ＳＱ01･07･08･09･15･17 配石遺構とその出土遺物

ＳＩ261 竪穴住居跡より新しく、本配石はこの２遺構より新しい。長軸 4.4m×短軸 0.9m で、南南東－北北西の直線状を呈する。礫の大きさにはばらつきがあり、拳大から人頭大の礫が用いられている。礫の上面レベルは、ほぼ一定である。本配石を構成している礫の中に磨石１点(286)、凹石１点(290)、砥石に転用された石皿１点(292)が混じっていた。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ08 配石遺構(第 43 図)

ＬＪ58、ＭＡ58 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。ＳＩ261 竪穴住居跡の覆土上にあり、同住居跡より新しい。形態は弧状ないし直線状を呈し、方向性は南東－北西とみることができる。長軸 4.2m×短軸 0.5m で、礫のほとんどが人頭大である。礫の上面レベルは、ほぼ一定である。礫の間から縄文土器(282・283)、有孔石製品１点(287)、円盤状土製品１点(288)、凹石１点(289)、石錘１点(291)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＱ09 配石遺構(第 43 図、図版 8)

ＭＡ59、ＭＢ59 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。調査区外の礫の配置も視野に入れると、二重の弧状ないし直線状で、南東－北西の方向性がうかがわれる。弧状と考えると、弧長 4.0m、幅 1.2m ほどの弧が並列している形ととらえることができる。礫の大きさにはばらつきがあり、拳大から人頭大を超えるものまである。礫の上面レベルはほぼ一定で、縦長のものは深く差し込まれていた。礫の間から縄文土器(284・285)、削器１点(293)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＱ13 配石遺構(第 44 図、図版 8)

ＭＡ63・64 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。平面形は弧状を呈しているが、環状であった可能性もある。南北方向に長く、その弧長は約 5.7m、東西の幅は約 0.7m を測る。構成している礫の大きさにはばらつきがあり、ピンポン玉大からバスケットボール大である。礫の上面レベルは、ほぼ一定である。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ15 配石遺構(第 43 図)

ＬＥ59 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。南南東－北北西の直線状を呈し、長軸 1.5m×短軸 0.5m を測る。斜面に位置するため、礫の一部は欠損しているものと思われるが、人頭大の扁平な礫１個と拳大の礫を数個並べたものとみることができる。礫の上・下面レベルは、ほぼ一定である。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ17 配石遺構(第 43 図)

ＬＥ57 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。斜面のため礫の一部は崩落しているものと思われるが、本配石の南西側斜面の落ち込みに沿うように弧状を呈していたものと考えられる。長軸方向は南東－北西で、長軸 3.3m×短軸 1.4m を測る。礫の大きさは不揃いであるが、人頭大を上回り、扁平なものが多い。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況か

ら縄文時代後期と思われる。

ＳＱ18 配石遺構(第 44 図、図版 8)

ＭＢ63・64、ＭＣ63・64 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。南東－北西の直線状を呈し、長軸 3.8m×短軸 1.2m である。人頭大の礫を主体に配石されているが、礫の大きさはやや不揃いである。礫の上面レベルは、ほぼ一定であり、縦長のものは深く差し込まれていた。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ23 集石遺構(第 44 図、図版 8)

ＭＧ58 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。敷石状を呈するが、撹乱により半数は失われていると思われ、もともとの形態は不明である。およその規模は長軸(東西)1.3m×短軸(南北)1.0m であるが、南東側の現状から推測すると長方形状に敷かれたものとも考えられる。礫の上面レベルはほぼ一定である。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、集石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ56 配石遺構(第 44 図)

ＬＪ45 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。撹乱により礫の半数は失われていると思われる。もともとの形状は不明であるが、長軸(南東－北西)1.6m×短軸(北東－南西)0.5m の直線状とみることができる。周辺からは、縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ68 配石遺構(第 44 図)

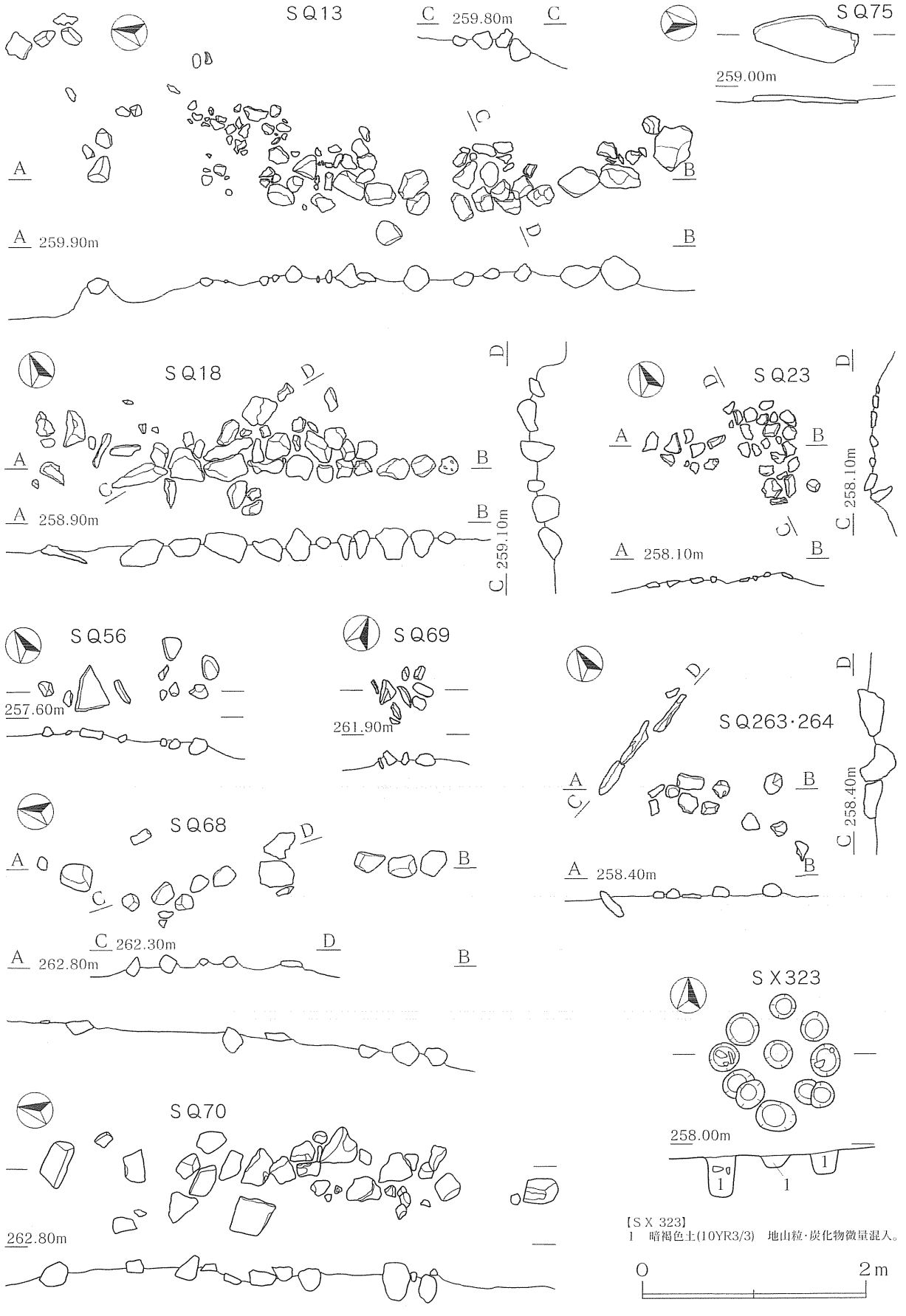
ＬＦ61・62 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で直線的な礫の並びとして確認した。確認状況と土層から、ＳＱ70 配石遺構とは同時存在であり、一連の配石遺構とも考えられる。また、別々に構築された後、つながりをもたせるように造り替えられた可能性もある。形態は、本遺構の礫の並びだけを見ると弧状を呈すると思われるが、本配石の延長上にＳＱ70 配石遺構があり、2 遺構を同時に見ると直線状の礫の並びとも考えられる。南南東－北北西の直線状とみると、長軸 3.7m×短軸 0.6m である。礫は人頭大のものが主体となっている。周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ69 集石遺構(第 44 図)

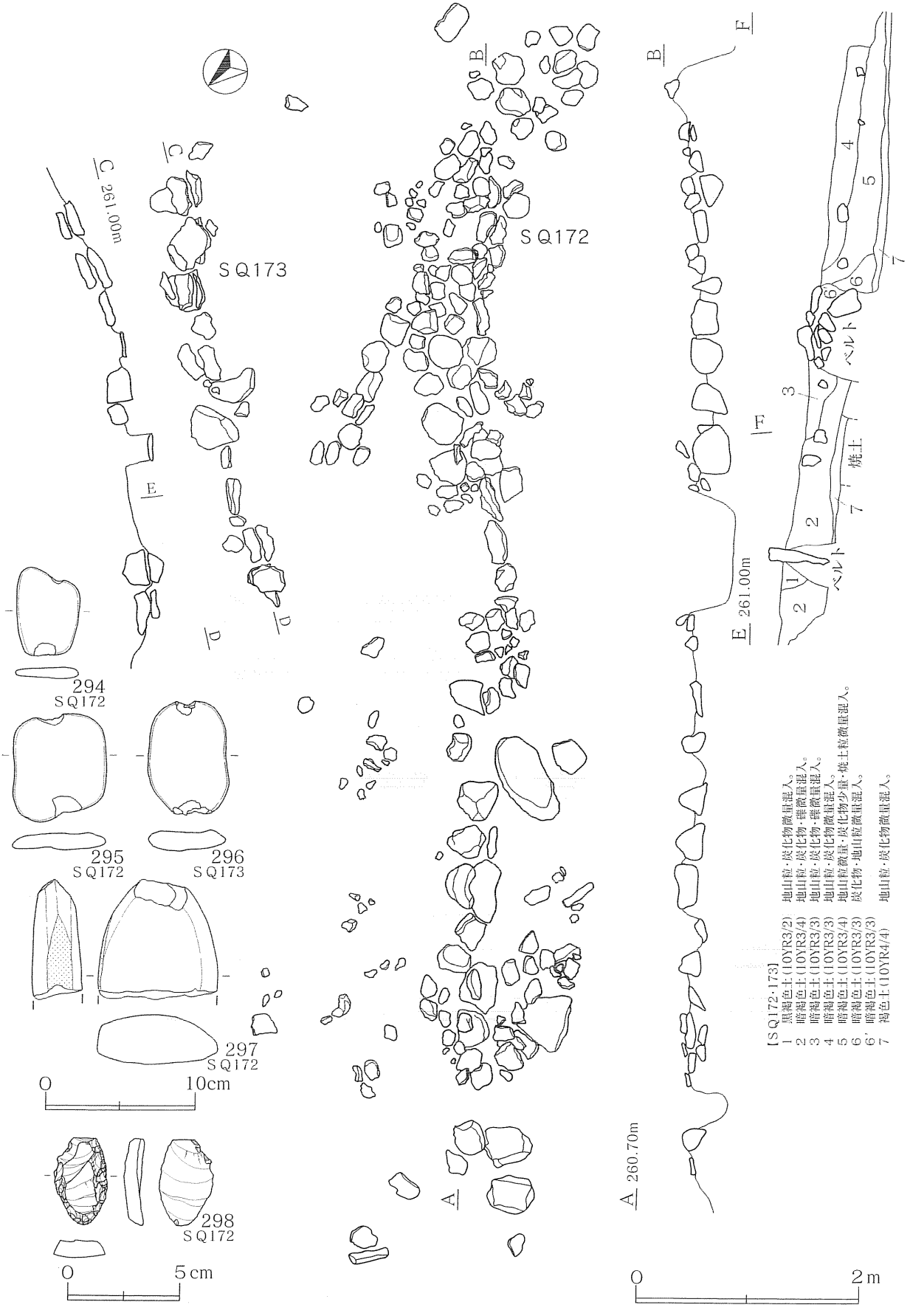
ＬＦ61、ＬＧ61 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、礫の集まりとして確認した。直径 0.6m の円形内に集められた礫の集合体とみることができる。礫は、掌大のものが主体である。土坑に伴う礫の可能性もあるが、掘り込みは確認できなかった。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ70 配石遺構(第 44 図、図版 8)

ＬＦ63・64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、直線的な礫の並びとして確認した。ＳＫＦ165 フラスコ状土坑と重複する。本配石が新しい。確認状況と土層から、隣り合うＳＱ68 配石遺構とは同時存在で、一連のものとも考えられる。また、別々に構築された後つながりをもたせるように造り替え



第44図　SQ 13・18・23・56・68・69・70・75・263・264配石遺構、SX323 性格不明遺構



第45図　ＳＱ172･173 配石遺構とその出土遺物

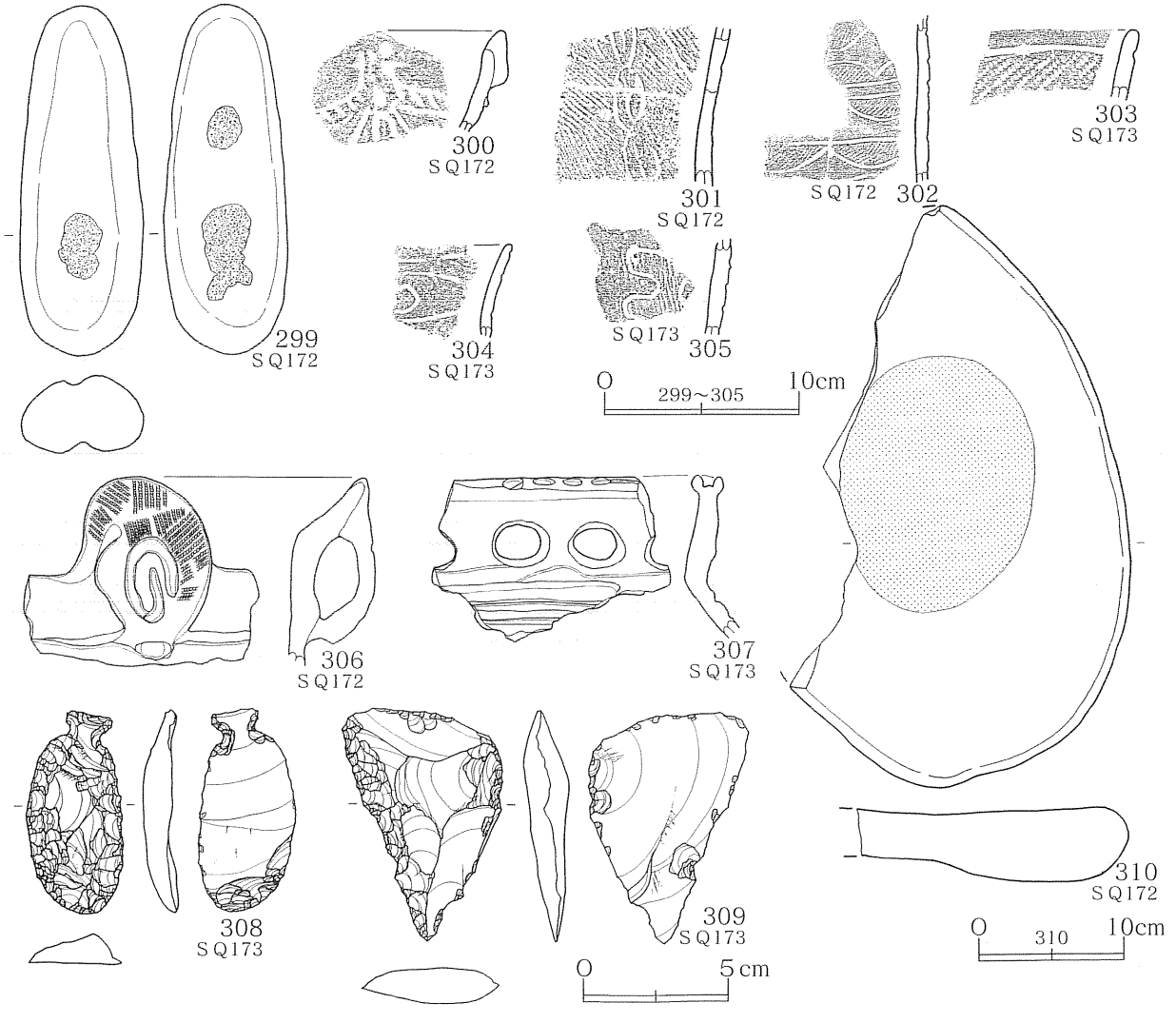
られた可能性もある。本遺構の礫の並びだけを見ると弧状を呈すると思われるが、本遺構の南側延長上にＳＱ68配石遺構があり、２遺構を同時に見ると直線状の礫の並びとも考えられた。本配石を南南東－北北西の直線状とみると、長軸4.6m×短軸0.8mである。礫の大きさは、人頭大のものが主体となっているが、不揃いである。礫の上面は、ほぼ水平であり、大きな礫ほど深く埋もれていた。遺物は、礫に混じって石皿の破片が出土した。礫とともに並べられたものと考えられるが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

ＳＱ75配石遺構（第44図）

ＬＧ49・50グリッドに位置する。Ⅲ層で扁平な礫として確認した。長軸95cm×短軸45cmで厚さが7cmのほぼ楕円形の礫が水平に据えられていた。本配石に伴うと判断される遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。平らな礫だが使用痕はなく、性格は不明である。

ＳＱ172配石遺構（第45・46図、図版8）

ＬＧ56・57、ＬＨ56・57・58、ＬＩ58・59グリッドに位置する。Ⅱ層の掘り下げ中、連続して並ぶ礫として確認した。ＳＩ308・309・310竪穴住居跡、ＳＲ193・194土器埋設遺構と重複する。ＳＩ



第46図　ＳＱ172・173 配石遺構出土遺物

308・309・310 竪穴住居跡より新しく、ＳＲ193・194 土器埋設遺構とほぼ同時である。主軸は南東－北西の直線状であり、長軸約 11m×短軸約 1.5m である。一部枝状の張り出し部分がある。南東から見ると曲がりの少ない「Ｓ」字状にも見える。礫のうち大きなものは、縦 85cm×横 50cm×厚さ 35cm に達するが、縦 60cm×横 40cm×厚さ 10cm ほどの扁平な礫が多い。これらの大きな礫と人頭大の礫によって構成されている。遺物は、縄文土器片(300～302・306)、石錘２点(294・295)、擦石１点(297)、削器１点(298)、凹石１点(299)、石皿１点(310)が出土した。構築時期は、確認面の層位と出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

ＳＱ173 配石遺構(第 45・46 図)

ＬＧ57、ＬＨ58 グリッドに位置する。Ⅱ層掘り下げ中に連続して並ぶ礫として確認した。ＳＩ308 竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。南東－北西の直線状を呈し、長軸 4.2m×短軸 0.7m である。縦 60cm×横 40cm×厚さ 10cm 程度の扁平な礫を主体に、人頭大の礫が混じる。礫はほとんどが立てた状態で据えられている。遺物は、縄文土器片(303～305・307)、石匙１点(308)、削器１点(309)、石錘１点(296)が出土した。307 は、裏面の所々に赤色顔料が付着していた。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。ＳＱ172 配石遺構とほぼ同時期に存在したと思われることから、本配石の一部を使用してＳＱ172 配石遺構を作ったと考えられる。

ＳＱ263 配石遺構(第 44 図)

ＭＥ61 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。ＳＩ337 竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。西南西－東北東の直線状を呈し、その長さは 1.2m である。縦 40cm×横 25cm×厚さ 10cm ほどの扁平な礫３個と掌大の角礫１個が、ほぼ一列に並んでいた。礫は立てた状態で据えられていた。周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。竪穴住居の壁の一部の可能性も考えられるが、性格は不明である。

ＳＱ264 配石遺構(第 44 図)

ＭＥ60・61 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。ＳＩ337 竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。弧状を呈するが、ほぼ南東－北西の方向性をもち、その弧の長さは 1.6m である。掌大の礫が並んでいたが、いくつかの礫はすでに失われているものと思われる。周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

7　性格不明遺構

ＳＸ323 性格不明遺構(第 44 図、図版 8)

ＭＦ59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の入る柱穴が円形に配列されていることから確認した。ＳＩ324 竪穴住居跡と重複するが、本遺構が新しい。規模は、中央にある柱穴を中心に半径 60cm の円形に柱穴が８カ所配されていた(重複２カ所)。覆土は、各柱穴とも１層で、同様の覆土である。Ｐ３・Ｐ９には礫が入っていた。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

第3節　遺構外出土遺物

1. 土器

出土した土器資料はすべて縄文時代のものであるが、磨滅の著しい破片が多く、全体の形状を把握できるものは少なかった。この項では、施文と胎土と器形から出土土器を5群に分けて、潟前遺跡出土土器群の特徴を記述する。器形や文様の全体については推測による部分が多く、また層位的に取り上げることのできなかった土器が多いので、施文の特徴に重点をおいて分類している。

[第1群土器](第49図320•321)

縄文時代前期中葉の土器と思われるものである。深鉢形土器で、口縁部は外反する。撚糸文を不規則に施す。褐色、一部赤褐色を呈する。胎土は粗いが、繊維の混入は認められない。焼成はやや良好である。出土土器に占める本群の割合は1%以下である。本群は、円筒下層a式に並行するかそれ以前と思われる。

[第2群土器](第47図313～315、第49図322～352)

縄文時代前期中葉以降の土器で、基本的に無文または縄文のみで文様が構成される土器である。一部の土器(330•342)の胎土には、繊維が含まれる。器面の色調は黒褐色のものと灰褐色のものが多く、黒褐色のものは概して焼成状態が不良である。器形は、外傾基調の直線的なバケツ形を呈するものが主体であるが、口縁部が外傾し頸部がくびれ、胴部が緩やかに内湾するものもある。出土土器の約15%を占める。本群は、円筒下層a～b式に並行するものと思われる。文様の特徴から以下の1～8類に細分する。

1類　無文の土器である(第49図322•323)。口縁部がやや外反する。胎土に繊維を含む。指頭による整形痕が顕著に残るもの(322)、丁寧に磨き、口唇部に刻み目を施したもの(323)がある。

2類　表裏に縄文を施す土器である(第49図324～326)。表裏で縄文原体の異なるもの(324•326)と表裏ともに同一原体のもの(325)がある。324•326は表が綾絡文、裏が撚糸文で、325は表裏ともLR縄文である。326は、口唇部にも表と同様の綾絡文を施したものと思われる。

3類　縄文または撚糸文のみを施文する土器である(第47図313•314、第49図327～332)。横位のLR縄文(329～331)が多いが、RL縄文(313•327)、撚糸文(314•328)、前段多条の縄文(332)など多種にわたる。器形はバケツ形を呈する。口縁部は垂直に近いか、緩やかに外反する。

4類　口唇部に指頭圧痕の入る土器である(第49図333•334•340•341)。器面の文様は縄文のみのもの(333•334)と綾絡文(340•341)に区別される。

5類　羽状縄文を横位に施す土器である(第47図315、第49図335•347)。口縁部は外反するもの(315•335)と垂直に近いもの(347)がある。前者は頸部がすぼみ胴部が膨らむ器形、後者は直線的なバケツ形の器形を呈すると思われる。また、前者は結束1種であり、後者は結束2種である。

6類　半截竹管による刺突を施す土器である(第49図336)。厚手の土器であるが、焼成は比較的良好である。

7類　綾絡文が施される土器である(第49図337～339•342～346)。口縁部は垂直に近いか、緩やかに外反する。口縁部または頸部に横位の綾絡文が施されるもの(337～342)、幅の狭い無文帯を持つもの(339～341)、口縁部から胴部にかけて綾絡文を施すもの(343～346)がある。綾絡文は、すべて横位

で、複数条のものが多い。口唇部に縄文を施すもの(346)や、補修孔の穿たれているもの(340)もある。

8類　木目状撚糸文が縦位に施される土器である(第49図348～351)。口縁部は垂直に近いか緩やかに外反する。器形はバケツ形を呈すると思われる。いずれも2条1組の撚糸文が施されている。

9類　網目状撚糸文が施される土器である(第49図352)。器形は7類と同様である。

[第3群土器](第47図311・312、第50図353～377、図版11)

隆帯の貼付により文様帯が形成される土器である。器形はバケツ形を呈するものが主体である。潟前遺跡出土土器群においては、最も大型で、厚手のものが多い。概して胎土は粗いが、焼成は良好である。器面の色調は第2群と同様である。出土土器の30%を占める。本群は、縄文時代前期中葉から中期初頭の土器であり、円筒下層a～d式、大木6～7a式に比定される。隆帯の特徴から以下の4類に細分する。

1類　頸部に幅広な隆帯を貼付した土器である(第50図353～358)。隆帯を貼付した後、それに指頭圧痕(353～355)あるいは刻目(356)や刺突(358)を加え、口縁部文様帯を形成したものである。口縁部の文様は、無文(356)、縄文(353・354)、原体側面圧痕文(353・355)、鋸歯状の平行沈線文(357)、隆線の貼付とそれに刺突を施すもの(358)がある。胴部の文様は、結束2種羽状縄文(355)や綾絡文(354)がある。

2類　口頸部に幅広な隆帯を貼付をした後、沈線により2条化した土器である(第47図311・312、第50図359～364)。一部2条化しない部分もあり、そこに棒状工具による円形刺突が施文されるもの(359～361)と2条化した隆帯に円形刺突文を付加したもの(364)がある。口縁部に1ないし2条の綾絡文を施したもの(361・363)、口唇部を内外に分けるかたちに溝と刺突を施したもの(361)がある。363は隆帯が一部剥落しているが、その残存部分には原体側面圧痕文が認められる。胴部の文様は、複節の斜縄文(311・312・362・364)が目立つ。312は、高さが65cmを超え、県南部出土土器中では、最大級のものである。なお311と312は同一個体と思われる。

3類　口頸部にやや幅広の隆帯を貼付した後、沈線により2条化した土器である(第50図365・367・368)。隆帯の幅以外は2類と同形態であるが、2類よりやや小型で文様も細かめである。口唇部に指頭圧痕を施すもの(365・367)がある。口縁部は、無文(365)のものとLR縄文(367・368)のものがある。胴部の文様には、LR縄文(365・367)と網目状撚糸文(368)のものがある。

4類　幅の狭い隆帯を貼付した土器である(第50図366・369～377)。やや突出した隆帯が巡るもの(370)もあるが、1～3類に比べて細めの隆帯である。隆帯には、絡状体圧痕(366・371)、刻み目(369)、原体側面圧痕文(370・372)、竹管等による刺突の入るもの(373～377)がある。口縁部の文様は、原体側面および絡状体の圧痕文であり、それが数条口唇とほぼ平行に施されるもの(369～375・377)と斜めに施されるもの(371・376)がある。口唇部には、刻み目を施すもの(369)と縄文を転がすもの(366・373・375・376)がある。胴部は、単方向の結束LR縄文(369)や横位の羽状縄文(373)、縦位の羽状縄文(375)を施すものがある。

[第4群土器](第48図316～319、第51図378～404、図版11)

頸部の上下で文様帯が区画される土器である。器形は、口縁部が外反するのが一般的な形状であるが、外傾しながら外反するものと内傾しながら外反するものがある。胴部は内湾し、丸みを持つものが多く、胴部上半部が最も膨らむ。頸部付近で文様帯が区画され、口縁部には文様が充填される。頸部には、沈線、隆帯、刺突を巡らすなどのバリエーションがある。概して赤褐色か赤褐色に近い褐色を呈し、焼成は良好である。最も肥厚する部分は、口縁部ないし口唇部の場合が多いが、平均的に厚

みのあるやや大型の深鉢形土器である。出土土器の約15%を占める。本群の土器は、縄文時代前期末から中期初頭の土器で、大木6～7a式、または円筒下層ｄ式に比定される。施文方法や文様のモチーフから以下の６類に細分する。

1類　頸部または口縁部に菱形状や鋸歯状のモチーフを持つ、複数条の平行沈線文を主体とする土器である(378～386)。頸部またはその近辺に隆帯や沈線を巡らし、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。隆帯は頸部に巡るもの(378•383)と口唇部(385)に巡るものがあるが、頸部に巡るものは区画の意味をもち、口唇部のものは装飾文様の一部を構成していると思われる。巡らした隆帯には、原体側面圧痕を施すもの(378)、刺突を加えたもの(383)、刻み目を入れたもの(385)がある。平縁口縁のものと波状口縁のものがある。菱形状の文様の中心に丸い棒状の物による刺突の入るもの(378～380)、波状口縁の波頂部直下に短隆線を貼り付けるもの(383)がある。胴部の文様は、羽状縄文(378•383)や木目状撚糸文(386)を縦位に施すものがある。

2類　口縁部に綾杉状またはそれに類似した沈線文を施す土器である(319•387～391)。沈線文は直線を基調としている。1類に比べ幾何学的で、単純化されている。文様帯の区画は、他類と同様に頸部またはその近辺においてなされるが、刺突や刻み目が主体と思われる。319は口縁部を欠くが、391に類似した文様構成をとると思われる。胴部の文様も1類と同様である。

3類　口縁部に同心円状の弧状沈線を連ねたモチーフを持つ、沈線文を主体とする土器である(316～318、392～395)。施文方法としては2類に近似しているが、曲線の描画されるところに相違を見いだせる。文様帯の区画は、指頭圧痕、短い沈線や刺突の並列(394•395)によるものがある。また、飾り突起の付くもの(316)や、口縁部に2本の隆線が平行に貼付られているもの(318)もある。なお、316と317は同一個体と思われる。器形は、1•2類に比べて、胴部上半の膨らみが大きくなると思われる。

4類　口縁部に条痕文を施す土器である(396～399)。縄文原体による側面圧痕文(396•398•399)や半截竹管による押し引き条痕を施すもの(397)がある。2•3類と同器形と思われるが、口縁部が内傾しながら外反するのが特徴である。

5類　櫛状工具による平行沈線文を主体にする土器である(403•404)。沈線は1～4類に比較して細身で、垂直な平行沈線の地文の上に2条1組の平行沈線により波状文を描く。一部沈線に沿って三角形状または逆三角形状の刻みが並び、鋸歯状の文様を作出している。北陸系の新保•新崎様式に近似した文様形態である。

6類　口縁部に幅広の隆線と太い沈線による文様を施す土器である(400•401)。幅広の隆線が貼付されるもの(400)と太い平行沈線を施文することにより沈線と隆線が形成されるもの(401)がある。前者は口唇部に隆帯が巡り、さらにその上に2条の刻み目を入れた粘土紐の貼付がある。後者には隆線の貼付はないが、口唇部が最も肥厚し、前者と同様の装飾効果が見られる。いずれも曲線を主体とする大胆な文様構成の土器である。

7類　口縁部にやや細めの隆帯を2条巡らす土器である(402)。隆帯には、細かい刻み目が施され、口唇部にも同様の刻みが見える。隆帯以外の部分には、絡状体圧痕文が施されている。

[第5群土器](第52図405～410、第53図411～第55図490、図版12)

縄文時代後期前葉の土器と思われるものを一括した。本群は、十腰内Ⅰ式または、それ以前の土器と、十腰内Ⅱ式並行の土器と思われる。なお、十腰内Ⅰ式以前と思われる土器は、関東の堀之内1式

に類似し、十腰内Ⅱ式並行と思われる土器は、宝ケ峰式および加曽利Ｂ式に類似する。器形は多様であり、深鉢形土器を主体に、浅鉢、台付鉢、壷、切断蓋付土器、注口土器等が混じるが、器形の不明なものも少なくない。概して第1～4群に比べて薄手で焼成も良好なものが多い。しかし、器形等によって製作の仕方に違いがあり、粗製、半精製、精製の３つの製作工程が考えられる。すなわち、深鉢形土器は、粗製、半精製のもの、壷・浅鉢等は半精製・精製のものが多い。器面は、赤褐色、褐色、黒褐色と多様で、胎土も一様でない。本群は潟前遺跡出土土器群の主体をなし、調査区全域から出土している。出土土器の約40%を占めるが、1997年の調査を勘案すれば70%に達するものと思われる。全体の判明する個体が少ないが、主に施文方法や文様の特徴から以下の16類に細分する。

1類　磨消縄文で文様を構成する土器である(第52図405～407、第53図411～429)。直線的な平行沈線を主体とするものと曲線的な平行沈線を主体とするものがある。全体の文様は不明な土器が多いが、長楕円形を呈する平行沈線をモチーフにするものや三角形状の平行沈線をモチーフにするものがある。基本的には、平坦な器面に磨消縄文が施されるが、刺突を伴うもの(420～425)、波状口縁の波頂部に刻み目を施したり(418)、刺突を加えたりするもの(425)、口縁部が肥厚するもの(427～429)がある。

2類　縄文と沈線文で文様が構成され、磨消を行わない土器である(410・430)。モチーフは第1類と同じであるが、磨消を省いたかたちになるものである。

3類　口頸部に細身の隆帯が巡る土器である(431・432)。モチーフは第1類と同じで、竹管による刺突が入る。

4類　沈線と隆線または沈線隆線で文様を構成する土器である(433～435)。いずれも地文を持たない。隆線で区画した内部に沈線文を施すもの(434・435)、隆線に刻み目の入るもの(435)がある。

5類　沈線文が主体となる土器である(436～446)。沈線のみの土器と地文を持つ土器とがあるが、2本以上の沈線による平行沈線文が主体をなす。また、モチーフは円を主体とする曲線となっている。4類同様に隆線の貼り付けられるもの(436～438・443)や、ボタン状の貼付のあるもの(442・443)もある。なお、439～441は壷で、439は切断蓋付土器である。

6類　基本的に縄文のみを施す土器である(447～453)。LR縄文が主体であるが、RL縄文(450・452)のものも少量混じる。網目状撚糸文を施文するもの(451)もある。

7類　口縁部に無文帯を持つ土器である(409・452～461)。口縁部にRL原体(454)、LR原体(455)の側面圧痕文を巡らすもの、沈線を巡らすもの(456～460)、また細い隆帯を貼付し、その上に半截竹管による左方向からの刺突を巡らすもの(461)がある。胴部の文様は、太めの沈線間に細い平行沈線を充填し磨消縄文風の文様を形成したもの(408・458・459)と磨消縄文を主体とするもの(460・461)がある。409は、屈曲外傾する口縁部を持ち、口縁上部にやや広い文様帯が設けられている。

8類　折り返し風口縁を持つ土器である(462・463)。折り返し様の部分には、縄文の施されるもの(462・463)と無文のもの(260)がある。

9類　口縁部に指頭圧痕による凹み文様が施される土器である(464～467)。口唇部の表裏にそれを施し、口唇が波状を呈するもの(464・467)と大きめの凹みを表面に施すもの(465・466)に2分することができる。

10類　突起や把手の付く土器である(468・469・471)。平行沈線文が施されるもの(469)と磨消縄文で文様が表出されるもの(468)と磨消を行わないもの(471)がある。468・471は丁寧に研磨され、黒褐

色で光沢のある精製土器である。

11類　無文の浅鉢形土器である(470)。底部はやや肥厚するが、口縁部は薄めである。10類の468、471同様、器内外面とも丹念に磨かれている。黒褐色で、光沢がある。

12類　胴部上半部に平行線的な文様帯を持つ土器である(406・472～475)。丹念に磨かれている。406の器外面は褐色である。それ以外は、器内外面とも光沢のある黒褐色の精製土器である。

13類　器外面全体を取り巻く曲線基調の沈線と磨消縄文により表出される文様を持つ土器である(405)。これは、口縁部の一部が大きく外反する片口土器である。

14類　器内面に格子状または縦に走る直線状の沈線を施す土器である(410・476)。器外面は、無文のもの(476)と縄文地文で口縁部に細い沈線による長楕円形の曲線文を施すもの(410)がある。いずれも器厚が際だって厚いが、前者は粗製、後者は半精製土器である。

15類　太めの平行沈線文が文様の主体となる土器である(477・478)。波状口縁の波頂部には直線的な平行沈線が垂下し、口唇直下と頸部付近には2ないし3条1組の平行沈線が巡る。

16類　連鎖状の沈線が垂下する土器である(479～490)。太めの沈線が文様の主体となるのは、15類と同様であるが、モチーフが異なる。連鎖状の沈線を大別すれば、綾絡文状のもの(479・480・484・485)と涙形や楕円の連なり状のもの(483・487～490)に分けられる。地文は、無文と思われるもの(484・488)や櫛歯状工具による沈線文(489)のものもあるが、縄文のものが一般的である。なお、縄文の入るものは磨消を伴う。

2. 土製品

土偶・ミニチュア土器・鐸形土製品・垂飾品・腕輪形土製品・円盤状土製品・三角形土製品が出土した。施文方法や文様の特徴からいずれも縄文時代後期前葉のものと考えられる。

土偶(第55図491・495・498、図版12)

頭部1点、胴部1点、脚部2点の出土である。楕円形の頭部(491)は、縦81㎜×横64㎜×厚さ28㎜を測る。隆線により眉と鼻の稜線部分を表し、刺突により目、鼻、口を表す。複数条の沈線により入れ墨状の文様が施されている。頭部は、首を前に突き出す形に付けられていたと考えられる。胴部(495)は、縦78㎜×横43㎜×厚さ22㎜、脚部(498)は、幅48㎜×高さ38㎜を測る。ともに頭部と別個体と思われるが、いずれも竹管状の工具による刺突が列をなしたり、周囲を取り巻いたりしている。胴部は、中央付近が膨らみを持っていて、妊婦を表しているものと思われる。

ミニチュア土器(第55図492、図版12)

小型の無文の土器が2点出土した。492は、口径41㎜×高さ44㎜を測る。器面は丁寧になでつけられているが、座りが悪く、正立しない。

鐸形土製品(第55図493、図版12)

無文のもの2点(うち1点493)と、細い沈線により裏表に筋状の文様を施すもの1点(494)が出土した。なお、494にも紐(ちゅう)が付いていたものと思われる。493は最大径35㎜×高さ42㎜、494は最大径21㎜×高さ35㎜を測る。

垂飾品(第55図496、図版12)

長方形の四隅が突出する形状で、最大縦23㎜×横31㎜×厚さ9㎜を測る。鋭利な工具により幾何

学的な文様が彫られている。裏面は、無文である。長軸方向にごく狭い穿孔がある。1点出土した。

腕輪形土製品(第55図497、図版12)

全体に厚みがある。沈線文を施すもの1点と無文のもの1点、いずれも破片が出土した。沈線を施すもの(497)は、現状で縦74㎜×横61㎜×厚さ16㎜を測る。やや細めの3本の平行沈線により、三角形を基調にした幾何学的な文様が施されている。その他に、遺構内(ＳＫ254土坑)からも1点(202)出土した。

円盤状土製品(第55図499、図版12)

土器片を打ち欠いて円盤状にしたものである。縄文が施されているものとそれに沈線の見えるものがある。径35～50㎜のものが3点出土した。うち1点(499;直径49㎜×厚さ9㎜)を掲載した。

三角形土製品(第55図500、図版12)

平面形は正三角形の板状と思われる。現状で縦35㎜×横64㎜×厚さ7㎜を測る。鋭利な工具によって表裏に文様が彫られている。1面は平行沈線状、もう1面は鋸歯状の文様が施されている。周囲は丁寧になでつけられている。

3. 石器

石鏃(第56図501～505)

基本的に両面加工で中軸線で左右対称となる。遺構外から30点出土しており、基部の形状により4類に分けた。類中でさらに細分できるものは細分した。( )は器種内に占める割合である(以下同様)。

A＝基部が平らなものである。

A-a;平面形が二等辺三角形を呈し、基部の両端が角張るものである。9点(30%)出土した。(501)

A-b;両側縁が並行するか基部に向かってすぼまるものである。7点(23%)出土した。(502)

B＝基部がくぼむもの、いわゆる凹基式である。5点(17%)出土した。(503)

C＝基部が凸基式のものである。広葉樹の葉に似る。8点(27%)出土した。(504)

D＝茎のあるものである。1点(3%)出土した。(505)

石槍(第56図506～508)

槍先形の石器である。基本的には扁平縦長で一方の先端に鋭い尖頭部を持つものである。

A＝断面が凸レンズ状で、石器の長さが10㎝以上のものである。2点出土した。(506)

B＝断面が薄い凸レンズ状で、石器の長さが10㎝以下のものである。4点出土した。(507)

C＝断面が凸レンズ状で、石器の長さに対して幅が狭い細身の石器で、石器の長さが10㎝以下のものである。2点出土した。(508)

石錐(第56図509)

尖端部の断面が菱形や凸レンズ状になる石器である。4点出土した。(509)

有撮石器(第56図510)

両側縁から抉りを入れてつまみ部を作り出し、両面調整かそれに近い調整を行い、石器の中軸線で左右対称となる石器である。4点出土した。(510)

石匙(第56図511～第57図524)

両側縁から抉りを入れて、つまみ部を作り出し、片面からの加撃によって刃部が作られた石器であ

る。103点出土した。

A＝縦型石匙　つまみ部の中軸線にほぼ平行する刃部を持つものである。刃部は直線的であったり曲線的であったりする。

A-a-1;つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な2つの刃部を持つもので、先端部を加工していないものである。11点(10%)出土した。(511)

A-a-2;つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な2つの刃部を持つもので、先端部を加工しているものである。13点(12%)出土した。(512)

A-a-3;つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な刃部と、曲線的な側縁を持つものである。曲線的側縁は加工しているものとしていないものがある。9点(9%)出土した。(513)

A-a-4;つまみ部の中軸線に対して、直線的な2側縁が少し末広がりに開くものである。10点(10%)出土した。(514)

A-b-1;つまみ部の中軸線に対して左右対称な側縁が外側に膨らみ円に近い形をなすものである。10点(10%)出土した。(515)

A-b-2;つまみ部の中軸線に対して側縁が外側に膨らむが、左右対称とならないものである。15点(14%)出土した。(516)

A-c-1;直線的または曲線的な側縁が先端部で交わって尖り、つまみ部の中軸線に対して左右対称となるものである。7点(7%)出土した。(517)

A-c-2;直線的または曲線的な側縁が先端部で交わって尖り、つまみ部の中軸線に対して左右対称とならないものである。8点(8%)出土した。(518)

A-d　;側辺の中に抉りのあるものである。2点(2%)出土した。(519)

B＝斜型石匙　2～3の側辺の中で最も長い側辺の中心と、つまみ部の中軸線が約45°で交わる石匙である。5点(5%)出土した。(520)

C＝横型石匙　最も長い側辺と、つまみ部の中軸線とがほぼ直角に交わる石匙である。

C-a-1;2側辺と最も長い側辺の交わる部分が弧状になるもの。4点(4%)出土した。(521)

C-a-2;2側辺と最も長い側辺の交わる部分が尖るものである。2点(2%)出土した。(522)

C-a-3;2側辺と最も長い側辺の交わる部分がやや尖るものである。4点(4%)出土した。(523)

C-b　;つまみ部の部分が石器の中軸線からずれているものである。3点(3%)出土した。(524)

箆状石器(第57図525～527)

大小の厚手の剥片に粗い二次加工を施して、全体の形状がいわゆる箆状を呈するように作り出された石器である。二次加工は両面加工と片面加工がありほぼ同数である。形状によって3つに分けられる。46点出土した。

A＝基端に明瞭な辺を持ち、刃部が基部より幅広のいわゆる撥形を呈するものである。24点(52%)出土した。(525)

B＝基端が尖り、全体の平面形が二等辺三角形を呈するものである。20点(47%)出土した。(526)

C＝基端と刃部の幅がほぼ等しい短冊形のものである。2点(1%)出土した。(527)

削器(第57図528～532)

剥片の比較的長い1辺あるいは2辺に、片面からの二次加工によって長い刃部を作り出した石器で

ある。刃部以外の二次加工はない。126 点出土した。

A＝様々な形状、厚さの不定形剥片の１辺に、直線的あるいは弧状に刃部を作り出したものである。58 点(46%)出土した。(528)

B＝様々な形状、厚さの不定形剥片の２辺に、直線的あるいは弧状に刃部を作り出したものである。刃部は急傾斜のものもある。28 点(22%)出土した。(529)

C＝剥片が二等辺三角形に近い形をなし、底辺は打面側となるものが多い。底面を除く他の２辺に連続した刃部が作られる。２つの刃部の交わる角度が鋭角のものが多い。18 点(14%)出土した。(530)

D＝剥片が４辺の辺を持ち、２辺に連続した刃部が作られる。３辺に連続した刃部を作るものもある。16 点(13%)出土した。(531)

E＝粗い二次加工を両面に施し、一部分に細かい加工の見えるものである。６点(5%)出土した。(532)

木葉形石器(第 57 図 533)

先端部が尖りそこから発する縁辺に二次加工を施す削器に似ているが、本石器はほぼ全部の縁辺に二次加工を施す。基本的に広葉樹の葉に似る(註１)。３点出土した。(533)

掻器(第 57 図 534・535)

比較的厚手の大小の剥片の一部に、裏面からの二次加工によって急斜度をなす分厚い刃部を作出した石器である。刃部は弧を描くのが一般的である。縦長の剥片を用いたものと、不定形の剥片を用いたものとがある。20 点出土した。

A＝縦長剥片の一端に刃部を作出した、いわゆるエンド・スクレーパーである。大部分は打面側に当たる基部を除き両側辺にも二次調整が加えられている。刃部には丁寧な二次調整が行われている。13 点(65%)出土した。(534)

B＝不定形の分厚い剥片の一部に、弧状の刃部を作り出している石器である。７点(35%)出土した。(535)

その他の剥片石器(第 57 図 536)

円形または楕円形に近い剥片の両面に粗い二次加工を施したものである。未製品の可能性がある。(536)

磨製石斧(第 58 図 537・538・543・544・547・548)

47 点出土した。うち完全なものは２点だけである。基部が残ったもの 14 点、刃部が残ったもの 23 点、刃縁が欠けたもの７点、半分に割れたもの１点である。なお石斧の部分名称は佐原真(1977)(註２)による。

A-a;基部と刃部がほぼ同じ幅で、刃部は円刃で両凸刃である。23 点(50%)出土した。(537)

A-b;基部と刃部がほぼ同じ幅で、刃部は直刃で両凸刃である。１点(2%)出土した。(538)

B　;基部より刃部の幅が広いもので、刃部は円刃で両凸刃である。８点(17%)出土した。(543)

C-a;明瞭な基端面を持つものである。５点(11%)出土した。(544)

C-b;明瞭な基端面を持たず、尖り気味のものである。９点(20%)出土した。(547)

D　;C-a と同形態であるが、極めて小型のものである。(548)

半円状扁平打製石器(第 58 図 539・540・541・542・545・546・549・550・552・553)

半円状を呈する扁平な礫を素材にしている。多くの場合長側縁(下側縁)の直線的な辺を打ち欠いて刃部を作り出している。刃部は擦られている場合がある。43点出土した。

Ⅰ類＝素材の直線的な辺を打ち欠いて刃部を作り出しただけのものである。3点(7%)出土した。(539)

Ⅱ類＝Ⅰ類の刃部以外の辺に抉りを持つものである。

1;抉りが両端にあるものである。

a;刃部に打ち欠きまたは擦りのあるもの。4点(9%)出土した。(540)

b;素材のままのものである。5点(11%)出土した。(541)

2;抉りが刃部の対辺にのみあるものである。2点(5%)出土した。(542)

3;抉りが刃部の対辺とどちらか一方の端にあるものである。1点(2%)出土した。これには中央に穴が開けられている。(545)

Ⅲ類＝Ⅰ類の側縁にあたるどちらか一方を打ち欠いているものである。2点(5%)出土した。(546・549)549は打ち欠き以外の辺および表裏、すべて擦られている。

Ⅳ類＝Ⅰ類の刃部以外の辺のほぼ全部に打ち欠きを行っているもの。

1;刃部に擦りのないもの。17点(40%)出土した。(550)

2;刃部に擦りのあるもの。4点(9%)出土した。(552)

Ⅴ類＝一部欠けていて分類できないもの

1;中央に穴のあいているもの。2点(5%)出土した。(553)

2;1以外のもの。3点(7%)出土した。

石錘(第58図551・554～559)

漁網錘あるいは編物の錘として用いられたと思われるものである。出土数243点である。

Ⅰ類＝円か楕円形に近い丸みのある礫の縁辺に刻み目を入れたものである。

A;刻み目が4ヶ所あるもの。39点(16%)出土した。(551)

B;刻み目が2ヶ所あるもの。1点(0.4%)出土した。(554)

Ⅱ類＝抉りが2ヶ所にあるもの。

A;素材となる礫が楕円形に近く長軸の両端に抉りのあるもの。94点(39%)出土した。(558)

B;素材となる礫が楕円形に近く短軸の両端に抉りのあるもの。16点(7%)出土した。(555)

C;抉りのある軸とない軸の幅がほぼ同じものである。82点(34%)出土した。(556)

D;抉りが対角にあるもの。5点(2%)出土した。(557)

Ⅲ類＝抉りが4ヶ所にあるものである。素材となる礫は円形に近い。6点(2%)出土した。(559)

石皿(第59図560・561)

遺構外から9点出土したが、ほとんど欠損していて形状のわかるものはない。自然石の少し凹んだ面をそのまま利用したもの、縁が付いているもの、脚の付いているものなどがある。

砥石(第59図566)

両面が非常になめらかに磨かれたもの、両面を使用したために中央が薄くなりついには穴があいたと思われるもの、中程が磨り減って「U」字状になったものが出土した。

凹石(第59図562～565)

素材となる礫の面に主に敲打による凹みを有するものである。形状によって円形と楕円形に分け、他に凹みが片面にあるか、両面にあるかによっても分けた。32点の出土のうち9点は半分に割れていたがすべて分類可能であった。

Ⅰ類＝円形のものである。

A;凹みが片面にあるもの。5点(16%)出土した。(562)

B;凹みが両面にあるもの。6点(19%)出土した。(563)

Ⅱ類＝楕円形のものである。

A;凹みが片面のもの。3点(9%)出土した。(564)

B;凹みが両面のもの。18点(56%)出土した。(565)

4. 石製品

石刀・石棒(第59図567～570)

石刀は7点、石棒は3点出土した。いずれも破損したものである。うち石刀3点(567～569)、石棒1点(570)を掲載した。なお、568と569は同一個体と思われる。

抉状耳飾り(第59図576～579)

4点出土したが、完形品は1点だけである。蛇紋岩を材質とし丁寧に研磨されている。

有孔石製品(第59図573～575)

3点出土した。2点(574・575)は、円盤状の礫の表面を研磨し、中央付近に孔を穿つものでる。垂飾品と思われる。他の1点(573)はやや扁平な礫の端部に孔を穿ったものである。

短冊形有孔石製品(第59図571)

短冊形に研磨し、一端に穿孔するものである。全体の形はわからない。1点出土した。

石皿状石製品(第59図572)

丁寧に整形された石皿状を呈する。全体の形はわからない。1点出土した。

円盤状石製品(第59図580～582)

3点出土した。2点(581・582)は、泥岩質の礫の全面を研磨し整った円盤状に仕上げたものである。他の1点(580)は、泥岩質の薄い板状の礫の周囲を打ち欠き円盤状にしたものである。これには特別な仕上げはされていない。

註

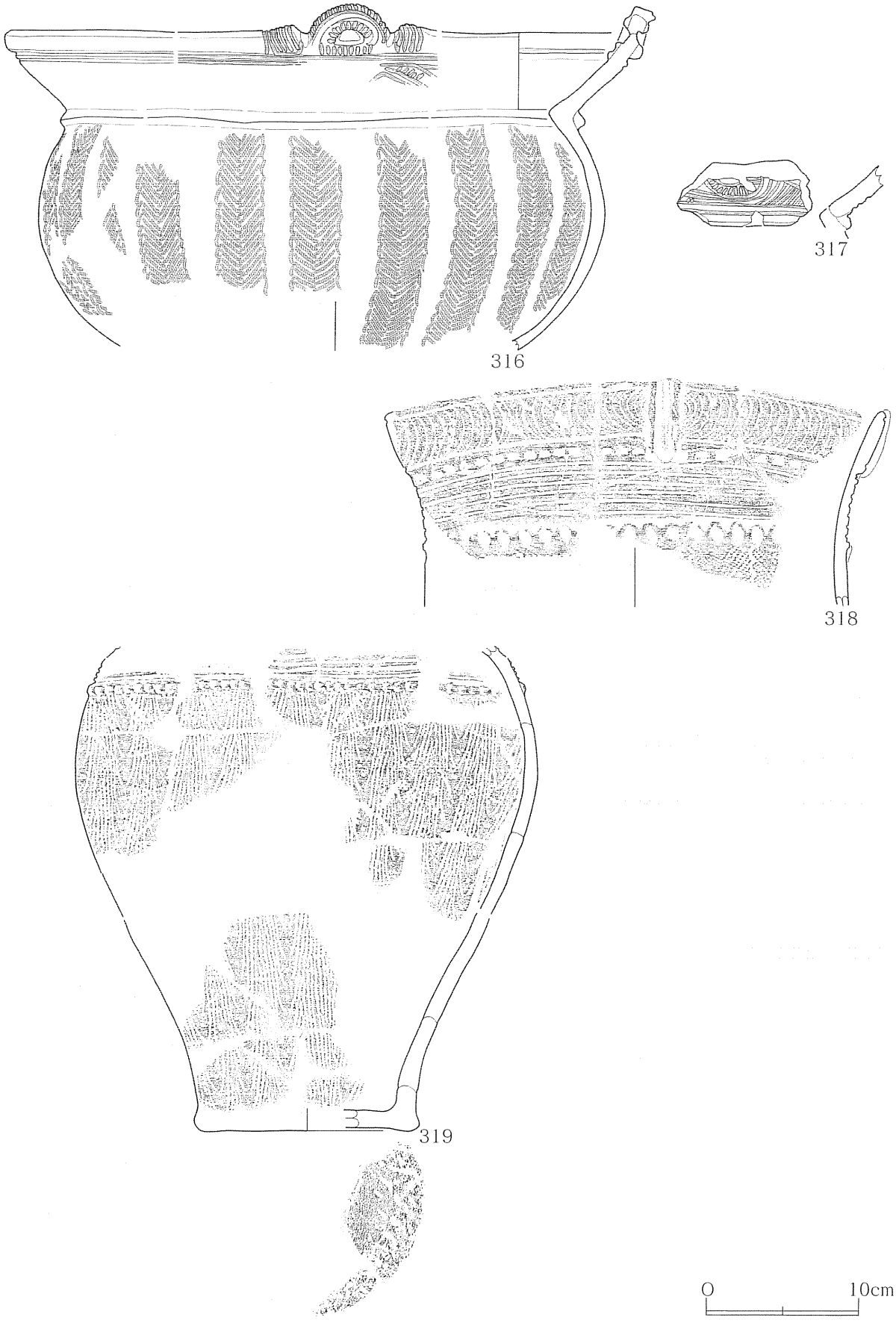
註1. 秋田県教育委員会 『公害防除特別土地改良八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査－八木遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第181集　1989(平成元年)

註2. 佐原真 「石斧論」 『考古論集』 1977(昭和52年)

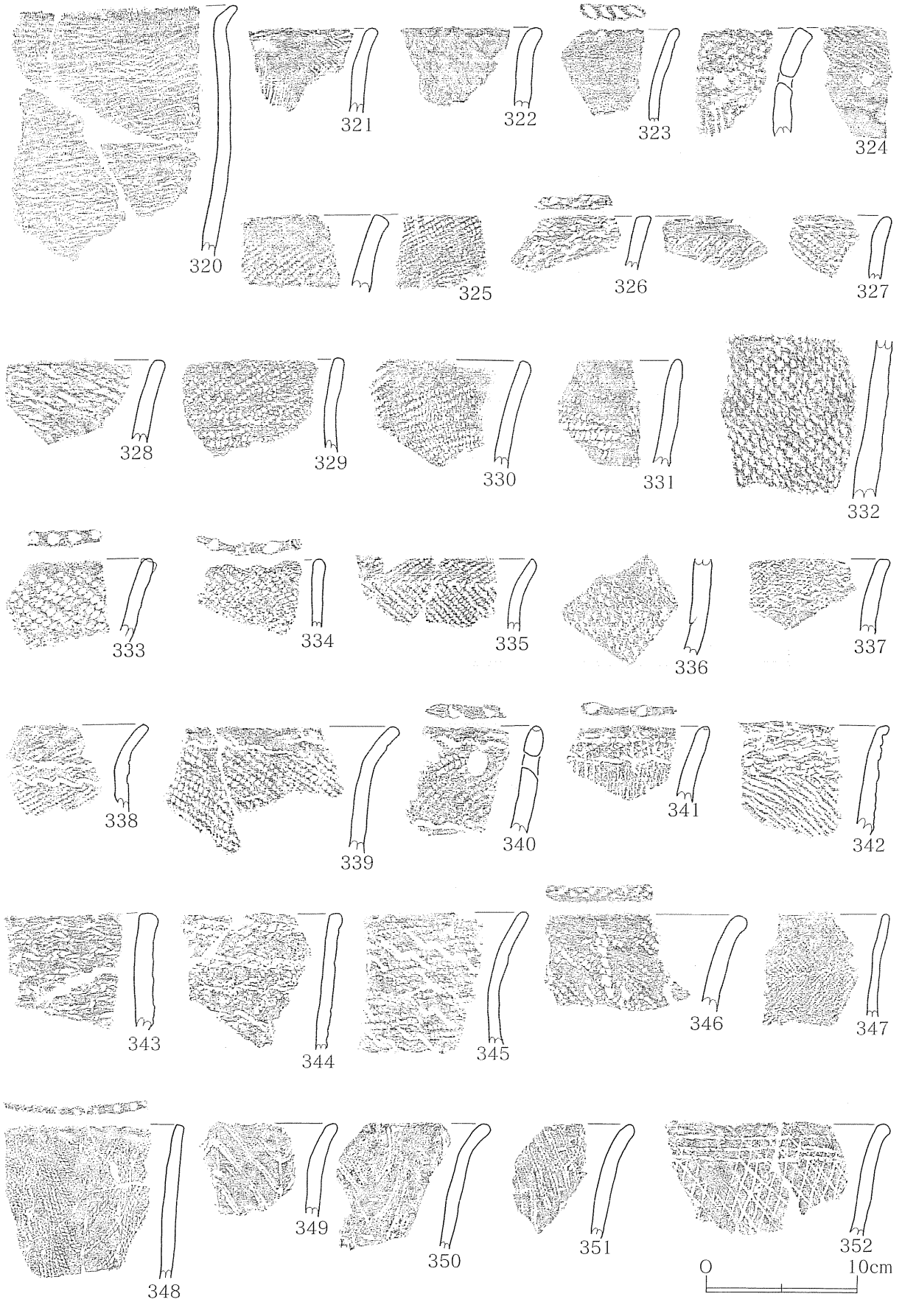
参考文献

1. 村越潔 『増補円筒土器文化』 雄山閣　1984(昭和59年)
2. 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63年)
3. 秋田県教育委員会 『潟前遺跡(第1次)－県営オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第290集　1999(平成11年)
4. 今井冨士雄・磯崎正彦 『十腰内』 青森県弘前市十腰内縄文式遺跡調査予報「岩木山」 1969(昭和44年)
5. 陸前高田市教育委員会 『門前貝塚－県道広田半島線の改修に伴う緊急発掘－』 陸前高田市文化財調査報告　第16集　1992(平成4年)

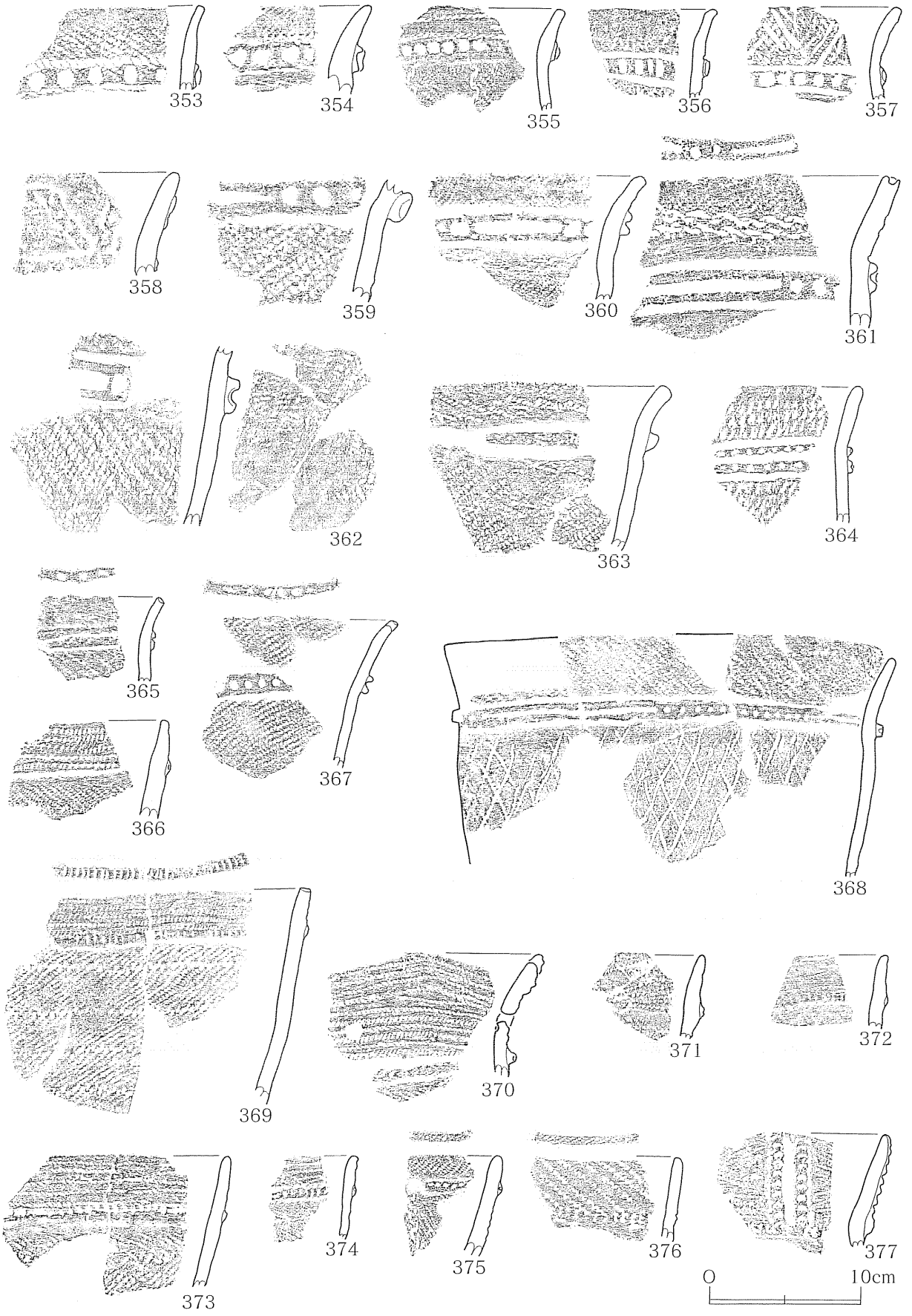
第47図　遺構外出土土器（１）



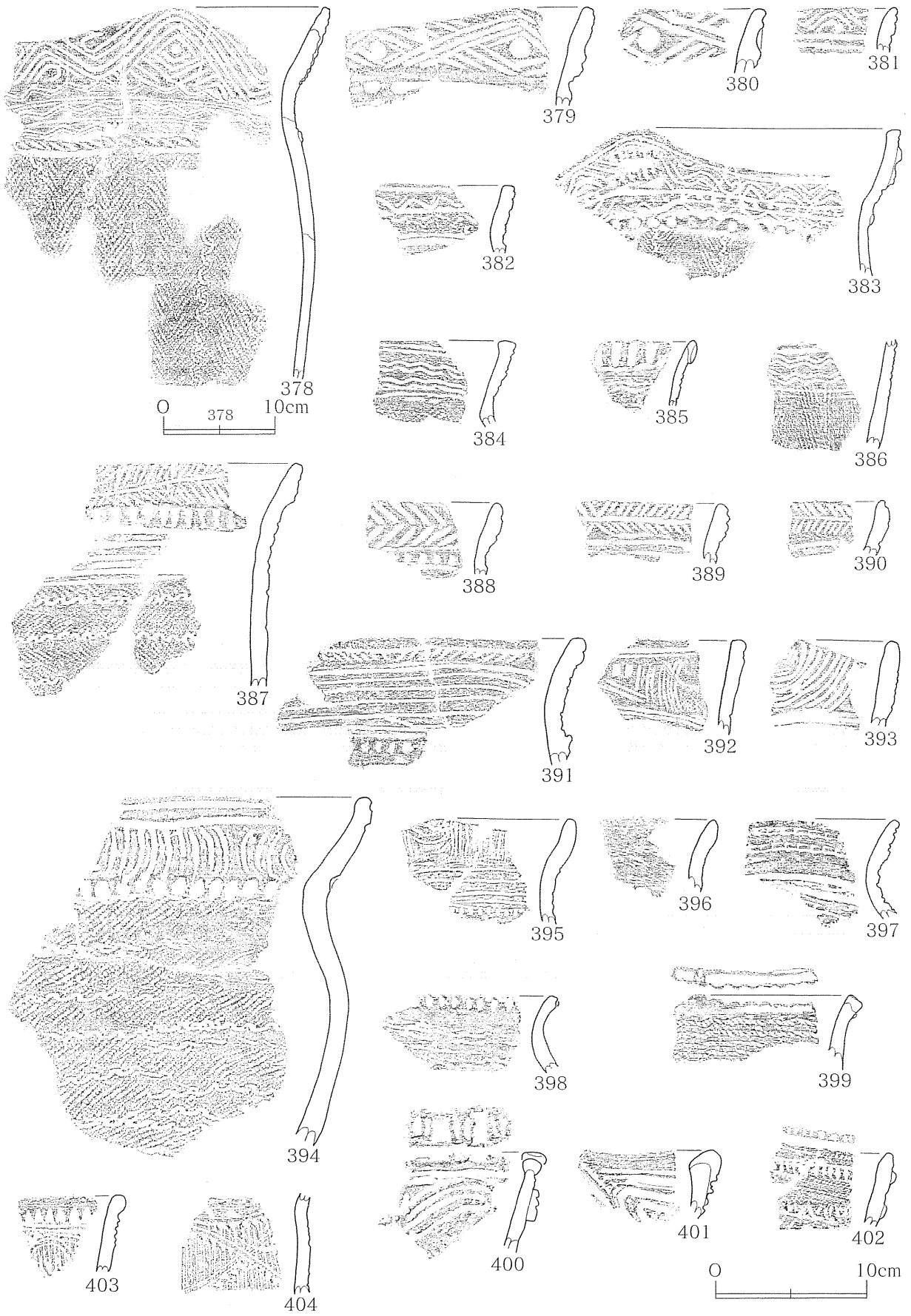
第48図　遺構外出土土器（２）



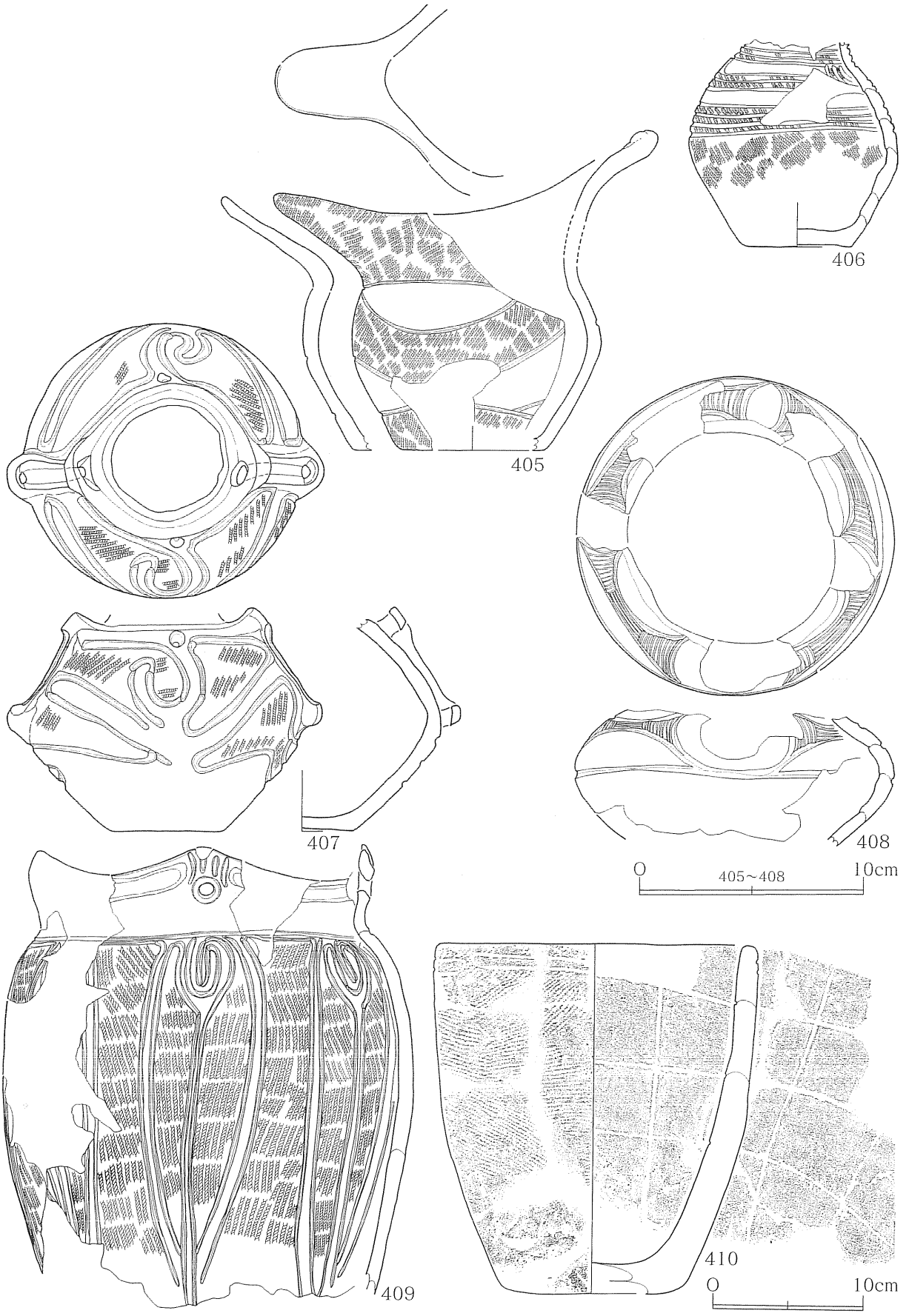
第49図　遺構外出土土器（３）



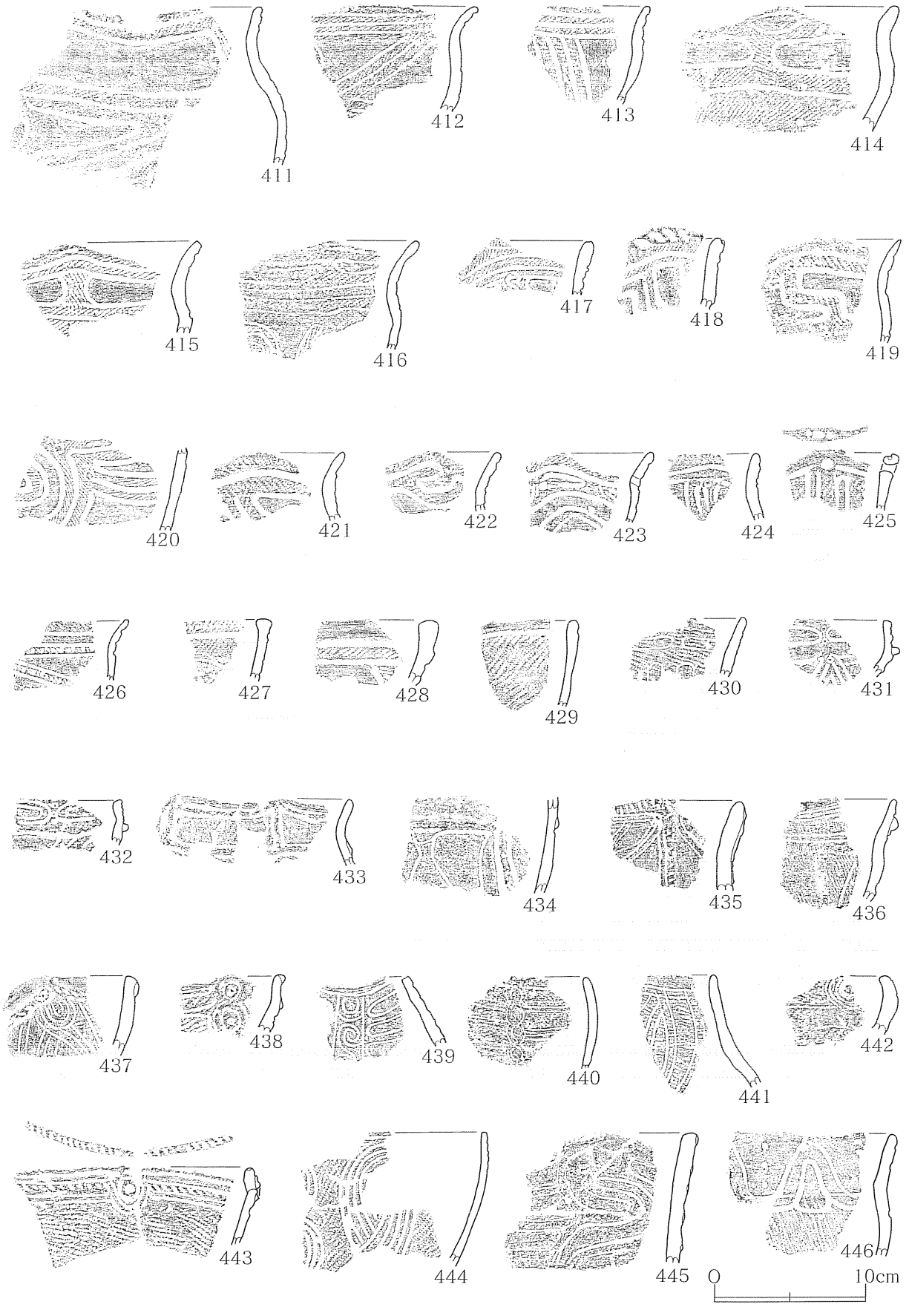
第50図　遺構外出土土器（4）



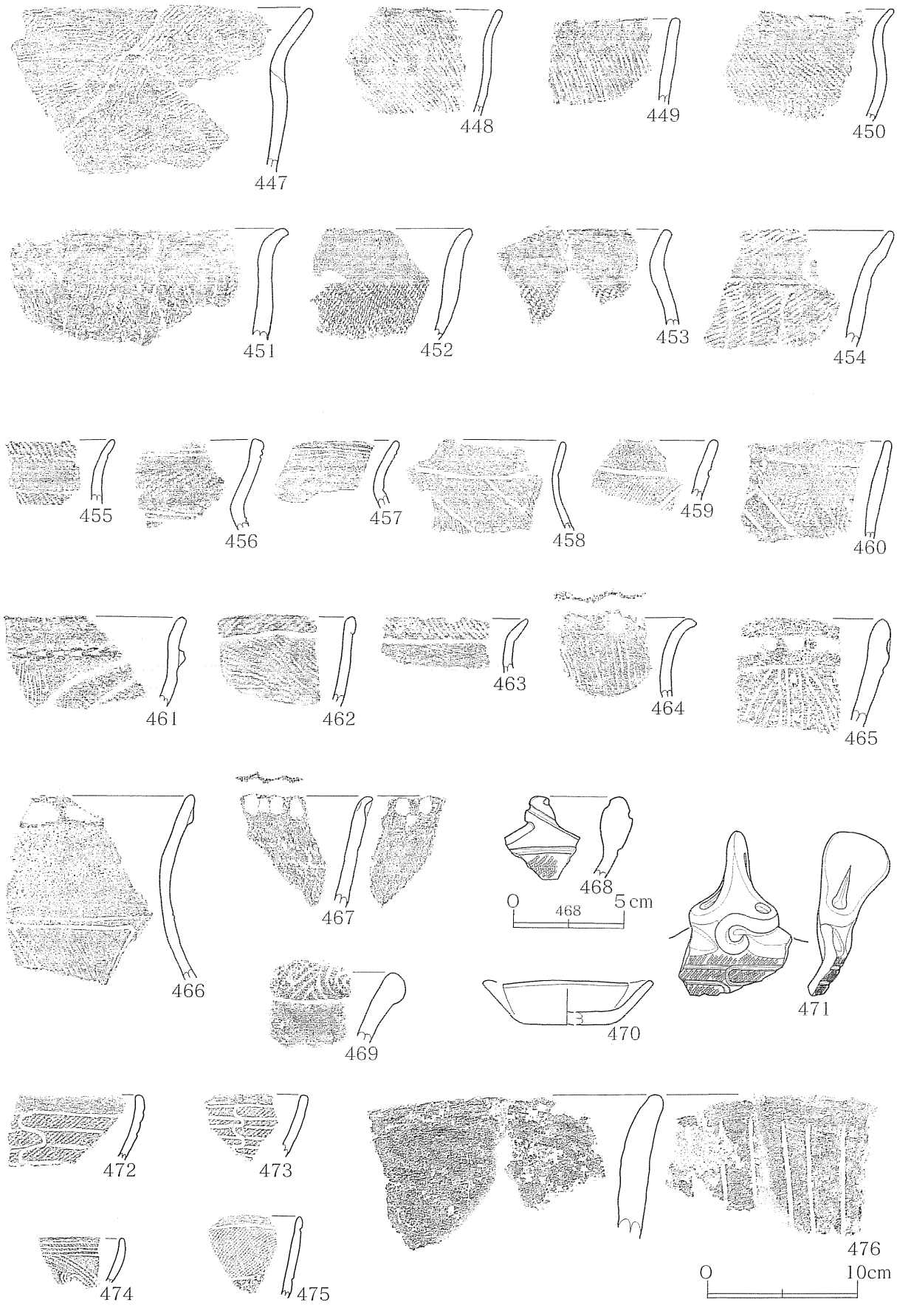
第51図　遺構外出土土器(5)



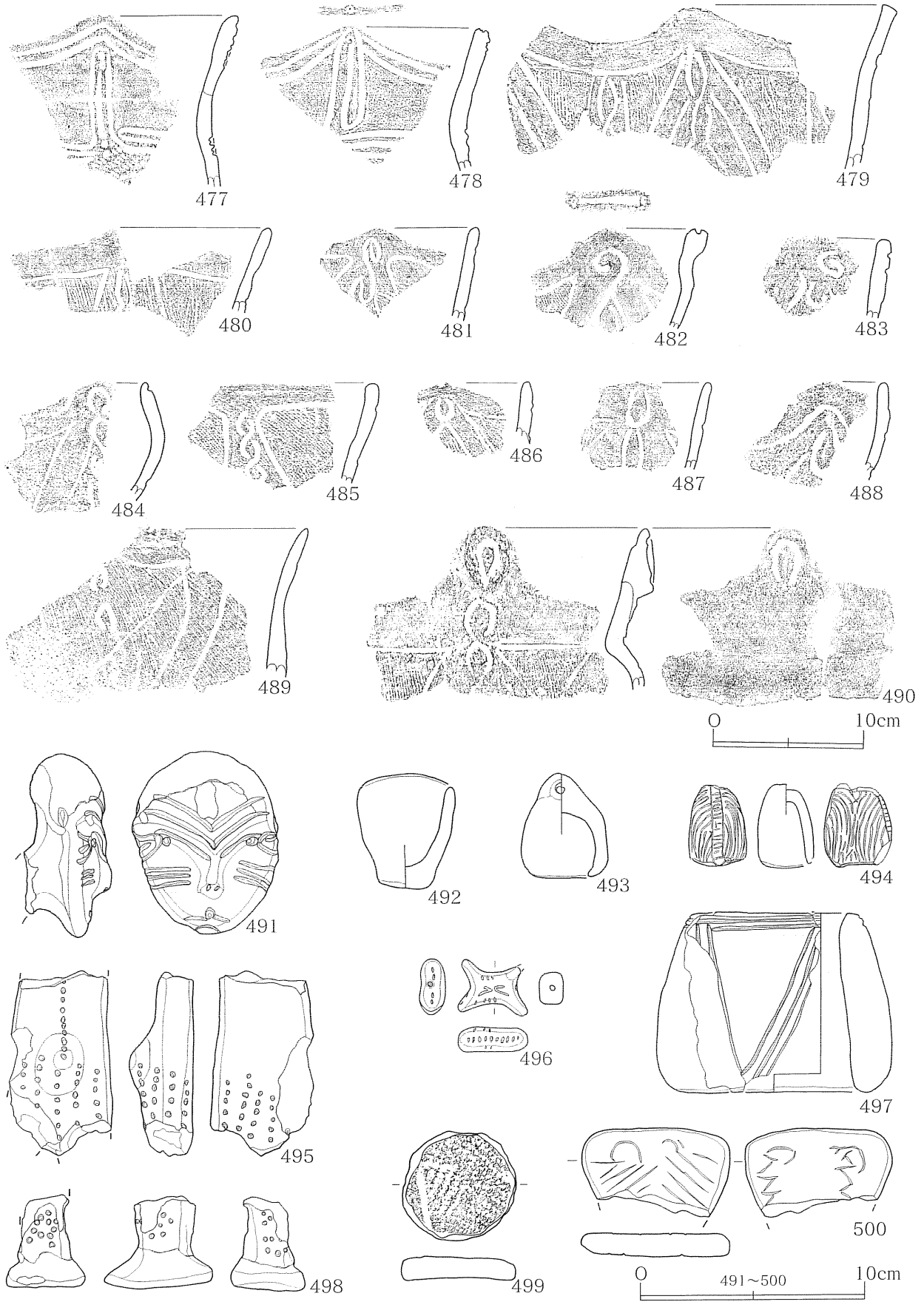
第52図　遺構外出土土器(6)



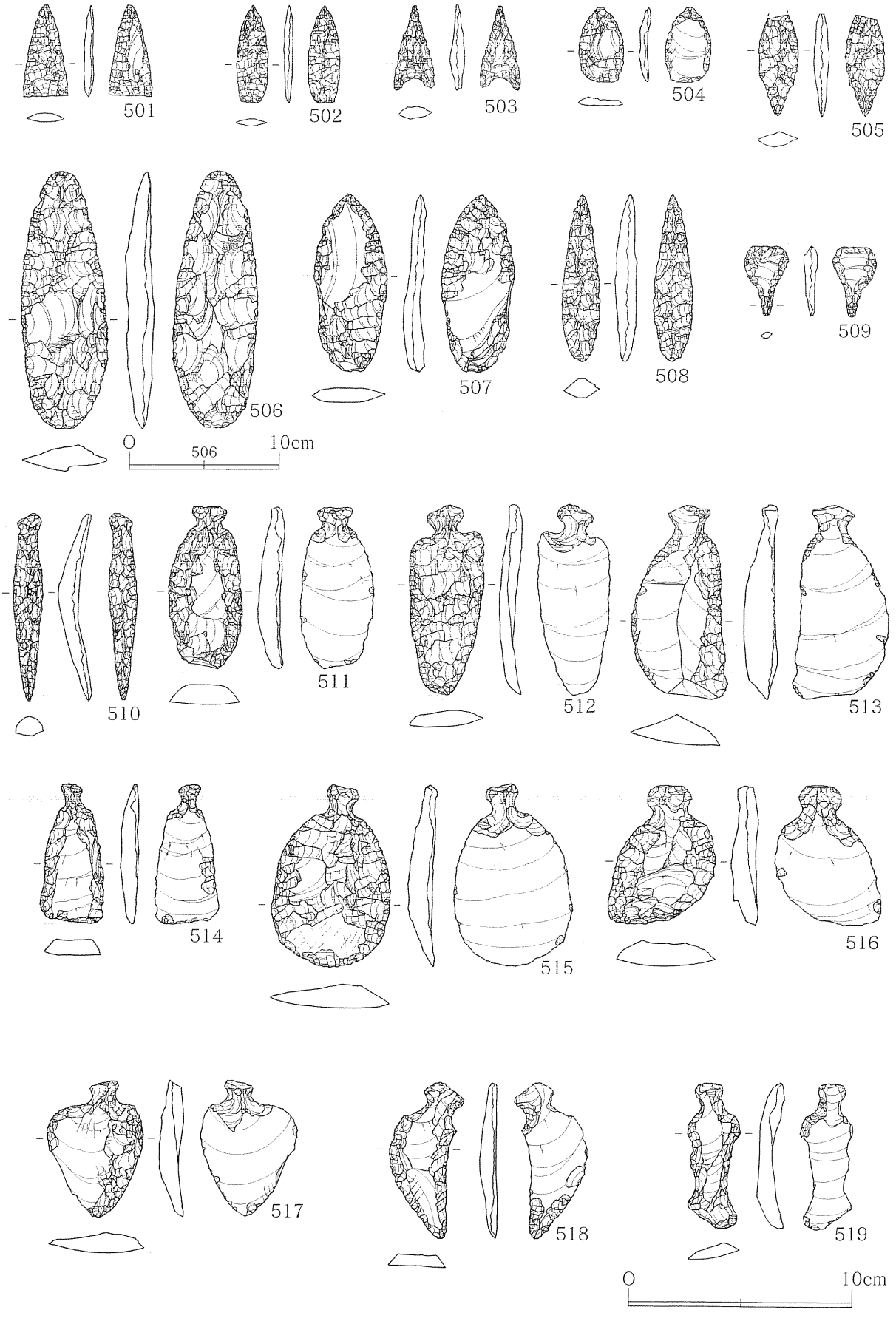
第53図　遺構外出土土器（7）



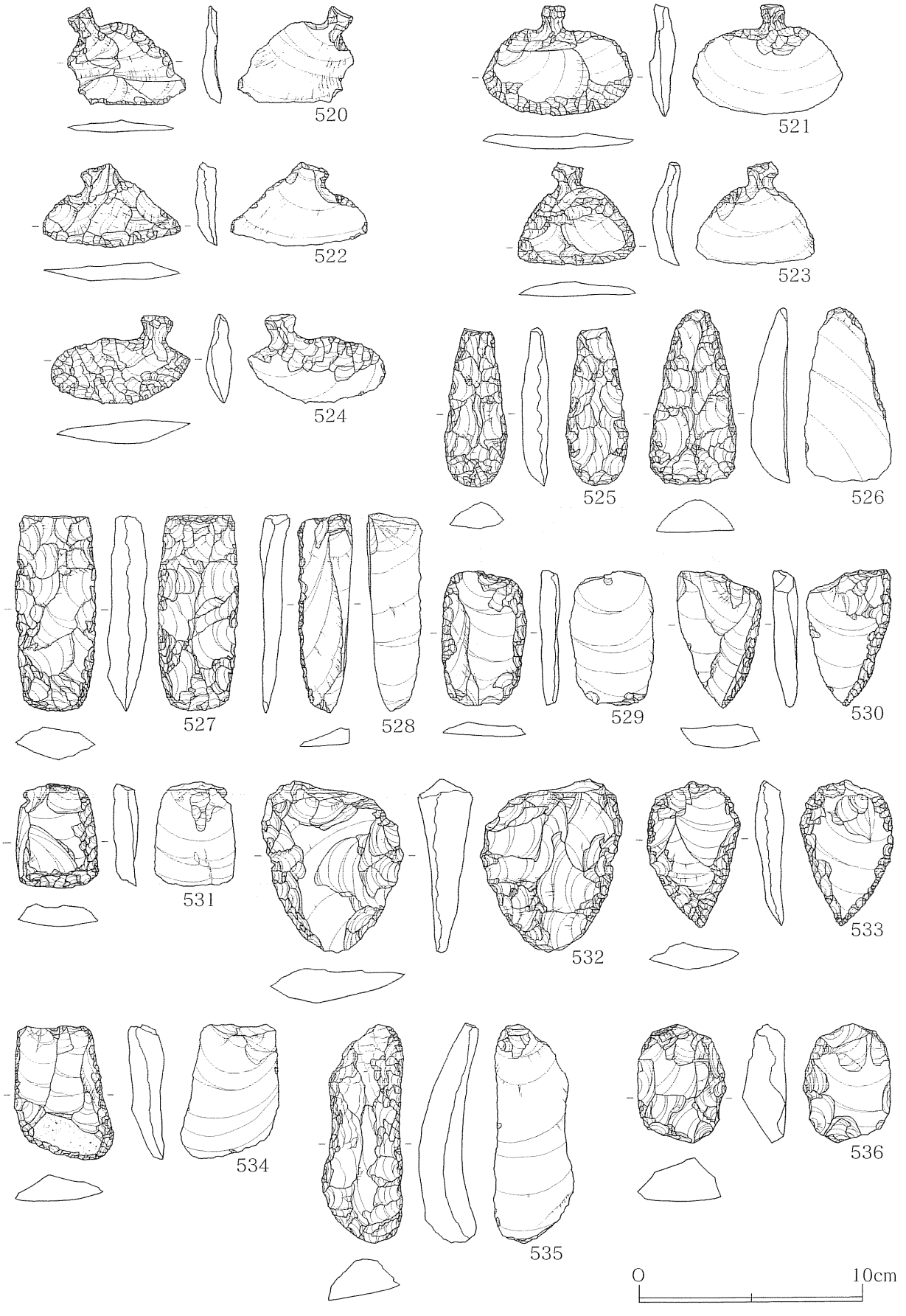
第54図　遺構外出土土器（8）



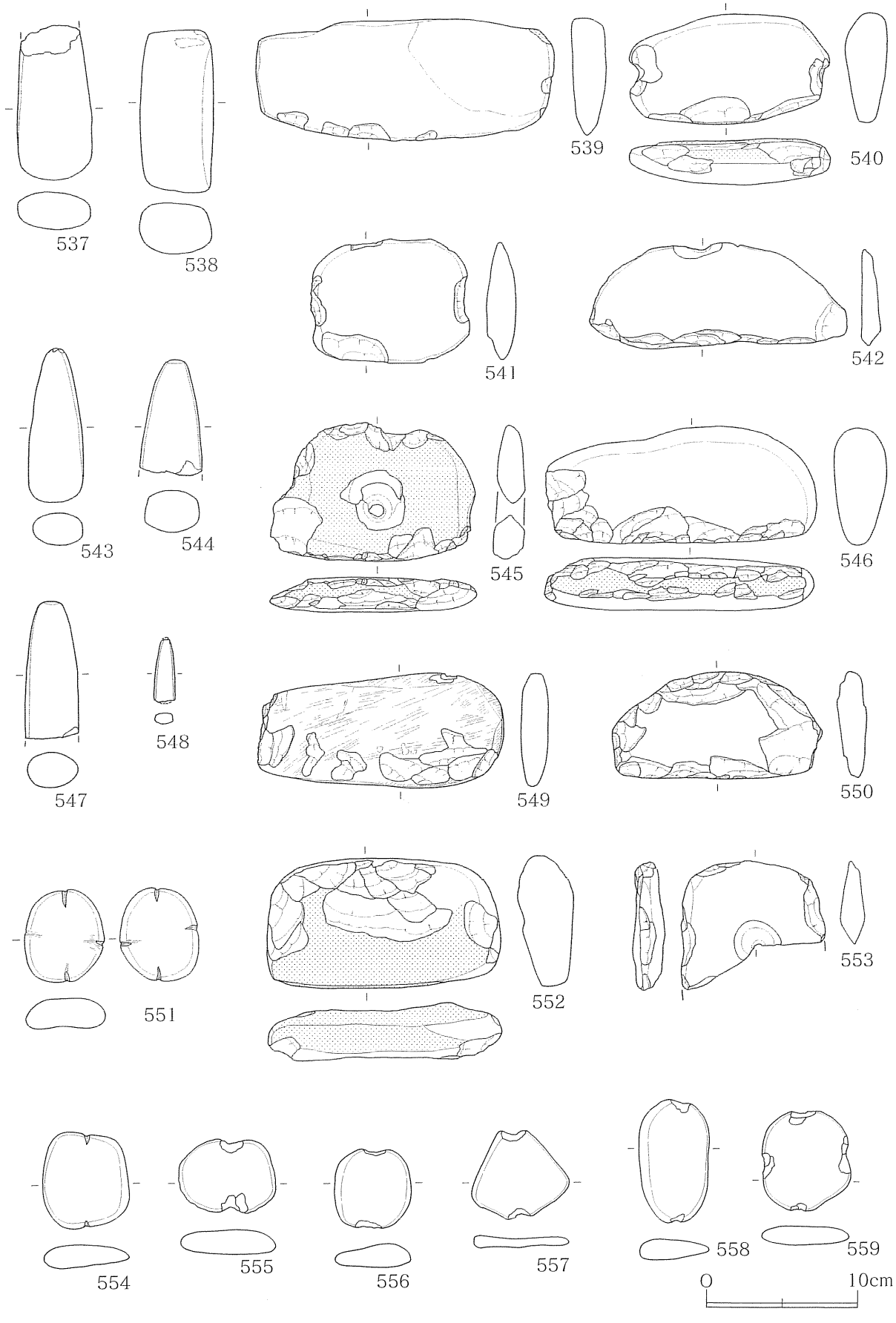
第55図　遺構外出土土器(９)・土製品



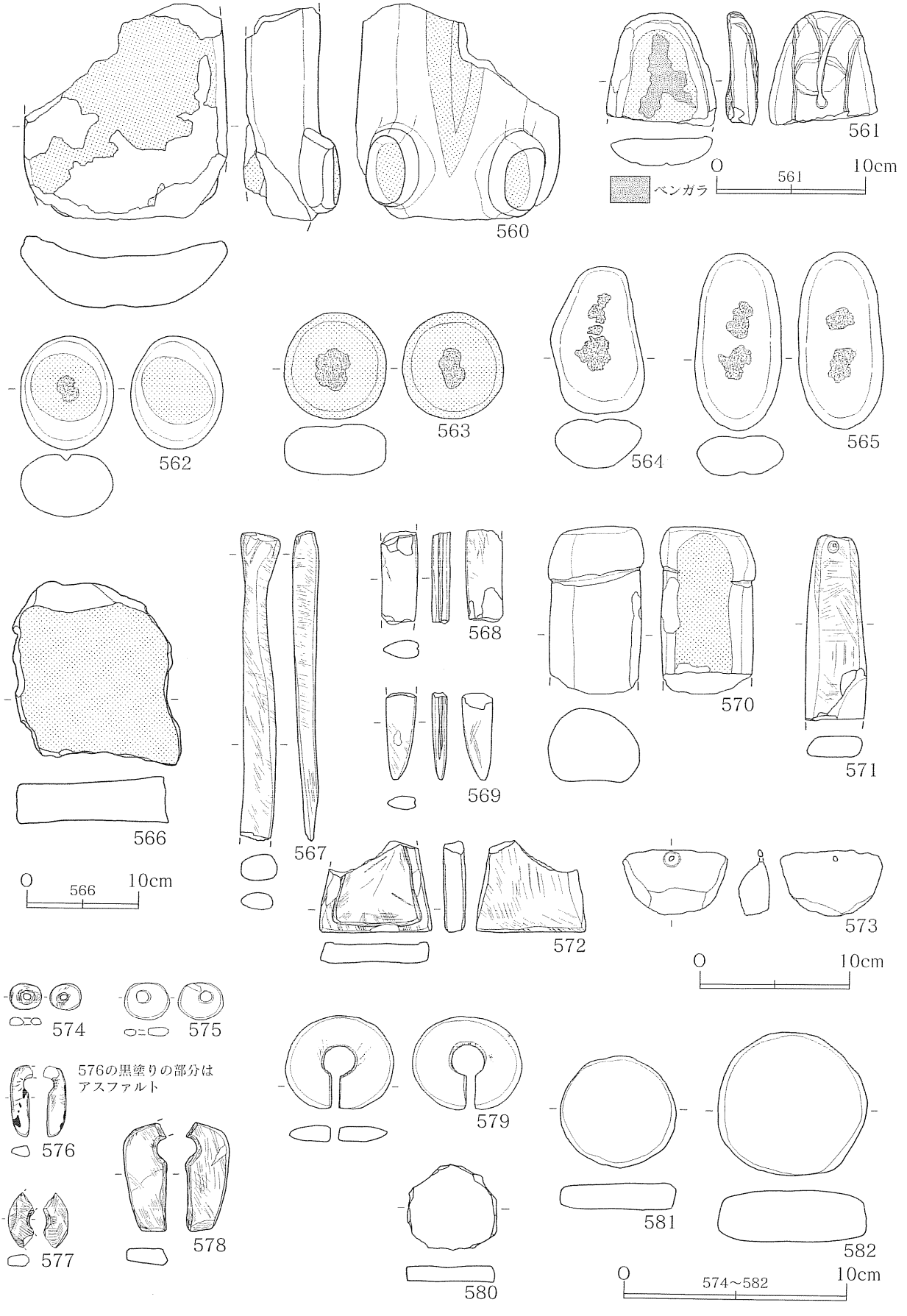
第56図　遺構外出土石器（1）



第57図　遺構外出土石器（２）



第58図　遺構外出土石器（３）



第59図　遺構外出土石器(4)・石製品

第５章　自然科学的分析

本章は、ＳＲ262 土器埋設遺構内のアスファルトの分析結果である。アスファルトの産地同定により、その流通経路を解明することを目的として、北海道大学教授 小笠原 正明 氏に依頼したものである。

アスファルトの科学分析と原産地

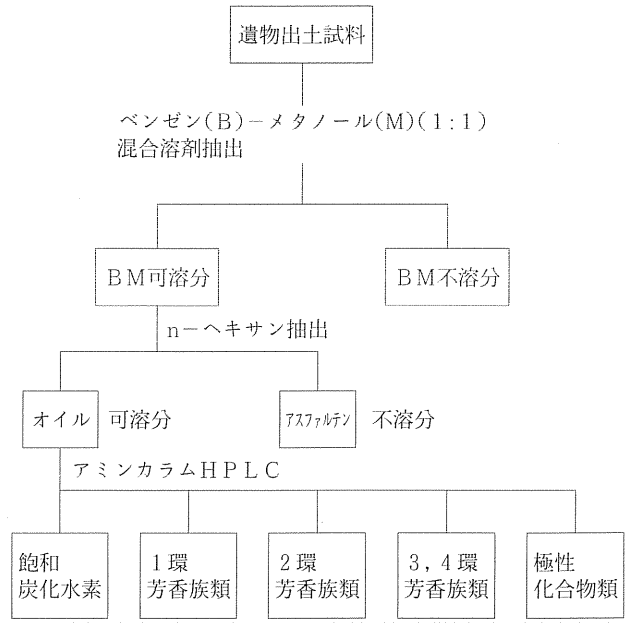
小　笠　原　　正　明
（北海道大学高等教育機能開発総合センター）

1. はじめに

天然アスファルトは、 地表付近に漏れ出した原油中の揮発性成分が失われて残った不揮発性の物質である。そのもとになっている石油は、古生代において海や湖沼などに沈積した生物有機体が、その後の地形の変化によって地中深く閉じ込められてできたものである。これらの根源生物のバイオポリマー(リグニン、セルロース、脂質、蛋白質など)はもともと化学構造が複雑であるうえに、長い地質年代の経過とともに地熱や地圧や周囲の無機物の影響によってさまざまな変成作用を受けている。そのため出土アスファルトの化学分析から産地や供給ルートを推定することは困難とされてきた。しかし 1992 年に北海道南茅部町豊崎Ｎ遺跡で巨大なアスファルト塊が発掘されたのを契機に、化学分析による産地同定の研究が飛躍的に発展した。この報告では、これまでの研究成果の要約に加え、新たに開発された石油の根源成分から由来するバイオマーカーなどの成分比から産地と供給ルートを解明する方法について述べる。

2. 分析方法の概要

発掘試料の表面部分を取り除いて一部を元素分析のためにとっておき、一部をベンゼン－メタノール(Ｂ-Ｍ)混合溶媒で抽出する。可溶分の溶媒部分を減圧蒸留で除いて乾燥したあと、さらにｎ－ヘキサンで抽出する。ヘキサン可溶分はオイル分、不溶分はアスファルテンと呼ばれている。オイル分に含まれている溶媒を減圧蒸留で除いたあと、高速液体クロマトグラフィー(ＨＰＬＣ)にかける。試料注入からもっとも短い保持時間で脂肪族炭化水素(パラフィン)類や脂環族炭化水素(シクロパラフィン)類などの飽和炭化水素部分(フラクションＰ)のピークが現れ、次いでベン



第60図　アスファルト試料分析のフローチャート

ゼン環を１個持つ炭化水素すなわち1環芳香族部分(フラクションM)、さらに2個を有する２環芳香族部分(フラクションD)、３個以上を有する多環芳香族部分などのピークが一部重なって現れる。最後に、ＨＰＬＣのカラムをクロロフォルムで洗浄すると、極性化合物部分が分離される。このようにして、それぞれの部分を分割することができる。フラクションＰまたはフラクションMを分取して質量分析(マス)スペクトルにかけると、それぞれの成分のマスパターンが求められる。以上の分析方法のフローチャートを第60図に示した。

3. 元素分析、溶媒分割およびオイル分の分析による分類

元素分析　天然アスファルトの主成分は、飽和炭化水素のほかに、酸素、窒素、および硫黄原子を含むヘテロ化合物である。第２表に北日本各地の遺跡から出土した試料の元素分析の結果を示した。その主成分は炭素Ｃであり、全体の約70-80%を占める。次に多いのは水素Ｈである。Ｃに対するＨの原子数の比が１をやや上回ることが石油起源のアスファルトの特徴で、この比はアスファルトか否かの判定の指標として使える。

	地名・遺跡名	C	H	N	S	O(残)
北海道	豊崎Ｎ遺跡	81.7	9.2	1.0	0.8	7.3
	苫小牧Ⅲ遺跡	83.1	9.2	1.4	0.8	5.5
	美々Ⅱ遺跡	84.2	8.8	1.5	0.8	4.7
秋田県	伊勢堂岱遺跡	76.5	8.4	1.3	0.7	13.1
	潟前遺跡	75.2	8.3	1.2	0.8	14.5
	小袋岱遺跡	82.1	9.3	1.2	1.0	6.4
	昭和町(１)*	73.9	7.4	1.7	0.7	16.3
岩手県	赤坂田Ⅱ遺跡	80.5	9.0	1.1	0.8	8.6
	川口Ⅱ遺跡	75.2	8.5	1.1	0.8	14.4
	沢田Ⅰ遺跡	59.7	6.7	1.0	0.6	32.0
	相ノ沢遺跡	83.2	8.1	1.7	0.8	6.2
	(柏山館跡遺跡)**	86.3	5.6	0.4	4.5	6.2
新潟県	大入遺跡	84.9	8.0	1.3	0.9	4.9

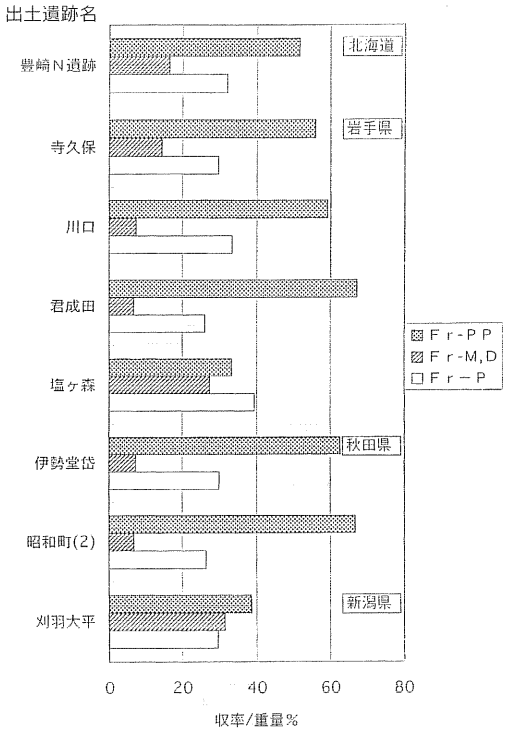
* 昭和町(1)とは奈良・平安期の羽白目遺跡を指す(注２参照)
** 柏山館跡遺跡出土のものは分析の結果アスファルトではないと判定された(本文参照)

第２表　遺跡出土アスファルトの元素分析

その例として、柏山館跡遺跡出土の試料の分析結果を示した。これは旧石器時代の地層からマイクロブレードとともに出土した暗褐色の試料で、外見といいＢ-M混合溶媒に溶ける性質といい、アスファルトに良く似ていた。しかし、Ｈの原子数がＣに対して１を大きく下回っていることから、何かの有機物が考古年代の間に炭化したものと判定された。イオウＳの濃度は産地の指標となり得るものであるが、これまで分析した東日本の試料ではいずれも0.8%程度と違いが少ない。ただし、岩手県塩ヶ森遺跡出土の試料は、ここには示さないが3%以上の高い値を示した。出土アスファルトには不純物が含まれていることが多く、元素分析値はアスファルトを区別するための指標とはならない場合がある。

溶媒分割　２で述べたような方法によって、試料をＢ-M不溶分、アスファルテン、オイル成分の３種類に分割できる。外見が似ていても、溶媒分割の結果からアスファルトとははっきり区別できる場合がある。たとえば余市町大川遺跡から出土したビーズ状の試料は、その90%弱がＢ-M不溶分であることから草炭または泥炭によるものと結論される。しかしアスファルト自身の溶媒分割の結果も、試料ごとに非常に異なっている。例えば、オイル分の割合は秋田県昭和町の約20%から豊崎Ｎ遺跡の60%程度と違いが大きい。産地から採取されたあと、どのような環境におかれたかによって変るからである。

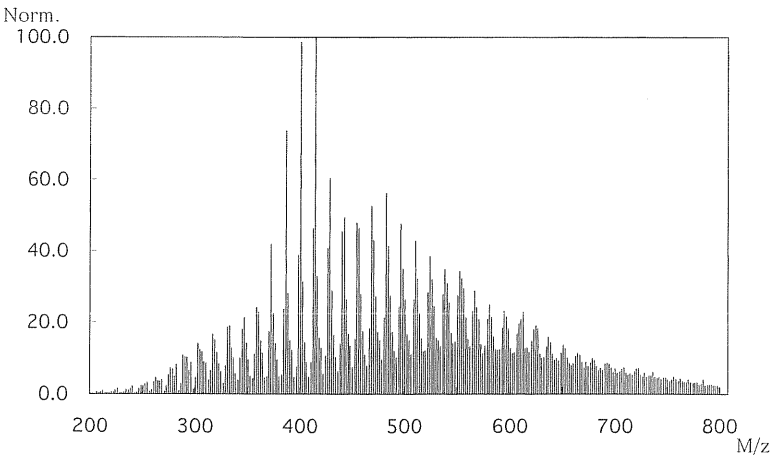
オイル分の分析　オイル分中のフラクションPに対するフラクションMやフラクションDの比は、区別のための1つの指標となり得る。フラクションMとフラクションDのHPLCスペクトルはお互いに重なっていて厳密な分離はむずかしいので、この2つのフラクションを足したものをフラクションPに対して比較する。第61図に、産地とみなされる秋田県および新潟県のほかに、岩手県および北海道の各遺跡から出土したアスファルトのオイル分の分析結果を示した。前述の溶媒による分割結果と違って、オイル分の各化合物クラスの比は互いに似通っているが、注意して見ると地域によって多少の違いがあることがわかる。北海道の豊崎N遺跡、秋田県のおよび新潟県の各遺跡、および岩手県の大部分の遺跡から得られた試料では、フラクションM、D、すなわち芳香環を含む化合物クラスの割合が10-20%程度と低い。これに対して、岩手県の塩ヶ森遺跡と新潟県の刈羽大平遺跡から出土した試料のオイル分は芳香族性が非常に高く、フラクションMとフラクションDの和がオイル全体の30%もある。このように、オイル分の芳香族成分の割合から、出土アスファルトは約2系統に分類できることが分かった。



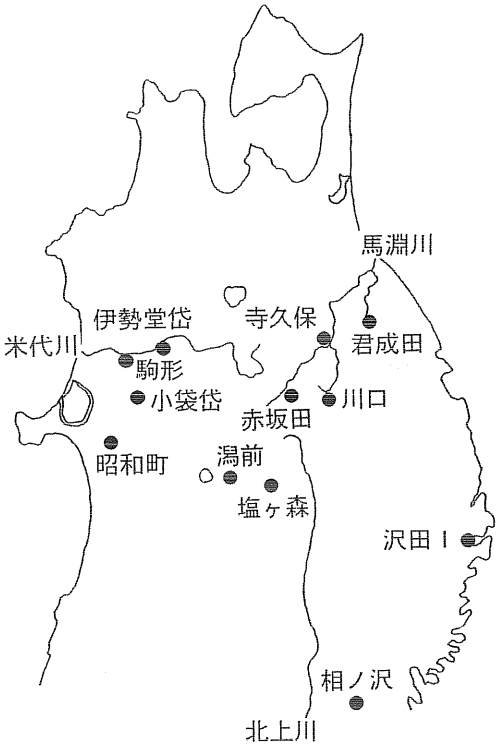
第61図　遺跡出土アスファルトのオイル分の高速液体クロマトグラフィーによる分析結果
Fr－PP：極性化合物部分；Fr－M, D：1，2環芳香族部分；
Fr－P：飽和炭化水素部分

4. フラクションPのマス分析による分類

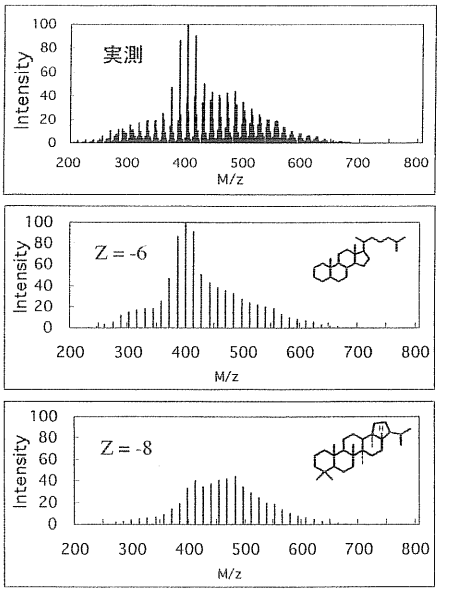
マス分析は、質量の異なる化合物を分離しその存在量に応じたピーク強度を与える。オイル分のフラクションP、すなわちパラフィンおよびシクロパラフィン成分のF1(電界電離イオン化法)マススペクトルは、質量と荷電数の比M／z＝400付近にピークを持つ非常に幅広いものである。F1マス分析においては、試料分子のイオン化が温和な条件で行われるため、測定中の分子イオンの断片化は実際上起こらないとされている。従って、オイル本来の分子量分布がこのスペ



第62図　秋田県潟前遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分のフラクションPのFIマススペクトル。



第63図　アスファルトの交易に関する北東北の主な河川および遺跡名。ただし、駒形および昭和町だけは地名を表す。



第64図　上：秋田県伊勢堂岱遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分のフラクションPのＦＩマススペクトル；中：ｚ数が－６すなわち環の数が４の成分（例としてステランの骨格を図中に示した）のスペクトル；下：ｚ数が－８すなわち環の数が５の成分（同じくホパンを示した）のスペクトル。

クトルに反映されていると考えてよい。第62図に潟前遺跡出土のアスファルト試料のマススペクトルを示した。

北日本出土試料のマススペクトルを測定したところ、数種類のパターンに分類できることが分かった。この分類により、北日本のアスファルトの原産地と流通について新しい知見が得られた。すなわち、秋田県の日本海側から岩手県の太平洋側に抜ける重要なルートである米代川および馬淵川流域の遺跡から出土した試料は、すべて同じパターンを与えることがわかった。これまで東日本出土のアスファルトは、その多くが秋田県昭和町槻木産と考えられていた。しかしわれわれのマススペクトル分析では、昭和町の試料の一部は上述の２河川流域の遺跡から得られた試料とは必ずしも一致しなかった。そこで秋田県埋蔵文化財センターが調査を行っところ、米代川の流域に近い二ツ井町駒形に地元では古くから知られていたアスファルト露頭があることがわかった(第63図参照)。この露頭から採掘した試料を分析したところ、２河川流域の試料と良く一致した。このようにして、駒形こそが縄文時代の有力なアスファルト供給地であるという説が浮上してきた。

次にマススペクトルのパターンによる分類から一歩進んで、Ｚ数による定量的な解析を試みた。Ｚ数とは、炭化水素の一般式をC_nH_{2n+Z}と表した時のＺのことで、パラフィン系炭化水素からの水素の不足数に相当し、分子構造中に不飽和結合を持たないときはナフテン環の数のみに依存する。実測のスペクトルを、Z=2から１つおきのＺ＝－８までの６つの成分スペクトルに分割したところ、スペクトルの形を特徴づけているのは第64図に示すように、Ｚ＝－６と－８であることが分かった。Ｚ＝－６と－８の成分はそれぞれ重質油のバイオマーカとして重要なステラン類およびホパン類を含むものである。そこでこの２つのスペクトルの強度比をとって、これをＲ値と名付けて産地推定のた

めの指標とした。駒形の露頭から採掘したアスファルトのＲ値の平均値と各遺跡から出土した試料のＲ値は第３表のように求められた。遺跡出土試料のＲ値と産地駒形の試料のＲ値の平均値との差をとり、それを産地試料の標準偏差で割って相対偏差を求めた。この相対偏差は、駒形産試料との隔たりを表す目安となる。

このような分析の結果、米代川・馬淵川の２河川、およびその支流域にある伊勢堂岱、川口、君成田、寺久保の各遺跡出土の試料のうちで、駒形産ではないと言えるものは一つもないことがわかった。一方、同じ北東北出土の試料でも、秋田県の潟前遺跡や岩手県の塩ヶ森遺跡出土のものは相対偏差が大きく、駒形産である可能性はほとんどなかった。さらに、馬淵川の河口から三陸海岸を南に100キロほど下った岩手県山田町の沢田Ｉ遺跡出土の試料は駒形の試料に非常に近かった。しかし、さらに南の内陸部にある相ノ沢遺跡(第63図参照)出土の試料は別系統であった。米代川と馬淵川をつなぐラインは、縄文前期・中期の代表的な土器形式である大木式と円筒式を区別する南北の境界線であり、その後も日本海側と太平洋側をつなぐ重要な交易ルートであったことを考えれば、駒形産アスファルトがこのルートをたどって三陸沿岸まで運ばれたと考えるのが妥当であろう。今回の結果は、さらに三陸海岸を通って山田町付近まで南下した可能性を示唆するものである。

5. 産地同定の問題点

試料の成分分析から産地を無前提に決めることはできないが、成分データを統計的に処理すれば、第３表に示すように基準となる試料からどれだけ隔たっているかがわかる。基準となる試料が複数であれば、すなわち候補地としての産地が複数であれば、出土試料がそれぞれの産地にどれだけ近いか(あるいは遠いか)を判定することになる。相対偏差が２以下であれば問題の試料がその産地のものである確率が最低数％はあるということであり、３以上であればそれが実質的にゼロだということである。従って、アスファルトの成分分析から産地を同定するためには、(1)産地の数が比較的少ないこと、(2)それぞれが産出するアスファルトが他と区別できる成分比を持っていることの２つの条件が必要となる。

	地名・遺跡名	Ｒ値	相対偏差
秋田県	駒形	0.632±0.036	—
	伊勢堂岱遺跡*	0.650	0.50
	潟前遺跡	0.781	4.09
	小袋岱遺跡	0.666	0.95
	昭和町(１)	0.586	−1.26
	昭和町(２)	0.953	8.82
岩手県	赤坂田遺跡*	0.706	2.04
	川口遺跡	0.698	1.18
	君成田遺跡*	0.637	0.15
	寺久保遺跡*	0.709	2.11
	相ノ沢遺跡	0.930	8.19
	沢田Ｉ遺跡	0.646	0.40
北海道	豊崎Ｎ遺跡	0.685	1.45
	キウス４Ｂ遺跡(１)	0.758	3.47
	キウス４Ｂ遺跡(２)	0.64	0.26

* 印は米代川と馬淵川の２河川およびその支流域にある遺跡を示す。

第３表　遺跡出土アスファルトのＲ値と駒形産の試料のＲ値からの相対偏差

アスファルトの産出地とみなされる地点は、今のところ秋田県の槻木と駒形、新潟県の大入遺跡など数カ所である。以前からアスファルトの原産地と考えられていた槻木を中心とする昭和町のアスファルトには、昭和町(1)と(2)の２種類がある。昭和町(1)タイプは駒形産と区別がつかない。そこでここでは、駒形タイプと昭和町(1)タイプを一緒にして「秋田タイプ」と呼ぶことにする。他にも可能性として考えられる場所があるが、アスファルトが明確な露頭として存在しない、

近隣に縄文遺跡が確認されていないなどの理由で、産地として確定することができない。

われわれの分析の結果によれば、秋田タイプは前節に述べたように秋田県の産地から米代川・馬淵川流域を中心に岩手県の三陸沿岸までの広い範囲に分布している。北海道南部の南茅部町で出土したアスファルトもこのタイプに良く似ている。しかし、岩手県に近い秋田県や、岩手県の中部以南ではこれとは明らかに異なるアスファルトが出回っている。特に岩手県の盛岡市に近い塩ヶ森遺跡の試料はＳ濃度など多くの点で際だった違いがあり、このタイプがどの産地から来たものか大いに興味がある。

新潟県産のアスファルトの化学分析は現在進行中であるが、予備的実験では秋田県産のものよりかなり高いＲ値が得られており、秋田県産と区別できる可能性が高い。

最後に考古学研究における化学情報の性格について一言つけ加えたい。物質の化学構造は情報の宝庫であるが、本来時間とともに指数関数的に減衰する性格を持っている。考古遺物を扱うときは、千年単位の時間スケールでどの情報が消え、どの情報が生き残ったかという評価が不可欠である。アスファルトの場合は、地質年代にわたって安定な物質であるという有利さはあるが、直射日光や酸素による変成の影響も考慮しなければならない。その影響を避けるために、この研究では比較的大きなアスファルト塊の内側からサンプリングした試料のみを用いている。石器などの表面に薄く付着した試料を扱う場合には、考古年代の間にどのような経年変化を受けるか実証的に明らかにする必要があろう。

注

1）Ｚ数による実測のマススペクトルの分割の方法は、参考文献の４で詳しく説明している。

2）昭和町(1)の試料は奈良・平安期の羽白目遺跡出土のもので、地理的に近いので槻木産といわれている。昭和町(2)は槻木の豊川油田のものである。

3）津軽海峡に面した地域では北海道側の釜谷地域で地表に原油が出ている場所が発見されているが、今のところアスファルトの露頭は発見されておらず、従って産地とは確定されていない。この地域でアスファルトの産地が発見され、かつその性質が「秋田タイプ」と酷似している場合に限り、南茅部出土アスファルトの秋田原産説は否定される。

参考文献

1）我孫子昭二(1986)「アスファルト」『縄文文化の研究』8:205 - 222 頁、雄山閣

2）小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山晋(1994)「豊崎Ｎ遺跡出土の天然アスファルト塊」『考古学ジャーナル』373 号:25-29 頁

3）小笠原正明・櫻田　隆・能登谷宣康(1999)「二ツ井町富根字不動沢地内のアスファルト浸出地について」『秋田県　埋蔵文化財センター研究紀要』14 号:50-57 頁

4）小笠原正明(1999)「縄文時代の交易-アスファルトがたどった道」『化学』9 月号:28-30 頁

第6章　まとめ

平成11年度潟前遺跡発掘調査は、県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に伴う道路、水路部分(2,800㎡)について実施した。これは遺跡推定面積の23%にあたる。しかし、平成9年度に田沢湖町が遺跡中央部と見られる配石遺構の広がる部分4,300㎡の表土付近を調査しているため(註1)、調査域の重なる部分が多く、新たに調査した面積は750㎡、遺跡推定面積の6.3%である。この結果、潟前遺跡で発掘調査の行われた範囲は平成8年度実施発掘調査面積を含め3,830㎡、遺跡推定面積の32%となった。

平成8年度調査では、旧石器時代の石器、剥片と縄文土器が出土し、縄文時代の土坑5基を検出した(註2)。平成9年度の調査では、主に縄文土器が出土したが、旧石器時代の石器、土師器・須恵器が数点混じる。遺構は、配石遺構19基、石組遺構2基、柱穴14基、土器埋設遺構4基、土坑1基、フラスコ状土坑1基、焼土遺構16基を検出した(註1)。

今回の調査では、縄文時代前期前葉・中葉・後葉～中期初頭の土器と縄文時代後期初頭から前葉の土器が出土した。遺構は、竪穴住居跡 42軒、土坑91基、フラスコ状・袋状土坑3基、配石・集石遺構18基、土器埋設遺構7基、焼土遺構8基等を検出した。

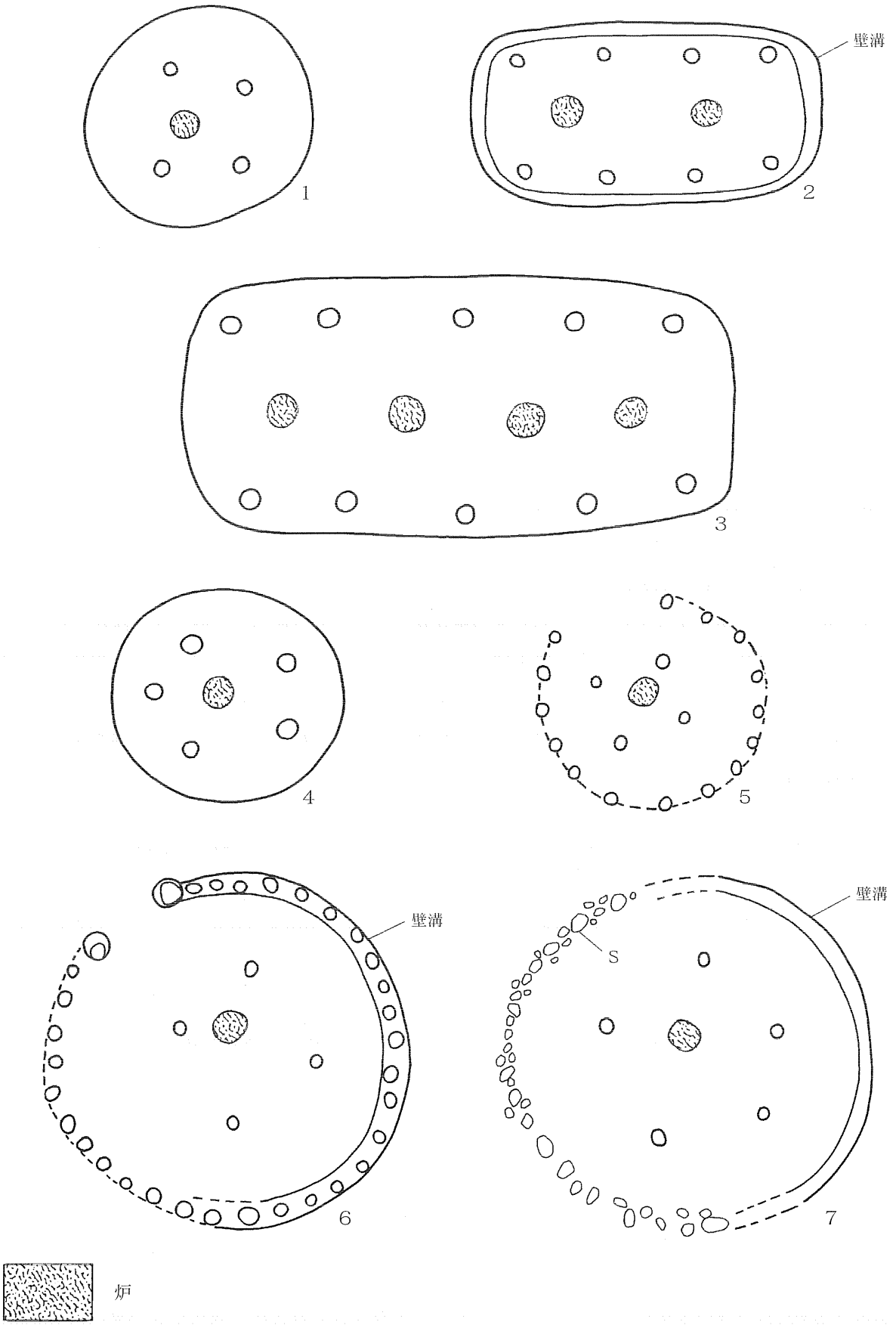
縄文時代前期～中期の竪穴住居跡

本遺跡で下位の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層すなわち地山漸移層から地山面で確認した竪穴住居跡は、伴出する土器から縄文時代前期前半から縄文時代中期初頭に構築されたものである。構築時期と形態には相関関係があると考えられ、全体の形状がわかるものを形態的に分類した。時期の想定は確認状況や切り合い関係などをもとにし、時期の特定できないものについては、検出面や土色にその基準をおいて時期を想定した。

本遺跡中最も古い段階の竪穴住居跡は、ＳＩ42・76・80・259竪穴住居跡(第65図1)と考えられる。これらは、直径2.5～4.5m、確認面からの深さは18～35㎝、その床面積は9～15㎡である。小型で掘り込みも浅い。柱穴は、いずれも径20㎝以下、床面からの深さ20㎝以下であり、2～7基検出した。円筒下層ａ・ｂ式並行の土器を伴出しているものがあり、構築時期は縄文時代前期中葉を想定した。

次の時期に出現するのは、いわゆるロングハウスと呼ばれる長方形大型住居(第65図3)である。「大型住居」という言葉の解釈には多様性(註3)があるが、ここでは、隅丸長方形か楕円形の平面形をとり、その長軸長が10mを越えるものと考えている。8割を調査したＳＩ97竪穴住居跡をはじめＳＩ136・137・340竪穴住居跡がこれにあたる。これらについては1軒すべてを調査したものはなく、また後世の撹乱等により推定部分が多くなるが、ＳＩ97竪穴住居跡は、長軸17m、短軸4.8m、深さ40㎝と推定される。他のものも同程度の規模を有すると思われる。なお、ＳＩ102竪穴住居跡は長軸長7.7mであり、大型住居には含まれないが、同時期、類似の形態であるので付け加えておく。

炉は住居の中央部にあり、中央を通る長軸に沿って数基並ぶ形態をとる。いずれも地床炉であり、住居の改築にともなって炉の位置がずれたり、重なったりして、焼土が二重ないし三重になる部分もある。そのため改築が重なると、炉の数のはっきりしないものが増える。しかし、長軸に沿う形に変



第65図　住居跡模式図

わりはなく、住居が広げられると、炉の位置も中央によるものと考えられる。

柱穴は、おおむね壁に沿って巡る形をとる。その他床面にあると思われる柱穴も何基か検出できたが、主柱穴と思われるものは壁沿いに配置される。屋根の構造材いわゆる垂木と呼ばれる部分の痕跡が検出できたことから屋根が地面から直接斜めに立ち上がっていたものと思われる。

本遺構群に伴う土器は、円筒下層d－1式・d－2式や大木6式・7a式に比定できる土器が混在しているが、円筒下層d－1式と大木7a式が主体である。構築時期は縄文時代前期後葉から中期初頭と思われる。

同形態の竪穴住居跡の検出は、協和町上ノ山Ⅱ遺跡で29軒(註4)を数える。これらはすべて円筒下層c式土器を伴出する、縄文時代前期後葉の住居跡である。岩手県鳩岡崎遺跡では3軒(註5)検出されているが、伴出する土器は大木6～7式が主体で、縄文時代中期前葉のものである。

次の時期を想定できるのは、平面形が長方形または隅丸長方形で、壁溝の巡る竪穴住居跡(第65図2)である。いずれも全容の不明な住居跡であるが、ＳＩ148・158・308竪穴住居跡がこれである。明確な切り合いはないが、確認状況から前者のものより新しいと考えられる。壁の一部と壁溝しか検出できなかったためその規模は不明であるが、長軸10m程度と思われる。また、その平面形は隅丸長方形と思われる。すべてに地床炉が確認でき、前者の小規模化による1バリエーションの可能性もある。伴出する土器に時期を明確にするものはないが、縄文時代後期の遺構に撹乱されていると考えられ、それから推定すると前者同様円筒下層d－1式土器または、大木7a式土器が伴ったのではないかと考えられる。

縄文時代後期の竪穴住居跡

縄文時代後期初頭から前葉の住居跡は、炉や柱穴だけしか検出できなかったものが多く、規模や形態等不明な部分が多いので構築時期と住居形態を関連づけて触れることができない。平面形は、円形で、直径 4～5mのものと6～8mのものに2大別できる。

小型の竪穴住居跡は、直径4m前後と思われるものが多い。柱穴は床面に5基前後あるもの(第65図4)が一般的だと思われる。中にはＳＩ143竪穴住居跡など壁にあたると思われる部分に柱穴が巡るもの(第65図5)もあった。炉は、地床炉(ＳＩ・140・334・339竪穴住居跡)と石囲炉(ＳＩ77・113竪穴住居跡)もあるが、大部分は土器埋設炉(ＳＩ45・46・47・53・55・61・122・242・260・268竪穴住居跡)である。石囲炉は、人頭大の礫を6～8個円形または楕円形に置いたものである。土器埋設炉の土器は、住居跡1軒に1～3個埋設されていた。複数検出した土器埋設炉は、新旧が明白なものもあるが、同時存在と考えられるものもある。

ＳＩ143・334竪穴住居跡では円形に巡る柱穴の途切れる部分があり、そこが出入り口と思われる。なお埋設炉を伴う住居跡は、確認面が最も上位であり、本遺跡中最も新しいものと思われる。

大型の竪穴住居跡（第65図6・7)は、平面形が直径8～10mの円形で、壁溝が巡るのが特徴である。壁溝の底面から柱穴を検出したもの(第65図6；ＳＩ30竪穴住居跡)もあるが、その他構造材の痕跡は検出できなかった。炉はすべて地床炉であり、床面中央部ないしやや壁よりにある。出入り口と思われる部分を検出した住居跡はＳＩ30竪穴住居跡だけであるが、その位置は北西側である。壁溝は、おおむね幅20cm、深さ10cmであるが、ＳＩ30竪穴住居跡だけがやや大きめとなる。時期がずれるのか、特殊なのか不明であるが、壁の構造そのものが違うと思われる。すなわち壁溝内に垂直に

掘られた柱穴が並ぶことから、柱状の用材を立てて壁としたものと思われる。つまり、地面から直接壁が立ち上がっていてその上に屋根が架かる軒高の上屋構造だったと推定される。なお、柱穴の掘り方やその並びは、ＳＩ143竪穴住居跡にも類似している。また、ＳＩ202竪穴住居跡(第65図７)の壁部分は、弧状の壁溝と共に弧状の礫の並びが向かい合って一つの円をなしており、溝も礫も壁を構成していたと考えられる。類例は、岩手県遠野市張山遺跡で円形に礫の巡る竪穴住居跡が検出(註6)されている。これも本遺跡と同時期で縄文時代後期初頭の構築であるが、炉は石囲炉である。

土坑

土坑は、形態から貯蔵穴や墓と思われるものも検出しているが、決め手となるような遺物は出土していないためその性格付けのできないものが多い。ここでは、ＳＫ275土坑など特殊と思われる土坑について触れておきたい。ＳＫ275土坑には焼土の堆積が著しく、何度となく内部で火を焚いたものと判断した。大きく４回の使用が認められたが、断続的に使用されたものとも考えられる特殊な土坑である。火を焚く目的については不明であるが、環状注口土器や垂飾品等の出土遺物から祭祀に関わる遺構と思われる。また、これと類似の土坑がＳＫ304である。これは、ＳＫ275土坑より小規模であるが、形態が類似していることと底面に火を焚いた痕跡のあることから同性格の遺構と思われる。しかし、これは１度しか使用されていない。また、ＳＫ335土坑も底面に厚い炭化物の層があり、幾度か火を焚いたものと思われた。なお、これらは、台地状平坦面の北西端に位置し、本遺跡中では、最も新しい部類の遺構と考えられる。また、これらはＳＮ343・344焼土遺構との関連も考えられ、一連の遺構群と見ることもできる。そう考えると、遺跡北西部は一連の儀式のための場所という想像もできる。なお、これらの土坑と同様の性格と考えられるものが、伊勢堂岱遺跡(註7)、高屋館跡(註8)、真壁地遺跡(註9)などで検出されており、伊勢堂岱遺跡では、“墓”と性格付けされている。

配石遺構

配石遺構は、縄文時代後期初頭の住居跡と同時か、それよりも新しいという結果を得た。また、当初ＳＱ06配石遺構としたものは、ＳＩ202竪穴住居跡の壁であることがわかった。しかし、その他の配石遺構の性格は不明である。なお、ＳＱ01配石遺構は、ＳＩ30竪穴住居跡の出入り口の施設の一部としての可能性も考えられる。他の配石遺構にも同形態のものがあり、ＳＱ263・264配石遺構は、住居の壁と出入り口の可能性も考えられる。さらに、ＳＱ23集石遺構は、ＳＩ324竪穴住居跡の付属施設の可能性もある。

性格不明遺構

ＳＸ323性格不明遺構の性格を判断する材料は得られなかった。ＳＫ275土坑などの周囲の遺構から推定すると、これも祭祀に関わる遺構かとも思われ、形態から類例を探すと、秋田市大松沢Ｉ遺跡に見いだすことができた。大松沢Ｉ遺跡(註10)では、中心部の小土坑に土器が埋設されているものがあり、柱穴の集合体と思われた遺構も上屋構造のある“墓”ではないかとされている。形態的には本遺構と類似しているが、時期は縄文時代晩期後葉とされている。本遺構は、ＳＩ324竪穴住居跡より新しいと判断できたが、同住居の付属施設の可能性も否定できない。

アスファルトの原産地

アスファルトの原産地については、今のところ不明であり、分析結果からは、昭和町産でも二ツ井町産でもないということしか言えない。すなわち、第3、第4のアスファルト産出地があるとすれば

そこが原産地の可能性が高いということであった。

潟前集落の隆盛と衰退

本遺跡からは、旧石器時代の石器や円筒下層式以前と思われる土器や土師器・須恵器も出土しているが、主な遺物は、円筒下層ａ・ｂ・ｄ式、大木７ａ式、十腰内Ⅰ式(大湯式・門前式とも言える)に比定される土器である。このことから判断すると、潟前遺跡の隆盛期は、縄文時代前期中葉、前期末葉から中期初頭、後期初頭の３期である。一部分の調査で全体を判断することはできないが、あえて集落規模を想像してみたい。

竪穴住居跡の検出数や出土遺物の量から、縄文時代前期中葉には、小型の竪穴住居が、２～３軒程度が同時存在するものと思われる。前期末葉から中期初頭には、大型またはやや大型の住居が１～２軒と小型の住居が数軒あったと思われる。後期初頭には、小型の円形竪穴住居の時期から大型の円形竪穴住居の時期を経て土器埋設炉を持つ小型竪穴住居の時期へという変遷が考えられる。いずれも、未調査区域を勘案すると５～６軒程度は同時に存在していたものと思われる。特に後期の大型円形竪穴住居の建つ時期には人口が最も多かったと推定される。

また、縄文時代後期初頭には前述の配石や土坑群が構築され北西部には祭祀の場が設けられる。住居との重なり合いから、住居の廃絶後にこれが設けられたと考えられ、後期初頭も後半になると居住地と祭祀場は分離していたのではないかと推測できる。

出土遺物

出土遺物で特徴的なことは、第一に石錘の出土数が極めて多いことである。また、縄文時代前期の円筒下層式土器に伴出する半円状扁平打製石器が多数出土していることも挙げられる。縄文時代後期の遺物では、非日常的と思われる土器、土製品、石製品も多数出土している。

縄文時代前期中葉の土器は、大木式土器と思われるものもあるが、円筒下層式土器の範疇に入るものが圧倒的である。逆に、前期末から中期初頭の土器は、大木式土器系の色彩が強くなる。後期初頭の土器は、十腰内Ⅰ式に比定される土器が主体で、関東の堀之内Ⅰ式に対比できる。若干ではあるが、十腰内Ⅱ式に比定される土器で、関東の加曽利Ｂ式に相当する土器も出土している。

潟前遺跡は、旧石器時代から縄文時代後期前葉まで断続的に使用された場所である。旧石器時代は、石器製作の場として、縄文時代前期から中期初頭にかけては集落として、後期初頭から前葉にかけてはやや規模の大きい集落と祭祀の場としてとらえることができる。

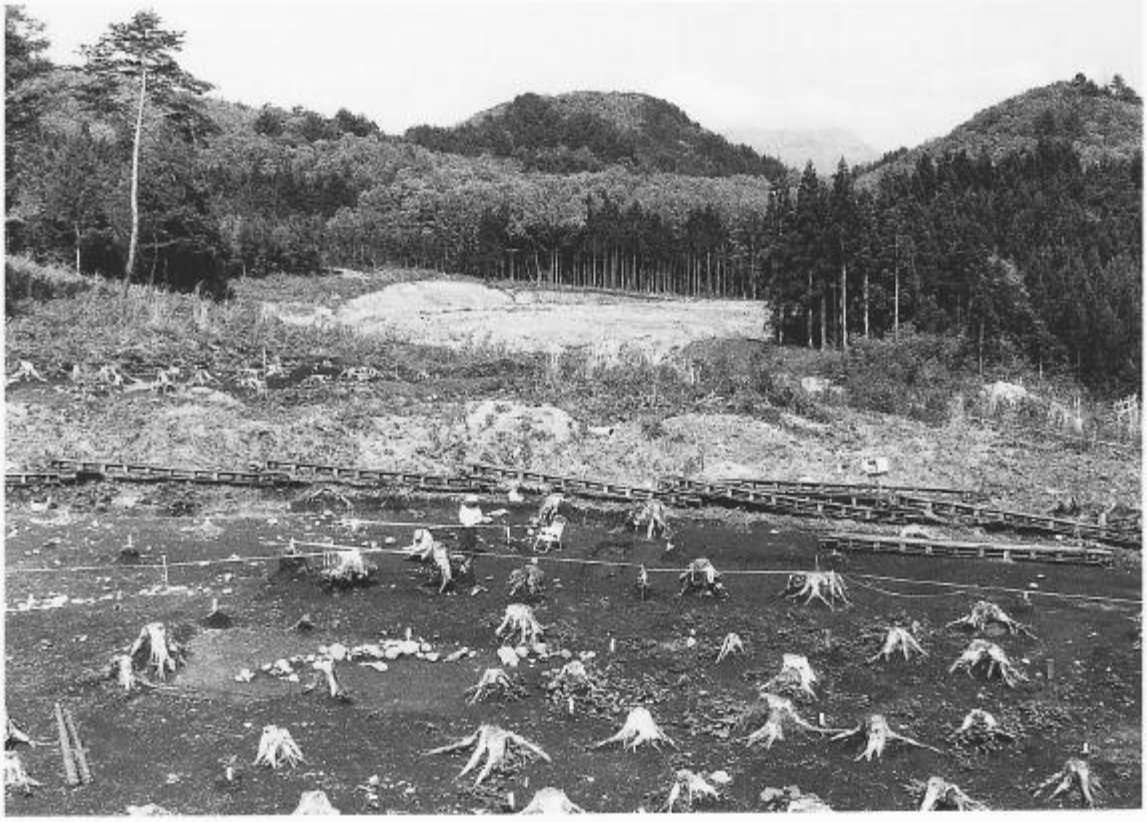
縄文時代前期中葉には、円筒土器分布圏に入っていたものが、前期末から中期初頭にかけては大木式土器分布圏に取り込まれる。また、中期初頭には、北陸系土器文化の影響も受けている。後期になると全国的に土器文化の共通性が見え始めるが、本遺跡についてもその傾向がうかがわれる。

このように、本遺跡は円筒土器文化と大木式文化の中間的な位置にあり、時期により土器様式が変わることから、この地域の土器文化を研究するためには欠かせない遺跡の一つである。とりわけ、秋田県南部においては、縄文時代前期末から中期初頭にかけての時期の遺跡は少なく、貴重なものである。

註

1．田沢湖町教育委員会 『潟前遺跡 －平成９年度発掘調査報告－』 1998（平成10年）
2．秋田県教育委員会 『潟前遺跡(第１次)県営オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書第290集 1999(平成11年)
3．武藤康弘「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』藤本強編 山脇洋亮発行 同成社 1997年
4．秋田県教育委員会 『上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－下 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』 1988(昭和63年)
5．岩手県教育委員会・日本道路公団 『江釣子村鳩岡崎遺跡 遺構編・遺物編 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＶ－１』 1982(昭和57年)
6．遠野市立博物館 『縄文の暮らしと精神文化』遠野市立博物館第35回特別展図録 1997（平成９年）
7．秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡 －県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』 秋田県文化財調査報告書第290集 1998(平成10年)
8．秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ －高屋館跡－』 秋田県文化財調査報告書第198集 1990(平成２年)
9．秋田県教育委員会 『真壁地・蟻ノ台遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第102集 1983(昭和58年)
10．秋田県教育委員会 『秋田・昭和線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ －大松沢Ⅰ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第243集 1994(平成６年)

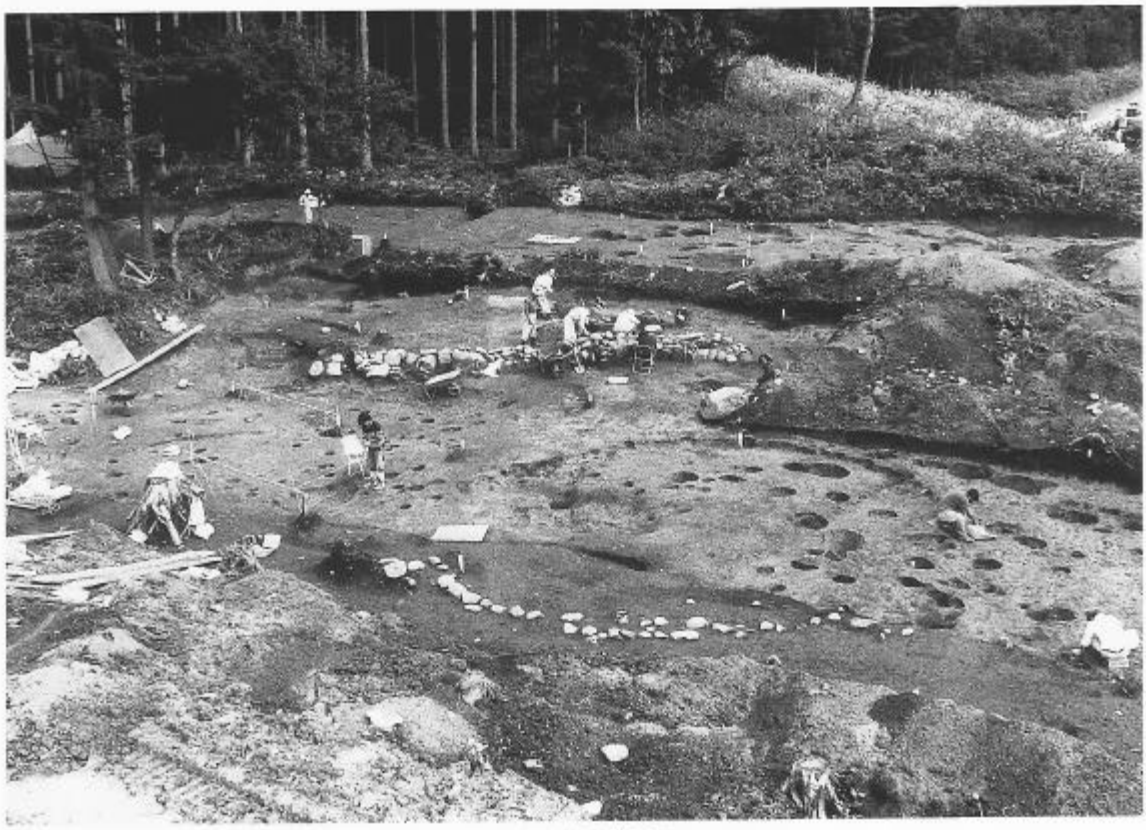
1　遺跡遠景



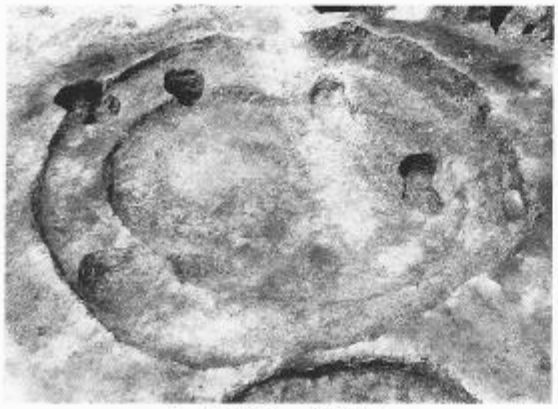
2　調査区東部全景

2張図

1　北部作業風景



2　中央部作業風景



1　SI42　（東→）

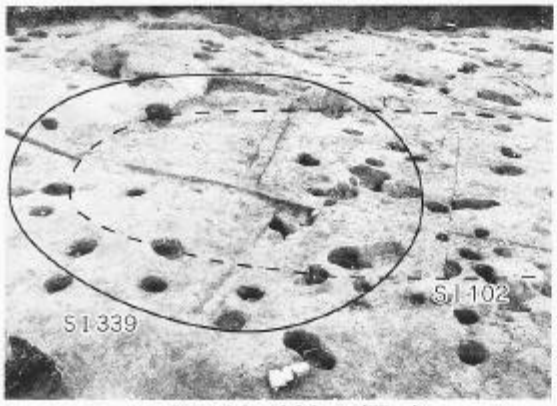
2　SI64　炉（北東→）

3　SI76　（南東→）

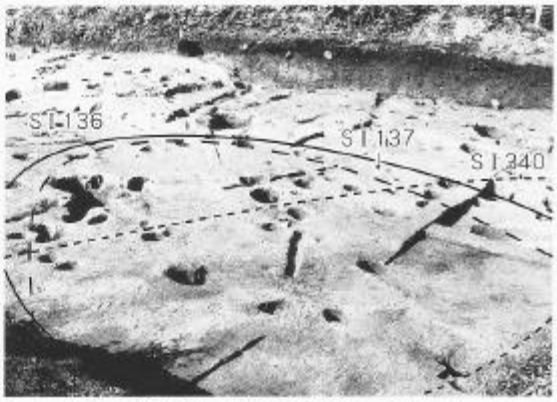
4　SI80　（南西→）

5　SI99・94　土層断面（南→）

6　SI97　（南→）



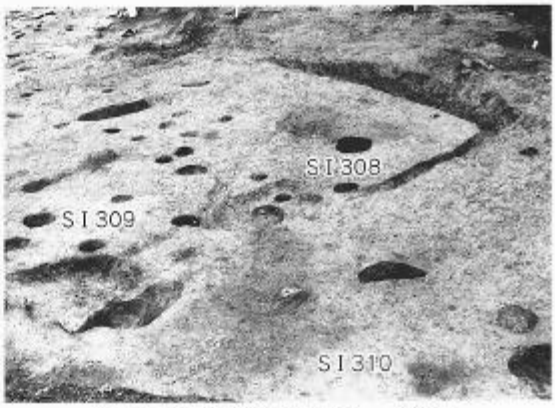
7　SI102・339　（西→）



8　SI136・137・340　（南東→）

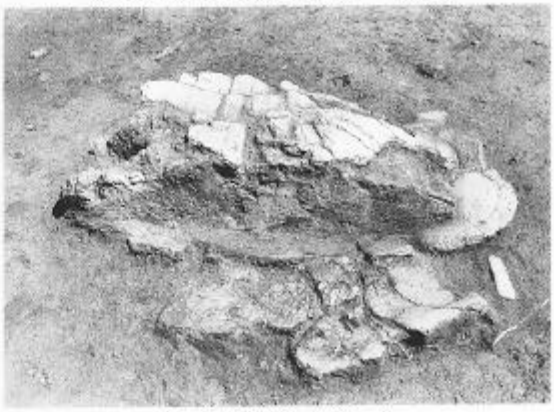
図版4

1　SI 148・158　（南東→）

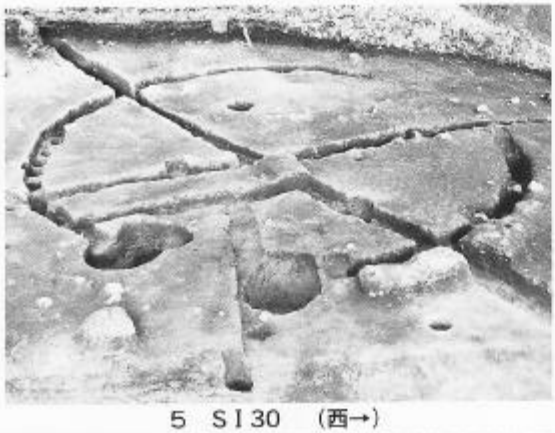


2　SI 308・309・310　（南→）

3　SR243　（南東→）

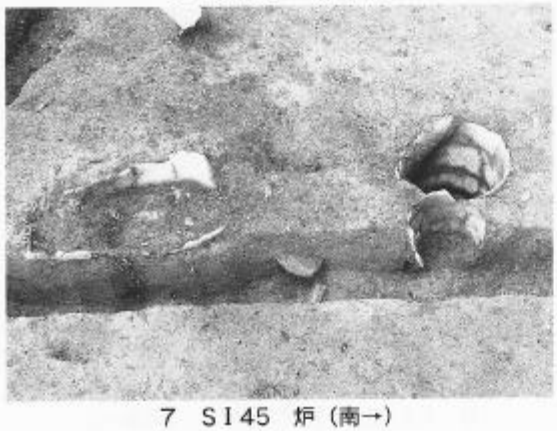


4　SU103　（南→）



5　SI 30　（西→）

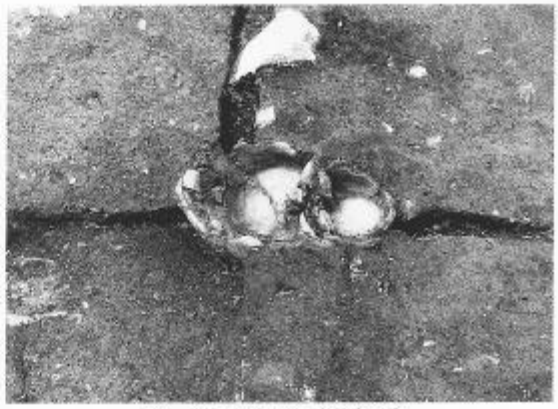
6　SI 30　柱穴列（真上→）



7　SI 45　炉（南→）

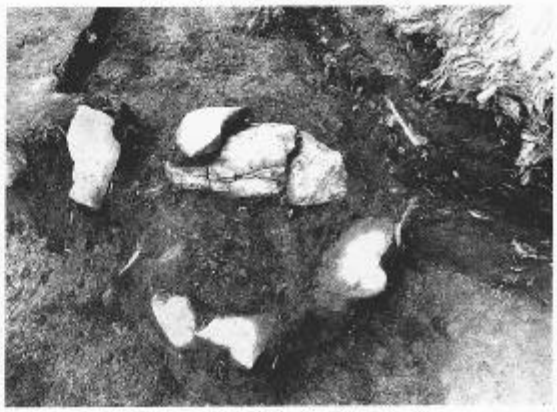
8　SI 46　炉A（北西→）

1　SI53　炉（東→）



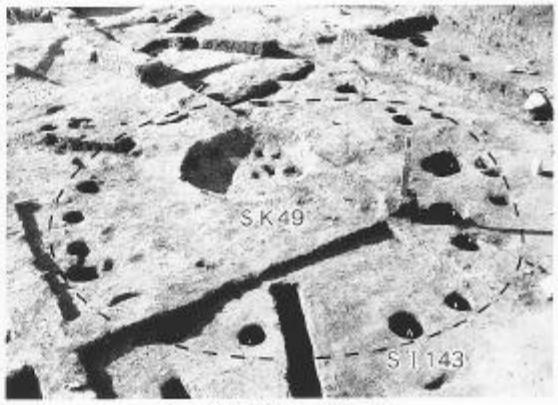
2　SI55　炉（北東→）

3　SI77　炉（西→）

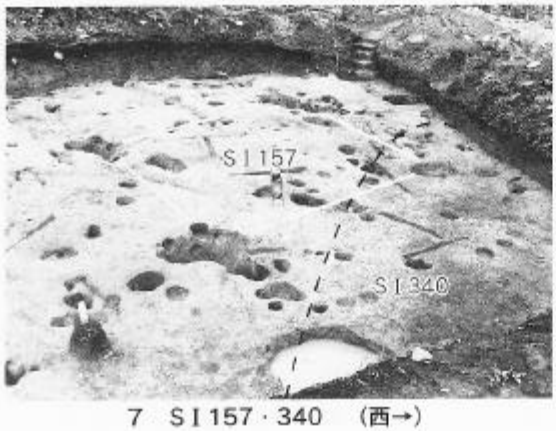


4　SI113　炉（南→）

5　SI122　炉（南西→）



6　SI143　（南→）

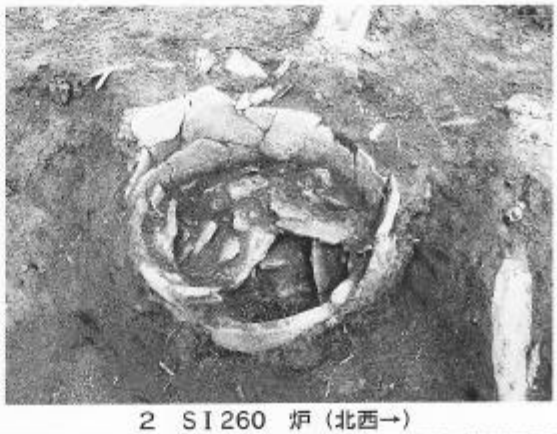


7　SI157・340　（西→）

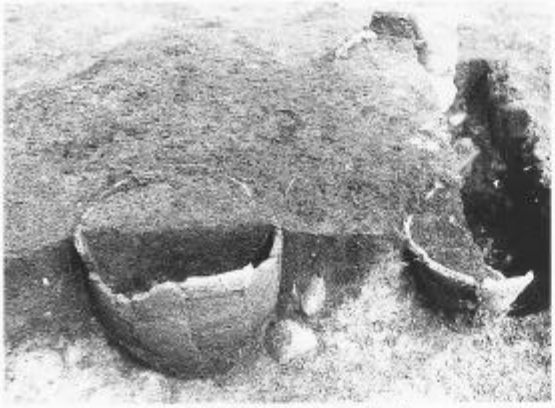
8　SI202　（西→）

図版6

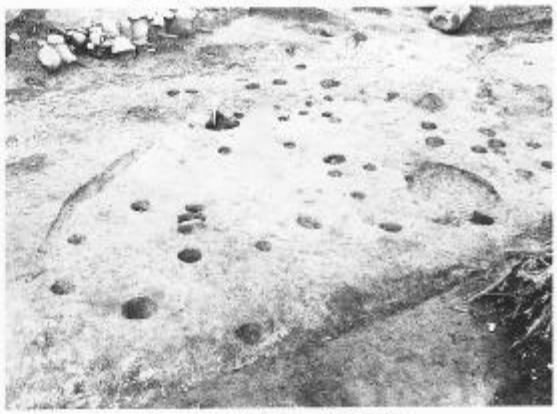
1　SI242　炉（南→）



2　SI260　炉（北西→）



3　SI268　炉（南西→）

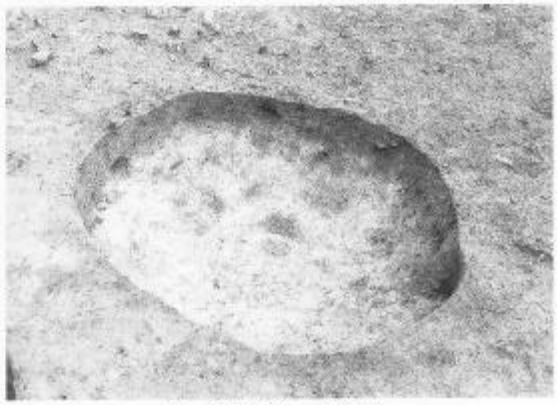


4　SI261　（北西→）

5　SI321　（南東→）

6　SK10　（西→）

7　SK36　（南→）



8　SK49　（南→）

1　SK159　（東→）

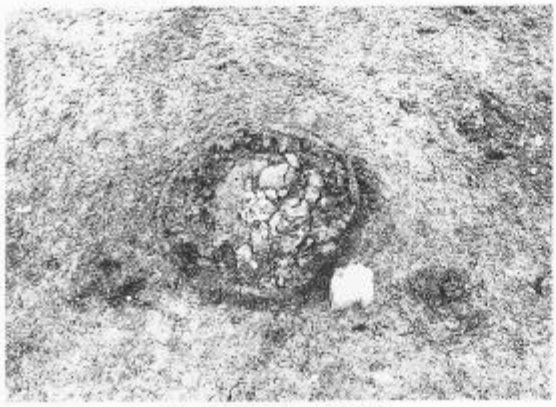
2　SK275　（南西→）

3　SK291　（西→）

4　SK333　（南東→）

5　SKF307　（南→）

6　SR193・194　（南西→）

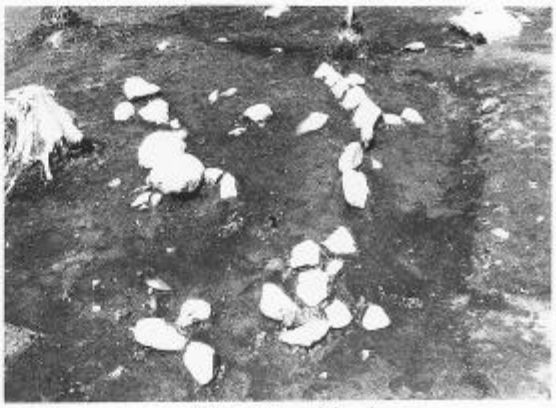


7　SR262　（西→）

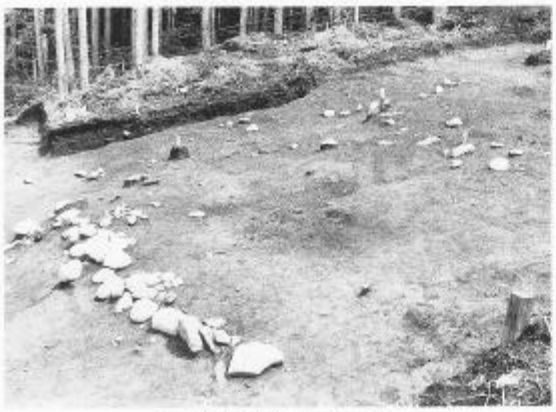
8　SR281　（北西→）

図版8

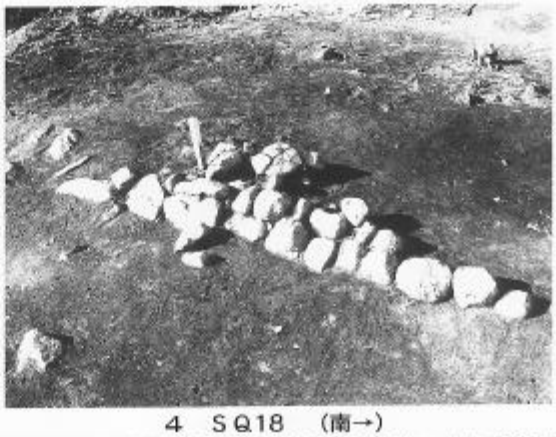
1　SQ01　（南西→）



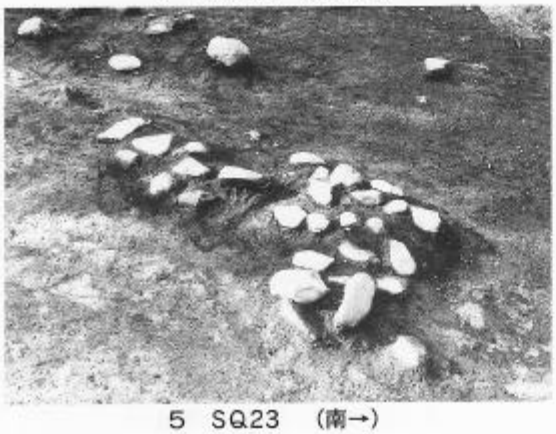
2　SQ09　（南→）



3　SQ13　（南西→）



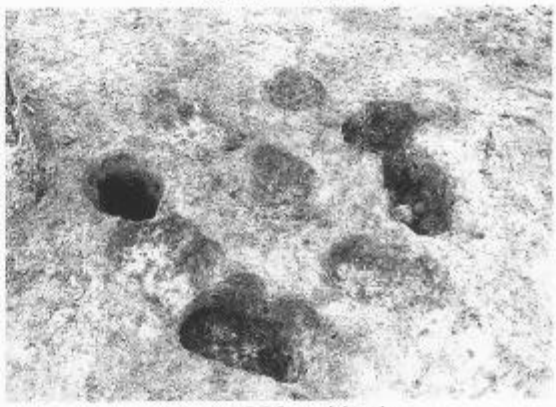
4　SQ18　（南→）



5　SQ23　（南→）

6　SQ70　（南西→）

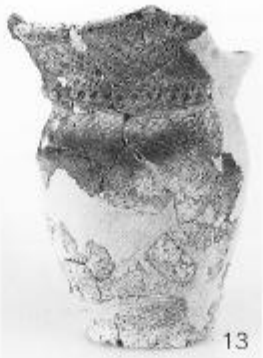
7　SQ172　（西→）



8　SX323　（南→）

11

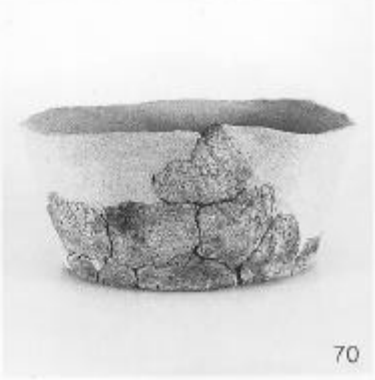
12


13

48

49

69


70

71

72

81

82

84

85

83

83

88

89

図版10

90

95

118

125

129

131

150

163

234

246

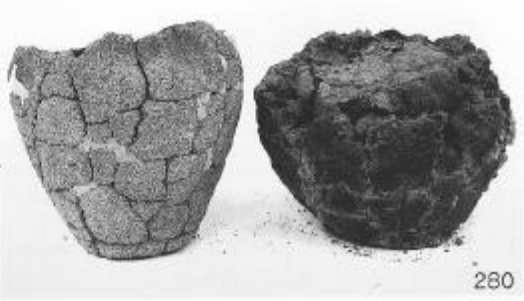
260

269

277

279

280


280

281

311

312

313

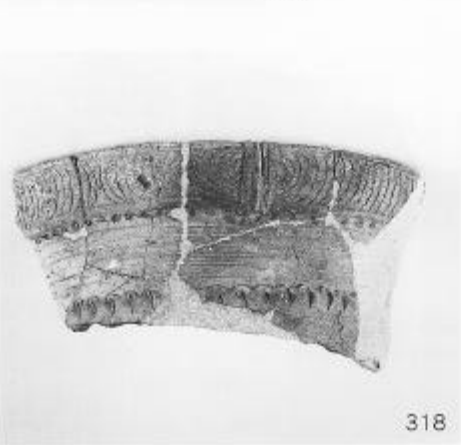
314

316

315

319

319


318

405

406

407

408

409

410

491

492

493

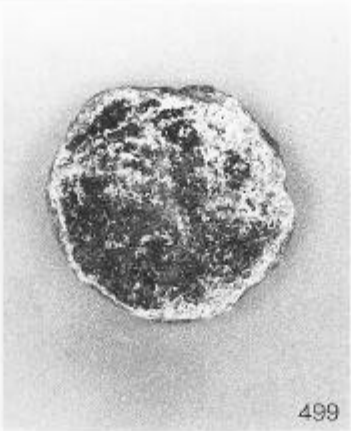
494

495

496

497

498


499

500

報告書抄録

ふりがな	かたまえ
書名	潟前遺跡（第2次）
副書名	県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第306集
編著者名	松本昌樹・伊藤　攻
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡
潟前（かたまえ）	秋田県仙北郡（あきたけんせんぼくぐん） 田沢湖町田沢（たざわこまちたざわ） 字潟前69外（あざかたまえほか）	05426	50－24	39° 44′ 29″	140° 41′ 18″	19980512 ～ 19981009	2,800㎡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
潟前	集落跡	縄文時代前期 縄文時代中期前葉	竪穴住居跡　18軒 土坑　7基 土器埋設遺構　3基 粘土貯蔵遺構　1基	土器・石器 石製品（玦状耳飾り等）	縄文時代前期・中期・後期の土器、日本最大級のアスファルト塊が出土。 縄文時代前期の大型竪穴住居跡を検出。
	集落跡 祭祀場	縄文時代後期前葉	竪穴住居跡　24軒 焼土遺構　8基 土坑　84基 フラスコ状・袋状土坑　1基 土器埋設遺構　4基 配石・集石遺構　18基 性格不明遺構　1基	土器・石器 土製品（土偶・鐸形土製品等） 石製品（装身具・石刀等） 天然アスファルト	

あ と が き

潟前遺跡の発掘調査ならびに整理作業は多くの困難をともないましたが、関係各位のご協力により、ここに調査結果をまとめた報告書を刊行する運びとなりました。

最後に、現場作業及び整理作業にご協力いただいた方々の名前を記して感謝申し上げます。

（順不同・敬称略）

（調査参加者）川瀬　正　草彌　寅治　今野長一郎　酒出　司　坂本　勲　佐々木惣吉
佐藤　壮治　平　正幸　田口　孝　田口　良平　田村　勲　羽川健之介
平岡　敬篤　藤井千代松　堀川　省吾　堀川　久也　堀川　祐久　三浦嘉兵エ
三浦善一郎　三浦　義捷　村田　繁夫　梁田　良雄　石川　悦　上野めぐみ
大石　弥生　大川　新子　齋藤　千秋　佐藤キヌ子　進藤　美雅　榛葉　博美
田村ひとみ　村上　優子　羽川　悦子　山本　博子

（整理参加者）富樫　厚子　藤谷　和子　千田　真澄　大西　英子　粟津ひろみ　後藤由美子
山崎　景子　齊藤　美幸　齊藤美江子　小松　馨子　高橋　宏子　新田ひとみ
川原　礼子　泉谷　昭子　藤田　悦子　小田長京子　小西　文子

秋田県文化財調査報告書第306集
潟前遺跡（第2次）
―県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

印刷・発行　平成12年3月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331 FAX（0187）69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号
電話（018）860-3193 FAX（018）860－3886
印　　刷　株式会社 佐藤印刷